カバーイラスト／ワダアルコ
カバーデザイン／WINFANWORKS
TY©TYPE-MOON/Marvelous,Aniplex,Notes,SHAFT

Last Encore Your Score

Fate/EXTRA Last Encore 原案シナリオ集

奈須きのこ



Last Encore Your Score
Fate/EXTRA Last Encore 原案シナリオ集
奈須きのこ
TYPE-MOON BOOKS
タA-13

4 560158 370661

TYPE-MOON BOOKS
定価：本体1600円(税抜)

それは、忘れ去られた月で開演(ひら)かれる“EXTRA”の物語。

あらゆる願いを叶える力を持った霊子コンピュータ「ムーンセル・オートマトン」。
ムーンセル内につくられた霊子虚構世界「SE.RA.PH」。
“聖杯”をかけた、魔術師(ウィザード)と英霊(サーヴァント)による、
新たな月の聖杯戦争、開演――

TVアニメの為に原作者奈須きのこが用意した全13話分の原案テキストを余すところなく完全収録！
「Fate/EXTRA Last Encore」を振り返り、読み解くファン必携の一冊ここに登場！

Last Encore Your Score

Fate/EXTRA Last Encore 原案シナリオ集

奈須きのこ

TYPE-MOON BOOKS
タA−13

Fate/EXTRA Last Encore
原案シナリオ集

Last Encore Your Score

奈須きのこ

表紙イラスト／ワダアルコ

Fate/EXTRA Last Encore
原案シナリオ集

Last Encore Your Score

CONTENTS



キャラクター紹介

Characters01




ラニ＝Ⅷ
Rani Ⅷ
間桐シンジ
Shinji Matou
間桐桜
Sakura Matou
尼里ミサオ
Misao Amari

序 用語集

ムーンセル・オートマトン
●ムーンセル・オートマトン

月の内部に発見された巨大なフォトニック結晶体。人類とは異なる知的生命体によって作られた、光を記憶媒体にしたスーパーコンピューター。『月の聖杯』とも呼称される。

SE.RA.PH
●セラフ

SERIAL PHANTASM。ムーンセル内に造られた霊子虚構世界。規模が巨大になったムーンセルが自身を運営するために作った〝月を回す都市型エンジン〟。

魔術師
●ウィザード

魂レベルで電脳空間にダイブできる異能者。自己の精神・魂を霊子化し、アバターとして電脳空間で活動できる。

マスター
●マスター

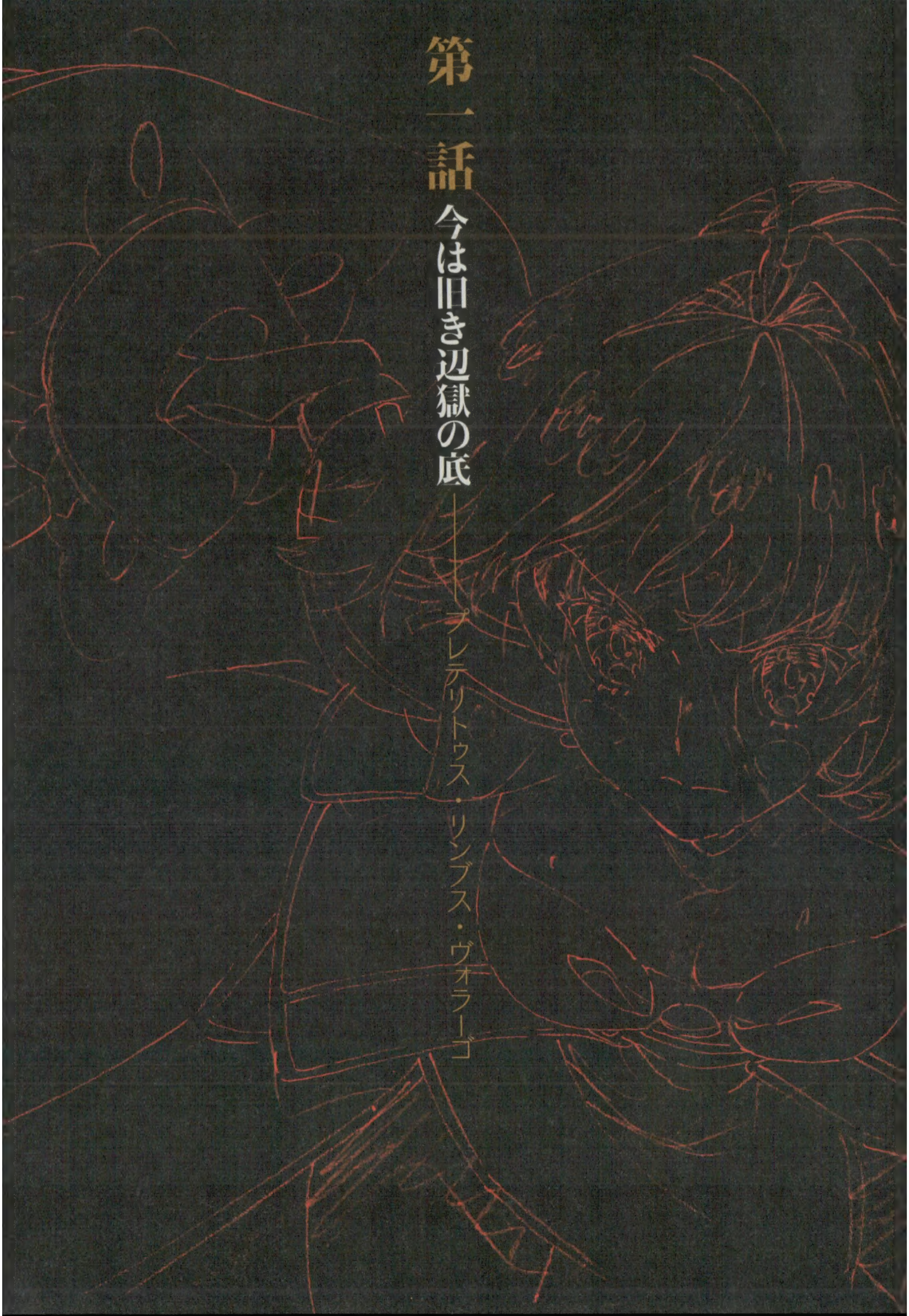
聖杯戦争に参加した者たちの呼称。サーヴァントを召喚・契約し、聖杯戦争に参加する。

英霊
●サーヴァント

人類史から読み取られ、選抜された『英雄・偉人』を誇張・再現したもの。SE.RA.PHにおいてはマスターの戦闘代行人として使用される。

聖杯戦争
●せいはいせんそう

『あらゆる願いを叶える』という『月の聖杯』を巡って争われる戦争。月の内部を舞台とした、一二八人のマスターによる生存競争。聖杯を手にできるのはただ一人の勝者のみ。



第一話
今は旧き辺獄の底
――プレテリトゥス・リンブス・ヴォラーゴ

予選

辺獄

落下する星の夢に、誰もが永遠を誤認した。

積み重なる敗者の声。罪嵩を増す勝者の無為。

奇蹟は無いとしても、「辺獄の底」で君を待つ。

アバン／SE.RA.PH最上層・アンジェリカケージ

月の聖杯戦争の最終局面。
七つの階層を勝ち上がってきた勝者である岸波白野（きしなみはくの）とネロ、立ちはだかるトワイス、セイヴァーとの戦い。（本シーンは過去回想となるので台詞はなしで、本編とはあからさまに違う時間軸だと分かるように）

×　×　×

カメラ、SE.RA.PH（セラフ）の中層（第五階層）あたりから、
上へ、上へ昇っていき、最上層、熾天の檻（アンジェリカケージ）に。
そこではゲーム版最終ボスである覚者（セイヴァー）と、単騎で戦うネロ（セイバー）の姿が。
セイヴァーは太陽のようにネロの頭上に君臨し、その頭上には後にチャクラ・ヴァルティン（大輪）になるコロニーが形成されつつある。ネロは空中にある疑似霊子を足場にして、ターン、ターン、と跳ぶように空中戦をしている。
（ネロの足がついたところに波紋が起き、その瞬間だけ足場があるように見えるように）
ネロ、空中高くに座するセイヴァーに肉薄し、炎を湛える剣・原初の火を激しく打ち込み続けるも、セイヴァーへは届かない。
ネロは既に満身創痍。額からは血がこぼれ、ドレスもボロボロ。

だがその瞳は決して曇らない。
勝ち目のない戦いを全身全霊で戦う。
その姿は悲壮なものと言うより、大切なものを奪われた怒りに満ちている。

×　×　×

そんなネロより数百メートル下。
アンジェリカケージに続く第七階層の神殿廃墟に、座り込んで空を見上げている岸波白野（ゲーム版女主人公）の姿がある。
白野はもう半身が欠けている。どう見ても助からない。
トワイスは熾天の檻でネロと共に戦っていた白野を先に仕留めた。白野に致命傷を与え、下層である七階層に落とし、その上で両足を破壊した。どれほど闘志があろうと、決して這い上がる事ができないように。
もう動く事のできなくなった白野は眩しそうに、悲しそうに、
ただ独りで戦うネロを見上げている。

×　×　×

ネロとセイヴァーの戦いが最高潮を迎える。
ネロ渾身の一撃もセイヴァーの印によって防がれる。
セイヴァーの宝具、天輪聖王（チャクラ・ヴァルティン）は全天を覆い、

輪の中心にいる地上のネロに向けて光の槍を一斉に放つ。
剣では捌ききれず、脚を止められ、釘付けになるネロ。
そこへ小天輪に備わった七つの武具の一つがトドメとばかりに撃ち出される。
（チャクラ・ヴァルティンの宝具名は天輪聖王だが、その元となった覚者は転輪聖王という別の可能性も持っており、この転輪聖王は七つの武具を持つとされる。それにちなんだ七つの〝慈悲の一撃〟である）
これは光弾ではなく質量兵器。
地表を抉るミサイル、インド式バンカーバスターのようなものだ。
ネロはこれを最後の力で防ぐも、
熾天の檻の地面ごと撃ち抜かれ、SE.RA.PHを落下していく。
最上層から最下層まで、流星のように落ちていくネロ。
それを見届け、息絶える白野。
ネロは三八万キロメートルの霊子距離をたたき落とされ、最下層……予選会場のさらに下、SE.RA.PHの底に激突する。
大地の構造体（ストラクチャ）と表面（テクスチャ）を吹き飛ばし、むき出しの土塊に横たわるネロ。
その周囲の地形はネロを埋めたままクレーターになり、墓穴のごとき場所になる。
天空から弔いの鐘が鳴り響く。

それはチャクラ・ヴァルティンの大輪が起動した言祝ぎの歌でもあった。
（この瞬間、これまで執り行われていた全ての聖杯戦争は停止。SE.RA.PHはムーンセルの手から離れる事になる）

×　×　×

以上が〝九九〇年前の戦い〟の終わり。
この戦いを経てSE.RA.PH内は遊びのない、死と滅びが支配するディストピアになってしまう。ここから灰色の時代が始まるよ、という明確な暗示とも言える。

Aパート

学園、放課後の教室
真っ赤な教室での会話。赤色と黒色だけで作られた世界。
顔の見えない三人組。
教室でそれぞれの（マスターとしてやってきた）理由を話している。
アマリ、シンジ、ハクノ。
はっきり顔が映し出されるのはハクノだけで、アマリとシンジの顔ははっきり映らない。
アマリ「私……あんまり、ちゃんとした理由はないんです」
アマリの口元は、優しく穏やかに微笑みの形を作っている。
アマリ「霊子ハッカーとしての才能に、人よりも少し優れていただけで」
シンジ「なるほどね」
頷くシンジ。ハクノも頷いている。（このハクノの記憶は、実際にシンジたちと予選を過ごした〝シンジの親友〟のもの）
シンジ「僕はゲームチャンプなんだ。だからここへ来た。世界最高のメインフレームが稼動させるゲームは世界最高峰のゲームのはずだろ？」
アマリ「素敵です。あなたの名前が永遠に残るんですね」

アマリは徹頭徹尾、シンジに優しい。
心から尊敬している風でもある。(実際は体よく操っているのだけれど)
二人だけの世界から、ようやくハクノへ話が振られる。

二人「それで、おまえ(あなた)は何のために?」

ハクノ「――――」

ハクノが唇を開いて何かを言おうとする。
一瞬、その顔にデッドフェイスが浮かびかけて――
その瞬間、カメラが途切れる。

学園・教室/授業風景

ハクノの視点。
ハクノ、ぼんやりと窓の外を見上げている。
どこか、ソラの高いところで飛行機が飛んでいる。
ジェット音が耳鳴りのように聞こえる。
平和な文明、過渡期を連想させる光景。

CHECK▼ ゲーム版では「人々が打ち上げられた人工衛星を見上げ、自分たちの輝かしい未来を讃えている。だが実際の話、衛星は飛んでいるのではなく滑っているもの。その事実を知らない大勢の人々は、誰もが永遠を誤認した」と語るシーン。

老教師「岸浪。岸浪、ハクノ——」

ハクノ「——え?」

教師に名前を呼ばれてハッと気がつくハクノ。

今は授業中で、ハクノは座ったままぼうっとしていたらしい。

ハクノ「はい。なんでしょう、先生」

特徴のない返答だが、弱々しいものではない。

怒りという芯は周囲に隠しつつも、堂々とした落ち着きをもったハクノの声。

老教師「退屈な授業なのは承知しているが、大切なコトだからな。しっかり聞いておきなさい」

老教師の、疲れて捨て鉢ではあるが生徒を気遣う声。

教室の生徒たちはクスクスと笑う。その中でも親しげに振り向いて笑い掛けてくるシンジ。

シンジ「災難だったな」

アマリ「でも、授業中に眠っちゃダメですよ」

悪友らしく笑うシンジと、困った風に微笑むアマリ。

ハクノ「…………」

小さく頷くハクノ。

授業が再開される。

老教師「つまり、サーヴァントというものは人類史を兵器として利用した画期的な存在であると言えます」

「人類史に刻まれた英雄の召喚。神話の再現とも言うべき圧倒的な力の実体化」

「この奇跡を成すものこそ、フォトニック純結晶体――

太陽系最古のアーティファクトである量子コンピューター『ムーンセル』です」

老教師がサーヴァントのなんたるかを説明する。

聞き慣れない授業内容にハクノは目を白黒させながら教室を観察する。

なんの変哲もない、西暦二〇〇〇年頃の日本の高等学校の教室風景。

だが校庭には通常の学校には存在しない巨大な塔があり、

そこには二つ、異様な電光表示がなされている。

一つは赤い文字でカウントされている時計。

時刻を表すものではなく、刻一刻とカウントダウンしている。

一つは大きな出席表。二五六名もの名札がパタパタと動いている。

老教師「実体化と表現しましたが、物理的な召喚は不可能です。
現在のところ、召喚を可能とする場はひとつのみと言えるでしょう」
「すなわち、月の霊子虚構世界SE.RA.PH」
「地上から接続・投影された二五六の魂を湛えた電脳体の園」
「無論、NPCも存在していますがね」
「つまるところ、この七天の海こそが英霊召喚に最適化された唯一のフィールドなのです」

CHECK▶ 老教師が言っている内容は、ここでは視聴者に理解できなくてもOK。

ハクノも興味なさげに、出席表を眺めている。
シンジやアマリをはじめ、レオやリン、ラニやトワイス、ダンといった各人の名。
(ちなみに岸浪ハクノの名前はない。彼の名前が電光掲示板に表示されるのは一話の最後だけである)
老教師「では、これですべての授業を終了とします。残り少ない学園生活を悔いの無いように」

CHECK▶教師なりの別れの言葉。何度も繰り返しシミュレートされてきた『二〇三〇年から三〇二九年までの、積み重なった敗者たちによる、飽きもしない敗者の予選』だが、彼がこの台詞を口にするのもこれが最後。なので、NPCに過ぎない老教師だが、少しだけ感慨深く、今回もまた〝記録された通りに〟死を迎える生徒たちを憐れんで告げたもの。

老教師「ああ、それと焼却炉には近寄らないように。
　立ち入った生徒の半数は意味消失からの自殺に陥っていますから」
シンジ「なにいってんだよ先生。辺獄になんて頼まれたって近寄らないよ」
老教師「そうですよねぇ。それではみなさん、さようなら」
老教師、穏やかに笑って去って行く。

授業後／教室

老教師は去り、生徒たちは談笑しながら教室を出て行く。
机に座ったまま出遅れたハクノの元にはシンジとアマリがやってくる。
シンジ「何だ、またひとりで放課後を過ごすつもりか？」
ハクノ「どうだろう」

平淡な反応をするハクノ。シンジは自分を誘ってくれているのかな、と考えている。
シンジ「とことん地味なヤツだなぁ。まったく、しょうがないか。放っておいたらおまえはいつだってひとりだもんな。ここは寛大なボクが……」
アマリ「今日も三人でのんびり昼食。ですよね？」
シンジ「……まあ、うん。そういうことだ。授業は午前で終わりだしな」
照れくさくて言いだせなかった本音をアマリに言われて、素直に頷くシンジ。
シンジが（善意の行動であっても）自然とイヤミを挟もうとしてしまうのを、アマリはやんわりとフォローを入れる。そういう関係の二人である。
ハクノ「ありがとう」
ハクノ、ほっとした表情。
この二人が『自分の友人である』と、ここでようやく実感／共感できたので。
アマリ「それで、何処へ行くんです？」
シンジ「何処でもだよ。食堂なんて山ほどあるだろ」
ハクノ、二人に促されて外へ。
教室はベランダからすぐに外に出られる造りとする（廊下は必要ないです）。
外に出ると、そこは普通の学園風景ではない。
別世界ともいえる広大で多重構造の学園都市が、蜘蛛の糸のような通路（橋状のもの）で

繋がっている。そんな未来都市じみた学園を明るい顔で行き来している生徒たち。

ハクノ「…………！（息を呑む）」

ハクノは世界の終わりか、とばかりに驚くが、シンジとアマリは普通に会話している。

CHECK▶ハクノには学園の知識はあるが、この予選都市群の体験はなかったので驚いている。「二十一世紀の学園風景」とかけ離れているものなので面食らっているのだ。

ハクノ、驚きながらも二人についていく。

巨大な学園を歩きながら会話をするアマリとシンジ。

アマリ「そういえば、さっきの話ですけど。辺獄でしたっけ。
私、まだ行ったことないんです」

シンジ「ボクだってないよ。あそこは……」

一瞬言葉に詰まるシンジ。（真実ではなく、自動的に噂話を言ってしまう、というある種のプロテクトが掛かっている）

アマリ「（可愛く首を傾げて）あそこは？」

シンジ「こんな風に言われてるんだ。良くないモノを見る場所」
「かつて廃棄物として捨てられたものの跡地」

「学園の最下層。誰も近寄ってはいけない焼却炉」

「魔物の墓標。悪夢に……ええと、何だったかな」

アマリ「悪夢に襲われて帰れない……その話だけ、聞いたことあります」

カメラを三人に戻す。

シンジ「まあ、そういう禁忌の場所なのさ」

アマリ「なんだってそんな場所があるんでしょう、この学校」

シンジ「知らないよ。それを言ったら、言ったら――」

一瞬の間。

ハクノ「――なんだって、こんな学校があるんだろうな」

シンジ「…………」

つい、二人の会話を継ぐようにして言葉を口にしてしまうハクノ。

同じことを言い掛けていたシンジは口を閉ざす。

場所はちょうど別エリアの校舎（かつては違う予選会場だった別の校舎）にさしかかる。

気まずい三人だったが、そこへ眼下の地上から歓声が聞こえてくる。

なにごとか、と下をのぞき込む三人。

チェスゲーム

ハクノたちが歩いていた通路の下は講堂になっていた。
チェスの試合をする二人の学生と、二人を囲むように観戦している生徒たちが見える。
湧き上がる歓声。
生徒の一人はレオ。そしてもう一人は名も無い男子生徒。
二人はもう一般生徒ではなく、どちらもマスターとしての己を思い出し、命の取り合いをしている——のだが、正確には、かつてここで行われた戦いの残像に過ぎない。この学園全体がそうであるように。だが事情を知らない生徒たちにはそれはチェスの試合として写っている。

女子A「レオ様、すごい！」
女子B「相手はチェス部の部長でしょう？　これって勝負になってないんじゃない？」
女子C「あんなに美しいのにこんなに強いなんて、
レオナルド・ビスタリオ・ハーウェイ様、さすが西欧財閥の御曹司！」

観戦しているモブ女子の声が聞こえる。

シンジ「へえ、チェス勝負か？」
アマリ「賑やかですよね、このあたりの施設って毎日」

ハクノ「西欧財閥……」

呟きながら、ハクノはレオの戦いを見つめる。

もう、勝負がつく寸前のように見える。

静かに落ち着いて、優雅に駒を進めるレオ。

対照的に震える手で駒を進める男子生徒。

だが、そんなチェスの光景に対して断片的に、

マスター同士の戦い――簡易術式(コードキャスト)や武器型の礼装を用いての死闘の映像が差し込まれる。

具体的には、優美な装飾が施されたサーベル型の礼装を手にしたレオと、

防御用の電子的魔法陣を自分の周囲に展開させた男子生徒との戦い。

レオはどちらの光景でも優雅で、余裕を持っている。

男子生徒はどちらの光景でも追い詰められていて、死を予感させる緊張した息遣い。

ハクノ「――――」

目眩にこめかみを押さえながら、愕然とするハクノ。

やがてレオが盤上でチェックメイトする。

レオが、男子生徒の胸に剣の礼装を音もなく突き立てる。

ふたつの映像が切り替わり、重なり――

レオ「チェックメイト」

レオは涼しげに勝ち、敗れた相手は倒れる。
チェスをしていた男子生徒としては椅子から力なく倒れ、
レオと死闘をしていたマスターとしては血溜まりの中に倒れ、絶命する。

×　×　×

教室に存在している二五六名の生徒出席一覧（予選通過状況一覧）にある『レオナルド・ビスタリオ・ハーウェイ』の名札が無色から赤に変わる。

×　×　×

観客席からの歓声。黄色い声援もある。
にこやかに手を挙げて、颯爽とその場を去って行くレオの姿。

アマリ「流石ですね、レオ様」

シンジ「おまえまであいつに様なんて付けるなよ。ボクの彼女だろ？」

アマリ「ふふ、やきもちですか？　私はシンジ君一筋ですから、安心してください……ハクノ君？」

ハクノ「……」

アマリの視線の先で、ハクノが行動していた。
ハクノ、通路から降りて、倒れた男子生徒を抱え上げる。さっき見えた血溜まりはない。
ハクノ、険しい表情で歯を噛み締める。怒りゆえに。

ハクノ（……憎い。なんて憎らしい）
（無様に死んだコイツも。コイツを殺したすべての出来事も）
『怒りを覚えてたまらない』と目つきを鋭くするハクノ。

CHECK▶ハクノがどちらの立ち位置（善か悪か、敵か味方か）なのかをまだ伏せる、という意図から、怒りの対象を絞らず、全方位の憎悪、憤怒として表す。

正体不明の衝動に、胸元を強く掴むハクノ。
観客席からはどんどん人が減っていく。
レオの勝利を見届けたので、三々五々、それぞれ放課後を過ごすために去って行っている。
目の前の〝倒れた男子生徒〟の事なんて、誰も目に入ってはいないように。
レオに敗れた、名前も知らない誰かの死体を看取るように佇むハクノ。
シンジ「何してるんだ、あいつ？」
アマリ「さあ……」
シンジとアマリは渡り廊下からハクノを見下ろしつつ、突然降りて行ったハクノの行動にきょとんとしている。
シンジ「チェスの試合ひとつでいちいち大げさなやつだなぁ」

アマリ「でも、優しい人ですよ？」

シンジ「それはそうだけどさ。ハクノ、ボクたちは先に行くからなー！」

肩を竦めてシンジと一緒に観客席から消える。彼らには死体が見えていない。シンジは去ってしまう。アマリもシンジと一緒に観客席から消える。彼らには

しかし、たった今日目覚めたハクノには事実は事実として映る。

ハクノ「……このままにはしておけない」

ハクノ、男子生徒の死体を抱きかかえるが、そこでハタ、と止まってしまう。

ハクノ「……どうすればいいんだっけ？」

積極的に行動しつつも戸惑うハクノ。

そこへ、

リン「物好きなのね、あなた」

すぐ近くで声。

隣に、見知らぬ女性——遠坂リンの姿がある。

制服姿ではない、マスターとしての姿。（レオもそうではあるが）

リン「そういうの、嫌いじゃないけど」

「で？　どこ行くつもり？」

はきはきとしたリンに圧倒されそうになりつつも、なんとかハクノは言葉を返す。

ハクノ（こういう時……こういう時は、確か――）

「――保健室だ。保健室に連れて行かなくちゃ」

リン「……保健室？」

リンの呟きは『そんな施設、この学校にあったかしら？』という疑問から。

保健室

リンと共にレオに敗れたマスター男子生徒に肩を貸し、保健室に連れて行くハクノ。

リン「へえ……こんなところあったんだ」

きょろきょろ周囲を見るリン。

CHECK▶ 保健室の存在はマスターには知らされておらず、聖杯戦争監督役AIのみが知る。ハクノが知っていたのは、彼の中に『保健室』を偶然にも経験したマスターの経験があったからとする。

保健室の扉を開けた先には――

桜「ようこそ保健室へ、先輩」

CHECK▶ 桜にとってハクノへのこの挨拶は二度目にして最後のものになるが、それは本作では関係のない話である。

保健委員、間桐桜の姿がある。
表向きには失神したマスター男子生徒を、穏やかな笑顔で受け入れる桜。

桜「怪我人ですね？　では、そちらの寝台をお使いください」

ハクノの目には三つの映像が交差する。
生徒を寝台に寝かしつける桜（学園・偽りの平和）と、
寝台に置かれた生徒たちの死体（月・予選の現実）と、
フォーチュンクッキーのような人形を無慈悲に保健室のストーブに棄てる桜（過去から繰り返される保健室の機能）が。
これら三つの映像が入り乱れ、頭痛に苦しむハクノ。

CHECK▶ 三種のレイヤーの世界に半分接触したせいで負荷がある。それはそれとして、保健室に並ぶ死体は「自分自身」でもあるので憎悪を感じ、表情を歪めてしまう。

ハクノ「っ……」

青ざめながらも表情を険しくするハクノ。
その横顔を見つめて、静かな表情のリン。
　桜「あの……どうかされましたか、先輩？」
　ハクノ「いや」
桜から声を掛けられると比較的穏やかな表情になるハクノ。珍しく。
　ハクノ「何もないよ」
　桜「(ほっと息を吐いて) 良かった——」
ハクノの表情が和らいだのを見て、微笑みを浮かべる桜。
リンは泰然と、二人のやり取りを見ている。
　リン「へえ、そういう反応なの」
リンはわざとハクノに何も教えない。
リン(の予選突破からシミュレートされたもの)にとって、ハクノはいまだ『目覚めていないマスター候補』に見えているからだ。かつてのリンがそうであったように、このリンも自分からこの学園の正体に気付かないかぎり、マスターとして敵対する事も、助言する事もない。
　ハクノ「……」
改めて寝台を見るハクノ。

ずらりと並ぶ寝台。そのすべては埋め尽くされている。寝台の掛布はちょうど人間大の丸みで盛り上がっている。それは具合を悪くした生徒たちか？　それとも、死体の――はっきりとは映し出されない。恐らくは死体の群れ、という意味での不気味な光景。

桜「あの……先輩、すみません、寝台がもういっぱいになっていて……」

リン「そういえばそうね、確かに」

リンも寝台を眺めている。

桜「だから、その……いちばん右の寝台の生徒を、ですね」

桜に促され、一番右の寝台を見るハクノ。

掛布はやはり、人間大の丸みで盛り上がっている。ぴくりとも動かない。生きているのか、死んでいるのか。恐らくは死んでいるのだろうな、という不気味な雰囲気。

桜「埋葬、していただきたいんです」

沈痛な表情で俯く、桜。

CHECK▶ もしこれが一度目であった場合、桜は「外に連れだしてほしいんです」とお願いするだろう。ハクノは「外に連れ出すって、アイツは怪我が治ってるのか？」と疑問で返し、桜は笑顔で「そういうのはいいんです」と怖い反応をする。まだ普通のAIであったろうから。

学園・校舎裏

校舎裏と呼ばれているものの、焼却炉は学園都市の中心にある。
焼却炉を囲み、覆い隠すように学園校舎が乱造されているイメージ。
学園の中心、校舎の側面で四方を囲まれた、都市の隙間の中庭。
そこに焼却炉に続く道がある。
中庭は巨大な空洞で、壁にぐるりと地下に向かって続く階段がある。
死体袋をかついで階段を降りていくハクノ。息が荒い。

ハクノ「埋葬……？」

呟きながら、汗の雫を落としながら、歩いて行くハクノ。

ハクノ「……」

この死体も自分の一部であるがゆえ、奇妙な感覚を覚えているが、記憶としては「死者の総体」であると覚えていないハクノ。
落ちる汗の雫。自分の遺体を捨てに行く矛盾に、幸運な事にハクノは気付かない。

焼却炉／辺獄の薔薇園

階段を下りきり、死体袋を持って、焼却炉へ。

炉の開閉口には、ラテン語で『辺獄の薔薇園』と記されている。

ハクノ「焼却炉……？　扉か……？」

ひとりでに開く、開閉口。暗がりを少し歩くと、墓場のように沈む静けさに満ちた、巨大なクレーターの姿が現れる。

CHECK▶ このクレーターは、アバンでセイバー・ネロが最上層アンジェリカケージから叩き落とされた時のもの。

×　×　×

保健室の回想。

桜「そこに、埋めてあげてください」

ハクノ「オレが？」

桜「私には……権限がないんです」

冷ややかな反応を返すハクノとは対照的に、桜は沈痛な表情のままである。

リン「埋葬って、また大袈裟ね」

静かに告げるリン。

リン「ソレはもうただのゴミ。関連データを失ったレジストリみたいなものよ」

ハクノ「……ゴミ捨てか」

××××

墓場のようなクレーターに投げ捨てられる死体袋。
死体袋のデータと一体化して、わずかに煌めくクレーター。

ハクノ「……っ」

その光景を見下ろしていると、ハクノは目眩を覚える。
いつのまにかクレーターに、どこか見知らぬ都市の火災跡の光景が広がっている。
目元に手を当てながら、呟くハクノ。

ハクノ「良くないモノを、見る……」

シンジとアマリが噂していた『良くないものを見る』というヤツだ。

ハクノ「……う……」

ハクノ、今度は胸が苦しくなって胸を押さえる。動悸が酷い。
胸を締め付けられるような痛みと悲しみ。胸を押さえ、眉をひそめ、歯を噛み締めながら俯いて感覚に耐えようとするハクノ。
その背後に、亡霊のような唐突さで現れるトワイス。ごく自然に（トワイスの出現にリアクションせずに）会話するハクノ。デヴィッドリンチ映画のような気持ち悪さ。

CHECK▶ このトワイスは熾天の檻にいるトワイスではなく、かつてこの予選を過ごした頃のトワイス。その思想が膿む前の、賢人としてのトワイスである。分かりやすくいうとトワイスの善性が焼き付いたもの。なので、『辺獄のトワイス』の声音は『厳しいが、優しい』もので。ハクノの記憶にたびたび出てくる『熾天の檻のトワイス』は『厳しく、冷たい』ものと差別化する。

トワイス「それも慣れる」

トワイスの顔ははっきりと見えない。

トワイス「いや、すぐに消える」

もしくは眼鏡が光っていて目が映らない。

トワイス「ここは人工楽園だ。
　黙っていれば、違和感さえ覚えなければ、君は幸福を甘受できる」

ハクノ「幸福……？」

トワイスを見ずに都市の災害を見つめるハクノ。

トワイス「この最下層では三つのレイヤーが重なっている」
「一つは元々用意された土台。廃墟」
「一つは君たち全員に見せている共通幻想。学園のテクスチャー」
「そして一つは君たち自身が持ち込んだ原風景（トラウマ）だ」

「故に、誰もが此処では何かを見出す」

ハクノ「……砂漠の、蜃気楼みたいだ」

胸を押さえる手が緩んでいくハクノ。トワイスの言う通り、慣れてきた。

この辺獄はかつてネロが落下し、ストラクチャがまるごと破壊されている。つまり土台が壊れている。

トワイス「ここから見えるのは、原風景。トラウマだ」

ハクノにとって、辺獄の底に見えるのは西暦二〇〇〇年の都市災害。

まさしく、砂漠の蜃気楼のように揺らめいている。

それをトワイスと共に眺めるハクノ。（トワイスが眺めているのは一九七〇年のベトナム戦争跡だが、風景としてほぼ同じものなので二人の会話は成立する）

トワイス「神（ハーミット）は理想の環境を作った。だがそれは機械が考えた天国だった。機械と人の感性は違う。見たまえ。これが天国として作られた、電子の地獄だ」

夕暮れの学園の全景が映し出されながら、トワイスのｏｆｆ台詞が重なる。

トワイス（未熟な子供が道を選ぶための施設）

（繰り返す一日、繰り返す日常）

（繰り返すトラウマ）

（繰り返す忘却（カルマ））

さらにｏｆｆに合わせて学園各部の様子が映し出される。
トワイス「だが、それは本来、自主的なものだった。
かつては地上の人間を呼びかけ、応える者を招いていた」
「いまは人を引き寄せている。地上の人々は、少しでもマスターとしての適性があればこの月に捕らわれてしまう」

×　×　×

名も知らぬ顔の見えない生徒たちが苦しんでいる。シンジも、アマリも、これまでのハクノと同じように目元を押さえたり、胸元を苦しそうに摑んでいる。
トワイス（そして苦しむ。君と同じように）
シンジは誰もいないシェルターの中で自己の有用性を疑い、
アマリは家族を見捨ててまで乗り込んだ成功者のレールに責められている。

×　×　×

ハクノ「なぜ、そんなものを作ったんだ」
怒りや恨みの類ではなく（まだそこまで状況を把握できていない）、ただただ疑問として声を漏らすハクノ。
ハクノ「繰り返す……必要なんて、あるのか……？」
トワイス「知りたければ問いただすといい。あの場所にすべての答えがある。

　月の中心――七つの海の底に君臨する熾天の檻、アンジェリカケージに」

地下であるはずなのに何故か見える、頂点に座する月の瞳。
七天の海。最果てにて待つアンジェリカケージが。

×××

パタン。学園の中心にある塔、その電光掲示板の表示が回り出す。
二五六名の生徒出席一覧（予選通過状況一覧）にある『遠坂リン』の名札が無色から赤に変わる。
横にある数字：九九から一〇〇へ。

×××

空の果て、海の果て――
アンジェリカケージの手前、最下層たる人工楽園（学園）の空を覆うチャクラ・ヴァルティンがゆっくりと回り始める。
トワイス「時間だ。君もまた間に合わなかった」

CHECK▶ 本来なら「君はまた」となるが、このハクノは今までの繰り返しにいた『誰か』ではないのでトワイスは「君もまた」と口にしている。

どういう意味だ、と尋ねようとするハクノだがトワイスの姿は既にない。
ずん、と重い地響きが直後にひとつ。

学園／崩壊する学園

薔薇園から――
焼却炉の開閉口から地上に出るハクノ。
校舎は崩壊しはじめていた。世界が割れていく。
霊子虚構世界であるSE.RA.PHとしてではなく、データの羅列へと。
学園のすべてが、先刻の死体袋のような『無意味なダスト』へと処理されていく。
これは予選終了のシークエンスだけではない。
予選終了に合わせて、「このシステムそのものの破棄」が行われている。
それを成すのが何かを、直感的に理解するハクノ。

ハクノ「……あれか！」

ハクノ空を見る。遥か頭上のチャクラ・ヴァルティンが軋みをあげて回転している。まるで、この空間をすり潰すミキサーのように。
激変する空と世界の様子に、悲鳴を上げながら逃げ惑う生徒たち。

そこに無慈悲なアナウンスの声が響く。

CHECK▶ アナウンスは監督役である言峰のもの。

言峰「本選到達者が一〇〇名を超えた。
これに伴いモラトリアムの園は拒否されたものと判定する」
「現時点より、残存する生命体及びNPCのパージを開始する」

末端から崩壊していく学園都市。
世界の終わり。
七天の最下層である人工楽園の終焉。
昇降口前に出たハクノは、さらに、マスター生徒同士の殺し合いを目撃する。
時にコードキャストを打ち合い、時に剣の形（ひとりひとり持っている剣の形が違う）礼装を手に切り裂き合っている。

ハクノ（何だ……！）
（何で、殺し合ってる!?）

ふと、脳裏にレオのチェス試合とそこに重なって見えていた死闘の光景が浮かぶ。

言峰「残り、一八名」

「これは最終審査、最終温情だ。他のマスター候補を排除したもののみ、
本選へ到達するよう取り計ろう」

×××

パタン。
予選通過状況一覧に変化が起きる。言峰のアナウンスから一分も経たないうちにユリウスの名札が本選行きとなる。ついで、他のマスターたちの名札も点滅する。

CHECK▶これらはかつて起きた予選の再現データが幾つもコリジョンしたものなので、順番が混ざり合っている。正しく言うとレオ、ラニ、リンはこの『最終温情』の前に既に本選にあがっているので、予選での殺し合いには参加していない。

×××

ハクノ「――――殺し合えって言うんだな」
かくして予選終了――――人工楽園は終わる。
学園都市……世界の崩壊など目に入らぬとばかりに殺し合う生徒たち。
生き延びるために、本選へと至るために戦っているのだ。彼らは。
いまだ自分が何者か分からないハクノの前で、かつてそうであったように、隣人を蹴り落

として生き延びようとするマスターたちの姿が乱舞する。
ハクノの視線の先で、力なく膝をついた男子生徒の喉を光るナイフ状の礼装で切り裂く女子生徒。
ハクノ「やめろ!」
叫ぶハクノ。女子生徒の行動は止まらない。
噴き出す男子生徒の血。
呆然と、人が死んでいくさまを見つめるハクノ。(こうして死んでいく者もまた、現在のハクノを構成する二五六分の一であるが故、これは自分の死でもある)
言峰「時間はない。君たちの人生において、猶予などはじめからないように」
「残り、九名」
パタン。パタン。パタン。
複数の音。予選通過状況一覧。
シンジの名札『間桐シンジ』に焦点が当たる。
シンジの名札は勝利色になっておらず、しかしまだ落ちてもいない。
×　×　×
ハクノ(どうしたらいい……どうしたら……!)
ダストデータ化していく校舎の中、血相を変え、どこへ行ったらいいのかも分からずに走

るハクノ。
その足が止まる。視線の先に、シンジが姿を見せていたのだった。
ハクノ「シンジ！　ひとりなのか、アマリは――」
シンジ「あいつは無事だよ、大丈夫だ。こっちに安全な場所があるからな」
ハクノ「良かった……」
安堵するハクノ。
ハクノ、シンジの焦りには気付いていない。シンジは俯いていて、その表情は見えない。
シンジ「おまえを探してたんだ。
いいか、ぜんぶ終わるまで隠れてやり過ごすしかない」
ハクノ「でも、ここはもうパージされるって声が……」
シンジ「なに言ってんだ？　いいから来いよ、殺されたくないだろ！」
シンジは踵を返して来た道を戻り始める。
ハクノ、一瞬の躊躇いの後、シンジに付いていく。
足音が反響する無人の通路を歩いて行く二人。
やはりシンジがやや早く先を行く。
血を裏切りを暗示するかのように、大袈裟なほどに赤い、真っ赤な通路。時折、ズズン、と震動が来ては砂のように砕け散った天井（のデータ）の破片が振ってくる。

シンジ「なあハクノ。おまえってボクの友達だよな」
ハクノ「ああ」
真顔で頷くハクノ。
シンジ「実際のところボクに友人は少ない。それは確かなんだ。おまえもそうだろ?」
シンジは振り返らずに背中を見せながら話している。
シンジ「こういう風には言いたかないけど、おまえと仲がいい生徒はボクとアマリくらいだ。だからさ、ボクたちはやっぱり貴重な友人なんだ。貴重な友人ってのはアレだろ、大切な、ほら……」
立ち止まるシンジ。
シンジ「……大切な親友、だろ」
何故立ち止まったのか分からないハクノ。
シンジ「親友の頼みのひとつやふたつはさ。聞いて然るべきだと思うんだよボクは」
ハクノ「シンジ?」
シンジ「———だからさ、いいんだよな。ボク、友達なんだから……!」
シンジ、無言で振り返り、そのままハクノに、ドン、と体ごとぶつかる。全体重をかけて。
疑問からシンジの名前を呼び掛けるハクノ。
耳元でそう叫んで、顔を青ざめさせながら引きつったように笑顔を……笑顔を浮かべよう

と必死に表情を歪めるシンジ。

CHECK▶ シンジの笑いは『ニヤついた、悪意一〇〇%の顔』ではなく、『引きつった、泣き笑いのような顔』。笑っているのは『自分はこういう行為（自分の為に親友を犠牲にする）ができるクールな人間なんだ』と自分に言い聞かせないと精神崩壊する一歩手前だから。第二～三話でシンジの心理状態がどんなものか明かされるが、ここでも少しだけそのとっかかりを出しておきたい。

ハクノの体ががくん、と震える。

シンジ「いいだろ。死ねよ。死んでくれよ。おまえだって殺したくないだろ？　なら
　ボクのために死んでくれよ！」

ハクノ「シン……ジ……」

顔面蒼白になって呟くハクノ。

同じくらい顔面蒼白で震えるシンジ、ハクノの体から離れる——パタタッと赤い廊下の床に黒い血が零れる。

シンジの手には血に染まったナイフがある。刺したのだ、ハクノを。

CHECK▶ ハクノの血が黒いのは『まだ生命ではない』から。第一話ラストで黒い血は『生命をもった』

人間の赤い血に変わる。とはいえ、露骨に血を黒くするとバレてしまう危険もあるので、血を黒くするか赤くするかはコンテ段階で変更して良しです。

シンジ「僕はゲームチャンプになるんだ……そのために来たんだ。でも、おまえには何もないだろ!?」

ハクノが憎いのではなく、こんな主張をしないとナイフを持てないぐらい、シンジは追い詰められている。本当はシンジだって殺したくはない。(そして実のところシンジはアマリに囁かれてこの行動を選択するように誘導されてもいる)

逃げようと、背中を見せるハクノ……へと再度襲い掛かるシンジ。

脊髄を刺すシンジ。

ハクノ「……!」

シンジ「あ……あああ、あああああ!」

シンジ、人を刺した嫌悪感と、いま殺さないと殺されるという恐怖感からハクノを滅多刺しにしてしまう。

シンジ「はあ、はあ、はあ……ッ」

荒い息を吐くシンジの頬には返り血。

引きつった顔で、(ハクノの死体があるだろう)床へ顔を向けるシンジ。

パタン。

×××

予選通過状況一覧。シンジ勝利。

×××

シンジの姿がザザッと電子的エフェクトを残して消える（かつての勝利条件を再現した事で予選会場での役目を終え、消滅）。
刃だけでなく柄の部分まで血塗れのナイフが残されて、床に落ちる。

×××

言峰「残り、一名」

ズズン、と震動。
真っ赤な通路にパラパラと破片が落ちる。
床には血溜まりの中で俯せに倒れているハクノの姿。表情は見えない。
一瞬、画面暗転。

CHECK▶ 完全な黒画面ではなく、デッドフェイスを暗示させるもの。デッドフェイスそのもののアップでも良いかも。

次の瞬間、顔の見えない男子生徒たち数十名が、廊下を埋め尽くすように死んでいる。
ハクノの姿はこの時消えて、ハクノのいた筈の床には血溜まりだけが残っている。

CHECK▼ ハクノを構成する無数の死者、そのうちの『男性』たちのイメージ。

男子生徒「またか」
次の瞬間、先述の数十名の男子は消えて、代わりに顔の見えない女子生徒たち数十名が、廊下を埋め尽くすように死んでいる。

CHECK▼ ハクノを構成する無数の死者、そのうちの『女性』たちのイメージ。

女子生徒「またか」
静かな落胆と怨嗟しみの声。
そして再度、黒画面が一瞬だけ挟まる。
生徒達「……またか」
静かに積まれる怨嗟の声がハクノの意識を呼び起こす。簡単に死ぬ事はできない。
ハクノ（そうだ――また、おまえたちは、こんな）

（無様な死を、迎えている）

口にするハクノ。次の瞬間、廊下は現実に戻る。数十名男子の死体も数十名女子の死体も既に消えて、ハクノだけが血溜まりの中に倒れている。

ハクノ、瞼をカッと開く。

死からの再生。不気味に。それでいて力強く。

ハクノ「ハ……ァ……ハァアアアア……」

獣のように息を吐きながら立ち上がるハクノの表情は見えない。

CHECK▼ この時点でデッドフェイスの仮面が張り付いている。

壁に寄り掛かるハクノ。

歩こうとすると、ずるり、と赤い壁にべったりと血の跡が残る。

ハクノ（ここでは死なない）

（復讐を）

（報復を）

ずるり。血の跡を残しながら歩いて行く。

ハクノ（死ねない、死ぬものか。誰もやらないのならオレがやる）

（誰もができなかったのならオレがやる。
おまえたちのかわりにオレがやる。
なぜなら、オレは）

ハクノ「この月の、すべてが憎い」

吐き捨てるように、鋭く呟くハクノ。
自分を突き動かすただひとつの原動力。すなわち『怒り』に満ちた形相である。

CHECK▶ハクノから伸びる長い長い影、その頭部には目と口のパーツがあり、ちょうどデッドフェイスのような造作になっている。

×××

予選通過状況一覧。ラニ勝利。

×××

言峰「砂時計の粒もつきた。本格パージを開始する」
「さらばだ、敗北者たちよ。仮初めの人工楽園と共に眠りたまえ」

廊下から外へと出た、険しい表情のハクノの目の前で……
空間のひび割れから数体のドールが出現。

生き残りの生徒たち……マスターではないＮＰＣや、マスター候補だが誰も殺せなかった生徒たちをドールは次々と殺していく。
悲鳴。悲鳴。
マスター候補から飛び散る鮮血と、ＮＰＣから飛び散るダストデータ。

CHECK▶ 人間であるマスターの血は赤く、NPCたちは黒いダストデータとして散る。

ハクノ「あ……ああ……！」
止めるためなのか、助けるためなのか、それとも逃げるためなのか、ひとりでに足が動きそうになっているハクノ。（実際にはドールが許せないので攻撃するために動いているが、死にそうなので弱々しいだけ）
そんなハクノの目の前にも、一体のドールが現れる。
ドール「………」
それは一〇〇〇年の時間を経て摩耗しきった、体制（セラフ）側の何者か。
聖杯戦争が終わり、すべてが終わった後でも守護者として使役され、名前ばかりか個性さえ苔むした、かつて弓兵のサーヴァントだったもの。

CHECK▶ このドールのデザインは赤い外套のアーチャーのものを。その遺体が一〇〇〇年経過してもまだシステムによって働かされている、というイメージで。灰色の石膏像のようなものがいい。

ドール「(作動音)」

かつての面影はない、みすぼらしい弓がハクノに向けられる。

ハクノ「……ッ！」

一瞬の葛藤の後、鋭くドールを睨むも、壁に手を突きながら逃げていくハクノ。

焼却炉／辺獄の薔薇園

ハクノを追うドールの動きに容赦はないが、その狙いは的確ではなかった。

ハクノ自身が決死の思いで回避すればギリギリで躱せる、そんな甘い射撃をしながらハクノを追い詰めていく。

そのおかげでハクノはなんとか校舎裏、焼却炉まで逃げ込める。

ずるり、ずるり、と壁に血の跡を残しながら辺獄の薔薇園へと追い詰められるハクノ。

ドール「(作動音)」

クレーター中央部にて、ついにドールの矢がハクノの腹部を大きく抉った。

ハクノ「…………っ!!」

衝撃のあまり、叫び声さえ出ないハクノ。

ただ腹を抉られただけではない。ドールの武装はＮＰＣ及びウィザードを効果的に消去するために最適化されたもの。

触れればデータはひとりでに解けていく。言わば、抉られた場所をミキサーでかき回されているようなもの。

痛みの中で、怒りのままに歯を食いしばるハクノ。

ハクノ（憎い、憎い、憎い……!!）

（許さない、許さない、許さない……！）

（どうして……オレが死ぬ……！）

（戦わなかったから？）

（殺さなかったから？）

（それとも、立ち竦んだまま、誰をも助けず、助けられずにいたから？）

ハクノ「なら、これは罰か」

呻くように、痛みと衝撃で朦朧とする意識でひとりごちるハクノ。

ドール「（作動音）」

ハクノ「……いや。そんな道理はどうでもいい……！」

内心、激昂するハクノ。
理由はいらない。ただ憎い。ひたすら憎い。
自動機械だと分かっているこのドールさえもが憎い。
バヂッ、とデッドフェイスが——電光の死相が一瞬だけ浮かびかけるも、未だ完全に発動はしない。放っておけば完全に発動するかもしれないが、ドールの攻撃の方が早い。

ドール「(作動音)」

ドール、ひときわ大きな矢(らせん状の剣が矢に変形したもの)をつがえ、放つ。
ハクノの肩口を通過し、その背後に直撃するらせん状の矢弾。
あまりのエネルギー量に、クレーターの、辺獄の底が抜け——

選定の間

辺獄の底の、更に下。SE.RA.PHの底、廃棄された選定の場へとハクノは落ちる。
それは滅び去った黄金劇場でもある。
煌びやかであるはずのそれが、完全に煤けて朽ちている。
輝ける栄光の劇場、であったはずの場。
その中心には朽ち果てた剣が刺さっている。(ネロの剣)

崩落した天上からの光に照らされた剣とわずかな薔薇。
仰向けに倒れたままの状態で、その光景に見惚れるハクノ。

　ハクノ「――――」

ほんの数秒。
肉体を苛む痛みも、精神を苛む憎しみも、すべてを忘れたフラットな表情でハクノはこの光景の意味を想う。
クレーターの底で、九九〇年間の時を経て朽ち果てた劇場跡。
あらゆるものに忘れ去られた地の底の暗黒に、それでもまだカタチを残したものがある。
真紅の剣だけ、今も、〝まだ終わっていない〟と告げている。

　ハクノ（――ここは）
　　（ここは、地獄の底の底だ。最下層の中の、本当に一番下だ）
　　（その中で、こんなにも――戦っていた、跡がある）

黄金劇場の細部がクローズアップされる。
カメラ、最後にもう一度、ネロの剣に。
炎は宿らずとも熱を残す『原初の火（アエストゥス・エストゥス）』。

　ハクノ「誰……」

想いの一部を口にするハクノ。

想いのすべてまでは声にはならない。

ハクノ（どこの誰かは知らない）

（どうして、おまえは戦えた）

（オレたちはみんな失敗した。戦えなかった。

こんな風に、ただ殺されるだけだったのに）

届かないまでも、剣へと手を伸ばすハクノ。

血塗れの指先。

ハクノ「……オレは憎い。美しいものだって、憎い」

「なのに」

剣を見つめながら、想いの一部をさらに口にするハクノ。

ハクノ（コレが何なのかは分かる）

（ここにいた何者かは、最後の瞬間まで戦った）

（この掃きだめの底で、胸を張って、きっと戦い抜いた――）

ドオン、と音をたてて落ちてくるドール。

ハクノ、歯を食いしばって起き上がろうとする。

ドールによる傷と落下のダメージとで血の塊を幾つか吐き出しながら、ハクノは剣へと歩き出す。その跡には黒い血の轍ができている。

背後にはドールが迫っている。
ハクノ（歩け。……歩け！）
歩こうとするハクノ。表情には険しさが戻りつつある。
ハクノ（奴から少しでも離れるために？　まさか）
（自分の命を守るために？　まさか）
ハクノ「……戦う、ために」
血を吐くハクノ。ここだけは勝者を呪う敗者たちの声も聞こえない。
一度歯を食いしばってから、一言。
ハクノ「なぜなら、ここには」
目の前にあるものへ手を伸ばす。
更に迫るドール。
手を伸ばすハクノ。剣の柄を握る。
その表情は、やはり険しい。セイバーの在り方の一端に触れながらも、未だ、行動の原動力は怒りのみであるからだ。
ハクノ「最後まで戦った、見知らぬ誰かの証があるんだから――――！」
ハクノの周りにバチバチと火花が生じる。
それは『無』だったものが『有』に変わった証。

『意志のないもの』が『意志』を持った事による変革。
ハクノの黒い血液は、この行為によって鮮やかな赤色に変わっていく。

ハクノ（来い!!）
（セイバー――ッ！）

ハクノ、深々と七大最下層の更に地下にて突き刺さった剣を一気に引き抜く。
ハクノの呼び声によって再起動するセイバー。

CHECK▶ マスターとの契約によって魔力が入り、封印から立ち上がった。ここのセイバーを呼ぶモノローグは不要ではあるけど、あると気持ちいいなら残してください。

死に等しい封印をことごとく解除して、朽ちたはずの黄金劇場を、輝きと華やぎの黄金劇場へと復元しながら――（ドール、その影響と余波を激しい風の形で受けたため、呻きつつ動作一時停止）
セイバーは、空中からふわりと下りる。
最終的にハクノの前の床に着地する。ハクノの体からはおびただしい血が流れ落ちているので、血溜まりに着地する形になる。彼女が着地した瞬間、その血溜まりが一瞬で薔薇の花となって舞い上がる。

眼前の彼女を見上げているハクノ。
ハクノの表情は、呆然。この時、彼の中から渦巻く怒りは消えている。
セイバー「――――そうか、そなたが」
セイバーはハクノを見て、寂しげに微笑む。

CHECK▶ 姿は違えどハクノは白野に似ている。その事実がネロに全てを悟らせる。かつてマスターであった女主人公は既に存在せず、ある種の同一人物であれど同一人物ではない、岸浪ハクノしかこの世界にはいないことを、一瞥で理解する。

セイバーはハクノの手からそっと剣を取り、ハクノの前を通り過ぎる。
一方、ドールも前進を再開していた。
黄金劇場の圧力に耐えながらもハクノ抹殺に奔るドール。
それを正面から迎撃するセイバー。
勝敗は一瞬で着く。
セイバーは蘇ったばかりのサーヴァントではあるが、それでも、一〇〇〇年摩耗しきったドールは敵ではない。
セイバーは剣でドールと高速で何秒間か打ち合ったのち、身を屈めてギリギリで攻撃を避

け、一閃で敵の右腕を斬り飛ばす。
敵は残った左腕を突き入れてくるが、セイバーはそれを回避し後方に大きく回転跳躍、間合いを開けて着地。
即座に敵が高速で間合いを詰めてくるのに合わせ、セイバーも前に疾駆。
すれ違いざまに剣を一振り。
ドールが両断され、消滅する。

×　×　×

ドール、消滅時に一瞬だけ表情が変化する。
無残に崩れ去っていくドールだが、口元にはシニカルな笑みが浮かんでいる。
このドールが何なのかは作中では最後まで語られない。
ただ、機械的にSE.RA.PHのルールを守っていた何者かと。
彼はSE.RA.PHというシステム側の英霊である。
守護者というものはいつも世界にこき使われて摩耗していくものだ。
それでも、最後の最後、朽ちた石像は散り際に意志を示した。
もう意識も思考エンジンも止まっているであろう、灰になったロストマンは、
「そうか。――――いってこい」
そう、誰に気付かれる事なく、最後の挑戦者を見送った。

×××

一瞬の、間。

輝きを取り戻した黄金劇場に、セイバーとハクノだけが残される。

セイバーはハクノのほうを振り返り、

セイバー「答えよ。そなたが余のマスターか？」

キリッと告げるセイバーのドヤ顔。

つい先刻の寂しい微笑みが嘘のように、その顔は輝きと自信に満ちている。

周囲には春の嵐のような薔薇の花弁。

ハクノは眩しげに、目を細めながらセイバーを見つめていた。

第一話タイトルイン して、ＥＤへ。

CHECK▶セイバーが戦う姿を見てハクノは心を奪われる。それは今まで『理由もなく何もかもが憎い』『それが自分の原動力らしい』と自己嫌悪に陥っていたハクノにとって、はじめての『美しいものへの憧れ』となる。ハクノはデッドフェイスとしての生存理由や、トワイスとの会話から生まれた『なぜSE.RA.PHなんてあるのか』という疑問で最上層を目指すが、同時に『セイバーへの信頼』『一緒に戦ってくれる嬉しさ』が戦える理由になっている。それに白野が気がつくのは第九話であるが。

Cパート／学園

崩壊していく学園都市。
巨大表示板で、暗転していたハクノのモニターが生き返る。
そして、血のような真っ赤な文字でハクノの名前が表示される。
誰もいなくなった学園屋上から、第一階層に昇っていく（落ちていく）ムーンマイルラダーを見上げる神父服の男。
かつての聖杯戦争の監督役・言峰である。

言峰「とうに、聖杯戦争は失われた。
　この人工楽園で行われていたのはかつての残像だ。
　ここは敗北者たちの庭。決して変わらない結末を見続ける辺獄だった」
「だが、此処に奇跡は成った。
　有り得ざる一二九人目のマスター、きみの存在こそが、私の、最後の仕事だ」

データ構造の崩壊に呑まれる言峰。
見上げると、ラダーが昇る様子が見える。
言峰、口元に笑みを浮かべ、

言峰「残響は確かに空に届いた。

その道行きに、どうか光あらんことを」

その言葉はかつて、あるマスターに向けられたトワイス・ピースマンの言葉でもある。

鐘の音とともに無に帰る予選会場。

〈第一話／了〉

第一話 用語集

焼却炉
●しょうきゃくろ

辺獄の薔薇園。立ち入った生徒の半数は意味消失からの自殺に陥っている。廃棄物として捨てられたものの跡地。良くないもの、悪夢を見る場所として知られる。



構造帯そのものが破損しているためSE.RA.PHの清浄機能が働いておらず、ここに訪れた者は三層のレイヤーを同時に視る。一つは元々用意された土台。廃墟。一つは予選参加者全員に見せていた共通幻想。学園。そして一つは来訪者が持ち込んだ原風景。トラウマ。

西欧財閥
●せいおうざいばつ

レオナルド・ビスタリオ・ハーウェイを筆頭とした経済団体。EXTRA世界における地上の王。西暦二〇三〇年、レオナルドは聖杯を手に入れるべく月の聖杯戦争に参加した。

熾天の檻
●アンジェリカケージ

七つの海の底に君臨する熾天の檻。月の中枢に位置し、外部からの知的生命体がムーンセルにアクセスする為の到達点とされる。

NPC
●ノンプレイヤーキャラクター

聖杯戦争を円滑に進めるために作られた仮想生命。それぞれに決められた役割があり、逸脱することはできないが独自の思考、人格が備わっている。

第二話 死相 ——デスフェイス



第一階層　停滞の海

海賊は優雅に踊った。武器よさらば、銃よ眠れ。

過去に浸るは血の祭り、笛吹き男の夢の跡。

「停滞の海」は来訪者を歓迎する。

アバン／最下層の煉獄

第一話ラストからの続き。
呆然とセイバーを見上げている（見惚れている）ハクノ。
ハクノへと差し伸べられるセイバーの手。
セイバー「マスター。いや、奏者よ！」
ドヤッとしたセイバーの顔。周囲を舞っている薔薇の花びら。
ハクノ「（奏者って何？）……？」
セイバー「見るがいい」
セイバー、空を見上げる。
天から差す光。空から降りてくるエレベータールーム「ムーンマイルラダー」である。
セイバー「あれこそはムーンマイルラダー。我らを天へ、戦いへと導くモノだ」
セイバーに見守られながら、ゴウン、と音を立てて辺獄の底に降り立つエレベータールーム。
地面に積もっていた薔薇の花びらが巻き上がりながら、エレベータールームの外観が露わになる。
セイバー「さあ、ゆくぞ」
ハクノへと華やかに振り返るセイバー。

宙に舞う薔薇の花びらとエレベータールームを背にしながら、ハクノへと手を差し伸べながら、一言。

セイバー「七天の海が我らを待っている！」

ムーンマイルラダー内・浴場

第一階層に向けて上昇していくマイルーム。

その浴槽にて、聖杯戦争の基本知識がセイバーの口からハクノと、視聴者に向けて語られる。たちこめる湯気。たゆたう湯に浮かぶ薔薇の花びら。

広い浴槽で、湯に浸かっているハクノ。セイバーのｏｆｆ台詞を受けつつ、大仰なバスルームの様子を眺めている。

ハクノ「（感心）……」

周囲を見てから、ハクノ、第一話で穴が空いたはずの自分の体を見下ろす。

傷はもう無い。

セイバー「マイルームとはマスターの為の休憩所。当然、傷を癒やす施設もある」

傷があったはずの場所に触れるハクノ。

ハクノ「本当だ」

セイバー「とはいえ、ひとりきりで長湯というのも暇であろう?」
ハクノ「?」
何を言っているんだろう……と、ハクノが思案をやめて顔を上げると、磨り硝子の向こうにセイバーの姿が映っている。
ハクノ、まずは一瞬の無表情。
次に『硝子の向こうにセイバーがいる』『彼女はこっちに来ようとしている』と気付いて動揺……するのだが、まだそこまで感情は働かない。
予選でのショックと、根ざしている復讐心と、まだ目覚めたばかりの人間性がうまく機能していないのだ。
ハクノ「……(つまり、これは)」
セイバー「邪魔するぞ、奏者!」
裸身のまま堂々とセイバー登場。
ハクノ、真顔で対応。内面は(本人も分からない理由だが)絶句。
顔を逸らさない、視線も隠さない、が視線はやや泳いでいて、第一話であった『相手の不義を問いただすような』視線の険しさはない。
ハクノ「……おまえ。裸、なんだけど」
セイバー「テルマエに裸は当然であろう?」

ハクノ「……」

そういうことじゃない、と言いたいがどう返していいか分からず、そうか、と平淡に返すハクノ。

セイバー「それから、おまえ、とは何だ。余にはむろん名がある。
特殊な契約ではあったが故に真名こそ知るまいが」

話しつつ、セイバーは大型の浴槽に入ってくる。

湯に浮いた薔薇の花びらが揺れる。

ハクノ「……?」

反射的に浴槽の端に逃げていくハクノ、真名とは何だろう、という顔に。

疑問と同時にハクノは視線をまっすぐセイバーに向けかけて……眩しい裸身を前に、また目を逸らす。

セイバー「真名とは、文字通りに余の真の名だ。
いずれそなたも知るだろうが——」

広い浴槽で湯浴みするセイバーの肌。

セイバー「今は、セイバーと呼ぶがよい」

少し遠い目になるセイバー。女主人公のことを思い出しているのだ。

ハクノ「(呟き) セイバー」

おうむがえしに繰り返すハクノ。
セイバーに言うのではなく、口の中で確認するようなイメージ。
セイバー「うむ。聖杯戦争を彩る七種のクラスがうち一種、
最優と名高きクラスである！」
ドヤッとしながら胸を張るセイバー。
セイバー「そして聖杯戦争とは、月の聖杯であるムーンセル、
霊子の願望器によって催される儀式である」
「ただ一人の生き残りとなるその時まで、参加者は戦わねばならぬ」
「己が願いを叶えるために」
「……そして、だ」
「そなたこそ参加者のひとり。すなわちは一二八名のマスターのひとり」
得意げ、自慢げに「二〇〇〇年前（ゲーム版）の聖杯戦争のルール」を語るセイバー。
セイバー「マスターが何かは言うまでもないな？
そう、サーヴァントと契約を交わしたウィザード、霊子ハッカーだ」
ハクノ「（小声で）言ってるじゃないか」
セイバー「そして、サーヴァントとは……」
セイバー、渾身のドヤ顔。

セイバー「もちろん、余だ！　いいや余と同じ至高の天才は二人といまいが、
ともかくも余のように人類史に刻まれた英雄・英傑こそが
サーヴァントとして召喚される！」
「いや、正確に言うとムーンセルによって再現され、
マスターにあてがわれる、というべきだが。
そのあたりの事情は（どうでも）よい。ロマンがない故な」
ムーンセル側の事情に関してはどうでもいいので、上機嫌から一転してやんごとない、淡々
とした口調で付け足すセイバー。
ハクノ「……」
ひたすらに明るい、エネルギーに満ちたセイバーを『どこか遠い出来事、他人事』のよう
に見つめるハクノ。（これは憧憬の裏返し。第四話でそのようにハクノは感じ始める）
ハクノ「………キミの話は難しいな」
セイバー「そうか？」
首を傾げるセイバー。ずずい、とハクノに接近してくる。
セイバー「余が口にしたのは基礎中の基礎のはずだが……」
ハクノの顔を（ハクノが逸らした視線の先から）覗き込むセイバー。
セイバー「そなた、名は？」

ハクノ「岸浪ハクノ」
セイバー「よき名だ。霊子ハッカーだな？」
ハクノ「……」
ハクノは返答できない。記憶がないためである。
自己プロフィールについてハクノは名前以外を認識できていないが、あまり気にしていない。憎い、という攻撃的で前のめりな行動原理が明確に存在しているからだ。
セイバー「では、あれか。ここが霊子虚構世界である事も分かっておらぬか？」
ハクノ「それは……何となく分かる」
セイバー「ふむ」
ハクノ「月の巨大メインフレームが作った、よくできた電脳空間」
セイバー「SE.RA.PHというのだぞ」
うんうんとひとしきり頷いてから、いぶかしげな表情になるセイバー。
セイバー「……そなた本当に知らぬのか？　聖杯戦争の何たるかを？」
ハクノ「(目を逸らしたまま頷く) 分かるのは、戦うってことだけだ」
カメラ、風呂の備品や美術品など映しつつ。
セイバー「予選中であれば、個々人の記憶は制御されているというが」
「サーヴァントと契約を交わし、本選を戦うマスターと

なったならば自動的に記憶は戻る」

ハクノ「そうなのか」

セイバー「（やや自信なく）戻る、はずだぞ？」

ハクノ「別にいい」

素っ気ないハクノの言葉に、ちょっと驚く表情のセイバー。

セイバー「……自分が何者か、知らずとも戦えるというのか？」

「負ければ命を落とす。勝たねば、地上に戻ることも叶わぬ。

霊子ハッカーは、魂を以て月に接続しているのだから」

ハクノ「気にしない」

至近距離で事実を突き付けられても、静かな表情のハクノ。

セイバー「そうか、ならば」

セイバー、ハクノの顎から手を離す。

ざば、と浴槽から立ち上がって裸身を晒しつつ……真剣な表情から一転、

明るい表情で、また堂々と胸を張って――

セイバー「流石は余を引き当てただけのことはある！

そなた、結構な大人物なのだな！」

セイバー、満足げに大きく頷く。

ハクノ「……」
褒められて悪い気はせず、横を向いて（視線を逸らして）頬をかくハクノ。
うっすらと嬉しそう。
しかし一瞬だけセイバーは哀しげな表情になってハクノの横顔を見る。
セイバーの口元、唇のアップ。
セイバー「（呟く）もしくは、よほどの……」
「よほどの痴れ者か――」とは続けずにセイバーの言葉は終わる。

新設海洋都市ケープ・ラダー到着口

浴室から出て、普段着に着替えた二人。
ラダーの上昇がゆるやかになり、ガコン、と大きな音と震動。
第一階層への到着である。
ハクノとセイバー、扉の前に戦闘態勢で待機。
ラダーの扉が開いて――
セイバー「見るがいい！　これこそ、聖杯戦争のための決戦場――」
扉から外へと出て行くセイバー、言い掛けてぴたりと止まる。

そこはセイバーの知る『聖杯戦争の会場』である『学校校舎』ではなかった。
ラダーが出たのはある高層ビルの屋上。
そして、ハクノたちの目の前に広がるは見渡すかぎりの美しい都市と、
そこで催されている大規模なお祭りの様子だった。
街は華やかに飾り立てられて、無数の露店と無数の人混みが路地を埋めて、
大通りではパレードが練り歩いている。

ハクノ「……！」

都市の光景を見ながら、息を吞むハクノ。
何かを（感嘆の表現を）言おうと口を開くハクノだが……
混乱したセイバーの発言の方が早い。

セイバー「なんだこれは!?　話が違うではないかっ！」

×　×　×

第一階層の遠景からはじまって、海中都市の各所が映される。

CHECK▶ 第一階層は十八世紀頃のイギリスの町並みと二十一世紀の近代都市が融合したもの

下層、下町的なものがイギリスの町並みで、

その下町部分を睥睨（へいげい）するように中央には近代都市の高層建築がある。
高層建築……ビルディングは神殿のように（あるいは一本だけの塔のように）建っている。
シンボルマーク然として。

CHECK▶ このビルディングはフロアマスターであるシンジの住み処でもある。

空は青く（海だけど）、うっすらと蜘蛛の巣状の格子が見える。
鉄骨のような、毛細血管のような、細い線。

CHECK▶ この細い線が何なのかは第三話で明らかに。

さらに、SE.RA.PH特有の『疑似霊子が散って天上に舞い上がっている』描写と、それと行き違うようにキラキラと空から落ちてくる光（星のようなもの）が見える。

CHECK▶ マリンスノーのようだが、マリンスノーのようにゆっくり落ちてはいない。

第一印象は美しい未来都市。

そして、都市の全域では賑やかな祭りが催されている。
静かな場所など、少なくとも屋外にはひとつもないようなイメージ。

セイバー「なんとも見事な都市、見事な祭りではないか……いや、いや、
余の知る第一戦の会場とはまるで異なる！」

×××

ぶんぶん首を振りつつ否定するセイバー。

ハクノ「キミ、怒ってるのか？」

セイバー「怒ってはいない、驚いているのだっ！」

セイバー、大仰に両手を広げながらぐるりと周囲を指し示して、

セイバー「七天の海、七層、すなわち七つの決戦場。一二八名による七回戦！
試合形式、トーナメント形式での命のやり取りは……どこへ行ったのだ？」

ハクノ、肩を竦める。
知らないので答えようがないのである。

セイバー「これは都市、まさしく都市だ。
しかも何やら祭事に沸いている。大いに……うむ！
大いに興味を惹かれるな！」

セイバー、ハクノに同意を求めながらワクワクしている。

CHECK▶ハクノの刹那的なものとはまた異なる、純粋な好奇心からの前向きさ・前のめりさ。

ハクノ「……」

輝くようなセイバーの表情に、出会った時と同じように見惚れかけるハクノ。

新設海洋都市ケープ・大通り

屋上から下りて、祭りの大通りを行く二人。セイバー、てくてく歩きながら周囲の祭りの様子や都市の建造物などを次々と指し示していく。

セイバー「あれも、これも、すべて気になる！」

セイバー「一度気になってしまうと、どうにもままならぬ……奏者(そうしゃ)よ！」

ハクノ「奏者？」

セイバー「この余を、ミューズさえ羨む余を奏でる者、という意味合いだ。
奏者、余はしばらく実体化を維持しておくが、良いな？」

ハクノ「（頷く）」

意味を分かっていないまでも頷くハクノ。

セイバー「おお、実体化と霊体化は分かるか」

ハクノ「いや……」

セイバー「やれやれ」

仕方ないなと眉を八の字にしつつも、笑顔を見せるセイバー。

×××

街としてきちんと栄えている下町を、

うきうきしながら歩くセイバーと、それについていくハクノ。

セイバー「サーヴァントは強大な存在ではあるが、

それが故、ただ実体を保つだけでもリソースを消費する」

ハクノ「電力とか?」

セイバー「魔力。古い言い方だ。つまりはそなたの生命力だな」

×××

街の散策は点描でもOKかと。点描候補。

・ずらりと並ぶ露店に、特にキラキラした装身具を売っている露店に対して目を輝かせる

セイバー。と隣にいるハクノ。

・見晴らしの良い場所から大通りのパレードを見下ろして眺めつつ、ふとセントラルタワー

を見上げるセイバー(とハクノ)。

・祭りの露店でわくわくしながらワッフルを買うセイバー。と隣に立つハクノ。
・人混みの中で、そのへんの男性（ＮＰＣ）にナンパされるセイバー。何か褒め言葉を言われたらしくふふんといい気になっているセイバー。と隣に立っているハクノ。
・大通りのパレードの端、パレード参加の踊り子だろう華美な服装のＮＰＣに道を尋ねて、『あっち』と指さされてなるほど顔のセイバー。
・パレードの先頭、ないし人の多い路地で路上演奏する楽団の様子を眺めて「ふうむ」という顔のセイバー。

×××

一方、ハクノは苛立ちを覚える自分を抑えていた。
不意に、理由なく歯がみするハクノ。
セイバー「む？　なぜ怒っている？」
露店で買ったワッフルをかじりながら、素朴な質問をするようにセイバー。
ハクノは首を横に振る。
ハクノ「キミに怒ってる訳じゃない」
セイバー「霊体化してしまえば魔力消費は抑えられる。きつければすぐに言うがよい」
ぺろりとワッフルを平らげて、セイバー。
セイバー「……だが、もうしばらくは実体化を続ける。対戦相手の目処がついた」

一瞬の間。

まさか、と目を丸くして驚くハクノ。

セイバーはふふんと得意げに、

セイバー「もちろん。余は興味本位で歩いたのではなく、情報収集をしていたのだぞ？」

ハクノ「全然気付かなかった——」

セイバー「(可愛く) していたのだぞ？」

ハクノ「街を……楽しんでるとばかり」

セイバー「せっかくの機会ゆえ全力で余は楽しんでいるが、それはそれ。様子が変わろうとも、ここは第一階層に他ならぬ」

セイバー、自分の言葉にうんと頷いて。

セイバー「ともあれ、まずは対戦相手だ」

大通り外れ・酒場

酒場は、かつて大きく賑わっていただろうと思われるものの、現在では無人の酒場と化している。

まるで一時間前までは酒宴が行われていたかのような状態のまま。

CHECK▼ 実際には最後の酒宴が終わってから（マスターが誰も酒場に来なくなってから）一〇〇年近い時間が過ぎている。酒宴直後の状態のまま、データ保存されている。いつでも再開できるように。

セイバー「ここが溜まり場らしいのだが――」
ハクノ「対戦相手の？」
セイバー「マスターたちのだ」
シン、と静まり返った店内。
テーブルの上にある飲みかけのグラスへ目を留めるセイバー。
更に、店の奥へと視線を送る。
店の奥にはひとりだけ客がいて、グラスを傾けている。ドレイク（サーヴァントとしての姿とは違う姿。マスターや一般人に見える）である。ウイスキーをロックで飲んでいる。
セイバー「二人だけか」
一言呟いてから、すう、と息を吸って見得を切るセイバー。
セイバー「剣を取るがよい、名も知らぬ宿敵よ。
己が願いがため、命を賭して戦う時が来たぞ！」

ドレイク、ちらりとセイバーの方へ視線を向けて——

ドレイク「ぷっはは！　何だいアンタ、開口一番いきなりそれか！」

大笑いするドレイク。椅子に座ったまま、体をくるりとセイバー（とハクノ）へ向けて、
長い足を組み直してから一言。

ドレイク「祭りの仮装かと思ったけどねえ。
　いやはや、まさかその恰好、本物のサーヴァントかい！」

CHECK▶ドレイクはセイバーの魔力を感知しているので本当はサーヴァントと分かった上でこう言っている。
ドレイク自身はシンジの計らい（この一〇〇〇年の間にシンジが開発したであろう特殊なコードキャスト）によってサーヴァントとしての気配が遮断されている。

セイバー「む？　むう？」

ハクノ「……？」

ドレイク「外でしこたま呑んできて、もしかして酔っ払ってるのかい？　サーヴァントが？」

セイバー「余は僅かたりとも酔ってはおらぬ。侮辱であれば受けて立つぞ？」

真剣な表情を崩さないセイバー。剣は抜いていないが臨戦態勢。

CHECK▶ 相手が少しでもハクノにアクションを起こせば、問答無用で斬り捨てる、という状態。サーヴァントは常時マスターを守っているよ、という関係を空気として見せておく。

ドレイク「ああ、悪い悪い。アンタがあんまり面白い冗談言うもんだから、こっちも変な風に返しちまったよ」
肩を竦めながら『やりあう気はないよ』とグラスを掲げるドレイク。武装はしてないよ、と両手を見せる意味も込めて。
ドレイク「ふうん。長期スリープ明け、ってあたりか」
言葉の意味が分からず、きょとんとするセイバー。
ハクノは慎重に周囲の様子を窺っている。
セイバー「ひとつ確認するぞ。貴様、マスターであろう？」
ドレイク「さあね」
セイバー「己が願いがために、この月へ……」
ドレイク「願い、ねえ」
一瞬だけ遠い目になるドレイク。
カラン、とドレイクのグラスの中で氷が溶けながら音を立てる。
ドレイク「懐かしい響きさね。あったねえ、そういうの。アイツも昔はまあ……」

ハクノ（……昔？）

ハクノのモノローグに同期するように、セイバーもいぶかしげな表情になる。

ドレイク「この階層で戦いを望む人間なんていやしない。
終わっちまったのさ、聖杯戦争は」

グラスを掲げて乾杯の真似のような仕草をするドレイク。

ドレイク「今はなき聖杯戦争に乾杯！
結局誰ひとり、熾天の檻には辿り着けませんでしたとさ！」

乾杯、と言いながらもその声には失望と、そしてシンジへの憐れみが隠れている。

ドレイク「（一口飲みながら）この街じゃ、マスターの生活は保障されてんだ。
戦う必要なんざない」

ぴくり、とセイバーの指が動く。

CHECK▶ 岸波白野とはまるで違い、戦う意思を失っているらしきマスターの存在に失望、怒っているがゆえ。

ドレイク「知らないなら教えてやるよ」
「マスター権を破棄するのさ。セントラルタワーの政府にサーヴァントを譲渡

すりゃ、ぜんぶ丸く収まる。この階層は、そういうふうにできている」
「街の様子、見ただろ？　あれは今日だけの特別なもんじゃない。
聖杯戦争をやめたマスターたちを讃えて、年がら年中祝ってるってワケ」
「サーヴァントを売ったマスターは、一生、永遠に遊んで暮らせるようになったのさ」
カメラ、酒宴の跡を映す。

CHECK▶ 酒場にあるのは退廃の象徴である。聖杯戦争を失い、願いを捨て、サーヴァントを捨てて第一層に留まったマスターたちの願いの残骸とも言える。

ドレイク「もっとも……飽きちまったのか、今じゃ引きこもる連中ばっかりだ」
セイバーの横顔。セイバー、憤りから口を閉じる。
ドレイク「(笑って) アンタはどうかな、見ない顔の『マスターさん』」
ドレイクはハクノへと微笑み掛ける。
ハクノ、無言。無表情。セイバー、ぎゅっと拳を握る。
ドレイク「ともかくだ。今どきサーヴァントなんて持ち歩いても何の足しにもなりゃしない」

「（悪戯っぽく）アンタはイイ女だから、そうでもないかもな」
セイバー「…………なんという」
口惜しげに俯くセイバー。
セイバー「（呟き）それぞれに願いを秘めて月へと集った魂であろう、それが」
「（呟き）今では誰一人、空を見上げる者はいないというのか？」
セイバー、歯がみして、その場を立ち去る。酒場から出て行ってしまう。
セイバーの後を追い掛けようとするハクノだが、その背中に声が掛けられる。
ドレイク「売らないのかい？」
振り返るハクノ。
視線が、ドレイクの姿をまっすぐに捉える。
ドレイク「アンタはサーヴァントを売らないのかい？」
ハクノ「……売らないさ。分かりきった事は聞かないでくれ」
ドレイク「へえ。それは、どうして？」
ハクノ「じゃあ逆に」
ハクノ、ドレイクに険しい視線をぶつける。
ハクノ「ただ生きるために、アンタは黄金を泥に変えるのか？」
ドレイク「――――」

ドレイク、ハクノの視線に嬉しそうに目を輝かす。獲物を前にした肉食獣の舌なめずりと同意。

ドレイク「いいタンカだ。昔、同じような大口を聞いた気がするねぇ」

なぜだか褒められてしまって、ドレイクの真意が分からず「？」顔で返すハクノ。

ドレイク「この階層にはまだ一人……」

都市外観。セントラルタワーがちらりと映る。

或いはさらに、セントラルタワー内のシンジないし大人アマリの後ろ姿を。

×××

ドレイク「サーヴァントを残しているマスターがいるってコトさ」

ドレイク、ニヤリと笑いながら一言。

大通り

酒場から表通りに出るハクノ。

セイバーは、不機嫌そうながらも凛とした風情で近くに佇んでいる。

セイバー「……すまぬ、奏者を置いて先に出てしまった」

ハクノ「いや、こっちこそ」

呼び止められて足を止めたのは自分だから、と首を横に振るハクノ。
と――
セイバー「(短く。小声で) 動くな。奏者」
セイバーの言葉の直後、ふたりの周囲を武装した少女警官たちが取り囲む。

CHECK▶ ミニスカ少女警官である。シンジが隠遁してから設立されたのである。ミニスカで美少女揃いなのはアマリの趣味なのである。

ハクノ「(息を呑む) ……!」
戦闘の予感に身構えるハクノ。
さりげなくこの時点で既に目を輝かせているセイバー。
少女警官A「ようこそ、新設海洋都市ケープへ。歓迎いたします、来訪カウント四〇四様」
少女警官B「市長がお呼びです。セントラルタワーまで、ご同行を願います」
ハクノ「――」
ハクノ、視線だけで『戦うかどうか』とセイバーへ確認するが……
セイバー「何と……何と! 余好みの華美な装い、見目の良い少女たちではないか!」
ハクノ「セイバーさん?」

セイバー「うむ、美少年もよいが、美少女はもっと良い！　いるだけで場が華やぐからな！」
少女警官A「ありがとうございます」
セイバー「こちらこそありがとう！　美少女武装警官とは、この街の市長とやらも趣味に走っているようで何よりだ！」
ものすごく上機嫌なセイバーに呆気にとられ、警官集団への警戒心がちょっと薄れるハクノ。
セイバー「余は市長とやらに大いに興味を抱いたぞ！　奏者はどうだ？」
ワクワクしている素振りをまったく隠さないセイバー。
ハクノ、そんなセイバーに頷く。
ハクノ「分かった。同行しよう」
頷きながらハクノは警官を見る。少女警官たちの背後に聳えているセントラルタワーをも見据える形で。
ハクノ「……偉い人なら、さっきの奴より色々知ってそうだし」
市長と対面する事でこの街の真相を知ろう、と考えるハクノ。
セイバー、うむ！　と自信満々に同意する。

×　×　×

その様子を、どこかの建物の屋上から観察している謎の人影（アニメ仕様のリン）。
リン「あー、ついて行っちゃったかあ……」

せっかくの新顔なのに、勿体ないコトしたな」

タワーに連れて行かれたマスターはどうあっても処理されるか去勢されるものと分かっているが故の発言。

セントラルタワー

タワー、エレベーター内。

ハクノとセイバー、そして銃を構えた警官たちを乗せてエレベーターは上昇していく。

電脳世界なので実際の距離は無視した描写や上昇時間でOK。

ガラス張りのエレベーターから都市を映しながら、セイバーと会話。

よく見れば都市にいるのはＮＰＣばかりで、マスター（人間）たちはその一割もいない。

CHECK▶ 一割のマスターを快適に過ごさせるため、NPCたちは都市のパーツとして働き、都市を稼働させている。

ハクノ「人間は、あの中にはいないんだな」

セイバー「殆どはＮＰＣであろうな。基本、マスター以外、SE.RA.PHに人間はいない」

CHECK▶ ここで二八名と言わないのは他の聖杯戦争会場からも逃げてきたマスターたちがいるので。
最終的には四〇〇名近くのマスターが避難してきた。

ハクノ（マスター、か）

× × ×

暗転。
第一話Bパートの『真っ赤な廊下』によく似た『真っ赤なエレベーター』の中にハクノひとりだけが立っている。
ガラスに映り込んだ自分の姿……の代わりに、壁面には真っ黒なハクノのシルエットが映っている。
ハクノ「聖杯戦争」
呟くハクノ。ハクノ以外には誰もいなかったのに、突然、足下には少女警官や見も知らぬ男女（街にいるはずのマスターたち）の死体が折り重なっている様子が露わになる。
死体たちの顔は見えない、もしくは、顔すべて黒一色。
マスターA「そう。殺し合いだ」
マスターB「肉をえぐって、骨を曝いて、心臓を突き刺すような」

マスターC「容赦のない無残な戦いだ。おまえに、やれるか」
マスターたちの声はハクノを構成する敗北者たちの恨みの声だ。
彼らはハクノを強制しているのではなく、ただ事実を並べているだけ。その覚悟はできているか？　と。

ハクノ「…………」
ハクノ、答えず。（口にするまでもない）

市長室

エレベーターはタワーの中層に到着、自動扉が開く。
エレベーターから出た瞬間、トラップが作動しているが一人は気付かない。

CHECK▼ 暗示的に、ザッ、とノイズのようなものが画面に走る。ん、と違和感を気に留めるセイバーだが、追求する時間はない。

セイバー「？」
少女警官A「市長室に到着しました」

分がシンジを扇動して殺させた同級生』の事など、とうの昔に忘れている。

アマリ「ようこそ、新設深海都市ケープへ」

手を広げて歓迎の意を示すアマリ。アマリの表情はにこやかである。

アマリ「正直なところ、もう予選から上がってくるマスターはいないとばかり」

「だって、ほら。今どき聖杯戦争とか、願いを叶えるとか、時代遅れすぎて。

いえ、失礼」

アマリ、クスリと笑いながら。

CHECK▶ここ、『自分を置いて大人になっている元友人』『その友人が権力者になっており、若者の努力を見下している』事への嫌悪感を出すように。ハクノ、ひいては視聴者にとって始めての〝明確な敵〟として。

セイバー「オマエたちから見ればそうであろう。だが、ここにひとりいる」

セイバーの表情は真剣。

態度には示さない（抜刀したりはしない）が、気持ち的には既に臨戦態勢である。

アマリ「はい。ですから、私たちはあなたの来訪を歓迎します」

ハクノへと（セイバーへではなく）微笑んで、アマリは第一階層の状況を説明する。

アマリ「ここは確かにSE.RA.PHの七層を構成するうちのひとつ、第一層……
ですがそれは過去のこと。現在はSE.RA.PHの管理から解放された
自由都市として機能しています」

セイバー「自由とな？」

アマリ「無益な戦闘を強制されず、マスターが自由に生きていける都市です。
一定の法律があり、都市行政によって管理される」

アマリの言葉はあくまでハクノへ。

CHECK▶ セイバーは懐柔対象ではないので話し掛ける意味がないと判断している……のかなー、と見せかけて実はそうでもない。

ハクノ「…………聖杯戦争は」

混乱は続いているものの、状況に対応すべきと判断し、声を出すハクノ。

アマリ「行われていません」

ハクノ「サーヴァントを、買いとるんだろ」

アマリ「争いの種を管理しているんです」

アマリは言葉としては反論しているが、あくまで表情は柔和。
懐柔の姿勢を一見では崩さない。

アマリ「予選会場であなたも学んだでしょう、サーヴァントは危険な電脳兵器に過ぎない」

アマリ、手元に光る電子的コンソールを出現させて、タタンと軽く指を走らせる。
先ほどの酒場……のみならず、遊興施設やごく普通の（ように見える）家庭の様子などが幾つか映し出される。どこの場所でも楽しげに過ごすマスターたちの姿。
そして、マスターたちを快適に過ごさせるために尽くすNPCたちの姿。

アマリ「時に労働者として、時に伴侶として、家族として。あなたたちに必要なのはサーヴァントではなく、AI。NPCです」

ハクノ「……」

ハクノは無言。伴侶や家族、と言われても感想がない。
そんなハクノの顔をちらりと鋭く横目で見るセイバー。
まさか懐柔されてはいないだろうけれど、一応確認として。

アマリ「自由都市におけるマスターの比率は、人口のおよそ一割にも満たないものですが――」

一瞬だけ寂しげな表情になるアマリ。

だがすぐに営業スマイルになって――

アマリ「全マスターを快適に過ごさせるため、多くのNPCたちが都市のパーツとして働き、都市を稼動させているのです」

アマリ、コンソールを操作。

市民登録のためのウィンドウが空中に開く。

アマリ「ですから、あなたも。サーヴァントを都市行政に譲渡し、市民登録を。永遠の幸福をご提供しましょう」

丁寧だが威圧的、かつ上から目線のアマリ。

ハクノは無言。僅かな空白の間。

アマリ、やはりセイバーを見ることなく、ハクノへと更に言葉を続けるべく口を開こうとするが、そこに重ねるタイミングでハクノが発言。静かな顔で。

ハクノ「サーヴァントは、どうなる」

アマリ「ああ」

そんなことは心配いらないのに、という上から目線の笑顔のアマリ。

アマリ「当然、無駄にはしません。令呪によって拘束し、分解し、都市運営のリソースとして有効活用されます」

セイバー「……!(反感に満ちた表情で)」

ハクノ「じゃあ簡単だ。断るよ」
アマリ「なぜ？」
ハクノ「オレは、頭の悪いヤツとは組まない」
アマリへの挑発、&本質をついた返し。
アマリ、営業スマイルを崩さずに——
アマリ「仕方ありませんね」
残念がりながらも嬉しそうに、コンソールをサッと操作するアマリ。
アマリ「ファイヤーウォール起動」
タワーの外壁すべてに真っ黒い防御壁（ファイヤーウォール）が入り、脱出不可能に。
アマリ「残念ですが『処理』を開始します」
営業スマイルのままのアマリ。
セイバーは待ってました、とばかりに瞬時に剣を実体化させて構える。
セイバー「どの口で！」

CHECK▶どの口で残念ですがと言うのだ！　の意味。

瞬間、部屋の様子が暗転する。一瞬にして部屋が『ふたつ』になる。

セイバーだけの市長室Aフロアと、
ハクノだけの市長室Bフロアに分かれる。

×　×　×

セイバーだけの市長室A。
セイバーがいるフロアにはアマリがいる。

CHECK▶アマリの姿を巨大ホログラフィにしていた場合、こちらで通常のアマリに戻る。

セイバー「……ぬう、まやかしか！」

アマリ「ええ。フロアへ踏み入った時、コードキャストを少し」

見下した笑みを浮かべるアマリ。

×　×　×

ハクノがいる市長室B。

CHECK▶アマリの姿を巨大ホログラフィにしていた場合、ホログラフィはままで。はじめから偽物のアマリだったので。

ここには、初めからハクノひとりきりで、アマリはいなかったのだ。
アマリはハクノに対して『直接面会する』価値さえ感じていなかったからだ。
ハクノ「セイバー……!?」
アマリ「視覚情報、位置情報に介入させていただきました。あなたは初めから、ひとりでこの部屋に入ったのよ」
スピーカー越しの音声でアマリが宣言する。

市長室A／セイバー

アマリ「ろくな防壁を使っていないんですね、あなたのマスター」
セイバー「ふふ、余も対魔力スキルは低いぞ!」
不敵に言って剣を改めて構えるセイバー。
強力なコードキャストを扱うとは言ってもただのマスターが兵器に等しいサーヴァントに勝てる道理は無い。
アマリ「低いのは、それだけですか?」
アマリの周囲に大型の電子的コンソールが出現、パラララと自動的にプログラムが走るような描写。

広大な市長室に、次々と、無数のサーヴァントたちが出現（実体化）する――

アマリ「見込みのあるサーヴァントはね、こうして手駒に残してあるの――」

英霊A「グウウ……」

英霊B「ガァアアアアアア!!」

アマリ「バーサーカーとしてね！」

大柄なサーヴァントが咆哮し、空間が震動。

セイバー、油断なく剣を構える。

アマリへと突撃を行う前に複数のサーヴァントと戦わなくてはならない、

という状況だが、

セイバー「ふん、多いな……！」

セイバー、強気を崩さない。

自分が勝利するのは当然、問題はどのくらい時間を使うか、という事だ。

アマリのコンソールが明滅。口々に獣じみた唸り声を上げながら、一斉にセイバーへと襲い掛かる無数のサーヴァントたち。

セイバー「奏者よ、余が行くまで――」

立ちはだかった一体を横薙ぎ一閃に切り裂きながら、セイバーは叫ぶ。

セイバー「決して！　死ぬでないぞ！」

市長室B／ハクノ

少女警官B「死ぬしかないわ、あなた」
少女警官のひとりが、そう言いながら腰のサーベルをスラリと抜き放つ――
市長室Bは絶体絶命の状況。
複数の少女警官が既にハクノを取り囲んでおり、少女警官Bを皮切りに、それぞれに腰のサーベルを抜く。まさに『処理』される寸前である。
ハクノ「……！」
ピンチに、歯がみしながらもどうしようもできないハクノ。
周囲をぐるりと囲まれているので逃げられない。
少女警官A「選択を誤ったんだ、キミは」
少女警官B「いやいや。戦いたいってことは、死にたいってことでしょ。だったら」
少女警官B、自然体でハクノの腹部を刺す。
少女警官B「死ぬしかないって」
ハクノ「……ぐ、あ……！」
少女警官C「バカな奴、こっち側にだって来れたのに……ねえ！」

二つ目のサーベルで胸を刺されるハクノ。
無数の剣、無数の刺突音。
少女警官B「命を大事にしない奴はさぁ！」
少女警官C「死ね！」
少女警官D「死ね、死ね！」
少女警官E「戦う奴はもういない！」
飛び散る鮮血。周囲が赤く染まる。
元マスターである少女警官たちによって嘲笑されつつ敢えなく殺害され、べしゃり、と自分の血の海へと膝を突くハクノ。
力なく、床へと垂れ下がった両腕。
血の赤色が部屋に広がっていく。一瞬の間。
――と。
ハクノ（ああ――目が覚める思いだ）
地獄の底から響くような、淡々としたハクノの声。
事実、彼は眠っていたのだ。憎しみだけで動いてはいたが、誰を憎むべきかまだ分かっていなかった。『きちんとした理由から怒りを叩きつけたい』。そんな人間らしい甘さが、彼の意識に薄いヴェールをかけていた。

それがこの痛みで剝がされた。
まさしく、温かな夢から目覚めるように。
死んでいるはずのハクノの腕が上がり、体に刺さった剣を抜く。
ゆっくりと、剣が抜かれる。
シルエット状の少女警官たちは、立ち竦むだけでハクノの行動に対して反応できない。

CHECK▶ 状況的には、少女警官たちは驚きのあまり硬直している。ただし少女警官たちのリアクションはあえて明示せず、立ち竦むシルエット程度に抑えて、ハクノの異常行動にシーンを集約したい。

ここでエレベーターでハクノに語りかけてきた死者たち（戦えるのか？という質問）に答えるハクノ。

死者の声「おまえに、できるか？」
ハクノ（無論、戦えるとも）
（自分が何者か分からなくても）
（オレは）

俯いていた顔が上がる。

そこには、電光する死者の顔がある。

ハクノ（――この、憎しみだけで）

×××

カメラ移って、タワーの外から内部をピーピングしていたリンの姿。

ハクノの豹変ぶりをみて、ぞわりと悪寒を感じながら呟く。

リン「死相――デッドフェイス」

その声は驚きではなく、おぞましいものを見て唇を噛みしめる、嫌悪感に満ちたものだった。

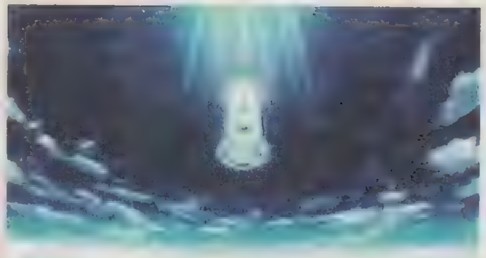
〈第二話／了〉

CHECK▶ 台詞にするコトであの顔はデッドフェイスだよ、と告知。本作でのみ使われる新用語なので、ここで強く強調する。

第二話 用語集

ムーンマイルラダー
●ムーンマイルラダー

上昇し、七天の海の戦いへと導くもの。聖杯戦争に参加したマスターが、対戦相手であるマスターに勝利した時のみ下ろされるSE.RA.PHの基本原則。下から上の階層へ上るにはこのラダーを使用する必要がある。傷を癒す効果もある。余談ではあるが、下の階層に下りるだけならラダーは必要ではない。



クラス
●クラス

聖杯戦争において、サーヴァントが司るもの。基本的には、セイバー、アーチャー、ランサー、ライダー、キャスター、アサシン、バーサーカーの七種のクラスで振り分けられる。

霊子ハッカー
●りょうしハッカー

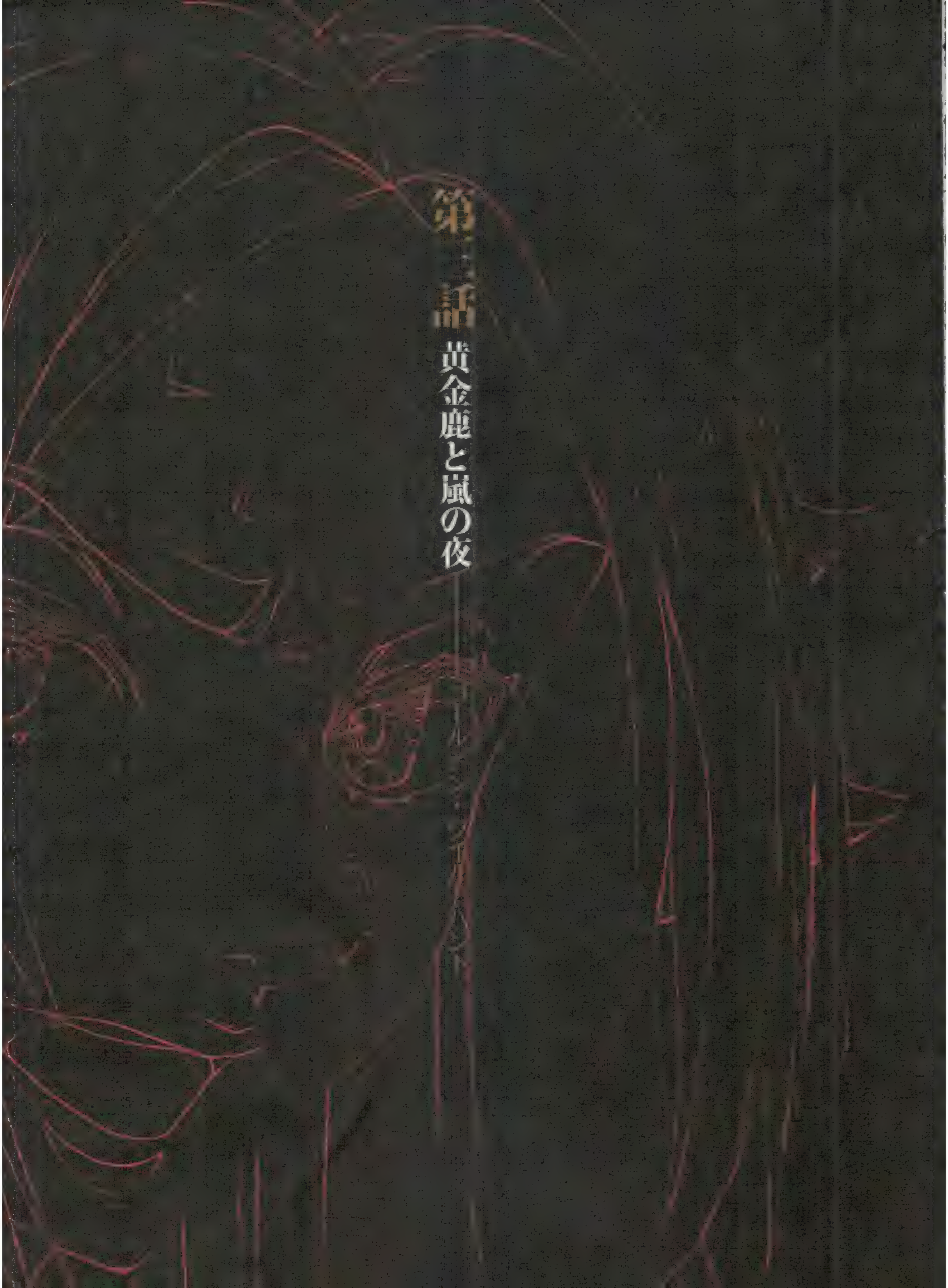
ウィザードと同義。

新設海洋都市ケープ
●しんせつかいようとしケープ

もともとはSE.RA.PHの七層を構成する第一階層だったが、SE.RA.PHの管理から解放された都市。間桐シンジにより、争いが起きないように一定の法律のもと都市行政によって管理されている。

デッドフェイス
●デッドフェイス

死相。チャクラ・ヴァルティン成立後、ごく稀に発露するようになった強化現象。



第二話 黄金鹿と嵐の夜

アバン／セントラルタワー・市長室A

タワー内部、セイバーとサーヴァント群。
セイバーはバーサーカーたちの猛攻をかいくぐり、壁を破壊し、ハクノのいる市長室Bにたどり着く。
セイバーの予想ではハクノは警官たちに囲まれて窮地にいる筈だった。
しかし、市長室Bに広がっていた光景は、無残に惨殺された警官たちと、疲れ切って今にも倒れそうなハクノの姿だった。
セイバーを追ってきたアマリも驚くが、状況はまだアマリ有利。
アマリ、バーサーカーたちの数に任せてセイバーとハクノを始末しようとした時、フロア全体にハッキングがかかり、閉ざされていた外部への壁が破壊される。

アマリ「どういうコトです、説明なさい！」

リン「バカね、こういうコトに決まってるでしょ」

破壊された壁の向こうにはエアバイクにまたがったリンの姿が。

リン「そこの二人、こっち！」

リン、セイバーに声をかけて脱出を促す。
セイバーはハクノを抱えてリンのバイクに飛び乗り、リンはタワーから離脱する。

アマリ、ぐぬぬ。ＯＰへ。

廃ホテル／リンの隠れ家

ハクノ、リンに連れられて都市の廃棄区画にあるホテルに。
移動している間に夜になっている。
ハクノは体中傷だらけで疲労困憊だったが、ホテルに落ち着き、リンの治療で回復する。

リン「回復のコードキャストが効いたみたいね。
　万全、とは言えないでしょうけど贅沢は言わないでちょうだい」

ハクノ、フラッシュバックで、第一話で出会った少女を思い出す。
チェス決闘の講堂で出会い、保健室で桜と一緒に話した少女の姿を。

ハクノ（……似てる、か……？）

リン、ハクノへと近寄ってくる。

CHECK▶ 予選会場にいたリンは一〇〇〇年前のリンの再現データ。こちらのリンはそれから生き延び続けた大人リン。

リン「よろしく。私はリン」

握手を求めて手を差し伸べてくるリン。

リン「サーヴァントを失った魔術師。

この階層でひとり、やけっぱちにレジスタンスをしてる元マスターよ」

ハクノ「……岸浪ハクノ」

握手に応えるハクノ。

リン「知ってるわ」

セイバー「そして、余はセイバーである！」

リン「(笑って) それも知ってる」

リン、小さな冷蔵庫っぽい箱を開けて、瓶入りの飲料をセイバーに投げて寄越す。

セイバー、パシッとキャッチ。

CHECK▶ ゲーム版でいうところの回復アイテム『薬酒の瓶』。

リン「飲んでおきなさい」

セイバー「ふむ？」

リン「(ハクノへ) あなたにはコレ」

リン、ハクノへ小さな結晶体をぽんと投げて渡す。
ハクノ、落としそうになりながらもなんとかキャッチ。

リン「マスター用の魔術結晶の欠片よ。ふたりとも、魔力を随分消費したみたいだから」

CHECK▶ゲーム版でいうところの『魔術結晶の欠片』。

ハクノ「……レジスタンスって言ってたけど」

リン「そ。文字通りの意味よ。あいつらが都市の支配者で、私は反抗者。久しぶりに上がってきたマスターがいたから、観察してたんだけど――」

冷蔵庫から瓶をもう一本取り出して、自分で開けてぐいっと煽るリン。

CHECK▶さりげなくサーヴァント用の回復アイテムを使っている。

リン「(一口ぶん飲み終えて)……面白い結果になったわね。あなたたち、聖杯戦争をしたいんでしょう?」

リンは自己紹介をし、訳知り顔で事情を説明する。

ここは臆病者たちのフロア。死にたくない者たちの供託だと。
この「死にたくない者たち」という言葉に反応するハクノ。怒りを覚えている。セイバーも同様に反感を覚える。
セイバー「死を恐れるのは当然の心理だ。それはよい。だが生き残っておいて何もしない、というのは美しくない。
それなら負ければ良かったではないか！」
まさにその通りだ、と同意するリン。
（と、言葉にしはないものの無言で同意するハクノ）
セイバー「どうしてそんな事になってしまったのだ、ムーンセルは何をやっている！」
リンは淡々と語る。
SE.RA.PHはもう終わっている事を。
あのチャクラ・ヴァルティンができてから聖杯戦争のルールは崩壊し、多くの死者が出た。
各階層の仕組みはそれぞれの独立したものになり、マスター同士の殺し合いは強制されなくなった。
この第一階層はその中でも平和な部類。
当時、一回戦を勝ち上がったものの、なぜか二回戦に上がらなかったマスターがいた。
彼はひとり第一階層に留まっていたが、その時にチャクラ・ヴァルティンによりSE.

RA.PHの在り方が変わった。
ただひとり残っていた彼はフロアマスターとなり、残っていたリソースを好き勝手使って第一階層を享楽都市に作り替えた。
その後、上の階層から逃げてきた者たち、予選から上がってきた者たちで新体制を作り上げたのだ。

リン「おかげで最下層からあがってきたマスターもここでストップ。
SE.RA.PHを壊したのはあの輪っかだけど、聖杯戦争を事実上停止させたのはここのフロアマスターでしょうね」

しかし、ここ最近熾天の檻の様子がおかしい。
チャクラ・ヴァルティンはSE.RA.PHそのものを破壊しようとしている。
真偽を確かめるには上にあがるしかないが、今じゃ誰も上を目指そうとしない。

リン「というか、物理的にできないのよ」
ハクノ「なぜ?」
リン「聖杯戦争のルールの名残。上の階層にあがるにはマスター同士の一騎打ちが必要なの。勝者だけにムーンマイルラダーは下ろされる」
「SE.RA.PHは基本、一方通行なの。上から下に落ちる事はできても、下から上に登るにはラダーを使うしかない」

セイバー「うむ、それが余の知っている聖杯戦争の基本だ」
「しかし、そうなると手詰まりだぞ？　このフロアにはもうマスターはいない。
戦うべき相手がいないのだ」

そう。

リンもマスターではなく、アマリもサーヴァントを操っているだけでマスターではない。

いや、と首をふるリン。

リン「いるわよ、ひとり。今もサーヴァントを捨てきれずに隠れている臆病者が」
「マトウシンジ。一回戦で相手を倒しておきながら二回戦を拒否した男」
「今じゃこのフロアのマスターになっているけどね」

セントラルタワー・市長室

カメラは別シーン、シンジ&アマリに。

アマリ、市長室からシンジに連絡をとる。

ハクノはこちらからの提案を拒否し、敵対したと。

シンジ、アマリの報告にあるハクノの映像を見て驚く。

シンジはハクノ（友人）を裏切って勝ち上がった事を今も覚えているのだ。

シンジ「なんでアイツが……死んだだろ、殺したはずだろ……!?」
シンジ、かつての記憶に苛まれる。

× × ×

シンジが参加した予選会場の校舎、その回想。
予選最終日、本選出場者が規定数に達していなかった為、予選会場では特別措置が取られた。モラトリアムが強制的に終わり、同じ『マスター候補』を倒した者が上がれる状況になってしまう。
シンジは狂乱の状況にありながら、それでも最後の一線を踏み越えられずにいた。
そこへ、先に勝利条件を満たしていたアマリが優しく囁く。
アマリ「シンジ君が友人と思える人って少ないでしょ？
なら、その逆も同じだと思わない？」
シンジ「……どういう意味？」
アマリ「シンジ君を友人だと思って、油断してくれる人は[redacted]君ぐらいしかいない
ってコト」
「だから、ね？」
「いちばん殺しやすい人を殺すの」
結果、シンジは友人を殺して一回戦に上がった。

アマリの誘惑は関係がない。そうしなければ生き残れなかったのだし、そうする事だけが正しいとその時のシンジは信じたのだ。
〝こんな事は、今回だけ――今回だけ、許してくれ〟と。
しかし。聖杯戦争一回戦目、決戦場において対戦相手が本当に死んでしまった事、聖杯戦争が遊びでない事を思い知り、シンジは自ら戦いを放棄した。

×××

カメラ、現在のシンジに。
シンジ「そうだよ、ボクは逃げた。一人も殺しておいて、ようやく怖くなった臆病者だよ」
シンジ、ノイローゼ気味に独白する。
シンジ「でも、でもさ――勝ち続けるって事は殺し続けるって事だろ。そんな馬鹿げたゲームに、付き合う方がどうかしている」

×××

カメラ、一〇〇〇年前のシンジの回想。
シンジが一回戦で勝利しながら二回戦に上がらなかったのは、臆病風に吹かれたからだけではない。その先にある展開が、彼にはどうしても許容できなかったのだ。
その後、シンジを残してマスターたちはみな二回戦にあがった。

ただひとり第一階層に残されたシンジ。次の聖杯戦争が始まり、第一階層にマスターたちが上がってくればシンジはムーンセルの手で消し去られるだろう。
だが、その前にSE.RA.PHのルールは崩壊した。
トワイスによって『下階層からの押し上げ式』だった聖杯戦争は終わり、SE.RA.PHにはフロアマスター制がしかれた。
ただひとり第一階層に残っていたシンジは自動的にフロアマスターになってしまった。
かつて裏切った友人と、一回戦で殺してしまった相手への罪悪感か。
シンジは第一階層を、『殺し合わずともいい場所』にする事にした。
上からだろうと下からだろうと、もしマスターたちが集まってくるのなら、彼らと共存できる世界を作ろう、と。

ドレイク「アンタがそれでいいなら、アタシは口を挟まないがねぇ」

ドレイク（そいつは、たぶん辛いだけだよ?）

ドレイクはシンジの選んだ選択が他の人間の救いにはなってもシンジ自身の救いにはならない事を悟りながら、止める事はしなかった。現実から逃げる為とはいえ、全力の、男の決断だったからだ。

CHECK▼ この結果、ドレイクも同じように彼女の最も強い部分――〝ここ一番で必ず成功する〟と

いう幸運を腐らせ、その代償として〝ここ一番で必ず失敗する〟運命を背負ってしまう。

程なくして、多くのマスターが第一階層まで逃げ込んできた。
シンジは彼らを仲間として迎え、本格的に第一階層の運営に着手した。
人が暮らせる、という時点で、それは都市を作る、という事だった。
できるだけ長く都市を運営する、という点においてシンジは有能だった。
第一階層のリソースは有限だ。シンジはあえて基本的な生活レベルを中世に落とし、節制する事で都市を継続させてきた。元マスターたちが望むような未来都市を造った場合、すぐにリソースが尽きると理解していたからだ。
生活レベルこそ落とすが、文明レベルは維持する。集まったマスターたちで変容してしまったSE.RA.PHを回復させ、地上に生還する。
それがシンジの作る新設都市ケープの目的だった。
やがて三回戦まであがっていたアマリが第一階層まで逃げ落ちて来た。
彼女はシンジの秘書となり、シンジ以上に熱心に都市運営に関わってきた。

CHECK▼ アマリが上の階層から逃げてきたマスターである事は第三階層で語られる。アマリ他、上から逃げてきたマスターたちも第一階層にはいたのだが、そこは後々分かる事としてここではスルー。

アマリのキャラクター性は深く語られないが、世界観の描写とアマリの言動のはしばしから、〝身勝手だったけど、悪人ではない貴方（視聴者代表）〟と感じられるぐらいがベター。

世界有数の霊子ハッカーであるマスターたちと、
シンジを支える有能な秘書。
サーヴァントをリソースに変える事で手に入れた膨大な貯蓄。
しかし――

× × ×

カメラ、現在のシンジに戻る。
シンジ「……は。はは。ははははは」
しかし。そんなものは全て、何の意味もなかったのだ。
アマリ「市長……？」
シンジ「いいよ。アマリに任せる。ボクはここから動かない」
アマリとの連絡を切るシンジ。
シンジ、捨て鉢気味に、聖杯戦争に参加していた頃の少年のように呟く。
シンジ「今さらなんだってんだよ。もう何年経ったと思ってるんだよ」
「本当――今になってさぁ？　もう、何ができるっていうんだよ、ボクに」

廃ホテル／リンの隠れ家

シンジの名前に反応するハクノ。

リン「あら。知り合いだった？」

ハクノ、答えず。ただ淡々と返す。

ハクノ「……シンジは殺す」

ネロ「奏者？（思い当たり）よもや、記憶が戻ったか？」

ハクノ「（首を振り）記憶は相変わらずだよ。オレの最初の記憶は、学園最後の一日だ」

再び、腹部に触れるハクノ、

ハクノ（オレが、殺された日だ）

×　×　×

フラッシュバック、学園で談笑するシンジとアマリを見ているハクノ。

シンジに刺されたハクノ。

床に落ちた血塗れのナイフ。

赤い廊下に倒れたハクノ、血を吐きながら起き上がる（顔は見えない）。

そこから断片的に、様々なハクノの死体（敗北した記録）が洪水のように流れ込む。

敗者たちの死の記録である。
膨大な死の中で、それでも死にきれず、ひょっこりと立ち上がる何者か。
それは血にまみれたハクノであり、その顔は――

CHECK▶ 電光の仮面、デッドフェイスである

×××

ハクノ「構わない」
「フロアマスターが誰であれ、そいつがマスターであるなら」
倒すだけだ、と視線で語るハクノ。
リン「上にあがるならシンジと戦うしかない。本拠へ乗り込むコトになるけど、いいの?」
ハクノ「オレは構わない」
その返答に喜ぶリン。ハクノがシンジを倒すというなら喜んで協力する、と念押しする。
これが最後のチャンスとも。
ネロ「良いのだな、奏者」
ハクノ、窓の外の新設都市に視線を移し、

ハクノ「いい街、なんだろうな」
ハクノ（けど、オレには関係のない話だ）
街の中心、セントラルタワーを見据え、
ハクノ「オレは、聖杯戦争を続ける」

CHECK▶ 補足。記憶が戻らないハクノだが、ハクノは気にしない。シンジへの憎しみはある（ように視聴者には見せる）。ハクノはシンジとの対決に執着するが、それはシンジへの恨みではなく、単に勝ち上がったものたちへの憎しみ・怒りである。

セントラルタワー／突入

リンの手引きでもう一度タワーに突入するハクノたち。
ロビーで待ち構えるアマリとサーヴァント群。
乱戦の末、ハクノとセイバーは中央ホール、最上階へ通じるエレベーターにたどり着く。
リンはエレベーターの制御を掌握し、ハクノとセイバーを最上階までノンストップで送り届ける。
リン「じゃあね。貴方の聖杯戦争、楽しみにしているわ」

リンを残し、最上階へ向かうハクノたち。
これを停止させようと中央エレベーターに迫るアマリと、
これを阻むためにホールに残り、アマリと対峙するリン。

アマリ「自殺行為ね。ウィザードひとりで、このサーヴァントの群を相手に一秒でも時間が稼げると？」

戦力差は圧倒的なので、アマリは勝ち誇りながらも『そこまで頭が悪かったの？』と本気でリンを哀れむ。
アマリはなんだかんだとウィザードとして優秀なリンを買っていたからだ。
リン、そうね、と笑って、

リン「私も同感。貴女は最後まで、いい意味で低俗なウィザードだったわ」

アマリ、リンの態度にイラッ。もういい、とばかりにサーヴァント群に指示を出す。
リン、これを前にして、

リン「命に代えてもアイツは殺させない。だって——」
「アイツを利用するのは、この私なんだから」

リン、自身をサーヴァント化させる。

CHECK▶第二話ではリンの正体を明かさず、リンの足下を映して『一瞬、赤く変化しなかった？』ぐら

いに留める。

画面、暗転。
暗転後、全滅しているサーヴァント群と消滅寸前のアマリ。
アマリ、死に際で『なんでこんなコトを』と呪いを吐く。
第一階層は理想都市だ。争いはなく、終わりもない。地上の人類は滅び去った。この都市を永続させるコトが人間にとって絶対的な正義なのに、と。
そんなアマリをリンは（やや同情気味に）見下ろして、

リン「モラトリアムは終わりよアマリさん。
もうじきここも終わる。死にたくなかったら上にあがるしかない」
「いえ――生き残りたいのなら、いつだって私たちは先に進むしかない。当たり前のことを忘れたアナタが、人間を名乗らないで」

アマリ「――――」

アマリ、悔しそうにリンを見上げながら、口元には自嘲の笑みを浮かべて消滅。

CHECK▶ 支払えるものはすべて支払って三回戦まであがりながら、結局逃げて燻っていたアマリも内心は分かっていたのだ。「そりゃあそうよね」と。サーヴァントたちとの戦いの激しさを示す為、

リンはここで崩れ落ちても消滅してもいい。ユーザーにどこまで謎を残すか、という話。ユーザーには「リンはハクノを生かす為に死んでしまった」と示し、第三階層でひょっこり現れる、というのも展開的にはアリ。

エレベーター内〜最上階

カメラはハクノとセイバーに戻る。
エレベーターはタワーの最上階にたどり着く。
外に出るとそこはタワーの屋上……ではなく、古びた学校の中。
そう。ゲーム版の月見原学園、その内部だ。

CHECK▶ ここのビジュアルはゲーム版からそのまんまを使うこと。エレベーターの出口はもちろん、ゲームで決戦場に向かう為に開かれた下駄箱横のあの扉である。

もう使われる事のない、訪れる者もいない記念碑となった校舎。
電脳空間とは思えない、何の変哲もない校舎を歩いて屋上にでるハクノたち。
屋上からは都市を一望できる。地上一〇〇〇メートル近い高度。

屋上からは空を覆うように、蜘蛛の巣状にはりめぐらされた通学路が見える。
上の空からは無数に落ち続けてくる人型の残骸。
今も上の層から落ちてくるマスターたちのなれの果てだ。
その、生きているか死んでいるかも分からない者を通学路は受けとめている。通学路に引っかかからなかったモノが街に落ちていき、その過程で砕け散ってしまう。これがマリンスノーのように見えていたものの正体だ。

シンジ「……よくここまで来たな」

シンジ、座ったままハクノたちに視線を向ける。

セイバー「フロアマスター、マトウシンジ。我らは聖杯戦争を続けねばならない。誤りの街のあるじよ、我らの挑戦を受けよ！」

堂々と告げるセイバー。
一瞬の間。から、シンジは突然笑い出す。

シンジ「はははは！　なぁにが！　聖杯戦争を続ける？　誤りの街？　だぁ!?」
「いまさら死に損ないがあがってきてギラついてんじゃねえよ！　上の様子を何も知らないクセにさぁ！」

叩き付けられる言葉に、無表情と無言を返すだけのハクノ。

シンジ「ボクは！　精一杯やった！　マスター崩れに居場所を作ってやった！　もう、

　これ以上何をしろって言うんだよ！」

激昂していると思いきや、一転して、静かな表情になって俯くシンジ。

シンジ「……もう疲れた。疲れたんだ。何をしたって結局、逃げ場なんてない。ここが楽園じゃないのは分かってる。でもさあ」

CHECK▶ それはハクノへの罵倒であり、ハクノへのSOSでもある。ようは分かってくれ、助けてくれ、といった深層意識がだだもれ。

シンジ、ようやく正面からハクノを見る。

CHECK▶ 友人である（人物を取り込んでいる）ハクノに助けを求める表情である。

シンジ「ボクは、ボクなりに頑張ったんだよ」

ハクノ、すぐには返答しない。

一呼吸置いてから、一言。

ハクノ「悪いけど」

「おまえが勝手にした苦労を、他人に話されても困る」

CHECK▼ あるいは、「誰かに褒めて欲しくて苦労したのか?」みたいな。

シンジ「!!」

シンジ、焦りでも諦めでもなく戦う顔に。

CHECK▼ この瞬間、最後の線が切れて——本気で戦う覚悟をシンジは決めている。

シンジ「いいよ、今度こそきっちり殺してやる……ッ!」

立ち上がるシンジ。
同時に、第一階層そのものに変化が生じる。
マスター同士の戦いが『成立した』とムーンセルが感知し、かつて機能していた『決戦場』が現れたのだ。

× × ×

決戦場が出現すると第一階層の全天に排水溝が開き、海水が都市に流れ、水没していく都市の中での戦闘となる。
決戦場の出現と共に、かつて聖杯戦争の舞台だった校舎は真っ二つに割れてしまう。

シンジのいる給水塔はそのままで動かず、ハクノがいた屋上は海流に流され、二人の距離は大きく離れる。

決戦場／ドレイク戦

ここからドレイク戦。海上戦闘。
海の如き水を割って出現するガレオン船！
ドレイクの宝具『黄金の鹿号（ゴールデン・ハインド）』である。
その舳先にはドレイクの姿。シンジもやや後ろに立っている。
ドレイク「さあ——久しぶりの戦闘だ！　思い切りやってやろうじゃないか、シンジ！」
シンジ「全力だ。リソースは気にするな！」
ドレイク「珍しく気前がいいねえ！」
彼我の戦力差は火を見るより明らか。
戦場はドレイクに有利であり、その火力もドレイクが圧倒的に上。
ハクノたちはドレイクに斬りかかる前に、まず海を渡ってガレオン船に到達しなくてはならない。
ハクノは水没したビルの屋上に残り、セイバーの戦いを見据える。

セイバーはガレオン船の上で陣取るドレイクと、水没したビルの屋上をピョンピョン飛び跳ねて移動し、ドレイクに肉薄する。
そんなセイバーを撃ち落とさんと放たれる砲弾の雨。

CHECK▶ドレイク戦の醍醐味は、ドレイクの宝具ゴールデン・ハインドをどう打倒するか？　という点にある。

×××

奮戦あえなく、ガレオン船の集中砲火を受けて海に沈むセイバー。
セイバーは水没しながら、自己の回復に残った魔力を回すのではなく、海中に没して船の中で『まだ戦えるもの』を探しだし、これに『皇帝特権（徴収し、使役する）』で制御下におく。

CHECK▶ドレイクに気付かれないように。またここでセイバーはガレオン船の情報で、ドレイクの真名をほぼ看破しているモノローグを。

しかしその『勝つ為の布石』でセイバーの魔力は切れる。

『自分を生かす』余力を無くしたセイバーはより深いみな底に沈んでいく。
そこへ、戦いの様子を見据えていたハクノが追い掛けてくる。
ハクノがセイバーが直撃を受けて海に没した後、マスターならそうするだろう、という直感で海面に飛び込んでいたのだ。
ハクノ、沈んでいくセイバーに追いつき、魔力（リソース）をネロに分け与える。
口づけで。なんで口づけかって？　したくなったからに決まってるじゃん！

×××

一方、海上のドレイクとシンジ。
既に亡霊船は消えてガレオン船のみ。
ドレイク「直撃とはいかなかったか。久しぶりなんで狙いが荒いこと荒いこと。いやまあ、アタシの砲撃はもともと大雑把だけどねぇ！」
かんらかんらと笑うドレイク。口ぶりの割には楽しそう。
シンジ「……油断するな、ライダー」
ドレイク「しちゃいないよ。ああ、うん。多少は油断してたかね――来るよ！」
ドレイクの言葉通り、セイバー、火柱と共に海上に復帰。
ハクノ（お姫様抱っこされている）と共に、海から突き出たビルの屋上へと着地する。

セイバー、ドレイクともう一度正面対決。

セイバー「再戦である！　ライダー、フランシス・ドレイク！　世界を繋げてみせた者よ！」

ドレイク、と真名を言われてドレイクの口元がつり上がる。

享楽と敵意に満ちた凶悪なスマイル。

ドレイク「いいねえいいねえ！　あがってきたよ！　それじゃあもう一発！」

二撃目のゴールデン・ワイルドハント。

ドレイク「アタシの名前を覚えて逝きな！

　テメロッソ・エル・ドラゴ！　太陽を落とした女ってな！」

亡霊船団が周囲に再び出現し、一斉砲撃を行おうとするが――ガレオン船が突如として激しく揺れる。

激突。海底から急浮上した難破船による上昇突撃がガレオン船に直撃したのだ。

CHECK▶ 白鯨のように浮上した難破船の腹に砲撃はすべて集中。難破船は砕け散る。

ドレイク「難破船!?」

セイバー「うむ、皇帝特権として徴用した！

　捨てられたもの、朽ち果てたものであれ、まだその姿があるのならば！」

CHECK▶「敗北者でも戦う気があるならまだ活躍できるはずだ」と続くセイバーの言い回し。総じてこの話すべてのテーマでもある。

ドレイク「アンタ王様かい！　ハハッ、しかも女王ときたか！」

CHECK▶本作のドレイクは生前にエリザベス女王と縁があったので、ドレイクは女性の統治者にちょっと甘い。

急いで三回目の砲撃をセットするドレイク。
ビルの屋上からドレイクに向けて流星のように跳躍するネロ。
だがまだドレイク有利。
ドレイク、装填が済んだ大砲で飛んでくるセイバーを迎撃。（ただし一斉掃射ではない。一斉掃射では間に合わないので、撃てる大砲だけで撃った）
今度こそネロに直撃する砲撃一門。
空中で爆散する火花。
しかし、それはセイバーが直撃する前に斬り捨てた事による爆発。

セイバー、爆風の中から勢いをそのままにガレオン船・船首にいるドレイクへ迫る。
ドレイク、敗北を予感しつつもまだ慌てない。
なぜならこれも計算通りだからだ。

ドレイク（あのセイバーならもう一度、接近戦を挑んでくる。
　懐に入られたらアタシの負けだ。決して近寄らせはしない）
（バラまいただけの砲撃なんざ躱すだろう。『あと一息』の間合いまで辿り着くだろう。敵ながらやるもんさ。だけどねぇ——）

ドレイクにはその『あと一息』の地点が読めている。
ドレイク自身の手で、セイバーがそこに到達するように誘導する。
その時こそチェックメイトだ。命からがら砲撃を切り抜け、ドレイクに向かって飛び込んでくる『射線』を限定し、迎撃する。
最後の力で跳躍するセイバーに、この一撃を躱す余力は存在しない。

セイバー「抜けたぞ、ライダー！」

からくも弾幕を切り抜け、ドレイクまであと一跳び、という地点に到達するセイバー。

ドレイク（お見事。悪いが勝負ありだよ）

勝利を確信して引き金を引くドレイク。
手に持ったマスケット銃を構え、ネロの眉間に銃の照星を合わせる。

引かれる銃の引き金。
ドレイクの腕なら百発百中でネロの眉間を撃ち抜く。
セイバーはコンマの差でドレイクに辿り着く前に死亡する。
……筈であったが、マスケット銃は作動しなかった。その撃鉄が落ちなかったのだ。

CHECK▶ ここ一番での銃の不備。生前の、自分の信条を曲げて逃げに走った時一度だけ起きた『不発』という凶運。戦法としてドレイクは勝っていたけど、本当に運がなかった、というか運はセイバーに流れていたから負けた、というのが視聴者に分かると嬉しい。

魔力不足、準備不足。理由はどちらでもいい。
ただ、長い倦怠のツケが回ってきただけの話、とドレイクは受け入れる。
ドレイク（ついてないねぇ――まあ、そういう事もあるさ）
フッと口元に笑いを浮かべるドレイク。
同時にネロの一撃がドレイクの体を切り裂く。流星のようにドレイクを通り過ぎるネロ。
決着。

決戦後／ガレオン船甲板

決着が付き、決戦場の崩壊が始まる。
ハクノもガレオン船に駆けつけ、セイバーと合流。
船の甲板には倒れたドレイクと、立ち尽くすシンジの姿が。
ドレイク敗退でシンジも消滅の憂き目にあう。
ドレイク「アタシとの契約を切りな。このままだと釣られてアンタも消えちまうよ」
シンジに忠告するドレイク。
だがシンジは契約を切らない。なぜ、と質問するドレイクに、
シンジ「だっておまえ、負けてないじゃん。サーヴァントが負けてないのに、契約を切るマスターなんかいるもんか」
セイバーの勝ちはまぐれであり、
（二〇〇〇年の倦怠で）腕が鈍っていたドレイクのミスでもあり、
シンジの怠慢である。
シンジはドレイクの消滅に殉じるつもりだ。
セイバー「貴様が逃げ続けた理由。死にたくない、がその動機ではなかったか？」
ネロの質問にシンジは憎らしげに笑う。

シンジ「違う。ボクは死にたくなかったんじゃない。ただ、認めたくなかっただけだ」
シンジはケープでの顛末を断片的に語る。
争いのない都市を作ったものの、その先は無かった事。
堕落していく元マスターたちの在り方と、次第にNPCだけになっていく人類の未来。
後からやってきたアマリに都市の全権を任せ、シンジはタワーの最上階に引きこもり、ただ第一階層のフロア維持の為に生き続けた。
この一〇〇〇年で見てきた多くの無為。人間の無価値さ。
シンジはそれを否定したかった。けれど覆す力も、答えも、勇気もなかった。
シンジ「だから、残り続けたんだよ。だってボクたちがここで消えれば、それこそ人間は無価値だったたって判が押される」
「だから、せめて——どうしようもない臆病者たちでもさ、生きてさえいるうちは、何かできるかもしれないって希望が——」
シンジなりに、臆病者であり続ける事に筋は通っていた、という話。
いい話のように聞こえるが、やっぱりそれは怠慢であり、奪われてきた人間（ハクノ）にとっては弁明にすぎない。
白野はシンジの言い分は認めないが、シンジへの怒りを収める。
ハクノ「……もういい」

「おまえの言い分は認めない。でも、オレはこれ以上、オマエを憎まない」

CHECK▶ 怒りと憎しみの化身であるハクノは『勝者を許す』事はできない。そんなハクノにできる最大限の譲歩であり、自身を否定する言葉。この「憎まない」がどれだけ重い言葉なのかは物語の最後で伝わればよい。

シンジ「なんだよそれ」
苦笑いするシンジ。少し嬉しそうに。
ドレイク「(笑って) シンジ。あんた、友達がひとりはいたみたいじゃないか」
満足げに笑うドレイク。
シンジ「友達じゃないよ。あいつは——」
最後まで言い切らないまま、シンジ消滅。

CHECK▶ ボクの親友だったんだよ、と言おうとしたのかどうかは分からない。

ドレイク、シンジ消滅と共に落ちてくるラダー。
ドレイクは散り際、ハクノに質問する。

ドレイク「シンジを殺したのは復讐心からかい？
ああ、それは別にいいんだ。咎める気なんざない」
「ただ、アンタ本人の目的が気になってね。
シンジは現実を認めたくなくて聖杯戦争から降りた。
そんなシンジを殺したアンタは、何の為に上に上がるんだい？」
ドレイクの問いかけはハクノの痛いところをつく。
答えられないハクノ。やれやれと消滅するドレイク。
第一階層はフロアを維持していたシンジが消滅した事で元のカタチに戻る。
誰もがとっくに死に絶えていた、ただの廃墟の水没都市に。
それに背を向けながら、二人は第一階層を後にする。

〈第三話／了〉

CHECK▶リンを殺さない描写をするならリンが最後に「待った待った～！」と駆け寄って一緒に乗る、というシーンを追加。



Characters02

キャラクター紹介

間桐シンジ

Shinji Matou

かつて対戦相手を倒し上に上がる権利を得たが、聖杯戦争が「本当に相手を殺すもの」という事実を突きつけられ、戦いを放棄。ラダーに乗らず、ただひとり第一階層にとどまったマスター。その十四日後、チャクラ・ヴァルティンが成立し、第一階層にただひとり存命していた為、自動的にフロアマスターとなった。

シンジは残っていたリソースを使い、上にあがることを諦めたマスター達が集う享楽の都市を作り上げ、新体制を運営した。何も残せないまま消えることを拒み、「世界有数のハッカーが揃えば、SE.RA.PHを救う事はできなくても、何かが出来るはずだ」と、無垢な夢に縋って。



フランシス・ドレイク

Francis Drake

ライダー、フランシス・ドレイク。世界一周を成し遂げ、世界を繋げてみせた者。史実では男性だが、「Fate」では男まさりの女海賊として登場する。

当時世界一のスペイン艦隊を打ち破ったことから、太陽を落とした女『テメロッソ・エル・ドラゴ』の異名を持つ。『星の開拓者』という特性を持つ希有なサーヴァントであり、強力な幸運を持つ冒険家。宝具は「黄金鹿と嵐の夜」。

「泥からだって黄金を生み出せる」というシンジの強がりを聞き、彼の都市運営に付き合っていた。……ドレイク自身、その長い長い停滞によって『いつもここ一番で勝利をもぎ取ってきた』自分の幸運が、決定的な場面では真逆に働くであろう事を予感しながら

第三話 用語集

コードキャスト
●コードキャスト

電脳空間で使用される簡易術式プログラム。ウィザードはコードを予め設計・製造しておき、これに魔力を通すことで起動させる。

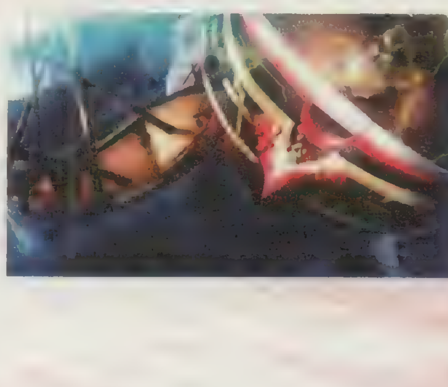
チャクラ・ヴァルティン
●チャクラ・ヴァルティン

天輪聖王。セイヴァーと呼ばれるサーヴァントが持つ宝具。聖杯戦争のルールを変えたと語られる。



フロアマスター
●フロアマスター

各階層の仕組みがそれぞれ独立したものになって、階層に残ったマスターが自動的に担ったもの。その時に生存していたもの、あるいはその階層の戦歴の中でもっとも優れたマスターが選ばれる。



皇帝特権
●こうていとっけん

セイバーが持つ固有スキル。万能の天才と自称するセイバーは、自分にできる範囲での技術ならば一時的に『その最高値』を身につける。権力のみで不可能を可能とさせた皇帝たちの持つ、強力なワガママ主張スキル。

魔力供給
●まりょくきょうきゅう

サーヴァントは自力で魔力を生成できるものの、その生産量は彼らの多大な消費量にはおいつかない。マスターは自身の生体エネルギーを

魔力としてサーヴァントに分け与える。その方法は様々だが、接触による供給がもっとも効率がよい。



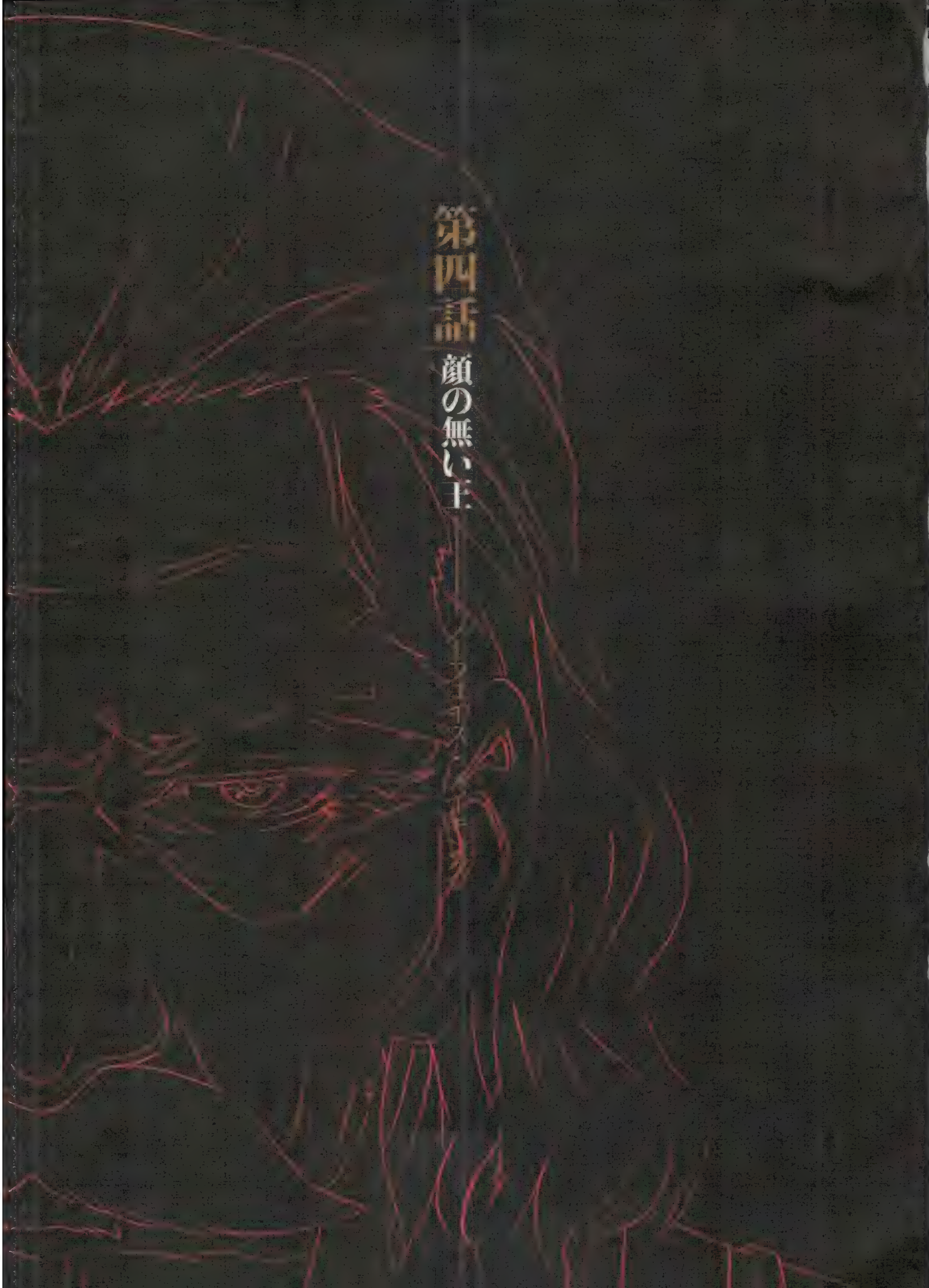
新設海洋都市ケープ

●しんせつかいようとしケープ



最後の聖杯戦争中、一回戦に勝利したものの二回戦にあがる事を拒否した間桐シンジによって運営されていた都市。後に彼の片腕となる女性マスターが三階層より逃げ延び、シンジの秘書となり、ケープはより完成した都市となった。以後、間桐シンジはかつての舞台であった旧校舎を住居とし、表だった都市運営は秘書となった女性マスターが行っていた。少女を中心にした治安部隊を組織したのはその女性マスターの趣味だとか。

第四話 顔の無い王



第一階層 悔恨の森

死者は蘇らず、誇りは受け継がれず、願はもう無い。

狩人は亡霊と踊り続ける。

静寂に響く刻の音。今も彷徨う「悔恨の森」。

アバン／マイルーム

ムーンマイルラダー内部。第二階層へ上がっていくマイルーム。
ご機嫌の体で湯浴みをしてるセイバー。
セイバー「一緒に入るか？　余は構わんぞ？」
セイバーの蠱惑的な誘いをぐっと堪えつつ、ハクノはひとりシンジとの戦いを追想する。
ドレイクの言葉を思い返し、いまさら自分が何者かを煩悶する。
記憶がなく、発作のように憎しみにかられ、なにより自分の目的がない。
上にあがる欲求だけあって、目的が希薄。
何がしたくて上を目指すのか？　とドレイクは言った。でも、それを知ってはいけない気がする、と思考にフタをするハクノ。
結局、自分は予選と何も変わっていない。
シンジと同じ、ただ死にたくないからと戦っただけだ、とため息をつく。
そこへセイバー、バスタオルで颯爽登場。
セイバー「何を悩む！　我欲、強欲、情欲、貪欲。
たしかに人間は己が欲のために戦うもの。
だが多くのモノはその理由を問い詰めぬ。

気持ちがいいから、そうしたいから、だけで事足りるからな」
「人間にとって、生存とは確たる理由を必要としないもの。
ただ生きるために生きる、でよかろうなのだ！」
堂々と語られてぽかーんとするハクノ。
セイバー「だが。それでも、そなたの心が酸欠にあえぎ、
理由のない事を恥じ入るのならば――
うむ！　己の望みを見つけるために、この海を登るがよい！」
自信満々かつ生命力に満ちたセイバーの言葉に目を奪われながら、『そうだね』と返答できない自分に、ハクノはますます不信感をつのらせる。

第二層／ダンの隠れ家

カメラ切り替わって第二階層、
フロアマスターであるダン・ブラックモアの隠れ家。
時計塔最上階……を思わせる部屋。
余計な荷物はないものの、何十年と放置された廃屋を思わせる一室。
壁一面のステンドグラスだけがかつての栄華を残すのみ。

部屋は六〇メートル近い高所にあり、窓から第二階層の森を見渡せる。
揺り椅子に座り、死人のように森を見下ろしているダン。
そこへ、ハクノたちを乗せたムーンマイルラダーが到着する。
ラダーが停止した衝撃が森に伝わり、驚いた鳥たちがいっせいに飛び立っていく。
その様子を見て自信ありげに微笑むダン。

ダン「待ちくたびれたが、ようやく対戦相手がやってきたようだ」
「では聖杯戦争を始めよう。敵を倒し、私が三回戦にあがるために」

スナイパーライフルの準備をするダン。
彼の後ろ、部屋の出入り口である壁際の階段には緑色のマントの人影……サーヴァント・アーチャー、ロビンフッドの姿がある。
〝戦いを始める〟と戦意に満ちたダンとは対照的に、やる気のない顔で眺めているロビン。

ロビン「また戦うんすか旦那？　監督役もいない、SE.RA.PHもボロボロ、勝ち上がったところで聖杯があるかどうか分からない状況なのに？」
ダン「無論だよアーチャー。聖杯の有無は重要ではない。それは、あくまで目的の後に生まれるものだ」
「私は戦い、勝利するために月に落ちた。そのために故郷を後にした」

「素晴らしい敵と出会い、素晴らしい戦いをし、素晴らしい勝利を収める。
――まさに騎士の本懐だ。そのために、私は今も生きている」

ダンの言葉に暗い顔でため息をつくロビン。

ダン、スナイパーライフルのスコープで森を見つめ、

ダン「歓迎するぞ、若きウィザードよ。今度こそ、私の胸をすく強敵であってくれ」

マイルーム～第二階層入り口

カメラ、ハクノに戻る。ラダーは第二階層に到着。

CHECK▶ もし三話でリンを合流させていた場合、リンはこのタイミングでいなくなっているが、ハクノたちはまだ気づかない。

ドアの前で準備を整えるハクノとセイバー。

セイバー「どうあれ、ここから先は余の知っているSE.RA.PHではない。
聖杯戦争の理念は崩壊し、決闘の誇りも失われた」
「だがやるべき事は明確だ。上にあがるため、マスターを見つけ、そして倒す」

なるほど、と頷くハクノ。しかし、
ハクノ「ちょっと待った。もし、そのマスターがいなかったらどうしよう？」
セイバー、「あ」とその最悪の想定に気がつく。
セイバー「そ、その時はその時だ！　何か他に方法があろう！」
そうこうしているとマイルームのドアが開き、第二階層の様子がとびこんでくる。
第二階層は鬱蒼とした森で、ラダーは森にある廃城の中層にあるテラスに繋がっていた。
ラダーから出て、二人はテラスから森を一望する。
見渡すかぎり暗い森。
建物らしきものはすべて木々に侵食され、緑の海に沈んでいる。
その中に建物が二つ。
いまハクノたちがいる王城と、遠くに見える時計塔だ。

CHECK▶もしリンが同行している場合、ここでリンがいない事に気がつく。「遠坂？」と首をかしげるハクノだが、そこへダンによる狙撃。

ハクノ「この様子じゃや、そもそも人を探す方が――」
そこへダンからの狙撃。

狙撃の直前に遠くで「カーン」と鐘の音が響く。
ハクノへのヘッドショットをセイバーがいち早く気づき、剣で弾く。
セイバー「スナイパーか！　奏者よ、注意を！」
続く第二射。再び鐘の音。ギリギリで躱すハクノ。
射線は森の彼方。ハクノ、時計塔の方角である事をすかさず確認する。

CHECK▶ 今はリンどころの話ではない。

テラスにいては狙い撃ちにされる、と二人は森に飛び降りる。

×　×　×

カメラ変わって、隠れ家にいるダン。
ダンの狙い通り標的はテラスから飛び降りて森に潜んだ。
歴戦のマスターであれば今の二射で狙撃先の方角、その大まかな見当は付くだろう。
ダン「ではおまえの出番だアーチャー。顔の無い王、存分にふるってくるがいい」
ロビン、気の乗らない顔で応じ、マントを羽織る。
宝具『顔の無い王』の能力でロビンの姿は完全に消える。
透明人間と化し、足跡だけが埃まみれの床についていく。

×××

カメラ戻って、森の中を走るハクノたちに。

ハクノ（とりあえず敵がいる事は分かった。マスターなのか……？）

突然の強襲に戸惑いながらも森を行く二人。

セイバー「ラダーを出た途端に仕掛けてくるとは、
　この階層のフロアマスターはやる気に満ちているな！」

ハクノ「ああ。射線は見た、あの方角だ」

ハクノ、時計塔方面を指さす。

セイバーもそれは同意。セイバーもしっかり射線を見ていたのだ。

いまだ覇気こそないものの、ハクノの冷静さ、したたかさに感心するセイバー。

そんなセイバーへ、ハクノはあらたまって「ありがとう」と感謝を述べる。

今の狙撃を防いだ事だけではない。

最下層の出来事からここまで、振り返っての「ありがとう」を。

今まで慌ただしくて礼を口にできなかった。今もそんな場合ではないのは分かっている。

でも大切なことだから口にしたかった、と。

セイバー、ハクノからの突然の感謝に照れながらもドヤ顔。

セイバー「うむ、もっと褒めるがよい！」

えっへんと胸を張るセイバー。
その後、セイバーもフッと落ち着いて穏やかに微笑む。
セイバー「そして、ひそかに余も嬉しい」
ハクノ「なにが？」
セイバー「そなたは張り詰めた顔ばかりだったからな。
　こうして、きちんと感謝を口にできる素直さがあって嬉しいのだ」
セイバー、戦うばかりではダメだぞ、とハクノに説く。
セイバー「どのような立場、どのような孤高に至ろうと驕るなかれ。
　花を忘れず、歌を忘れず、感謝を忘れず。
　そして、胸に咲く誇りを忘れず」
謳うように語るセイバー。
それはセイバーが自身に課している言葉だった。
自分がどれほど強くなり（偉くなり）、どれほどの窮地、どれほどの孤高に立とうとも。
花を愛する心を忘れず、
歌を吟じる豊かさを忘れず、
自らを育てたものたちへの感謝を忘れず、
その上でなお、自分は誰にも負けないのだと胸を張るのも忘れず。

そのように生きたい。

そのように生きられたら良かった、と思い出すように語るセイバー。

その笑顔は輝かしくもどこか悲しい。

CHECK▶ この段階では「いつもの自信ありげな自画自賛か」と流されてしまいそうだが、この独白はセイバー　ネロの憧憬を示すもの。ネロそのものを示す台詞である。

ハクノ、いまはその言葉の真意が分からないが、そう語るセイバーに見惚れる。

『死の総体』として目覚め、憎しみだけで上を目指すハクノにとって、彼女の在り方は暗中に輝く星のようだからだ。

CHECK▶ つねに張り詰めたハクノだが、セイバーに見惚れる時だけはゲーム版の純朴な白野に戻る。セイバーがハクノの光である事を示すように。

セイバー「しかし、まったく無粋にすぎる！　せっかく我が奏者と良い雰囲気だというのに、物理的に空気を乱す輩が来るとはな！」

セイバー、剣を構える。

見れば周囲には紫がかった霧が立ちこめていた。
ロビンの毒霧である。

ロビン「そりゃあ野暮で申し訳ない。でもまあ、お互いサーヴァントなワケですし？
話し合いより殺し合いが先でしょう」

木々の向こうから聞こえてくる声。
ハクノは大樹に背を預けて身構える。（背中を守っている）
霧の中から弓矢が放たれる。
セイバー、風斬り音で矢を察知し、これを迎撃。

CHECK▼ 風斬り音と矢が見えていれば濃霧の中でもセイバーは矢を切り落とせる事をアピール。

緊迫状態の中、ロビンから言葉責めが始まる。
ハクノの心を動揺させる為だ。

ロビン「サーヴァントはやる気満々だが、マスターはそうでもなさそうだ」
「分かる。よく分かるぜぇ？　だって似たもの同士だもん、そこの坊主とオレ」
「オタク、基本的に後ろ向きなタイプだろ？　顔がこわばってんのはアレだ、
そうでもしていないと悲観的になるからだ」

「聖杯なんてどうでもいいんだろう？　他人を押しのけてまで叶えたい欲望はない。自分のためにまわりを食い物にするほどのエゴの強さもない」
「だから、本当は今すぐ逃げたい。何もかも放り出したい。結果なんてどうでもいいから、一秒でも早く楽になりたいんじゃない？」
ロビンの言葉はハクノの痛いところをついてくる。
敵の姿は見えない。毒霧の中にいては持久戦もまずい。
どうする、という時にハクノの頭上から、無音で短刀が振り下ろされる。
これをまたも迎撃するセイバーだが、その顔に余裕はない。
セイバー「姿が見えぬ……！　透明化の宝具か！」
ロビン「ご明察痛み入る。
　ついでに言うと、見えなくなるのはオレの姿だけじゃあないぜ？」
ロビン、セイバーに弾かれて空中に飛んでいたが、体をひねりながらハクノに向かって毒矢を掃射。
音はすれど完全に見えない無数の矢。
ハクノ、危険を察知して大樹から離れるが、走った先にトラバサミで足をロックされるハクノ。トラップがしかけられている。
そこへロビンの第二掃射。

セイバー、切り落とせないと悟り体を張ってハクノを守る。
セイバー「っ……！」
ロビンの毒矢がセイバーに命中し、ひそかに毒に犯される。
ロビン「ヒュウ。ここまで狙い通りだと笑っちまうな！
マスターの足を止めれば逃げはしねえと決め撃ちしたが、
まさか自分から当たりに来るほどの阿呆とはね!!」
セイバー「なに、よくみれば木の実にも劣る豆鉄砲、面倒ゆえ体で防いだまで。
余にはてんで効かぬ。それが姿を見せぬ卑怯者のものなら尚更よ」
セイバー　の　すごい　強がり！
ロビン「ああそうかよ、じゃあテメエは（ここで）ハリネズミだ！」
ロビン、第三射準備。
派手さこそないものの、確実に相手を仕留める致命の一撃だ。
戦いに慣れていないマスターであれば、何が起きているのか理解できずサーヴァントを失い、敗れていただろう。
しかしハクノはセイバーの負傷を見てスイッチが入り、躊躇いもなく三回しかない切り札である令呪を使う。（※一度目）
セイバー、ハクノからの魔力強化を受けて剣が燃え上がり、大きく一閃。

剣圧は炎となって木々を震わせ、毒霧を吹き飛ばし、森の一部を大きく焼き払う。
セイバーの目の前はまさに平地と化した。
しかしロビンの姿はかわらず見えない！
ロビン「ほい、チェックメイト」
姿無きロビンの声。
ロビン、ハクノの令呪使用も想定した上で、セイバーの死角に待機し、ハクノを狙っていたのだ。
大技を使った後ですぐには動けないセイバー。
今度こそ万事休す、という時、第三者の攻撃（ラニの光弾。呂布の軍神五兵を利用したものでも面白い）が飛来、セイバーの斜め上空、何も無いところに着弾し、爆発する。
ロビン「なんだと……!?」
『顔の無い王』をはがされながら着地するロビン。
セイバー、ここぞとばかりに斬りかかる。
ロビン、間一髪で躱し、逃げる。
窮地を脱し、息をつくセイバーとハクノ。そこへ、
ラニ「――――失礼。手助けの必要があるように見えたので」
褐色の美女、ラニ＝Ⅷが姿を見せる。Ａパート終了。

第二階層・ラニのコテージ

森に夜が訪れる。
ラニの手引きで彼女の隠れ家（コテージ）に案内されるハクノたち。
コテージは大木の下に隠れるように建てられている。ロッジ風。
廃墟ではなく、きちんと手入れがされている。
コテージの裏にはラニが今まで弔ってきたマスターたちの墓が無数にある。
コテージ寝室にて、セイバーの手当をするラニ。
セイバーはベッドに横になっている。
ラニはこのフロアでの生き残りである事、
サーヴァントを失った元マスターである事を語る。
その内容は奇しくも第一階層で出会った元マスター、遠坂リンと同じものだ。

ラニ「私の事はお気になさらず。もっと重要な話があるのですから」

ラニはフロアマスターであるダンの事を語る。
かつて第二階層でもっとも力のあったマスター。
優勝候補の一角だったがこの第二階層で敗北し、死亡した筈の人物。

ラニ「かつて第二階層で最も力のある魔術師（ウィザード）であり、

思慮深く礼節を重んじる稀有なマスターでしたが……」

しかしSE.RA.PHがその機能を変更し、聖杯戦争が廃止された時、フロアマスターに選ばれ、蘇生。

その後は第二階層に訪れるマスターを殺し続けるだけの狩人になったと。

セイバー「第二階層に、貴様とフロアマスター以外のマスターはいるのか？」

ラニ「いいえ。第一階層へと逃げ延びた者以外は皆、彼に殺されました」

セイバー「……そうか」

神妙な面持ちで黙るセイバー。

ハクノはますますラニに疑問を抱く。

ハクノ「キミはなぜ第一階層に降りなかった？」

ラニ「五〇年、上の階層を目指すマスターが訪れる日を待っていました。

もうマスターはいないと結論は出ていましたが、

星辰はあと一度だけ星が現れると告げていました」

ラニの五〇年、という単語にどきりとするハクノ。

CHECK▶ このラニ（アバター）が第二階層に住み着いたのが五〇年前、という事。

ラニ「私はかつて聖杯戦争に参加したマスターです。
その時にセイバー、貴女を見かけました。戦う事はありませんでしたが――」
セイバー「そうなのか？　それは残念な事をした。
貴様は一流の魔術師、そのサーヴァントはさぞ立派な英霊であったろう。
あのような卑怯者と違ってな！」
ラニ「堂々たる英霊ではありました」
ラニはもう失われた自分の相棒である呂布を褒められて内心、とても誇らしい。
セイバー、隙あらばロビンをディスっていくスタイル。
ラニ、遠い目になる。
ラニ「……かつての聖杯戦争では、そういった英霊をよく見かけました。
マスターもです」
「一二八人のマスターによるトーナメント。過酷な生存競争ではありましたが、
そこにはルールがあり、相互理解があり……。
そして何よりも、人類の――」
セイバー「うむ。ヒトの希望があった」
「貴様の言う通りだな。命の奪い合いであったとしても、
まばゆいモノを余は確かに感じた覚えがある」

セイバーも遠い目になって呟く。
ハクノ、そんな二人を前に、自然と胸元を押さえている。
懐かしげに、そして誇らしげに語る二人の様子にハクノはどろりとした感情を覚えてしまう。
ハクノ（偽物の楽園、廃墟だった街、誰もいない森）
（まばゆいものなんて、何処にある）
ひそかに歯がみするハクノ。
ハクノ（希望？）
（そんなもの、オレには——）
聖杯戦争への憎しみ、反感である。
二人のやり取りへの反感を悟らせないよう、眉間にしわを寄せて黙っているハクノ。

CHECK▶ゲーム未経験者への必要な説明、『聖杯戦争』をクリア。

話はさらに派生し、そもそもSE.RA.PHとは何か、の話になる。
ラニは博士属性なのでとにかく説明好き。
SE.RA.PHとはムーンセル内部に作られた電脳空間であり、
聖杯戦争の舞台であり、

人類に作られた新たな、そして最後のフロンティアだったと語る。
これは一話のトワイスの語り（電脳の地獄）と同じものでもあるが、
ラニの語りは希望に満ちたもの。
事実、SE.RA.PHは使用法さえ間違わなければ理想郷になりえたのだ。
しかしそのSE.RA.PHは今や崩壊の危機にある。
なぜそうなってしまったのか――というところで、
セイバー「余は疲れた。もう眠る」
セイバー、気力の限界。飽きたとも言う。
ロビンに受けた傷の回復もある。
セイバーにならってハクノとラニも眠りにつくことに。

眠り／ハクノの夢

ハクノ（死の総体）の見るバッドドリームⅠ。

CHECK▶ トワイスとの繋がりを『かつてトワイスに倒された者』の記録を夢としてフラッシュバックする、という手法で積み重ねていく。

熾天の檻に佇むトワイス（ゲーム版）。
まだ理想があり、信念をもって月の中枢でマスターたちを待っていた頃のトワイス。

トワイス「――元々、聖杯戦争とはムーンセルの情報収集活動の一つに過ぎない」
「無論、聖杯戦争などという名もなかった」
「ムーンセルはサンプルを必要としただけだ。
人間というもののデータをより精密に得たかっただけなんだよ」

トワイスは独り言を言っているように見えるが、視線の先には一人の人物がいる。
熾天の檻までやってきた、この回の聖杯戦争の優勝者（マスター）である。
マスターの顔は真っ黒な影になっていて見えない。（背格好や髪型はハクノ似）

トワイス「だが、現実はそうはならなかった。
月に招かれたマスターたちは自己解釈の末、
ともに殺し合い、脱落していった」
「――キミのように。自らの益だけを見据え、
自らのルーツを知ろうともしない、愚者たちの群だ」

トワイス、右手を天へ向ける。

CHECK▼ セイヴァーを呼び出すにあたり、ブッダ誕生時の天上天下唯我独尊のポーズを意図的に模しているトワイス。

トワイス「聖杯に相応しい者は、私が選ぶ」

「人類にとって私は悪である。だが、生命とは転輪するもの」

「全を生かすために、個に救いをもたらすために、私はこの力を授かった」

「残念だよ。キミは、この熾天の檻に来るべきではなかった」

まばゆい白色の光が溢れるイメージ。

トワイスのサーヴァントである覚者(セイヴァー)からの攻撃を示す光。

挑戦者であるマスターの体は、光に呑まれて、指先から光の粒子となって、あっという間に全身が消し飛び、絶命する。

×　×　×

欠落した誰かの記録。死者は夢を見ず、ハクノは目を覚ます。

ラニの隠れ家～夜の森

悪夢から目覚めるハクノ。

汗だくになった状態で、いま見た夢を反芻する。

ハクノ（オレの記憶なのか？）

（奴は、誰だ。あの男……）

フラッシュバックする第一話、焼却炉に佇んでいたトワイスの姿。

自分はかつてトワイスに敗れ、蘇ったマスターなのか？　と不安を覚えるハクノ。

CHECK▼ ダンの『死んでから蘇った』という話と重なるように。

しかし、そうなると予選会場にいた事と矛盾する。

自分は一体なんなのか？　本当に〝自分〟なのか？

悪い思考を振り払うように顔を上げるハクノ。

と、ラニの姿がない事に気がつく。

×　×　×

ハクノ、コテージの外に出る。

夜の森には点々と明かりがともり、空は変わらず海の底だ。

外ではラニが墓に火をともしていた。

ラニは自分のコードキャストで自分の劣化コピー（デコイ）を複数作り、多くの墓に火をともし、供

養していた。

ラニ「悪人も善人もいましたが、誰もが必死に生きていました。
それだけで私にとっては弔うに値します」

ホムンクルスであるラニにとって、個人の善悪はパラメーターにすぎない。

〝ただ自分の願いのために生きたもの〟

〝最後まで、競争という生命の責務を放棄しなかったもの〟

を、自分にはない熱（魂）を持つものとして尊重している。

幻想的な風景の中、ゆっくりと軋みをあげて回るチャクラ・ヴァルティン。

ラニ、ハクノにいくつかの質問をする。

なぜ上を目指すのか。どうやってマスターになったのかを。

ハクノは胸を押さえ、先ほどの正体不明の憎しみが何だったのかを考える。

ハクノ「……上を目指す理由はよく分からない。
そうしなければならない、と感じるだけだ」

ラニ、なるほど、と頷く。

最後にハクノからラニに質問を返す。

ハクノ「さっき、キミは五〇年と言ったけど……じゃあ一九〇〇年代の人なのか？」

ラニ、いいえ、と首を振る。

ラニ「アナタは知らされていないのですね。そして、気づこうとしていなかった」
「今は二〇三〇年ではなく三〇二〇年。
アナタがいた最下層の地上は、かつてあった楽園の再現です」
「SE.RA.PH崩壊から約一〇〇〇年。
地上の人口は一〇万をきり、じき滅亡域に到達する」
「文明圏を維持する事が人間の証であるのなら、
このSE.RA.PHにいる私たちは最後の人類」
「……つまり。SE.RA.PHが崩壊すれば、人類はこの宇宙から消え去るのです」

ハクノ、愕然。

CHECK▶ 七万年前のトバ・カタストロフではヒト属は一万まで減少したが、現在はご覧の通り。一〇万からでも盛り返すのは可能と思われるが、EXTRA世界の地球環境はある理由で既に死亡している為、後は新天地に向かうしかない状況なのです。

Cパート／ダン隠れ家

カメラはダンとロビンに。
ダンはハクノたちを仕留めずに戻ってきたロビンのミスを責める。

ダン「なぜマスターを狙わなかった？」
ロビン「いや、狙いましたよ？」
ダン「セイバーを釣る為に、だろう。
　初めからマスターだけを狙っていれば邪魔が入る前に事は済んだ筈だ」

実のところ、ロビンはマスター殺しをしない。
マスターを狙い勝利を収めるのはダンの方針である。

CHECK▶これはゲーム版の逆となる。ゲーム版ではロビンがマスターを狙い、ダンがそれを禁じた。その違いの痛ましさは五話で明らかにする。

ダン「次はないぞ。的確に、確実にマスターを殺せ」
はいはい、と肩をすくめて了承するロビン。
ロビン「どうあれ連中は詰んでますよ。セイバーにはオレの矢がたっぷり刺さった。

ありゃあ三回殺しても余りある」

意味ありげなロビンの台詞。これはロビンの宝具が『相手の体内の毒を爆発させるもの』だから。

しかしそんなロビンの言葉もダンには届かない。

ダンはライフルを磨きながら独り言を繰り返す。

ダン「今度こそだ。今度こそ私は上にあがる。

そのために何人もマスターを殺してきた。

今度こそ――ムーンセルは私を勝者として迎え入れる筈だ――」

独り言をもらすダン。

ダンは『素晴らしい戦いをする』と言っておきながら正々堂々と戦わない。

その矛盾に本人が気がついていない。

ロビン、苦々しげに唇を噛み、隠れ家を後にする。

〈第四話／了〉

第四話 用語集

ラニと星辰
●ラニとせいしん

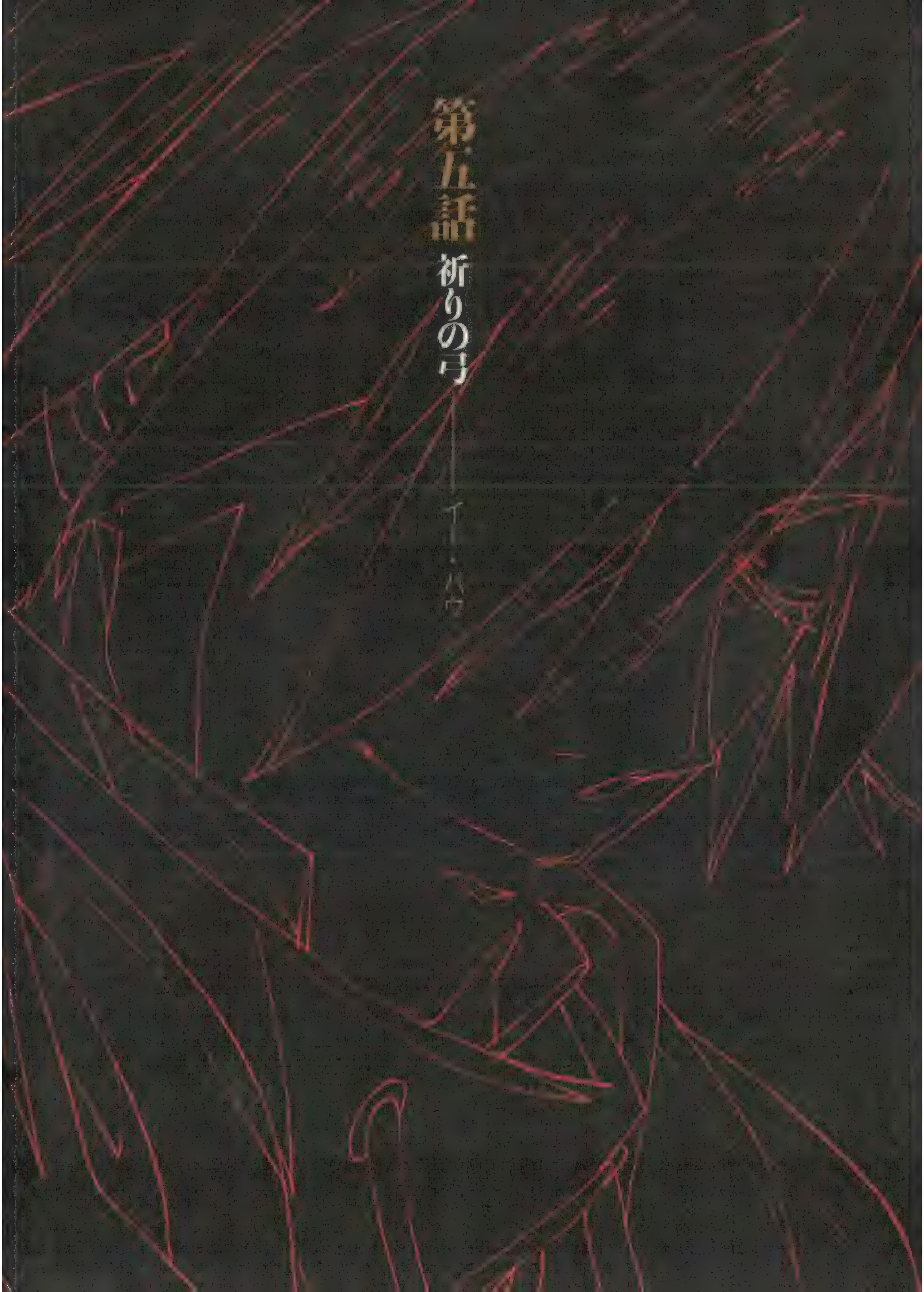
星辰とは星、星座の並びのこと。ラニは占星術を得意とする。ラニはアトラス院と呼ばれる地上最後の魔術機関が鋳造した、地上最後のホムンクルスである。感情より理論を優先するよう調整された電脳活動に特化した人工生命だが、錬金術から生まれたラニは失われつつある神秘学……オカルティズム……を重要視しているようだ。



西暦二〇三〇年
●せいれき二〇三〇ねん

本作品における現在の年。SE.RA.PH崩壊から約一〇〇〇年。地上の人口は一〇万をきり、じき滅亡域に到達する。文明圏を維持することが人の証であると仮定すると、SERA.PHにいるマスターが最後の人類。そしてSE.RA.PHが崩壊すると人類は宇宙から消えることになる。





第五話　祈りの弓

——イー・ハウ

アバン／ダン回想

ダンによる一〇〇〇年前、聖杯戦争時の記憶。
ゲーム版でのダンをダイジェスト風に語る。
ダンとロビンの在り方が真逆だったこと、
二回戦においてダンは敗れ、先に進む少年少女へ道を示した。
敗れ去り、望みは叶わなかったが意味のある終わりだった。
しかし――――チャクラ・ヴァルティンが現れ、SE.RA.PHが崩壊し、ダンは蘇った。第二階層そのものが選んだ『この階層でもっとも優れたマスター』だったからだ。
ダンは蘇った後、上に逃げる事はせず、かといって第二階層を治めず、執拗にマスターを殺し始めた。
聖杯戦争に勝つために。勝者として上にあがるために。
正気のように見えて、ダンは過去の妄念にとらわれた亡霊そのものだった。

Aパート

翌朝、朝食中のハクノ、セイバー、ラニ。

献立はラニの用意したもので、コーンフレークとミルク、サラダ、果物のジュース。

セイバー「うむ、ゆうべは食事を抜いてしまったからな。朝食で取り戻さねば！」

「奏者もよく噛んで食べるがよいぞ」

美味しそうにもくもくと食べているセイバーを見ながら、ハクノ、ぼうっとした表情で呟く。

ハクノ「……一〇〇〇年」

ハクノの呟きに合わせて、ぴたり、と食事の手を止めるセイバーとラニ。

ラニ「正確には九九〇年です」

セイバー「おお、追い打ちか……」

ラニ「すみません。事実を端的に告げるばかりでは、混乱を招くのも当然ですね」

一〇〇〇年の経験蓄積を経て、ゲーム版よりもちょっとだけ気遣いができるようになったラニ。

セイバー「なにを暗い顔をしているのだ、奏者よ。

一〇〇〇年経とうが別にどうということはない」

ハクノ「……？」

ドヤ顔で告げるセイバーを見るハクノ。

セイバー「余の生前など二〇〇〇年も前なのだぞ？　あいや、三〇〇〇年だったか。

ともかく大差ない。

幾星霜を経ようとも、余とそなたは共に手を取り合える」
「それで余は充分だ」
にっこりと微笑むセイバー。
ネロ・クラウディウスが生きていたのは紀元一世紀。言われてみればその通りではあるのだ。ハクノ、僅かに微笑む。
ハクノ「セイバーの言う通りだ」
セイバー「であろう？」
ハクノ「ありがとう。少し驚いたけど、お陰で落ち着いた」
セイバー「うむ！」
セイバー、話は終わりとばかりに食事を再開。もりもり。
ハクノ（……落ち着いた）
（それは本当だ。でも）
（それなりの衝撃はある）
（シンジ。おまえは、一〇〇〇年も――）
既に通り過ぎた対戦相手、
間桐シンジが積み重ねてきた時間を、ハクノは想う。
ラニ「……」

そんなハクノの様子を静かに見守っているラニ。

×××

朝食後。引き続きラニのコテージにて今回の作戦会議が開始される。
テーブル上には、森の立体地図データが展開されている。

セイバー「充分に休息が取れたのは僥倖だが、
　いつまでこの小屋が見付からずにいるかもわからぬからな」

頷くハクノ。

ラニ「敵に勝利するには実力が上回る事が確実ではありますが、
　何よりも、敵を知る事こそが正道です」

セイバー「いくさの常だな。して、フロアマスターはどのような人物なのだ」

ラニ「老練な戦士であり、勝利に執着する人物」

ラニ、レジスタンス活動をする中で収集した人物データを表示する。
名前、性別、身長体重、国籍、などが英語で書かれたデータと画像データ。

ラニ「ダン・ブラックモアは、第二階層を訪れたマスターを殺害しています」
　「目的は、マスターとの決戦を経て上層へと上がること。ですが……」

ラニ、わずかに表情を翳らせる。

ラニ「それは絶対に実現しません」

ハクノ「絶対？」

セイバー「マスター同士の戦闘を勝ち抜けば、ラダーが降りるであろう」

セイバーとハクノは疑問の顔。

ラニはゆっくりと首を横に振る。

ラニ「彼は一〇〇〇年前の時点で聖杯戦争で敗北しているのです。

フロアマスターとして他マスターに決戦を挑まれる立場であり、

他マスターが上の階層に行くための関門ではありますが……」

「彼自身は、もう勝ち上がる資格を失っている。

何十というマスターを倒したところで、

ムーンセルが彼に貼ったラベルは〝敗者〟なのです」

ハクノ「マスターを殺しても……」

ラニ「ラダーは降りません」

なるほど、と頷くセイバー。

その表情は真剣になっている。

セイバー「ならば、無為の殺戮を続ける妄念の男というわけか」

ラニ「はい。事実を理解しているかは不明ですが、

彼はマスター殺しを九九〇年間にわたって続けています」

セイバー「並々ならぬ執着よな」

ラニ「ですからハクノ、彼は必ずアナタを狙い続けるでしょう。
いま第二階層にいるマスターは、貴方だけです」

ハクノへ告げてから、ラニは駒のデータを配置しはじめる。

CHECK▶ リンが三話で使ったのと同じモデルのチェスの駒。ここでも二人が同質の存在である事を示唆する。

マップには王城とコテージ、時計塔が示される。
狙撃の射線の元であった時計塔にダンの駒が。
その時計塔に向かう森にロビン……アーチャーの駒が置かれる。
ラニはダンが地上では元軍籍の狙撃の名手であり、騎士の称号を授かった英雄である事、そのサーヴァントであるアーチャーの真名（ロビンフッド）と、その逸話を説明する。

ラニ「真名、ロビンフッド」
「英国に伝わる英雄、ゲリラ戦闘に長けた英霊です。五月の王（メイキング）、顔のない王の性質を有しています」

ラニ、空中にプロフィールデータを開示。

ロビンの真名、能力パラメーターやスキル、宝具の名前などが英語で表記されている。

ラニ「注意すべきは二種の宝具。
　姿を隠す『顔の無い王（ノーフェイス・メイキング）』と」

マントの画像データが浮かぶ。

ラニ「対象がため込んだ不浄を何十倍にも増幅させて爆発させるドルイドの秘術・
　『祈りの弓（イー・バウ）』」

ロビンの弓の画像データが浮かぶ。

セイバー「不浄とは何を指す？」

ラニ「主に毒です。対象に毒を仕掛けた後、
　宝具の真名解放による一度の射撃によって爆発をいざなう」

セイバー「……内側からドカンか？」

ラニ「内側からドカンです」

セイバー「ならば余は、貴様に危ういところを助けられたという訳だな。
　改めて礼を言うぞ、ラニよ」

ラニ「いいえ」

ハクノ「――――」

セイバーは明るく笑っているが、ハクノは真剣な表情で表示データを睨んでいる。

ラニ「いずれも強力な宝具ですが、どちらか一方ずつしか使用できないようです」
セイバー「ドカンとやるには、姿を見せるしかないのだな」
ラニ「その通りです」
セイバー「ならばやりようもある。姿が見えねば勝つのは難しいが」
セイバー、ハクノをまっすぐに見据える。
ハクノ「ああ」
セイバー「奏者、こやつは余が引き受ける。時間稼ぎは任せるがよい」
ハクノ、視線を受け止めて頷く。
ハクノ「その隙に――」
決意を秘めて、時計塔に配置された黒ナイトの駒を手に掴むハクノ。
ハクノ「オレが、ダン・ブラックモアを倒す」
ラニ、そんなハクノを見ながら、メガネに僅かに手を当てる。
カチャリと鳴るメガネ。
ラニ「全面的に協力します。五〇年のレジスタンス活動に、私も区切りを付けたい」

森〜時計塔へ

ハクノたちは時計塔を目指してラニのコテージを後にする。
ラニは自前の移動手段。(セグウェイっぽいものに乗って移動するのが浮き世離れしたラニらしいが、絵的にどうしても緊張感が出ないのなら違うものに)
木々の向こう、森から見上げる空に時計塔が見え始めた頃、ロビンフッドが現れる。

セイバー「ふむ、正々堂々待ち受けるか!」

セイバー、満足げにニヤリ。

セイバー「予定通りにゆくぞ、奏者!」

ハクノ「頼んだ、セイバー」

セイバー「うむ!」

加速をかけてギューンと駆け抜けていくセイバー。
そのままロビンに斬りかかり、ロビンがハクノたちを追えないように引きつける。

ラニ「私たちは時計塔へ」

頷くハクノ。

× × ×

セイバーVSロビン。

二人がサーヴァントとして向き合った時点で第二階層の「決戦」がムーンセルに受理される。
空から次々と降り立つ決戦場の壁。
白亜の壁で覆われた広大な森の中で対峙するセイバーとロビン。

CHECK▶ 時計塔も含んだ広大な森林域を取り囲むようにして白亜の壁は突き立っている。

ロビン、地響きと揺れの中で大きく飛びすさって距離を取る。

ロビン「しっかり休んで全快したろ？
それじゃあ仕切り直し、いいや——大詰めだ！」

セイバー「気が合うな、アーチャー。いや
「ロビンフッド！　義賊と讃えられた男が殺戮の尖兵に落ちるとは！」

見得を切って剣を構えるセイバー。

CHECK▶ これ以降のセイバーとロビンのやりとりはゲーム版のクライマックスのものをあえて使いたい。
二人の立場を示しながら、セイバーのハクノへの心情を視聴者に示すものなので。

ロビン「言うじゃねえの。

高慢ちきなお姫さまには、きっついお仕置きをしてやらねぇとな」
セイバー「姫……？」
一瞬ぽかんとなりかけるセイバー、鋭い視線になってロビンを睨む。
セイバー「姫だと？　貴様、もはや許さん！
せめて女帝と讃えぬか、痴れ者がっ！」
「余を子供扱いするでない！
我が奏者まで真似たらどうしてくれる！」
ロビン「って、怒るのそこかよ！　どこまでマスター大好きなんだアンタ!?」
セイバーのある意味愛らしい反応に思わず毒気を抜かれて突っ込むロビン。
セイバー「たわけ！　そのような事、余に問うな！
なにしろ余にもまだ、真実が分かっておらぬ！」
ロビン「はい？」
聞き返すロビン。
他愛ないやり取りのようで、ロビンの表情は完全に戦闘時の真剣なもの。
セイバー「……うむ、そうなのだ。なにしろ顔も性別も違う。
容姿も人並みで、きらめくような才もない」
独り言のように呟くセイバー。

セイバー「だが――うむ、そうだ」

「記憶が無く、目的も無く、その眼が闇に曇っていようと、

あの者は〝戦う〟と言った！

自分が何なのか分からぬ未明の中でなお、

〝やるべき事がある〟と叫んだのだ！」

「その叫び、その願いは我が焔に相応しい」

「我が奏者は貴様のマスターと比べるべくもない。

貴様の主人はとうに死人」

「だが、我が主は未熟ながらももがき、懸命にあがいている。

その姿はぞんぶんに愛らしい！」

ロビン「そうかよ！」

ロビン、一斉射撃。

当然すべての矢は毒矢である。

セイバー、高速の剣撃ですべての矢を叩き落とす。

姿が見えている上に風切り音もあるからには全迎撃も可能！

迎撃しながらも移動を開始しているセイバー、ロビンへの直進ではなく、木々に姿を紛れさせるために横移動。

ロビン「雛鳥相手に随分なご執心だな、姫！」

ロビン、姿を消さないまま直進、移動しながら遮蔽に隠れているセイバーへ次々と矢を射る。

セイバー「……雛鳥か」

遮蔽に隠れたまま、剣を握りしめて息を整えるセイバー。

セイバー「雛鳥ならば我が手で育ち、
　いずれ大鳥（おおとり）となって飛び立つは道理」

セイバー、大樹へと一閃。ばらばらに砕ける大樹。

ロビン「！」

大樹の破片のひとつに隠れながら、飛び出して、ロビンへと斬り掛かるセイバー。緑弓でかろうじて受け止めるロビン。

セイバー「だが貴様の主人はどうだ！
　死した黒鳥（からす）に、まだ羽ばたく力は残っているか！」

つばぜり合いながら叫ぶセイバー。

ロビン、忌々しげに、かすかに苦しげに、チッ、と舌を鳴らす。

カメラ、アウト。

森～時計塔まで

森を行くハクノとラニ。
その最中、ラニはハクノにSE.RA.PHの在り方の補足をする。

ラニ「SE.RA.PHは本来、人間観察の為に作られたものです」

ハクノ「……?」

いま語る事なのか、と不審げな表情のハクノ。
ラニは一切気にせずに続ける。

ラニ「けれど、やはりムーンセルは機械にすぎなかった。
管理するのみで、ヒトの内面までは理解しなかったのです」
「ゆえに人間を招き、行動を記録した」

ハクノ「……それが聖杯戦争か」

ハクノが返答できるのは、昨晩夢に見たせいだが、ハクノは言わない。

ラニ「はい。ですが、この際に生じた人間の事象に対する反応……
『感情』を数値化できなかった。
ムーンセルはこれを理解せず、切り捨ててしまった」
「これにより、SE.RA.PH最下層の更に下には、

廃棄された人間の感情、想念が澱み溜まっていった」

ハクノ「……ああ」

第一話に登場した焼却炉の景色、さらにその下に眠っていた朽ちた黄金劇場がフラッシュバックする。

ラニ「地上世界において、死後の世界は物理的に存在しませんでした。
或いは観察不可能なものでしたが」
「SE.RA.PHにおいては、霊子的に実現した」

第一話、第二話、第三話、でハクノが見た『赤い背景の場所』がフラッシュバック。

ラニ「……そして一〇〇〇年という時間を経て」
「死者の想念が、亡霊の如くして歩き回る事例さえも」

CHECK▼ この言葉は、ダンを指しているものである、と見せかけてハクノの正体をずばり指している。

ハクノ（……誰の事を言ってるんだ。ダン・ブラックモアか？）
（それとも——）

敵意を込めてラニを睨むハクノ。
ハクノの顔に、デッドフェイスを思わせる電光が走る。

セイバーVSロビン

セイバーとロビン戦、続行中。
セイバーは戦いの中、今まで無意味に（殺しても上にはあがれないので）マスターたちを殺してきたロビンの行いを弾劾する。

セイバー「なんのために戦うのだ!?」

ロビン「目的なんぞねえ。ただ負けたくねえだけだ！」

もう何もかもが終わっている事を知りながら戦うロビン。
ダンには何も得るものはなかった。
栄光も得られず、報酬も与えられなかった。
そんな老騎士に〝おまえは負け犬だから諦めて死ね〟と言えるのか。
ロビンにはできなかった。せめて〝負けない事〟ぐらいしか示せる誇りがなかったのだ。
姿を隠して戦うロビンにセイバーは苦戦するが、今回はハクノはいない。
セイバーひとりならジリ貧だが負ける事はない。
セイバーの狙いはただ一つ。
ロビンが『祈りの弓』を使うために『顔の無い王』をはぎとる瞬間。
その瞬間にロビンの位置を特定し、花散る天幕（ロサ・イクトゥス）で勝負を付ける算段だ。

しかし――

森／時計塔前の広場

一方、ハクノとラニ。
森を抜けて時計塔に辿り着く。
が、鐘の音が響き、時計塔前の広場でラニが狙撃される。
容赦のない、正確無比なヘッドショット。
頭部を撃たれ倒れ伏すラニ。駆け寄ろうとするハクノをラニは止める。
ラニを生かしておくのは本命であるハクノをおびき寄せるため。
戦場におけるスナイパーの常套手段だ。
ラニ、自分は見捨てて時計塔内部へ、と視線でハクノに訴える。
森の茂みに隠れながら苦悩するハクノ。
動揺と緊張でハクノの思考は加速する。

ハクノ（見捨てて時計塔に行けばラニは殺される。
　このまま躊躇していてもラニは殺される。
　どのみちラニは殺されるのなら時計塔に急いでダンを倒すべきだ）

（そのためにここまできた。それを覚悟してこの作戦をとった。
セイバーに勝ち目の薄い戦いを強要し、ラニを犠牲にした。
なら迷っている暇はない。一秒でも早く時計塔に入るべきだ）

それが当然の結論だ。だが。
ハクノは昨夜の光景を思い返す。
五〇年、誰もいない森で死者たちを弔っていたラニの姿。
人間の善悪は問わず、生きようとあがいた者たちを尊いと彼女は言った。
それが、憎悪しかない自分の喉にどうしてもつかえていて――

ハクノ（――それは違うと、脳をかきむしる音がする）

ハクノ、もう一度時計塔の最上階を見る。
大きな鐘楼がある。鐘だ。今まであの鐘が鳴っていた。
狙撃の時は必ずあの鐘が鳴っていた。

ハクノ（そもそも疑問がある。ダン・ブラックモアは百戦錬磨だ。
そんな男がどうして、射線を知らせるなんて愚を犯す？）

『スナイパーは姿を隠すもの。居場所を偽るもの。
そのすべてを瞞すもの――』
ハクノの中でダンの戦略、そのピースが当てはまる。

見れば広場には大勢のマスターたちの死体がある。
今までダンによって処理されたマスターたちのなれの果てだ。（死の総体であるハクノにとっては自分の事でもある）
迸る電光の記憶。
かつて、未来ある少年少女に道を示した、尊敬すべき老兵。
その末路に、ハクノの感情が発火する。

ハクノ「ダン・ブラックモア――――！」

ハクノ、現実を見ず、ただ戦いを繰り返すダンに怒りを覚え、デッドフェイス化。
デッドフェイス化による身体強化、弾道予測、そして頭部保護。
広場に飛び出すハクノ＝デッドフェイス。
ハクノはダンに狙撃されながらもラニを助け、弾道から逃れる為、再び森の茂みに隠れる。
地面に寝かされたラニは半ば死体。
朦朧とした眼でハクノを見つめている。
ハクノ、ラニに「動けるか」と問う。ラニは首を振る。
「では戦えるか？」と質問しなおすハクノ。ラニ、頷く。
ハクノ、ラニにある役割を頼んで、ラニの元から走り去る。

セイバーVSロビン

ロビン、セイバーのしつこさに舌を巻きながらもダンの心配をする。
いつもならとっくに敵マスターはダンに倒され、サーヴァントは力を失う筈だ。しかしその兆候はない。
その時、時計塔の鐘撞き堂が爆発する。
気を取られまいと賢明にロビンに集中するセイバーと、焦るロビン。
ロビン「……あの坊や、旦那の罠に気がついたのか……？」
いや、まさかな、と否定しながらもロビンは焦り、勝負をつけにでる。
既にセイバーはロビンの矢を受けている。
毒は彼女の血液にとけ、全身にまわっている。
後は『祈りの弓』を当てれば終わり。
ロビン、『顔の無い王』をぬぎ、『祈りの弓』の真名を解放。
ショートクロスボウだった『祈りの弓』は変形し、片手で携帯できるカタパルト状のボウとなる。
ついに切り札を出したな、と挑発するセイバー。
どのような矢であれ弾き飛ばし、その首を落とすと豪語する。

ロビン、その発言に笑う。

ロビン「勘違いしてるようだがな。コイツは矢というより起爆装置だ。撃ち抜く必要はねえ。当てるだけで十分なのさ！」

『祈りの弓』、射出。
凄まじい勢いでセイバーに迫る雷光の如き一射。
これを剣の背で受け、渾身の力で斜め後ろに弾くセイバー。
あまりの威力のため、セイバーの体は後方に泳ぐ。
ダンブカーに弾き飛ばされた人体のように。（しかし、その姿は無残ではなく、華麗に空中でターンしている。ステップを踏む踊り子のように）

ロビン「お見事！　無意味だがね！」

勝利を確信するロビン。
矢はセイバーの剣技の前に弾かれた。
しかし、『祈りの弓』はセイバーの剣に触れた時点で発動する。
セイバーの体内で毒が爆縮する。大爆発と共に四散するセイバー。

CHECK▶ ここのイメージ映像がはまるように、前のシーン（ラニの説明、あるいは過去のロビンとダンの戦歴）で視聴者に見せておく。

……四散するセイバー……？
いや。その兆候は微塵もない。
ロビン「────！」
セイバー、回転の勢いを殺さずにロビンへと体勢を立て直し、跳躍。
一瞬で間合いを詰め、ロビンの胴体を一閃する。
セイバーが走った跡には夥しい血の跡が刻まれている。
立ち尽くすロビンと、剣をふるったまま残心しているセイバー。
ロビン「何故、爆芯が作動しなかった……？」
セイバー「見れば分かろう。毒抜き（血抜き）は済ませてある」
悔しがる訳でもなく、淡々ともらすロビン。
セイバー、自らの動脈（内股でも、二の腕でもよし。手首はナシ）を斬って血液を事前に流出させていたのだ。
爆発する毒がなければ『祈りの弓』もただの矢である。
ロビン「とんでもねえ手を使いやがる……そりゃあ自殺行為じゃねえか。
　なんで生きてるんだよ、オタク」
セイバー「余を誰だと心得る。喉を裂いた後、三日後に目を開けた女だぞ。

　自傷による死なら、三度まで蘇る」
ロビン「――ああ、そんな話もあったっけ。こいつは、一本とられたな」
ある皇帝の逸話。自刃した後、三日生き延びた話に思い至るロビン。
ロビン、もはや死に体。
セイバー「まだ戦うか？」
ロビン「どんだけサディストなんだよオタク。どう見ても無理でしょコレ。
　息するだけで精一杯だっつの。それに、だいいち」
「オレのマスターは、オタクのマスターに敗れたらしい。
　――もう鐘の音が聞こえない」
セイバー「なんと!?」
ロビンの言葉を受け、セイバーはハクノの元へ駆けていく。
ロビンの事よりマスターであるハクノを心配しての事だ。
そんなセイバーの後ろ姿を見送るロビン。
ロビン「おーおー、子犬みたいにはしゃいでまあ」
鼻で笑って、ロビンは森の中に歩いていく。
辿り着いた先にはイチイの木がある。
木の根元には小さな墓がある。

ダンがまだ正気だった頃に作られたアンタの墓。いまはもう忘れ去られた、誇り高き騎士の跡。

ロビン「これでおしまいだ、旦那。
満足かい？　気の遠くなるような、長い長い悪あがきだったけどさ」
「しっかしまあ……やっぱ正面からの戦いだと勝てませんわ、オレ。
その点だけは旦那の見込み違いでしたねぇ」

ロビン、やれやれと肩をすくめながらも（少年のように）思いだし笑いをして消滅。

森～時計塔

一方、カメラはハクノ側に。時間は少しだけ戻る。
時計塔を駆け上がるハクノ。
ステンドグラスのある最上階に到着する。
そこには車椅子に座った人影が。
しかしステンドグラスは四話で出てきたダンの隠れ家のものとは違う。車椅子に座った人影もただの人形。
どういう事――――という瞬間に部屋の四方にしかけられた爆弾が起爆、最上階の鐘撞き堂

は骨組みだけ残して爆散する。

×××

その光景を隠れ家からスコープで確認し、ほくそ笑むダン。

ダン「マスターは消えた。

アーチャーは手こずっているようだが、これで——む？」

森にできた決戦場に変化はない。
時計塔最上階の爆風が風に流される。
爆破された床にはドールを実体化させる為のコアが転がっている。
ハクノがラニに用意してもらった劣化コピー……囮（デコイ）である。

ダン「！」

ダン、驚いて視線を上げつつ銃を構えるが、時既に遅い。

CHECK▶ここでカメラ引いて、ダンがいた場所は最初の場所……ハクノたちが降り立った王城の最上階だと明かす。一番はじめに狙撃された場所の真上にスナイパーがいる、とは誰も考えない。ダンの隠れ家は意識の死角を利用したものだった。

ドン、と衝撃とともにダンの頭部に弾丸が突き刺さる。

ダンの銃の引き金もひかれるが狙いはそれ、鐘に命中。弾丸は跳弾して森のあらぬ方向に。
（分かりやすく城のテラスに跳弾してもよい）
ガラーンゴローン、と鐘が鳴り響く。
死の間際、倒れ込みながらダンは見た。
時計塔の最上階よりさらに上、鐘撞き堂の屋上に人影が一つあることを。
ダンと同じライフルを構えたハクノだ。
射撃直後のライフルは、デッドフェイスの影響で、パリッと電光を発している。

CHECK▶ ただのライフルではなく、デッドフェイス化して撃った事で強力なのだ、という提示。

ダンにはその姿がかつて自分を倒した対戦相手に重なって見える。
未熟だが熱意に溢れていた少年少女。（少年か少女、どちらであるかは語らない）
上を目指す若者にできるかぎりの言葉を残した自分。

ダン（なんと――愚かな）
（素晴らしい戦いをする、などとどの口で。
それはもう、とうの昔に過ぎ去った話だった）

ダン、白ばんでいく視界の中、後ろに振り返る。

そこにいるはずのロビンの姿はない。もう見えない。とっくに見えなくなっていた。
その上で、あの弓兵は自分に付き合ってくれていた、と理解する。
視界は白い闇に落ち、届くのはハクノの勝利を告げる鐘のみ。

ダン「鐘の音が聞こえるよ、アーチャー――」
「なんと懐かしい。まるで、あの日々に戻ったようだ――」

ダン、そのまま死亡し、消滅する。
その姿を時計塔の屋上で眠むように眺めるハクノ。
それはダンの末路に向けられた憎悪ではなく、一〇〇〇年さまよい続ける騎士を作りだした何かに向けられたものである事を、ハクノ自身もまだ気付いていない。

森／時計塔の鐘楼

勝者であるハクノめがけてムーンマイルラダーが落ちてくる。
駆けつけるセイバー、そのままハクノに飛びつく。
ハクノの勝利を祝うセイバーと、セイバーの勝利に感謝するハクノ。
しかし勝利の余韻にひたる時間はない。
第二階層、忘却の森はダンの消滅と共に崩壊を始めていた。

森には炎が広がっている。
ラダーは「搭乗時刻は　あと　二分　です」と無情なコールを告げる。
ラニを連れて行こうとするハクノだが、ラニの姿はない。
そもそもあの傷では助からない。

セイバー「急げ奏者、もう時間がない！」

ハクノ「でもラニが！」

セイバー「馬鹿者！　あやつは一度でも、一緒に上がりたいと言ったか!?」

そう。ラニは上に登る気はなかった。
彼女は第二階層で犠牲になった人々を弔っていた。
――はじめから、ハクノだけを上に行かせて自分は第二階層と運命を共にする気だったのだ。

ハクノ「……ありがとう、ラニ」

ラダーに乗るハクノとセイバー。

CHECK▶ ハクノはこの階層にて他者へ心から感謝することを学習した、と言える。

無情に閉まる扉。

ガコン、と一度だけ揺れた後、ラダーは上昇を開始する。
第二階層の妄念を晴らし、第三階層に向けて。

×××

森に横たわったまま、空に上がっていくラダーを穏やかな表情で見送るラニ。

ラニ「……良かった。最後の星が、ようやく空に」
「でも気をつけて。死人の仮面は、いつか、貴方の素顔を覆ってしまう」

ラニの電脳体、きらきらと消滅していく。

CHECK▶ デッドフェイス化は強力な武器だが、同時に破滅へのカウントダウンである事を視聴者に報せておく。

炎に巻かれていく、イチイの木。
小さな墓も一緒に燃える。

マイルーム

第三階層へ昇っていくムーンマイルラダー内部。

しんみりとした空気のラダー内部。

リン「まあ、ラニも満足だったんじゃない？
待ち望んでいた星とやらに、ようやく出会えたんだから」

チュッパチャプスを舐めながらほざくリン。

そうであろうな、と頷くセイバー。

そうだといいな、と感傷するハクノ。

一瞬の間のあと、

セイバー「なぜ貴様がここにいるのだ――――!?」

ハクノ「なんでキミがここにいるんだ――――!?」

二人の同時ツッコミを受けながら、ヤッホー、と手を振るリン。

以下次回。

〈第五話／了〉



ダン・ブラックモア
Dan Blackmore

騎士道精神を重んじる武人、百戦錬磨の老騎士。しかしチャクラ・ヴァルティン成立後、第二階層で破れたマスターの中で最強の者として選ばれ、強制的に蘇生。

だが死者が生前のまま蘇る道理はなく、一〇〇〇年の時を経て、勝利のみに妄執する狩人へと変貌した。

ダンは第二階層のフロアマスターではあるが、一〇〇〇年前に既に敗北している。そのため、聖杯戦争の参加者＝マスターではなくなり、いかにマスター権を持つウィザードを殺したところで、上へとあがる資格を持たない。



ロビンフッド

Robin Hood

アーチャー、ロビンフッド。英国に伝わる、義賊とたたえられた英霊。ゲリラ戦に長けており、二種の宝具を有する。姿を隠す、『顔の無い王（ノーフェイス・メイキング）』と、対象がため込んだ不浄を増幅させ爆発させる、『祈りの弓（イー・バウ）』。

かつては不意打ち・毒殺などで敵マスターを仕留める『無駄の無い、危険の無い』戦法を信条としていたが、ダン・ブラックモアの信条に触れ、生前のちっぽけな願いを叶えた。

その後、ダンの蘇生に合わせてサーヴァントとして復活。既に敗北しマスターとしての資格を持たないダンに付き添い、深い森の中一〇〇〇年もの間、彷徨い続けた

顔は無くそうとも誇りは忘れず。我らの亡骸は、どうかイチイの樹の下に――

第五話 用語集

イチイ
●イチイ

ケルト、北欧における聖なる樹木の一種。アーチャーの弓はシャーウッドの森の木から作られている。伝説によると、ロビン・フッドは「この矢が当たったところに埋葬してほしい」と残したという。

悔根の森
●かいこんのもり

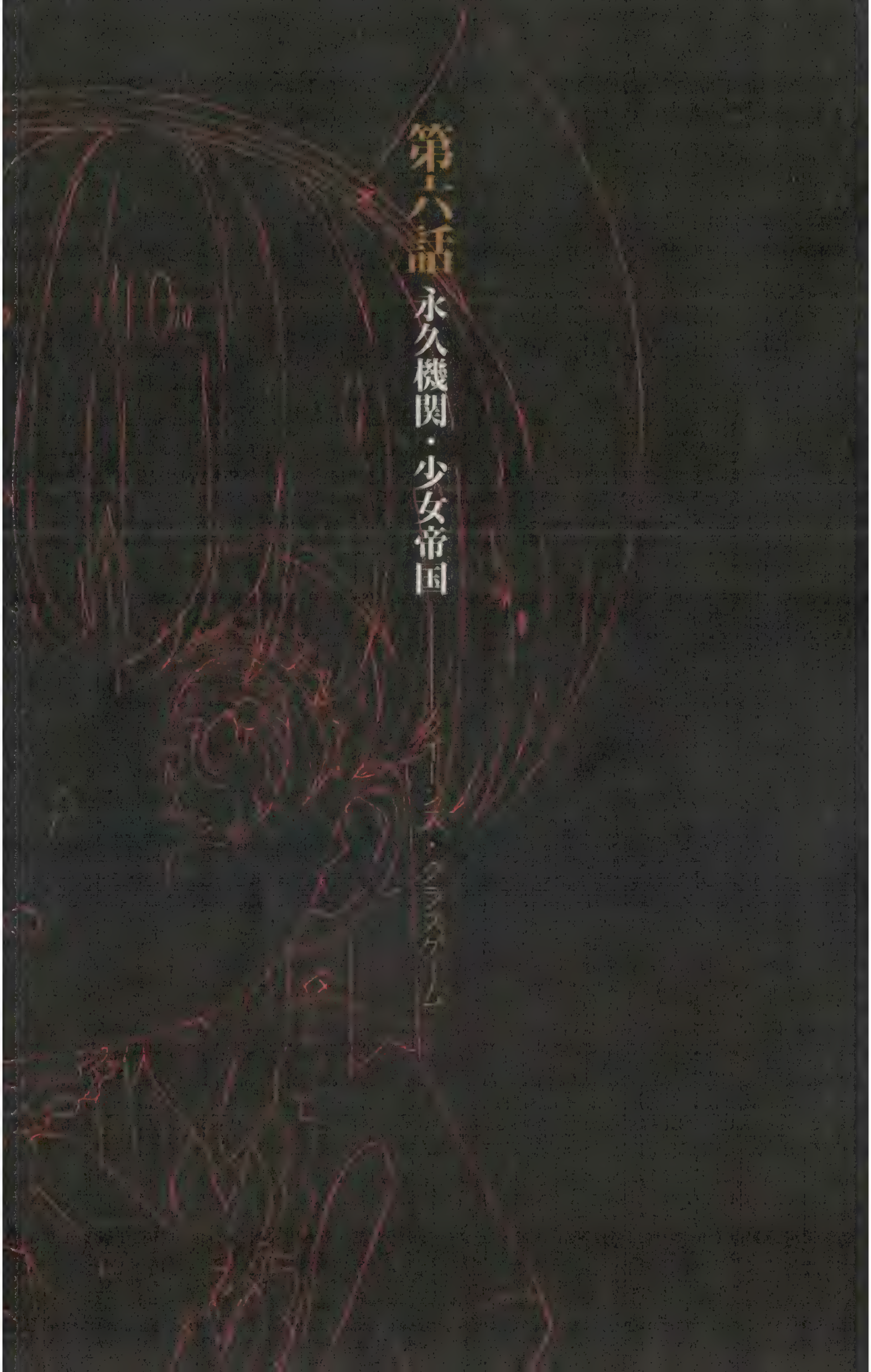


姿を見せない狙撃手の狩り場となった第二階層。刻を告げる鐘楼が鳴り響いた時、迷い込んだマスターはその頭部を撃ち抜かれ、『決闘』に至る事もできず抹殺されてきた。『停滞の海』から戦いに訪れたマスターたちは、入り口である『王城』を出た瞬間に狙撃され、森への撤退を余儀なくされた。マスターたちは狙撃手がいるであろう時計塔を目指し、その道半ばで狩人に倒されるか、時計塔に辿り着いた時、最後の罠によって殺された。

王城
●おうじょう

ラダー出現場所。第二階層入り口。多くのマスターは狙撃手を倒す為に王城から離れたが、狙撃手はこの王城に身を潜ませていた。刻を告げる鐘の音は、王城頂部から時計塔の鐘を狙って撃たれた跳弾の音である。





第六話　永久機関・少女帝国

——ノース・クラスクーム——

第二階層 停滞の海

それは繰り返す「忘却の庭」。

薄黒に木霊するかなきり声。

診察台とお茶会と、置き去りにされた物語。

CHECK▶ ありす編となる六、七話は通常の物語形式にあてはめない。童話めいた世界、すれ違う時間、前後不在の構造にする。一度目の視聴では意味不明の物語に、二度目の視聴では繋がりがなんとなく分かるものを目指す。

CHECK▶ 第三階層において、ハクノはいたるところでかつてのマスターたちの跡を見かけては、それに触れて物思いに耽る。彼らが何の思いでここまで来たかを読み取ろうとしているのだが、「彼はどうしてここまで」とか「どんな願いがあったのだろう」といったモノローグはしない。あくまで表情だけでハクノの『願いの無い自分への失望』を表現。表情的には『静かな苛立ちと後悔』といったもの。

アバン／過去

第三階層、ありすの思い出。草原の別れ。
時系列は一〇〇〇年前（SE.RA.PH崩壊前）の聖杯戦争時。
光射す城の中庭で、ありすとハクノB（ハクノに似た人影）が最後の別れをしている。
三回戦を終え、四回戦……上に上がるというハクノB。
ありすはハクノBにしがみつくでもなく、静かに涙しながらハクノBを止める。

「いかないで、いかないで。わたしをおいていかないで」と。
しかしそれが叶わない事もありすは分かっている。
〝聖杯を手に入れたらありすに会いに戻ってくるよ〟
ありすにそう告げて上に上がるハクノB。
「うん、待ってるね。待ってるね。きっと、わたしを見つけてね」
ハクノBを乗せた昇降機(ラダー)が上がっていく。
それを涙ぐみながら見上げるありす。
雲一つない青い空の下、昇降機は昇っていく。

CHECK▶ チャクラ・ヴァルティンはまだない。

01 マイルーム内

第三階層に向かって上昇していくラダー内での、リンを交えたハクノ、セイバーの会話。

ハクノ「いつのまにラダーの中にいたんだ!?」
セイバー「第一階層から忍び込んでいたのか!?」
リン「そこはそれ、企業秘密というヤツで」

驚きから喰い気味に問い詰めてくる二人を華麗にスルーするリン。

リン「ま、なんとか追いついたってコトで納得して。
アナタたちは上に行きたい。
私はそのチャクラ・ヴァルティンをどうにかして止めて貰いたい。
マスターじゃないんだし、アナタたちとは争う理由もない。
ほら。協力しあえるでしょ、私たち？」

セイバー「むむう」

怪しさ全開のリンだが、助力はあればあるほどいい。
ハクノの不安定さ（記憶がない、目的がない）もあり、リンのような先導役はどうしても必要であるコトをセイバーは理解している。そしてハクノも。

ハクノ「分かった。手を組もう遠坂」
「でも、ここからは騙し打ちはなしだ。ラダーには堂々と入ってくれ」

リン「ええ。ありがと、ハクノくん♡」

ハクノを利用する気満々な、小悪魔といった体のリン。
やれやれと肩をすくめるセイバー。

CHECK▶ このリンは第二階層で隠れていた（ステルスしていた）リンのアバターの一つ。二人はリンが第二

階層で砕け散っているのを知らないので、『そもそもリンは死んだ筈では？』という疑問を持たない。持つのは視聴者のみ。

CHECK▶補足→第二階層ラストにリンが合流している案が採用された場合、このエピソードはカット。

02 現在（0回目）

第三階層についたばかりのハクノたち。
ラダーが停止したのは森の中。
ラダーのまわりはちょっとした広場で、公園のような作りになっている。
散乱する子供用の遊具。
公園には時計台がある。ハクノたちが上がってきたラダーと、その隣に第四階層に上がるためのラダーがある。
しかしその入り口は鎖で施錠されており、『ただいま清掃中』と立て札が。
ハクノ「？」
セイバー「どうあれマスターがいる、という事だろう。
ラダーが初めから落ちている、というのは気になるが……」

今までのルール通り、マスターを倒さないと上には上がれない、という提示。
森からは遠くにそびえる城が見える。
リン「ここが第三層。亡霊集う夢の跡地。通称、名無しの森よ」
リンは第二階層と違い、姿を隠す事なく同行する。
セイバー「亡霊集う、とはどういう意味か？」
リン「文字通りの意味よ。
　ここは聖杯戦争があった頃から出やすい階層だったけど、
　こうなってからは頻繁に出るらしいのよね。ゴーストが」
ここからサイバーゴーストの説明。SE.RA.PH基礎知識にして、ありす編に必要な知識なので。
ハクノ「電脳世界にも幽霊はいるのか？」
リン「もちろん。SE.RA.PHは魂を情報化し、確定させた世界だもの。
　地上では〝精神だけ〟〝魂だけ〟の生命活動は有り得ないけど、
　ここではそれがあり得るの。ただ」
セイバー「それはSE.RA.PHに付いた染みのようなもの。
　死の間際の〝記録〟が再生されているにすぎない。

その無念が焼き付いた場所からどこにも行けない。
生命とは呼べないものだ」

リン「そ。サイバーゴーストはコードに紛れたバグにすぎない。
ムーンセルに見つかれば即座にデリートされる、死者の夢みたいなものよ」

死者の夢、という単語に反応するハクノ。
それは自分の事ではないのか、という疑問があるからだ。

リン「〝生まれた場所から動けない〟という点ではデッドフェイスと同じね。
でもデッドフェイスと違って、サイバーゴーストは危険なもの
ばかりじゃない。わたしは好きよ、ゴースト。
わたしたちウィザードも似たようなものなんだし」

リン、ごく自然に『デッドフェイス』という単語を用いる。もちろんハクノへの牽制、試
しである。

ハクノ、その単語に当然引っかかる。

ハクノ「デッドフェイス……?」

リン「死相――――電光の仮面」
「知らない?
この一〇〇〇年の間に醸成されたSE.RA.PHの伝説みたいなモノよ。

死者の想念を具現化した、ゴーストとは別の何か」

ハクノ「……見た事は」

リン「ないわね」

嘘をさらりと言うリン。

リン「噂でしかないもの」

ハクノ「噂……そういうものなのか」

リン「さあ?」

しらばっくれるリン。

CHECK▶ この後、もうワンシーン続くがそれは七話で展開される。

セイバー「何をしている。第三階層、その戦いの舞台が見えてきたぞ!」

セイバーの声でリンとハクノの会話はストップ。

先行していたセイバーが森の奥を指さす。

そこには――

03 その過去

一秒にも満たないカット。
かつて美しかった城の城門を挟む。

04 現在（読み戻し2回目）

城門は錆びついている。城門越しに見える城は色あせている。
城門を見上げているハクノとセイバー、そしてリン。

CHECK▶ 視聴者には『02』の続きとミスリードさせる

三人の表情は先ほどと違い、緊迫度を増している。

リン「中に入るわよ。二人とも、準備はいい？」

セイバー「無論だ。夕方までに決着をつけるのだな？」

リン「ええ。一戦目、二戦目に比べて敵も手強くなっている。
相手が何であれ、躊躇しないようにねハクノ君」

ハクノ、頷く。
城門をくぐるハクノにカメラを向けて、強い決意の横顔を見せる。
その手にある令呪は残り一つになっている。

CHECK▶ リンの言う一戦目、二戦目はドレイク、ロビンの事ではなく、既に二度戦った「名なしの怪物」との戦いの事である。

05 現在（読み戻し0回目）

廃墟と化している城内を探索するハクノたち。
城は同じ作りのものがコピーペーストのように連続している。
『シンデレラ城の門』をくぐり抜けて中庭に出たら、また「シンデレラ城の門」があるような。
城の内部構造そのものがループしている訳ではなく、そういう風に錯覚するような作りをしている。
手入れがされなくなり、荒れ放題になった英国風の迷路庭園と、朽ち果てた城門、朽ち果てた廊下をひたすら進むハクノたち。

CHECK▶ 廃墟のいたるところに「わたしに気づいて」「わたしを見つけて」という落書きがある。セイバーやリンが映っている画面では出さず、ハクノが一人でいる時だけ画面に映るようにしてほしい。

× × ×

ひときわ長い廊下。中庭に続く廊下。

セイバー「(笑って) 退屈そうだな、奏者」

ハクノの様子に気付き立ち止まっていたセイバー、ハクノに隣合って歩きはじめる。

ハクノ「長い廊下だから」

セイバー「こんなものが長いうちに入るものか。

余の宮殿の回廊はこの一〇倍はあった!」

ハクノ「それは……すごいな。迷いそうだ」

少し微笑むハクノ。

いつも気を張っているハクノが表情を緩めるのは嬉しいので、満足げに頷くセイバー。

セイバー「案ずるな。いかな大迷宮であろうと迷うものか。

余がこうしてそなたの手を握っていてやろう」

セイバー、ハクノの手を掴む。

ハクノはその温かさと気遣いに遠慮し、握り返す事ができない。

CHECK▼ いまだに目的がない自分への不信から、セイバーのまっすぐな善意に応える資格がない、と感じている。

ハクノ「ありがとう、でもいざという時に」

リン「不利になるんじゃない？
　トラップ回避にも不意打ち対応にも邪魔になるでしょ、それって」

リンの横槍に頬を膨らませるセイバー。

セイバー「むう」

ハクノ、リンに話を振る。

ハクノ「遠坂。ここはどんな階層だったんだ？」

リン、第三階層の所感を語る。

三回戦目はいよいよマスターたちから余裕が消えた時期。

一二八人が三二人になり、誰もが敵になった場所。

心の優しいマスターはここで自らの目的を再確認し、進むもの（殺すモノ）、捨てるもの（殺さないもの）に分かれたとも。

リン「不戦勝で上にあがるヤツが多かったのもここね」
ハクノ「ここまで来て逃げたヤツがいたのか」
二人殺しておいて無責任な、と静かに憤るハクノ。しかし。
セイバー「それは違うぞ奏者。戦わない、という選択は、
戦う事と同じぐらい志のある決断だった」
そう。聖杯戦争が正常化していた頃、不戦敗イコール死である。
自らの願いの終わり――――死を選んでも、対戦相手の命を、願いを尊重したマスターもいたのだ。
ハクノ「……ここまで上がってきたのに？
地上で、身を焦がすほどの願いがあったのに？」
ハクノ、怒りにわずかに目を細める。
それを察し、静かに語るセイバー。
セイバー「そうだ。願いに貴賤はない。世界を救うような願いも、
個人を救うような願いも、どちらが上、という話はない。だが――――」
「時にそれでも、他人の願いを尊重するモノがいるのだ。
それを弱いと断じる事は愚かである」
セイバーはハクノの怒りをなだめ、諭す。

リン「なに？　ハクノ君、怒ってたの？」
ハクノの危うさに気づかなかった脳天気なリン。
ハクノ、セイバーの気遣いに「まいった」と息をつきながら、あっさり認める。
ハクノ「ああ。でもセイバーのおかげで、愚かなのは自分だって気づいた」
「願いを簡単に捨てたのか、なんて怒る資格、オレにはなかった。
その願いそのものがないんだから」
苦しげに漏らすハクノ。
通路はじき終わろうとしている。
通路の終わりからは強い日差しが射しており、その先の風景はよく見えない。
ハクノ、日の光に目を細める。くらりと眩暈がして、一瞬、視界が途切れ、

06 現在（読み戻し1回目）

城、本館通路。夕方。
ハクノ、眩暈のように視界がぼやけている。
ふと自分の手を見ると血まみれで、自分は床に倒れている事に気がつく。
顔をあげると、『よく分からないもの（怪物）』に、今まさに倒されようとしているセイバー

の姿がある。
リンはむごく惨殺されている。
（ハサミ状の蜘蛛の脚）によって手足を串刺しにされたセイバーの胸に、トドメ（コンパス状の脚）が振り下ろされようとしている。
ハクノ、最後の力でネロに令呪を使う。

CHECK▶ 以後は三回目の朝に戻る。ハクノの令呪は残り一つとなる。

07 現在（0回目）

『05』中庭に続く廊下の終わりから繋がるシーン。
ハクノ、軽い眩暈から立ち直って、中庭へ。
強烈な光が射している。この中庭だけは荒れていない。
イギリス風の迷路状に作られた庭園を歩く三人。
途中でハクノ、何かに気づいたように振り返る。
そこには植木の通路の曲がり角に消えていくありすのドレスの裾が。
ハクノ、セイバーとリンに声をかけず何者かを追い掛ける。

08 過去

一〇〇〇年前の聖杯戦争第三回戦、その準備期間中(モラトリアム)。
ハクノB（本当はまったく関係のないマスターだがフィルム上ではハクノと同じ姿にする。読み手にとってこの六、七話が一つの話に見えてしまうように）、迷路状の茂みの曲がり角を曲がったところで庭園の中心に辿り着く。
そこでありすと出会う。

CHECK▶ハクノBがありすを見つけられたのは本人の才能（魔術師としての霊感）によるものと、予選突破時に地上で記憶を一部ロストしてしまった為。岸波白野やトワイスの状態とは違う。

CHECK▶ゲーム版では似たような状態である『岸波白野』だからありすは救いを与えられたが、アニメ版ではそれはなかった。だが、たとえ岸波白野と出逢えない世界だったとしても、いつかありすは『そのような善き人間』に触れる機会を経て、夢の終わりを迎えるのである。

ハクノB「君は？」
声をかけるハクノB。ありす、ぱあ、と顔を輝かせる。

ありす「お兄ちゃんはあたしが見えてるのね！」
こうして始まる、一時のありすとハクノＢの交友。
ありすはひとりぼっちで城で遊んでいる事、普通の人には見つけてもらえない事を語る。
ありす「だって、あたしは幽霊だから」
ハクノＢもサイバーゴーストの知識はある。
悪いものだと分かっているが、ありすが淋しそうなのでゴーストだという事を怖がらず、ありすと会話を続ける。
ありす、更に嬉しい。ハクノＢと友人になる。
短いが、温かな交友時間。
ありすは自分がマスターである事、今までずっと病室にいた事、なんとなくで三回戦まで勝ち上がった事を語る。

CHECK▶ このあたりの会話はゲーム版のありすの設定からコンパクトに作成する事。

ハクノＢも同じだと語る。ますます仲良くなる二人。
ありすは自分の能力、『名無しの森』を説明する。
ありす「あたしと別れると、あたしにあった事は忘れちゃうの」

CHECK▶この説明をする事で、過去と現在のザッピングをうまく成立させる。視聴者に、ハクノがありすの事をリンたちに説明しないのは『忘れているから』だと誤解させる。

鐘の音が鳴る。（一〇〇〇年前の聖杯戦争なので。アリーナへの誘導とする）
そろそろ時間だ、席を立つハクノB。
ありす「……また遊べる？」
おそるおそる尋ねるありす。
ハクノB、うなずきだけで返答。嬉しそうにはしゃぐありす。
ありす「でも気をつけてね？
お城には怖い魔物がいるから。捕まったら食べられちゃうわ」

CHECK▶これは過去ではジャバウォックの事だが、現在では異形化したありすの事だと読み手が誤認するように。

09 現在（0回目）

長い廊下を抜けた出た、城の中庭。
ハクノ、庭園でぼんやりしているところをリンとセイバーに呼びかけられ、振り返る。
リンとセイバーは中庭を望む扉……ひときわ大きい建物、城の本館入り口……に立っている。

CHECK▶視聴者にはありすと別れたばかりのように見せる。実際のハクノは庭園に残された『あの娘を忘れないで』というナーサリー・ライムのメッセージを見ていた。

リン「ちょっと目を離した隙に何処いってたのよ」
呆れながら注意するリン
セイバー「何かあったのか、奏者」
一方、セイバーはハクノに駆けより、様子がおかしい事をさりげなく確認する。
ハクノ「え……いや、なんだろう。誰か、何かあった気がするんだけど……」
ハクノ、曖昧な返答。嘘は言っていない。
リン「いいから行きましょ。ここがこの階層の中心っぽいわよ」
リン、二人に先行して城本館の扉を開く。

と。

アマリ「貴方はいつもそうね。自分基準で、まわりの事なんか考えない。良識があるようで一匹狼なのよ、基本的に」

× × ×

リン（――――!?）

リンの目の前には有り得ない光景が広がっている。
本館のロビーにはアマリと、他にも数人のマスターたちがいる。彼らは疲れた様子で床に座り込んでいる。
これは『過去、まだアマリとリンが第三階層に残っていた頃』のもの。
リンは自分の過去を、観客として傍観するという不条理に陥っている。

過去リン「――――何が言いたいのかしら。たしかアマリさん、だっけ？」

アマリ「あら。優勝候補だった人に覚えてもらえてたなんて、光栄だわ」

アマリ、リンに嫌味を言うものの敵視はしていない。

アマリ「……見ての通り、私たちは限界よ。生き残ったマスターはみんな下層に避難しようとしている」

過去リン「貴女はどうするの？」

アマリ「私は……まだ諦められない。

ここに来るまで、どれだけ犠牲を払ってきたか……！
私はぜんぶを捨てて、勝者になるためにここまで来たのに！」
勝者である事に拘るアマリ。まわりの戦意をなくしたマスターたちをなじっている。

アマリ「ね。お願い。私と戦って。
貴女だって、くすぶっている気はないんでしょう？」

過去リン「ええ。そこは同感。でも貴女とは戦わない」

アマリ「なんでよ!? 私に負けるのが怖いの!?」

アマリ自身、リンに勝てる気はしていない。これは追い詰められたアマリのやけっぱち＆ヒステリックな強がり。
過去リン、やれやれ、と呆れて、

過去リン「そうね。貴女に恨みはないし、まだ上昇志向を持っているあたり評価できるから、負けてあげてもいいんだけど
「貴女じゃダメ。だって次で負けるもの。
六階層目まであがる見込みのない人とは戦わない」

アマリ、バカにされたと勘違いし、過去リンを罵倒して去って行く。
ロビーに立ち尽くす現在のリン。
そのうちロビーから一人、また一人とマスターが減っていき、現在の『朽ち果てた』ロビー

になっていく。
その様子をひとり淋しく眺めている現在リン。そこへ、
ハクノ「遠坂？」
ハクノに呼びかけられてハッとするリン。軽い眩暈に目頭を押さえる。

CHECK▶ 今のは何人目かのリンが体験したこと。実際、ここで起きた『過去の出来事』に当事者として参加はできない。過去の映像で「話しかけられた」としたら、その人物は実際にその場にいたからである。

何でも無い、と誤魔化すリン。
リン「探索を続けましょう。どうあれ、ここが最後の建物よ」

10 現在（読み戻し1回目）→過去の記録

本館の探索をするハクノ。
さりげなく『11』で初出となる血まみれの廊下を歩いてきた後。
セイバーと共に歩くハクノはふと足を止める。

そこは個室の前。ドアは破壊され、中は荒れ放題。足を止める理由はどこにもないが、ハクノは壁に立てかけられたルームプレートに目をやる。
そこにはアマリのフルネーム（ローマ字表記）が。

ハクノ「これは――」

と顔をあげると、ここから過去の映像がインサートされる。
それは聖杯戦争三回戦目の出来事。決戦を前にしたアマリの告白だ。
アマリの部屋で、ハクノBが話している。
アマリは精神的に弱っており、ハクノBに弱音を吐いている。
アマリは地上での自分のトラウマと、上を目指す動機を語る。

アマリ「『あまりもの』なんてバカにされたくなかった。
笑われるのではなく、笑う側に回りたかった」
「バカみたいでしょ？　私、何でもいいから偉くなりたかったの。
そんな理由で、動機で――」

月に登る為に、家族も妹も（見捨てただけだが）結果的には売り払った。
その見返りでムーンセルとのアクセス権を獲得した。
下らない理由で始めた事だが、だからこそ、アマリは敗北者にはなりたくなかった。ここで失敗したら、それこそ本当にどうしようもなく価値の無いクズになってしまうからだ。

アマリ「私は理想の自分になりたかった。なるしかなかった」

「その為にはなんでもやったわ。私は天才じゃなかったけど、勝ち上がる手段は知っている。今まで何度もやってきた事だもの」

「自分より強いヤツを倒したかったら、自分より弱いヤツを利用するのよ。予選でも、一回戦でも、二回戦でも、私はまず周りを観察して、自分より弱い人を見つけて、利用した」

予選のシンジやハクノのように、弱者を焚きつけて安全に利益を得るのがアマリの勝ち方だった。しかし。

アマリ「……笑っちゃうわよね。

私、天才じゃあないけど、それなりに優秀だって信じていたのよ」

「でも、ここまで上がってきて、周りを見て、泣きたくなった。

だってただの一人も、私より弱い人間なんていなかった」

弱者を見つける事が得意なアマリは、ここでは自分が最底辺だと理解してしまったのだ。

アマリ、泣き腫らした後の、こころなしかすっきりした顔で首を横に振る。

ハクノB「それじゃあ逃げるのか？」

アマリ「戦うわよ。それしかないもの。

私は狡くて、人でなしで、人を裏切ってばかりだったけど」

「逃げる為にここまできたんじゃないわ。
　少しでもマシな人間になりたくて、この地獄に飛び込んだんだもの」
アマリはアマリなりに必死で、懸命で、信念の在る人間だった。

CHECK▶ なので、誰もが第三階層から逃げていくところを最後まで踏みとどまる。結局は諦めて下に降りるにしても、それは逃げではなく、仕切り直しをする為だった。

ハクノB、そうか、と頷いて部屋を去ろうとする。
その背中にアマリ、語りかける。
　アマリ「貴方は？」
　「貴方はどうして上を目指すの？　自分の記憶も、願いもないクセに」

11 現在（0回目）

『09』からの続き。
　リン「ねえ。この城、というかこの階層、おかしくない？」
唐突に話を振ってくるリンの声で、ハクノ、ハッと顔をあげる。

確かに、と同意するハクノとセイバー。
全体的に時間感覚がおかしい。
一分が一〇分に感じられたり、その逆もある。妙な幻も見る。
セイバー「サイバーゴーストと同じではないか？
　ここでは過去に起きた断片が残っているのやもしれん」
セイバーの推測に納得するリン。しかし、
リン「…………………」
いぶかしみながら、ロビーから二階に上がるリン。
外は夕方になっている。
これみよがしにある血痕と、壁に刻まれた爪痕、といった殺戮の跡。
ホラー映画風の演出。
三人の後ろからひたひたと〝何か〟がやってくる雰囲気。
本館の惨状を見て、リンは顔を青くして呟く。
リン「……なんてこと。私も忘れてた。三層は、そういうフロアだった」
セイバー「リン？」
リン「どうしてみんな下に逃げたのかって話。
　三層にはね、殺しても殺せない怪物がいて――――」

緊迫したリンの台詞に続くように、廊下の向こうからガラスをひっかくような音（怪物ありすの足音）が聞こえてくる。
身構えるセイバーとハクノ、リン。
廊下の曲がり角から現れたのはぼろぼろのシーツ（病室のもの）を被った、奇怪なクリーチャー。

CHECK▶ハサミ、コンパス、メス、鉄骨、といったものがごちゃごちゃと固まって、蜘蛛のように動く怪物を想定。ボロボロのシーツの下から、触手のように錆びた鉄の刃物の脚が相手に伸び、相手を切り裂きながらシーツ下に引き寄せ、捕食する。

その奇怪さに竦むハクノだが、
セイバー「奏者よ、指示を！」
セイバーの叱咤で気を取り戻し、怪物と向き合う。
怪物はあまり強くない。
ほんの一瞬だけ危うい場面（セイバーがコンパスの脚で四方八方から串刺しにされそうなシーン）はあったものの、セイバーは紙一重でこれを躱して怪物に肉薄、一撃で倒す。
怪物「━━━━━━━━——！」

金属がこすれるような絶叫をあげる怪物。
瞬間。
不自然なまでの自然さで、ハクノたちは城の外――ムーンマイルラダーの前にいた。
呆然とするハクノとリン。
セイバー「……あれ?」
怪物を一閃した姿勢（剣を振り抜いた残心のまま）かわいく首をかしげるセイバー。
三人、固まった後に、「どういう事だ――!?」と動転する。

12 現在（読み戻し1回目、開始）

ラダー前にあった時計台を確認するハクノ。
時刻は朝。三人でラダーから出てきた時刻。
困惑するハクノとセイバー、口元に手を当てて思案するリン。
リン「……そういう事か。やられたら朝に戻る。
　自分に都合いい物語を永遠に読み返す。
　そんな宝具を持つサーヴァントがいたわ、確か」
リンの口からナーサリー・ライムの宝具が語られる。

やられた日の朝に戻る宝具。ただしループではない。記憶は蓄積される。リトライに近い。
一日の朝に戻る。
リン「ここのマスターが誰なのかは知らないけど、
そいつはそれで三層にいた他のウィザードたちを始末してきた」
「何のつもりか知らないけど、そいつは自分だけずっと、〝この一日〟に居続けているのよ」
音もなく刻まれる時計の秒針。
タイトル、ナーサリー・ライムの宝具名、イン。

〈第六話／了〉

Characters04

キャラクター紹介

尼里ミサオ

Misao Amari

尼里操。一〇〇〇年前、聖杯戦争に参加していたマスター。辺獄ではハクノとシンジの同級生として、第一階層では都市を牛耳る敵として、第三階層では〝かつてそこにいたマスターたち〟の残滓として登場する。穏やかな笑顔、ふくよかなスタイル、周囲を取りまとめる性格、と生まれついての委員長属性。秀才だが、自分を主張せず、いつも一歩引いて他人を立てていた。が、それは表面上のもので、本心は才能のありなしで人間は管理されるべき、という差別主義。

アマリ、という姓名にコンプレックスがある。余り者、ととれるからだ。実際、彼女の母親はエリートコースに進みながらも相手に恵まれず、権力者のたわむれで妊娠し、ミサオと、その妹を出産した。母親は愛人の枠から出る事はなく消耗品として若さと精神を磨り減らしていき、妹は人間として誰からも好かれる善人だったが、人間としての性能は凡人以下だった。母親や妹が余りものなら自分も余りものになるのでは、という強迫観念から、病的な才能至上主義になってしまった。能力的にはエリートである自分へのプライドも高いが、『どんな手段を使って生き残る』自分の半生に対して、より強いプライドを持っている。

召喚したサーヴァントはライダー、二メートルを越える体軀の狼、ヴァナルガンド。フェンリル狼の別名である。サーヴァントを食べて成長する特殊能力を持つが、成長するたびにマスターから令呪を奪い、最後には手の付けられない怪物になり、マスターすら食べてしまう（神話においてテュール神の腕を食べたように）という危険なサーヴァント。ヴァナルガンドは三つの鎖で縛られており（レージング・ドローミ・スレイプニール）、これらすべて壊れるとマスターに襲い掛かる、とされている。

聖杯戦争時、この特性をなんとか御したまま三回戦まで上がったものの、その時点でアマリより弱いマスターはおらず、勝ち上がる事を絶望視していた。が、そのタイミングで聖杯戦争が停止し、第三階層でマスターたちと過ごしていたが『名無しの怪物』によって第三階層からの撤退を余儀なくされ、第一階層まで脱落。そこで、かつて見捨てた間桐シンジが市長として活





躍している事を知り、かつての仲を利用して第一階層の支配者の席を手に入れた。

九〇〇年近く、第一階層の都市・ケープは平和だった。リンというテロリストはいたが、アマリにとってケープは最後の安息地だった。——辺獄から、誰でもないマスターが現れるまでは。

最終的にアマリは成長したヴァナルガンドに自分を喰わせ、一体化し、サーヴァント・リンと互角の勝負するも敗北する。（詳しくはドラマCD『あまりものの聖杯戦争』を参照）

第六話 用語集

サイバーゴースト

●サイバーゴースト

SE.RA.PHに出現する『幽霊』。魂を情報化し確定させた世界であるSE.RA.PHでは、地上ではあり得ない『精神だけ』『魂だけ』の生命活動がありえるため、ゴーストが物理的に存在する。死の間際の記録が再生されているため、無念が焼き付いた場所からは動けない。ムーンセルに見つかれば即座にデリートされる、死者の夢のようなバグでしかない。



ありす

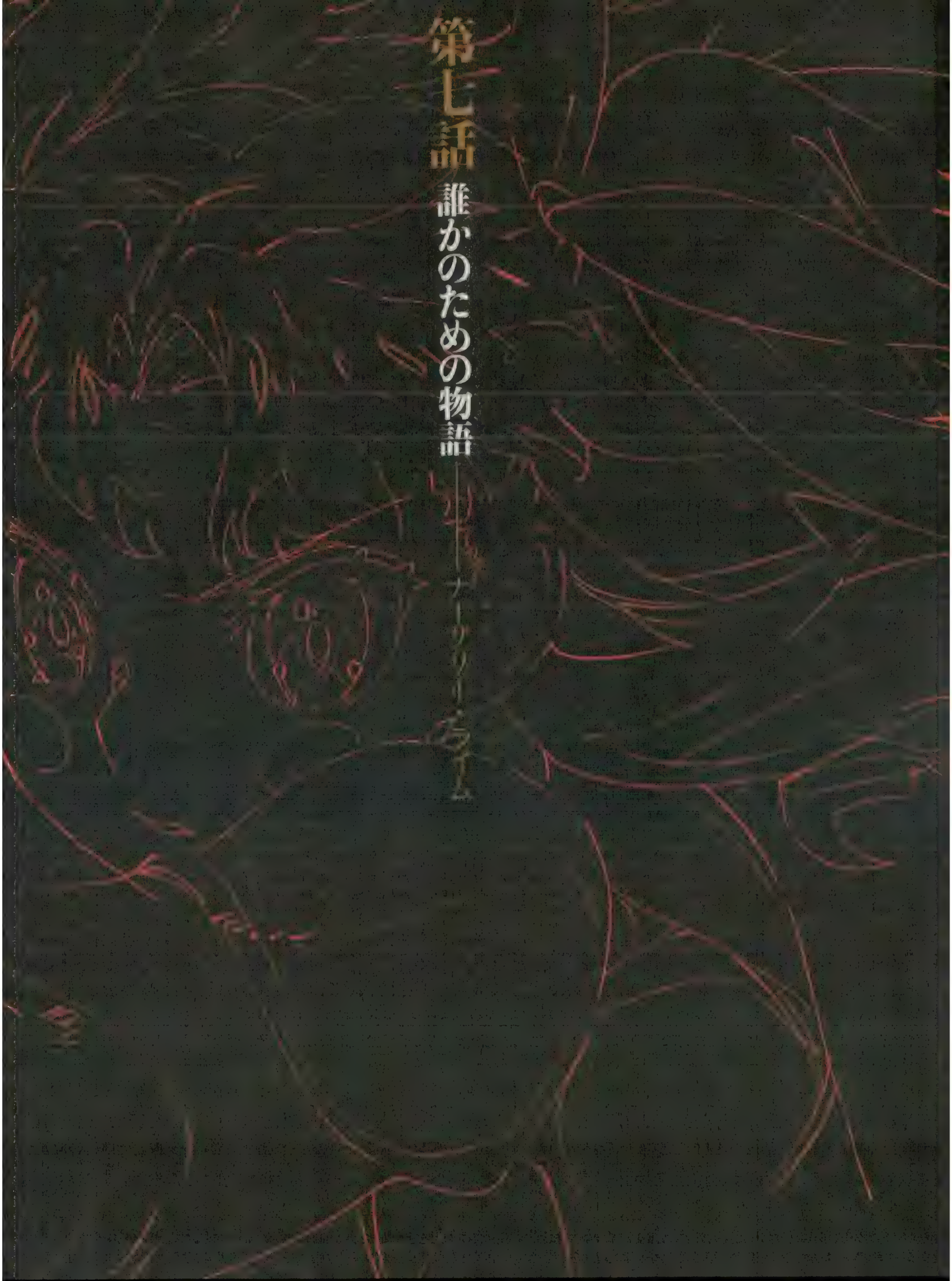
●ありす

一〇〇〇年前の聖杯戦争において、第三階層まで到達したと記録されているマスター。ゴーストではあるがSE.RA.PHで生まれたゴーストではなく、地上から月に昇る過程でゴースト化していた為、自由に移動できる希有な存在だった。生存競争には向かない性格だったが、マスターとしての性能は破格・規格外のものだった。彼女を相手にしたマスターは『戦闘行為』にすら辿り着けなかったという。



第七話

誰かのための物語



アバン／過去

一〇〇〇年前の聖杯戦争、その後の第三階層。
誰にも気づいてもらえないありすがクリーチャーになるまで。

×××

ハクノBが去った後の校舎。
屋上から空を見上げていたありすの目にチャクラ・ヴァルティンが映る。
いま勝ち上がった聖杯戦争の勝者（岸波白野）がトワイスに倒された事で、聖杯戦争が終了したのだ。
既に次の聖杯戦争は始まっており、第三階層に勝ち上がっていたマスターたちは困惑しつつも第三階層でコミュニティを作りだしていた。
その時点で第七階層まで到達していたマスターたちも、死の第五階層、未明の第四階層を見限り、比較的まともな第三階層まで避難してきていた。
殺し合う必要はなくなったものの、上に上がる手段も、地上に戻る手段も失ったマスターたち。
そんなコミュニティの中をひとりで過ごすありす。
誰に話しかけても無視され、忘れ去られていく。

SE.RA.PHの運営が止まった事で魔力供給も途絶え、段々と薄れていく。
それでも約束を守ってほしくて、ありすは第三階層に残り続ける。
しかしSE.RA.PHに流れていたマナだけでは自分を維持できない。サーヴァントであるナーサリー・ライムの姿さえ見えなくなった。
ありすはひとりになった寂しさにせき立てられ、第三階層にある様々なデータをリソースとして取り込み、異形化していく。
樹を取り込めばたしかにその分の容量を得る。しかし、それを消化する機能……自分のフォーマットに変える機能をありすは持たなかった。
自滅に近い自己改造のすえありすは実体を得ていくが、その姿はもう亡霊ではなく怪物そのものだった。
存命とはそういう事だ。
肉体は長続きできるように強固になるが、それはツギハギだらけ。
不自然な増強、手術は稼働するだけで痛みを起こし、『ありす』としてあった人格も肉体に伴って変化していく。
自分ではもうどうにもならない痛みと恐怖から、ありすは勇気を出して（まだものを考えられるうちに）第三階層に残っていたマスターたちに助けを呼ぶように姿を見せる。
しかし。マスターたちにとって、それは突如現れた怪物にすぎなかった。

マスターたちはありすを攻性プログラムと誤認し、攻撃する。
ありすは身を守る為に泣き叫ぶ。
気がつくと彼らを殺して生存する為のパーツとして取り込んでいる。
やがて完全にモンスターと化したありすは、(殺し尽くして)無人になった第三階層を徘徊し続ける。
異形化したありすにはもうナーサリー・ライムの声も聞こえない。
人間の声も出せない。そもそも自分が誰かも、生存する目的も分からない。
ハサミ状の脚を引きずりながら、悲鳴のような足音を立てながら。
〝いかないで。おいていかないで〟
〝こんな姿になったあたしは、きっと気づいてもらえない〟
〝でも待ってるの、待ってるの、待ってるの……〟

01 現在(読み戻し1回目)

再び城門をくぐり、長い廊下に踏み入るハクノたち。
延々と続く通路のはしばしには『わたしをみつけて』というニュアンスをこめた落書きがある。

ハクノたちはあのモンスターこそが第三階層に残ったマスターたちを捕食した怪物――フロアマスターのサーヴァントだと仮定し、退治する事に。

セイバー「しかし、あの宝具はどうする？
倒したところでまた巻き戻されてはキリがないぞ？」

リン「キリがないだけならいいけど」

リン、あのクリーチャーが段々と学習していく危険性に気づいている。

リン「ともあれ、あれがサーヴァントならマスターがいる筈よ。
もう一度はじめから、このエリアを調べましょう」

マスターを探して城を探索するハクノたち。

様々な場所に残された、名も知れぬマスターたちの夢の跡。

初見では気づかなかった彼らの生活の跡と、その意味を思い知るハクノ。

ハクノ（得体の知れない怪物がいるのに逃げなかった人たちがいる。
それぞれの願いの為に）

（俺は？　俺に願いはない。ただ、どうしようもない憤りがあるだけだ）

ハクノは自分の動機の不明瞭さを再認識する。

自分の願いがなく、熾天の檻を目指す動機が不純（憎しみ）なこと。

02 現在（読み戻し0回目）

中庭の前、城の通路を歩くハクノたち。
『01』と連続したシーンに見えるように。
六話でしたサイバーゴーストの話の続きとなる。

リン「わたしは好きよ、ゴースト。わたしたちウィザードも似たようなものなんだし。デッドフェイスとは違うわ」

デッドフェイスとサイバーゴーストは違うものだ。
デッドフェイスは位置づけ的にはゾンビに近い。負の感情で動くもの。数字でいうなら0のようなもの。何も生み出さず、生者を恨み続けるもの。

CHECK▶デッドフェイスは死人。死人は上を目指さない。デッドフェイスはつねに「その時間（階層）に留まりたがる」ものだ。ハクノが上を目指すのはまだデッドフェイスになりきっていないから。ラニが危惧したように電光の仮面が剝がれなくなった時、ハクノも彷徨う死人になる。

ハクノ「……その、デッドフェイスっていうのはどうやって生まれるんだ？」

ハクノ、おそるおそる尋ねる。

リン「そりゃあ、一度死んでから恨みで再起動したんじゃない？　死人なんだもの」
「個体差はあるようだけどね。
生者のまま死人になりすぎて、生きながら死んでいるもの。
死者なのに動き回って、死にながら生きているもの」
「どっちにしろそうなったらお仕舞いよ。二度と元には戻れないし、
死ぬ事も、どこかに行く事もできない。
ずっと同じ場所、同じ時間で彷徨い続けるの」
通路はそろそろ中庭にさしかかる。
強い光に目を細めるハクノ。

03 過去

一〇〇〇年前、聖杯戦争三回戦。
中庭でありすと会うハクノB。
ありすは童話を読んでいる。
ハクノB「本が好きなんだね」
語りかけるハクノBにもちろん、と笑うありす。

ありす「お兄ちゃんが来るまで、御本だけが友達だったの。
御本だけがあたしに優しかったの」
ハクノB「でも童話ってたいてい残酷じゃないか？　悲しい話ばかりだ」
ありす「そんなの気にしないわ。だって、悲しい事があったら
いつでもいちばん始めの頁に戻ればいいんだもの」

少女らしい意見を得意顔で語るありす。
ハクノB、幼い意見にやれやれと苦笑いする。
ありすに本を読んであげるハクノB。
しかし二人の日常もじき終わる。もうじき決戦が始まるからだ。
明日にはこの階層のマスターたちは全員、生き残りの決闘をする事になる。
ハクノBはありすに『なぜここにいるのか』を尋ねる。
ありすの願いは病気を治すこと。
ありすの口から語られるありすの過去。生前、戦争で両親を失い、それからずっと病院（と偽った研究所。ムーンセルとの繋がり）で実験されていた事。
痛い思いしかないまま死に、気がついたらSE.RA.PHにサイバーゴーストとして彷徨っていた事。
ハクノB、ありすの過去に同情する。

ありす「お兄ちゃんは、何の為に上にあがるの？」
ハクノBは少しためらったあと、照れくさそうに返答する。
ハクノB「　　　　　　　　　　　」
しかし、この返答内容は読み手であるアナタには聞こえない。口パクだけとなる。
その後、ありすの提案でかくれんぼをする事に。
ハクノBが鬼になって、ありすが隠れる。目隠しをして数を数えるハクノB。はしゃぎながら遠くへ走っていくありす。
その背中に、
アマリ「いつまで黙っているつもり？」
水をかけるようなアマリの声。
話しかけられ、数を数えるのをやめて振り向くハクノB。
アマリ「貴方の対戦相手はあの娘でしょう。貴方たちはマスター同士。
どちらかが、どちらかを殺さなくちゃいけないのよ」

04 現在（読み戻し2回目）

迷路の庭園を抜けた先、城本館のロビー。

それぞれの探索から合流するハクノ、セイバー、リン。

ハクノがまた勝手にどこかに行っていた事に拗ねるセイバー。

セイバー「奏者よ！　また一人でふらふらと！」

アンタが悪いという顔でハクノを見るリン。

ハクノ、セイバーへのフォローをすべく表情を緩めて口を開くも……

ハクノ「……セイバー」

静かに真剣な顔になるハクノ。

それは今回の庭園で、〝見知らぬ誰かの記憶（ハクノBとありすの交友）〟をぼんやりと見た気がするからだった。

ハクノ「聖杯戦争に参加していたんだよな」

セイバー「む？　うむ、三回戦も危なげなく勝ち抜いたぞ」

えへんと胸を張るセイバー。

ハクノ「なら、教えてほしい。相手を殺さないで上にあがれたヤツはいたのか？」

セイバー「（少し驚き）なに？」

予想外の質問に一瞬返答が遅れるセイバー。知らなければ出ない筈の質問だからだ。セイバー、一呼吸おいて、

セイバー「うむ。いるぞ」

リン「いるの!?」
ハクノ「……」
セイバー「ごく稀に、だがな。相手が決戦を放棄した場合は不戦勝となる。
そして戦いを放棄したものは――」
どうなるんだ、というところで本館から怪物の声が聞こえてくる。
一気に戦闘態勢に入る三人。
セイバーは剣を実体化させて前に立ち、リンとハクノはコードキャストの構え。
リン「アレと戦っても無意味よ、マスターを探さないと!」
怪物「━━━━━━━――!」
リン（ｏｒセイバー）が怪物の相手をし、ハクノと（リンｏｒセイバー）がマスター捜しの別行動をとる。
本館のロビーから二階、さらに三階とあがっていき、前回チェックしなかった場所を探す。
ついにロックのかかった思わせぶりなドアを見つけるが、鍵がない。
ええい、力ずくで壊そう、と（セイバーｏｒリン）が実力行使に出た時、廊下を破壊して怪物が追いついてくる。
怪物「━━━━━━━――!」
怪物が雄叫びを上げる。

瞬間、オブジェクトのすべてがカミソリに変貌し、ハクノを襲う。
卵スライサーを思わせる、家庭にあるありふれたものだが残酷な刃物。
セイバー「奏者!」
セイバーは離れていたためハクノに駆け寄れず——また、それが隙になって致命傷を負ってしまう。
リンはハクノのために身を挺し、これは惨死したと思わせる量の鮮血が舞う。
ハクノも、頭を切断されて死ぬ——という直前で暗転。

CHECK▶ この後は最後の判断でハクノが令呪を切り、ブーストのかかったセイバーが怪物を両断して勝利→だが朝に巻き戻る、という展開に。

05 過去

三回戦のメモリー。
黒画面。
アマリ「あの娘を助けたい、ですって?」
本気で言っているの? といわんばかりの刺々しさ。

アマリ「……いいわ。じゃあ真実を見せてあげる。
あの娘が貴方に見せていない、本当の姿をね」

アマリに連れられて、『04』で鍵のかかっていた本館最上階の部屋に。

CHECK▶ マスターとして登録されてしまった時、SE.RA.PHに与えられたありすの『マイルーム』である。

部屋は病室に変貌している。
死んだ方がマシな状態で、ベッドで生かされ続けるありす。
生前のありすが持っていた最期のイメージでもあり、ゴーストであるありすの〝本当の姿〟だ。

CHECK▶ 『03』のありすとの隠れんぼで唐突に出てきたアマリは、ハクノBに現実を直視させるために変身したナーサリー・ライムである。

ハクノBを連れてきたアマリが、黒いドレスのアリスに変わる。
黒いアリス(ナーサリー・ライム)はここで自分の正体を告げる。
自分がありすのサーヴァントである事。

貴方が会っていたのは自分で、動けないありすの代わりに日々を夢見ていただけだと。

アリス「ありすは戦う事すらできない。ありすはひとり置いていかれる。
助けるも助けないもないのよ、お兄さん。
だって、ありすはもう死んでいるのだから」

死者は助けられない。
もう救えない存在がある、という事を黒いアリスは語る。
ベッドの横の棚には童話の本が置かれている。
アリスは語る。童話とは日々の希望ではない。日々の絶望を和らげるための、最後の明かりなのだと。

06 現在（読み戻し2回目）

朝、ムーンマイルラダー前。
令呪を一つ失い、窮地を切り抜けたものの朝に戻ってしまったハクノたち。
気合いを入れ直すためにシャワーで頭を冷やしていた二人。
ラダーからひとり、またひとりと出てくる。

セイバー「それにしても令呪の使用、見事な判断だった。

窮地を脱せたのはそなたのお陰だな！」
先ほどの惨敗をまったく後に引きずらないポジティブ大権現・セイバー。
その笑顔につい苦笑してしまうハクノ。
この第三階層にきて初めて見せた人間らしい、少年らしい仕草である。
セイバー「うむ？」
ハクノ「オレは別に。実際にあいつに一撃を加えてリトライに持ち込んでくれたのはセイバーだよ」
セイバー「そうだが、そなたも凄かったのだぞ？」
二人の「そっちのが凄いよ」が延々とつづくイチャイチャコラボが始まるが、ラダーからリンが出てきた事で終了。
リン、起き抜けのタンクトップ姿で、首元に残ったうっすらピンク色の傷跡が見えている。
首を切断されかけたのだ。
リン「今回を最後にしましょう」
怪物は確実にセイバーたちの行動パターンを学習している。
これ以上、戦いを繰り返すのはまずい、とリンも覚悟を決める。
セイバー「そうは言うが、あの宝具はどうする」
リン「使わせなきゃいいんでしょう。

……奥の手だから、できれば使いたくなかったけど」
リン、密かに二人の前でサーヴァント化する事を決意する。
ハクノ「それよりマスターを探した方が確実じゃないか？」
ハクノはマスターを探したい。というか会いたい。（いたるところにある書き置きの主に会いたい）
リン、後ろめたい表情で、
リン「そうね。……マスターを探せればね」
リン、あのクリーチャーが『マスターのなれの果て』である事に気づいたが、あえて口にしない。

07 現在（読み戻し2回目）

中庭の前、城の通路を歩くハクノたち。
セイバーはキリッと警戒しつつやや前で先頭を歩き、リンとハクノは少し後ろを歩いている状態。
ハクノ「サイバーゴーストは、死者の夢って話だったよな」
リン「ええ」

セイバー「────」

ちらっと振り返りハクノを見るセイバー。

ハクノ、淡々と語り始める。

ハクノ「この階層と同じだ。オレとも同じだ」

リン「はい？」

ハクノ「ここも、オレも、まるで今を生きていない。

ここには過去しかなくて、オレには……過去がない」

リン「過去しかない場所と、過去がない男？

語呂は似てるけど意味は真逆じゃない」

ハクノ「……いや」

×　×　×

──イメージ。

真っ赤な通路を歩いているハクノ。

足下には男女の死体（すべて最下層の学園生徒）が折り重なっている。

『Oh, deary, deary me, this is none of I!』と壁に大きく刻まれている。

CHECK▶ 桜井さんより、マザーグースからの引用。仮に『ああどうしましょう　これじゃ私じゃないみ

たい」を入れてもらいました。

ハクノ（憎しみっていうのは、過去に執着してるって事だと思う）

（……憎いんだ）

（訳がわからないほど、オレは、何もかもが憎い）

ハクノの顔に、電光がわずかに走る。

×××

戻って、中庭前通路。立ち止まって壁の埃を指先で拭い、

ハクノ「ここには過去が積もっている。覆われすぎて、今がない」

指先の埃を吹くハクノ。

ハクノ「オレと同じだ」

自分が人間ではなくゴーストのようなものではないか、という問題を意識し始めているハクノ。なにしろ予選で一度死んでいるので。

ハクノ「オレは……多分、憎しみだけで上を目指してる」

「叶えたい願いもない」

沈黙。セイバーとリンも立ち止まっている。

セイバー、ハクノを見据え、意を決して語る。

彼女の前回の戦い、大切なマスターの物語を。

セイバー「昔話をするぞ」

「かつて、そなたと同じように、自分が誰か分からないマスターがいた」

「名前以外のすべてを持たず、記憶もなく、

聖杯にかける願いさえない者だった」

ハクノ（それは――オレ、か？）

驚きの目でセイバーを見るハクノ。

CHECK▶ そこには期待のニュアンスもある。ハクノにとって、自分がセイバーの前のマスターであるのでは？という推測は唯一にして最大の希望だからだ。

しかし。

セイバー「そなたではないぞ。完全な別人だ。

そやつはただ『死にたくない』一心で上を目指した、か弱き人間だ」

「か弱いなりに足掻き続け、七回戦を勝ち上がり、熾天の檻にて……」

セイバーは瞼を閉じて、

セイバー「トワイス・ピースマンに敗れた」

静かな無念を込めて告げる。僅かな沈黙。
セイバー、瞼を開けてハクノを見る。
ハクノ「セイバーはトワイスへのリベンジが目的なのか？」
セイバー「さて。再戦はしたいが、それが目的ではない」
今の目的は違うものだ、と話を切るセイバー。
セイバー「熾天の檻に行けば聖杯があり、願いが叶うというが……
トワイスめを倒したとして、果たしてムーンセルは
本当に願いを叶えるのかどうか」
リン「まあね。保証なんて、何処にもない」
ハクノ「……」
セイバー「余はそなたに問おう。奏者」
「それでも、上を目指すのか？
聖杯の有無も、自らの願いも定かではないのに」
ハクノ、答えられないまま歩き出す。
じき、目映いばかりの中庭に辿り着く。
いつもの眩暈がきて――

×　×　×

ザ、と時系列変更演出。
一〇〇〇年前の出来事。ハクノBとありすの別れ。
草原でハクノBとありすは向かい合っている。
ハクノBの後ろには四回戦へ続くラダーが降りている。
ハクノBの決戦は、対戦相手（ありす）の不戦敗で終わったのだ。

ハクノB「三回戦は終わった。何とか、ここでも勝ちを拾えたよ」

ありす「うん」

ありす、悲しげに俯く。

ハクノB「キミが無事で良かった」
「……いや、キミがそうしてくれたんだね。不戦敗を選ぶことで」

ありす「うん」

ハクノB「聖杯戦争の敗者はどうあれ命を奪われる。でも、キミは……」

ありす「最初から死んじゃってるあたしの事は、ムーンセルも殺せないわ」

ありす、俯いたまま返答する。

ハクノB「……オレは上へあがる」

穏やかに告げるハクノB。
俯いたありすの足下に落ちる、涙の雫。

ありす（いかないで）

顔を上げたありすの瞳からは、涙がはらはらと落ちている。

ありす（いかないで、いかないで。あたしを置いていかないで）

ハクノB「聖杯を手に入れたら、戻ってくるよ」

ハクノB、ありすに手を伸ばしかけるが、ありすの頭を撫でるか頬に触れるかの寸前でその手を止める。

ハクノ「必ず」

ありす「（呟き）うん、待ってるね」

「――待ってるね。きっと、あたしを見つけてね」

ハクノB、ありすへ背を向けて、ラダーへと乗り込んでいく。

上へ昇っていくラダー。

ありすはその光の軌跡を見上げながら、涙をこらえながらハクノBを見送る。

ありすは本当の願いを口ずさむ。

ありす「もう一度会いたいの……」

「あなたに、会いたい。それだけで、あたしの今まではみんな、良かったことになってくれるの――」

今までの辛かった事も、悲しかった事も、すべてを〝このためにあった〟と思わせてくれ

る救い。そんなささやかで拙い、最後の夢を。

×××

……そんなシーンの後、カメラは現在に戻る。
淡い夢のような白昼夢。垣間見た立ち眩みに頭を抑えながら、迷路の庭園のある〝行き止まり〟に立ち尽くすハクノ。
セイバー「奏者よ。ここでよく物思いに耽っていたが、
そなたの過去に関係があるのか？」
セイバーに呼びかけられ、振り向くハクノ。
ハクノ「いや。でも、何か大切な事を忘れている気がして」
ここで、作中ではじめて現在の『ハクノが見ていた行き止まり』を映す。
それはお茶会の跡。
ありすとの過去にあった美しい庭園は今はもうない。
荒れた庭園には、草に埋もれたお茶会用のテーブルがあるだけだ。
テーブルの上には病室への鍵がある。
セイバー「余とて分かる。その鍵は、あの部屋の鍵であろう？
「では、この階層の物語を終わらせよう」

08 現在（読み戻し2回目）

ハクノたちは夕方になる前に本館、病室に到着。鍵を開けて中に入る。
中は過去の映像にあった病室とほぼ同じ。
ベールに囲まれたベッドがあるが、ベッドはもぬけのカラ。
病室にはただ古びた、ボロボロになった本だけが置かれている。
ハクノ、本に触れた瞬間、思い起こされる〝誰か〟の記憶。

×××

いつかの、だれかの会話。

少女「アナタはなんのために上を目指すの？」
誰か「目的はまだないんだ。でも気持ちはきちんとある」
「自分は優れた人間じゃなくて、
誰かの代わりにたまたまここまで来てしまった偽物だった」
「……でも、偽物であっても、気持ちだけは本当でありたい。
どんなものでもいいから、確かな希望を持って空に上がるんだよ」
少しためらったあと、照れくさそうに返答する誰か。
涙をこらえた笑顔で、それを眩しそうに見上げる少女。

× × ×

かつての誰かの記憶を思い出し、その言葉に胸を衝かれるハクノ。
立ち尽くすハクノに声をかけるリン。
リン「……満足した？」
おそらくはかつてここにいたであろうマスター。
その痕跡を悲しげに一瞥した後、リンはハクノに語る。
この城にはもう誰も居ない。救うべきものも、語るべき事もないと。
リン「その本は？」
ハクノ「……いや。なんか放っておけなくて。
　せめて一つ、持っていきたくなったんだ」
この寂しい庭の思い出に、と。
その本こそ過去のありすがサーヴァントとして契約し、忘れ去られた一冊の本、ナーサリー・ライムである。

09 現在（読み戻し2回目）

やがて日が落ちる。城が茜色に染まる。

本館のテラスで待ち構える三人。
金切り音をあげてやってくるクリーチャー。
ここで、すべての経緯を知った読み手であるアナタには、今までガラスをひっかく音にしか聞こえなかった怪物の叫びが聞こえる。

怪物「いかないで、いかないで!」
「わたしをわすれないで!」
「いたいのも、こわいのも、さみしいのも、もう嫌なの!」

最後の頁がめくられる。
怪物は刃の脚を振りかざして襲い掛かり、セイバーと剣戟を開始。
そして同時に『手すりや床、壁、といった周囲のオブジェクトを瞬時に刃のトラップへと変える』能力によって前回と同じく全体攻撃を目論むが――
リン、ここで待望のサーヴァント化。
かつて彼女のサーヴァントだったランサーと同じスタイル（全身にフィットした戦闘スーツ）だが、そのカラーリングは彼女のイメージカラーである赤色に変わっている。
ランサーそのものとなったリンは怪物の猛攻を高速ですり抜け、容赦なく切り札を放つ。

リン「いくわよ――ゲイ・ボルク!」

魔槍ゲイ・ボルクの一撃によって、怪物の霊核を貫くリン。

怪物「いたい、いたいよぉおお……！」

ギュルル！　時間逆行を思わせる歪んだエフェクトを発生させる怪物。
エフェクトは強力で、セイバーも接近できない。
だが突き刺さった槍は茨のようなトゲを伸ばし、怪物を固定。
時間の巻き戻しを阻害している。

リン（よしっ、因果を縫い止めた！）

怪物「痛い痛い痛いぃいいいいいい！」

と思いきやエフェクト再開。
一〇〇〇年ものあいだ第三階層を徘徊し、多くのマスターを殺し、フロアを食み、固有結界を広げた怪物は、宝具一つで御せるものではなかった。

CHECK▶ これはいずれ対峙する第六階層のフロアマスターにも言える。

リン「嘘!?」

怪物は喘ぎながらリトライを開始させようと歪みエフェクトを広げていく。
しかし――怪物の視線がハクノを映す。
ハクノの手には『一冊の本』がある。

血走った怪物の眼球が、もう機械のレンズでしかない眼球が、懐かしの本を網膜に焼き付ける。

怪物「――――、――――」

一瞬だけ硬直する怪物。

セイバー「その隙、逃さぬ！」

セイバー、ドレスのスカートに突き刺さったメスを力尽くで剥がしながら、渾身のロサ・イクトゥスで怪物を真っ向から斬り伏せる。

ギ、ギ……と壊れた機械のように活動を停止する怪物。

破片は中庭にも落ちていく。

呼応するように、鐘の音が鳴り響く。

×　×　×

カメラはムーンマイルラダーのある森の入り口の広場へ。

〝ただいま清掃中〟の札がカラン、と地面に落ちる。

10 現在（あとがき）

怪物との戦いの直後、城の屋根にラダーが落ちてくる。

セイバー「終わったようだな」
無人の城を見上げて、セイバーが呟く。
ハクノ「……ああ。本当に、誰もいなくなった」
ハクノの手にあった童話本が、ハクノの見守る中で風化していく。
手の中には空色（水色）の栞が残る。

CHECK▶ ナーサリー・ライムの宝具。一度だけ戦闘をやり直すもの。

郷愁に襲われつつ、城に背を向けるハクノ。
ハクノ「さっき、セイバーは言っただろ」
「何のために上がるのか、って」
セイバー「言った」
静かに返答するセイバー。
上がるのをやめる、と言われても否定すまいと覚悟しているセイバー。
同時に、そうは言わないだろうとも信じている。
ハクノ、寂しげながら穏やかな表情。
ハクノ「……まだ、オレにはちゃんと答えられないけど……」

「叶うなら――」

ハクノ、手に取った栞を空に翳して、

ハクノ「希望を持って、オレは空に上がりたい」

ハクノ（かつてこの城を後にした誰かのように。

たとえその先にあるものが、どうしようもない現実でも）

応えるように風が吹く。

セイバー「……」

切なげに微笑みながら、風で揺れる髪を押さえるセイバー。

空色（水色）の栞を大切に握りしめて、ハクノはセイバーと共にラダーに歩いて行く。

CHECK▶ 絵には映さないが、リンもちゃんとついていきます。

Cパート

美しい夕焼けに照らされる廃墟の庭（城）。

遥かな上空、熾天の檻を見上げながら去って行く白野。

その後ろ姿を、残骸になった怪物の眼球が映している。

もう怪物に意識はなく、そこに意味を紐づけるものもない。
ただ、いま先に進むハクノの姿と、かつてのありすを置いて先に進んだ誰かの姿が重ねられる。
物事は何も解決していないし、悲しい事しかなかったが、その夕景は美しい。

ありす（ああ、そうか――）

（悲しいコトでは、ないのだわ）

かつての願いと、かつての後悔を思い出す。
わたしは悲しいコトばかり口にして、あの人を送りだすコトができなかった。
あの時ほんとうに言うべきだった言葉。
言いたかった言葉。
自分を見つけてくれた誰かに贈れる、最大の感謝を込めて、

ありす「うん――行ってらっしゃい、お兄ちゃん」

カメラは懐かしい思い出にひたるように、いま先に進む青年を見送るようにソラを映し、途切れた。――おしまい。

〈第七話／了〉

キャラクター紹介

Characters 0.5





ありす

Alice

第三階層のフロアマスター。病気で亡くなり、気が付くとSE.RA.PHでサイバーゴーストとして出現していた少女。

普通の人間には見えない存在。だった。「必ず戻ってくる」というある人物との約束を胸に抱き、「名無しの森」をリソースとして自身を保ち続けようとした結果、怪物化した。

彼女は「この一日」を巻き戻し続けていた。どんな姿になっても、ただ、その約束が叶うことだけを夢見て——

第七話 用語集

デッドフェイス

●デッドフェイス

死相――電光の仮面。死者の想念を具現化した、ゴーストとは別の何か。チャクラ・ヴァルティン成立後の一〇〇〇年間で醸成されたSE.RA.PHにおける伝説・うわさ。同じ場所・時間を彷徨い、何も生み出さず、生者を恨み続けるものと言われている。

アリス

●アリス



ナーサリー・ライムがマスターである『ありす』の望みに応えた姿。『ありす』とうり二つの容姿・性格をしている。『ありす』が変質した後、その姿も失われた。今はただ、かつてお茶会が開かれたテーブルに最後の希望を残すのみ。

忘却の庭

●ぼうきゃくのにわ

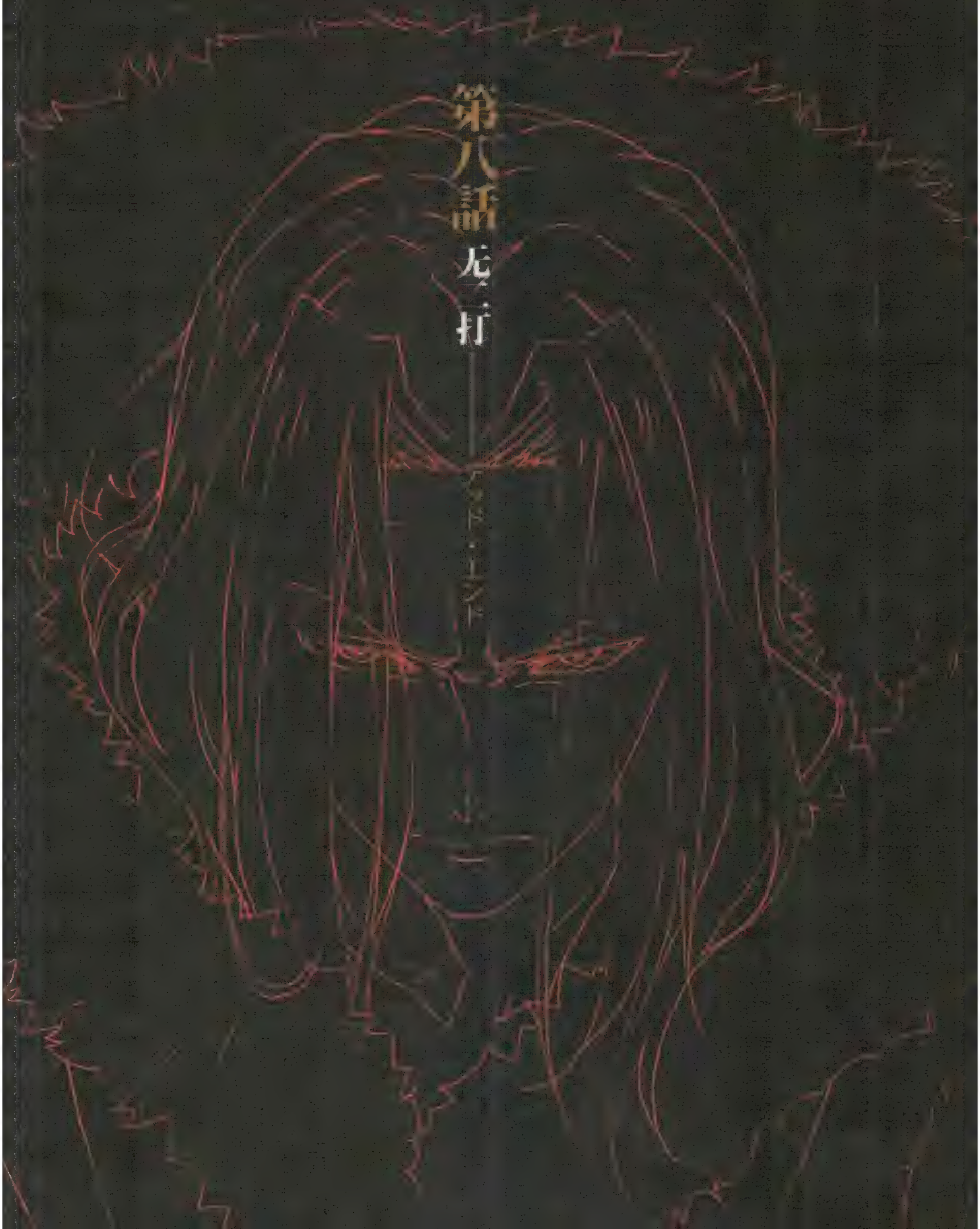
マスターを捕食する怪物が徘徊する第三階層。『自分の名前を忘れさせて無力化させる』というありすの固有結界、『名無しの森』と融合したもの。ここでは誰もが時間の迷子になる。



人生は連続した物語に見えているだけで、実際は過去と現在のシャッフリングにすぎない。

第八話　无二打

ワード・エンド



第五階層 ザザ鳴りの街

記憶を削る雨音。意識を眩る煙霧。

「ザザ鳴りの街」に死は吹き溜まる。

狂える獣は、今もただ一人を待ち続ける。

アバン／対峙

第五階層、最終場面。
時系列は九話の後半に飛び、ハクノとユリウスの対決シーンから始まる。

CHECK▶ 第五階層は影絵の街。工場地帯の地平線、土砂降りの雨の世界。

高層ビルの建ち並ぶ近代都市だが、すべて影絵。周囲を囲む地平線にはもくもくと煙を吐き続ける工場地帯がテクスチャーのように貼り付けられている。そして常に、土砂降りの雨（ダウンプア）。
ノイズを思わせる土砂降りの中、ビルの屋上で対峙するハクノとユリウス。
　ハクノ（その男は言った）
ハクノを罰する死神のように立ちふさがるユリウス。
ひざまずき、懺悔するようにうなだれているハクノ。
ユリウス「見ろこの世界を。これがおまえの生存の末路だ」
土砂降り、薄汚れた工場地帯、無人の街の様子はそのまま現在の地上の姿でもある。
ユリウス「罪深いにも程がある。何度罰されようと飽きたらない」

「おまえに望みなどない。生まれる筈がない」
「死に絶えろ。死に戻れ。生を望むなぞおこがましい。
なぜなら――その貌が、おまえの証しだ」
うなだれるハクノ。貌は見えない。デッドフェイス化しているような印象。
ハクノ、土砂降りの雨に打たれながら、
ハクノ（ああ――まさしく、その通りだ）

CHECK▶ この後、「でも、それがどうした」と顔を上げて反撃に移りますが、ここではそう見せないように。

ハクノの、相手の言い分を受け入れて死を受け入れるようなモノローグで画面暗転。オープニングへ。

ムーンマイルラダー

ラダーは既に第四階層を通過し、第五階層を目指している。
セイバー「いやあ、四層の敵は取るに足りぬ相手だったな！」

CHECK▶第四階層はもう終わりましたよ、と場の空気でアピール。第四階層の相手はキャスター・玉藻の前にまつわるもの。テレビ放映には入らない番外編枠として残しておく。敵であれたいていのサーヴァントを褒めるセイバーがここまで言う相手はただ一人しかいない。愛情・信頼からくる軽口。察してほしい。

セイバーとハクノが（さしたる意味もなく）仲良くできる最後のチャンスなので、二人は柔軟運動（体育の、二人一組でやるあれ）しながらのほのぼの会話でもよい。

ここでリンからハクノにまだセイバーの力を引き出していない、マスターとして一番大事なものが欠けている、と指摘できるならする。

そんな二人とは離れたところで何やら作業をしているリン。

セイバー「何をしているのだ、リン？」

リン「第五層用の準備よ。はい。あなたたちの分も作っておいたわ」

レインコートを渡すリン。

ハクノ「雨合羽……？」

ビル屋上（ラダーあり）

マイルームから外に出る一行。
土砂降りの第五階層を一望できるビルの屋上にラダーは停止した。
第五階層は小・中・大の建物があり、ラダーが止まったのは大のビル。
ハクノには一瞬、街の様子が地上の風景（煉獄で見た災害現場）にザッピングしてみえる。
ザザザザザ、という土砂降りの音もあいまって、まるでノイズで視界が乱れるように。

リン「ここがザザ鳴りの第五層。
　バーサーカーの徘徊する、事実上のラストフロアよ」

CHECK▶「ラストフロア」発言はリンにとっての事なので。

リン、第五階層を説明。
街の中央に見える細長い塔が第六階層に続くラダーである事。
この階層にフロアマスターはいない。第五階層を統べる、あるいは繋ぎ止めようという意思を持つマスターは一人もいなかったからだ。

リン「だから、マスターであるハクノ君がラダーまで辿り着ければ

　自動的に六層に上がれる」

「けど――――」

そううまくはいかない。このフロアにはひとりの殺人鬼が徘徊している。

第三階層の怪物と同じ、〝出会えば戦うしかない〟怪物が。

ハクノ「……殺人鬼ってのは、おだやかじゃないな」

頭痛を堪えながら、強がりの軽口を言うハクノ。

リン「事実だもの。マスターになる前は地上で殺し屋をやってたヤツでね。

　聖杯戦争中も、裏から多くのマスターを始末してたって話」

リンの話に反応するセイバー。

セイバー「もしや、その男の名は」

リン「ユリウス・ベルキスク・ハーウェイ。

　聖杯戦争史上、最高のマスターと言われたレオ・ビスタリオ・ハーウェイの兄」

「セイバー。この第五階層で、貴女と、貴女の前のマスターに敗れた男よ」

リンの台詞に怯え一歩手前の緊張を見せるセイバー。

セイバー「ユリウス……では、サーヴァントはあの男だな。それは……」

ハクノ、セイバーのそんな顔を見るのは初めてなので心配する。

ハクノ「強敵なのか？」

無言で頷くセイバー。

ハクノ「でも、一度勝った相手なんだろ？」

セイバー「うむ、多くの幸運に助けられ、かろうじてな。
　おかげでヤツの手の内はすべて知っている。任せるがよい」

セイバー、目に見えての強がり。

リン「そもそもハーウェイっていうのは、地上世界における支配者の名前なんだけど」

リンの口から西欧財閥の事が語られる。

しかしそれは一〇〇〇年前の話。リンはかつて西欧財閥と敵対していたが、今はそうではない。仕事の契約期間が切れているからだ。

リン「私が月に上がったのは、西欧財閥の御曹司が聖杯戦争に参加したからよ。
　次期当主であるレオに聖杯なんて渡したら、ハーウェイの地上支配は盤石なものになる。それを阻止するのが当時の私の仕事だった」

ハクノ「聖杯を手に入れる為にマスターになったんじゃなかったのか」

リン「まあね。でも、私が参加（エントリー）した聖杯戦争は、レオより一つ前の回だったの。
　笑っちゃうでしょ？　私は標的に出会う事さえなかった。
　ボタンを一つかけ間違えたのよ」

「ま、参加するからには勝ち残る気だったし？

聖杯を手にいれたらもう好き放題やってやるー！　って欲もあったわ」

あはは、と冗談っぽく笑うリン。「当時のわたしバカよねー」みたいな気持ちの良さ。

リン「結果は言うまでもないけど。私たちは聖杯には届かなかった。負けはしなかったものの、七つ目の海には辿り着けなかった」

CHECK▶ 私たち、とはリンとラニの事。リンとラニが六回戦まで到達した事を暗示。

リン「それでおしまい。私たちがグスグズしている間に最後の聖杯戦争が始まって、SE.RA.PHにはあのチャクラ・ヴァルティンができてしまった」

「私だって死にたくないし、事態の解明に乗り出したわ。聖杯戦争が崩壊した後、考える時間は山ほどあった。最後の聖杯戦争は誰が勝ち上がったのか。そのマスターがどんな人物だったのかを調べたの」

セイバー「———そうか。それで、我が奏者に近づいたのか」

リンの思惑を察したセイバー。まだ分からないハクノは「？」顔。リンは悪びれずにセイバーにふふん笑いを向ける。

リン「最初に助けたのは偶然よ。でも、そこからは打算と企み」

リン、セイバーからハクノに視線を戻す。

リン「SE.RA.PH最後の聖杯戦争、第七回戦。
最強の二人として残ったのはレオと、もう一人のマスターだった」

ハクノ「……もう一人のマスター……」

ちらりとセイバーの横顔を盗み見るハクノ。
セイバーは何も言わない。ハクノ、セイバーにではなくリンに問いかける。

ハクノ「それは、どんなヤツだったんだ？」

リン「予選から本選にあがってきたのが奇蹟みたいなへっぽこで、
一回戦も二回戦もまぐれで勝ち上がった最弱のマスターよ。
他のマスターはみんなこう思ったでしょうね。
次はアイツと当たれば楽に勝ち上がれるのにって。
でも——そんな下馬評を、そいつは全部乗り越えていった。
半人前のマスターのクセに、最後まで戦いを投げなかった」

客観的に語るも、リンの顔には微笑みがある。

ハクノ「……なんか嬉しそうだな、遠坂」

リン「ええ。記録でしか知らないけど、

私も彼女も、そのマスターさんには励まされたわ」

CHECK▶ 彼女、というのはラニの事。

リン「偉そうにふんぞり返ってるハーウェイより、
余裕ぶって自分の才能に心酔している他のマスターたちより、
よっぽど『今を生きている』って感じがしたから」

少し悲しげに笑うリン。ここまでは人のいいリンだったが、ここからはハクノを利用する狡猾なヒロインとしての顔に。

リン「ほんと。アナタとは正反対ね」

会話はここで終わり、三人はビル屋上から市街地に向かう。

殺人鬼の記述

尺に余裕があれば挿入。

一〇〇〇年前、ユリウスがフロアマスターとして蘇生する時のシーンとして作成。

画面黒。闇にいるユリウス。

ユリウス（――オレの頭蓋骨には隙間がある）
（風鳴りのような音が響く。洞に落ちるような音が響く。
静かな眠りにあったのは、幼少期の一時だけだ）
（だから慣れている。
オレにとって眠りとは、目を閉じただけの休息にすぎない）
ザザザ、とノイズが走る。
かつての第五回戦での戦い、岸波白野との戦いがフラッシュバックする。
第三回戦での暗殺描写（ゲームより）
ユリウス（覚えている）
第五回戦の遭遇戦（ゲームより）
ユリウス（覚えている）
第五回戦での決着、崩壊するユリウス（ゲームより）
ユリウス（まだ、この記憶を覚えている）
画面を黒く塗りつぶす雑音。
しかしピタリとノイズは止み、映像は第五階層のただ中、誰もいない広場に。
まだ雨は降っていない。一面、何もない空白を思わせる灰色の空。
広場の中心に黒い染みが発生する。水たまりほどのものはぞふぞふと広がり、その中から、

まず腕が出てきて地面を掴む。（穴から出てくるように）
ゆっくりと這い出てきた人影は黒い泥に覆われていたが、泥はぼたぼたと地面に落ち、やがてユリウスの姿が露わになる。

ユリウス（悔恨から、オレは生まれた）
（やるべき仕事は覚えている）
（岸波白野を、殺す事だ）

幕が落ちるように土砂降りが振ってきて、シーン終わり。

CHECK▶ ダンと違うのは元々ユリウスが聖杯戦争時から違法行為スレスレで自らの電脳体を維持していた事。結果、ムーンセルの指定で第五階層最強のマスターに選ばれ蘇生したが、半分はもう「自分で蘇生」していたゾンビ状態だった事。結果、妄念から彷徨い続け、死にながら彷徨うデッドフェイスになってしまった。肉体は生きていても、その心が死に染まったのだ。

土砂降りのビル街

ラダーから離れ、土砂降りの街に降りる一行。
ユリウスに見つからないように中央を目指すハクノたち。

その中でセイバーに質問するハクノ。
リンとの話で『以前のセイバーの戦い』が出たからだ。
ハクノ「……俺と、セイバーの前のマスターは似ていたのか？」
かすかな期待をこめて問いただすハクノ。
セイバー「いや。余の前のマスターは少女だった。そもそも別人だ」
「リンのように一流のウィザードではないが、諦めぬ者だった。
とびきりの勇気の持ち主でもあった。
思うに、勇者というのはああいう者の事を言うのかもしれぬ」
ハクノ「勇者か」
セイバー「うむ」
ハクノへ振り返り、懐かしげに語るセイバー。
セイバー「それでいて……小さな胸に願いを秘めた、
愛おしくも愚かしい、一人の人間であったのだろうよ」
ハクノ「似ても似つかないな」
ハクノ「（頷く）」
セイバー「（一瞬の間）……そなたとか？」
セイバー「だが、そなたはとてもよく似ている。

余も、すわ、生まれ変わりか！　と驚いたほどだ」
穏やかに、しかし懐かしそうに言うセイバー。
華やかだが少し寂しそうな微笑み。そこには先ほどから張り付いていた緊張の影はない。
『美しい過去の思い出』として語るセイバー。

CHECK▶ これは『ハクノは前のマスターの生まれ変わり』と語るのではなく、『ハクノは前のマスターの生まれ変わりではないよ』とはっきり語るシーン。台詞にはなっていないが、演出でそう分かるように。セイバーの寂しげな微笑みは、『そうであったら良かったのにな』という意図のもの

ハクノ、セイバーの笑顔を直視できない。
後ろめたさと、前のマスターへの嫉妬からだ。
ハクノ「……けど俺は、そんな立派な人間じゃない。自分の事だけで精一杯の」
ハクノ（いや、自分の事さえまだ分かっていない）
ハクノ「ただ、上に登りたいだけの人間だ」
セイバー、何を今さら、ときょとん顔でハクノを見る。
セイバー「それでよい。ははあ。
さてはこれまでの戦いで、余計な荷物でも背負わされたな？」

「よし。唐突だがここで天才というものについて語ろう。
天才とは優れた才能、能力を持つものを言うのではない。
いや、当然そのあたりは欲しいが、才能があるだけではただの〝才人〟だ。
敵を斬る事に特化したこの剣と変わらない」
手にした剣をスッと見せるセイバー。
セイバー「では天才とは何か？　それは自分と他人の違いを、明確に知るものだ」
「人間は互いの能力を比べながら、
根底では〝自分たちは同じ仲間〟と依存してしまう」
「だが、残念ながらそれはない。人間は誰であれ違うのだ。
自分にできる事は、決して他人には叶えてもらえぬ事。
そして他人にできる事は、決して自分には届かぬ事。
天才とは、そこを残酷に分かつものを言う。
余は万能の天才だが、余の仕事と同じものを他人に期待する事はなかった。
同時に、どれほど才に欠けた者であろうと、
その者が生み出すものを真似る事はできないと知っていた」
セイバー、一旦言葉を止めて悲しい目をする。
天才の話はここで終わり、ここから凡人の、いや我々の話に。

セイバー「……人間はみな、最終的に自分と他人は同じものだと考えたがる。
なぜなら、それはとても素晴らしい事だからだ。
満ち足りた、温かなものだからだ。
みながわかり合え、価値観を共有し、手を取り合えるのなら、
それが最良の営みだと夢に描くからだ」
「だが、現実はそうではない。
それぞれに役割があり、それぞれに欠点がある。
他人を信じるのは良い事だ。
だがその前に、自分と他人は違うものである事を覚えてほしい」
セイバーはハクノに諭しながら、同時に励ましている。
前のマスターと自分を比べる必要はない。競い合うのはいいが、同じものの筈だ、と意気込んではいけない。
セイバー「無理に、大きな事をせずともよい」
「そなたはそなたのできる事を」
「余は余のできる事を」
「そして、そなたにできる事は、そなたにしかできぬ事なのだ」
これからのハクノの在り方を語るセイバー。

ハクノがセイバーに抱く好感度（憧れ）は、この時点で揺るぎのないものとなる。
〝無理に大きな事をせずともよい〟
この言葉は死者の総体として生まれたハクノにとって、大きな救いになるからだ。
ハクノ自身まだ自覚していないが、ハクノは死者の願いから生まれた。
世界を呪（すく）え、と。
だが個人に世界を背負う事は難しく、ハクノにはそれだけの能力はない。
そんなハクノにとって〝使命ではなく、自身の最善を選べばよい〟というセイバーの言葉はこの上ない応援になったのだ。
また、同行しているリンが空気化しているので、二人の会話を聞いていたリンはセイバーの最後の結論を聞いて、「ま、そうよね」とひとりで得心のいった顔をしていると良い。
セイバーの前向きな言葉はリンにとっても救いになっている。というかリンは基本、前向きでポジティブな人間が大好きなのだ。

中央広場

スラム街と化した街を抜け、塔のある中央広場へ。
広場の中心に塔（ラダー）がある。

広場は開けており、隠れる場所がない。
ハクノたちは広場に入らず、広場に続く通りの一つに留まる。
建物の陰から塔の入り口を遠視スコープで調べるリン。
リン「……やっぱり、そう簡単にはいかないか」
土砂ぶりの中、塔の前にはゆらめく黒い影がある。
ユリウスのサーヴァント・バーサーカー（李書文）だ。
どうやって対処するか相談しようとするハクノたち。
そこへ、
ユリウス「――――」
無言で現れるユリウス。
ユリウスは顔をフードで隠し、ビルの壁の側面に幽鬼のように立っている。
人の気配に驚き、ユリウスの立つビル側面に視線を上げるハクノたち。
ユリウス「――懐かしい顔だ」
穏やかだが、地の底から響くような重い声。
ユリウス「待っていたぞ、岸波、白野」

CHECK▶ ユリウスには現れたマスターがみな岸波白野に見えている

フードに隠れた顔だが、ユリウスが歓喜の笑い（復讐者の笑み）を浮かべるのが分かる。
ぞわりとかつてない悪寒に襲われるハクノ。

ユリウス「は――――はははははは！」

怨念と喜びに満ちた声と共に、（重力固定をカットして）壁から落ちてくるユリウス。
同時に、広場・塔の前にいた筈のバーサーカーが超スピードでハクノたちの場所まで移動して襲いかかる。

CHECK▶ 瞬間移動ではなく、広場からまっすぐに突進してくる。建物を破壊しながら突撃してくるダンプカーのように。

時間が止まったかのような一瞬。
バーサーカーもユリウスも共にハクノを狙っている。
セイバー、わずかな躊躇いの後、ハクノの背中に回り、バーサーカーの攻撃を剣で受ける。
否、受けてしまう。
バーサーカーの拳（握り拳）を剣の背で受けるセイバー。
ごいーん、という堅い音と、拳の衝撃が波のように刀身と、セイバー本人に伝わっていく。

CHECK▶李書文の宝具・无二打である。この時点でセイバーはほぼ瀕死。もう内臓はぼろぼろになっている。セイバーが一瞬だけ躊躇したのは、李書文のこの特性を知っていたから。初手を剣で受ければ剣ごと自分も死に体になる。それを知った上でハクノを庇ったのである。

セイバー、バーサーカーの強襲を剣で防ぐも、その表情はピンチそのもの。ギリギリ受け止めたが、完全に力負けしている。

スローモーションのように飛び散る瓦礫と、バーサーカーによってハクノから引き離されるセイバー。

ハクノ「……！」

ハクノ、セイバーにピンチをフォローしてもらった、と察するものの、今は目の前のユリウスに専念するしかない。

ユリウス、戦線から離れていくバーサーカーに構わずハクノに襲いかかる。

ハクノ、とっさに両腕でユリウスの貫手をガード。

ユリウス、ガードされたまま左足でハクノを蹴り上げる。ハクノ、背にした壁ごと吹き飛ばされ、隣のビルの中へ。

CHECK▶ サーヴァントほどではないにしても超人的な描写を。

リンは瞬時にセイバーとバーサーカーの戦力差を分析し、セイバーが危ないと判断してセイバーを追い掛ける。

×　×　×

セイバーはバーサーカーとの戦闘でスラム街にまで押し戻される。
もう中身がボロボロのセイバーは当然、バーサーカーに追い込まれる。

CHECK▶ その理由はまだ視聴者には説明しない。

ここでの描写はとことんバーサーカー優位で。これどうやってもセイバー勝てないじゃん、と視聴者が思うように。その逆転を九話でやるので。

CHECK▶ とはいえ、それでもしのげているのは李書文が劣化しているから。セイバーの表情は険しくはあるものの、大ピンチ！　というものではない。アサシンとしての李書文は〝種が分かっていても倒せない相手〟だったが、バーサーカーとしての李書文は〝冷静に対処すれば御し得る相手〟になっている。

そこへサーヴァント化したリンが駆けつける。
リンとの共闘で少しだけ希望ができるか——という空気になる。
二人でなんとかして倒すぞ、という雰囲気になるが、
セイバー「よいところにきた！　ちと頼む！　うむ、できれば倒しておくがよい！」
セイバー、ハクノの元に急ぐ。
リン「助けに来たら押しつけられた!?　どんだけ自由なの!?」
リン、ぼやきながらも律儀にバーサーカーと相対する。
リン「——でもこれ、まずいわよね。
変身もこれで二回目……この体、いよいよ保たないかも」

CHECK▶ リンが第一階層からついてきている場合は三回目となります。

×　×　×

一方ハクノとユリウス。
ビルの壁をブチ破り、今も溶鉄場として稼働している工場の中に。
ハクノ、逃げながらユリウスと戦う。

ユリウス、顔をフードで隠した殺人者としてハクノを追い詰める。

ユリウス「戻ってきたのか」
「帰ってきたのか」
「懲りない奴だ。それでこそオマエらしい」
「だが、どういう事だ」
「俺は怒りで死にそうだった」
「だが今は失望で死にそうだ」
「そのザマはなんだ。そのカオはなんだ」
「どこまで無様を晒す、岸波……！」

ユリウスはアクションする度に、ハクノに恨み言をぶつけてくる。始めは静かに。段々と激高していく。

CHECK▶ ユリウスが怒っているのはハクノがデッドフェイスだから。白野によってレオを倒された怒りと、ハクノがデッドフェイスとして上がってきた怒りは別のモノ。ユリウスは復讐鬼であり、同時に失望鬼。「死人の顔でやってくるなど！」。また、ユリウスはハクノを純粋に岸波白野のデッドフェイス（死人返り）と誤認している。

ハクノ「人の名前を——」
「いいかげん、なれなれしい！」
苛立ちながらハクノ反撃。ユリウスのフードを曝く。
現れたのはユリウスの素顔。
ハクノ、ユリウスの顔を見た瞬間に『以前、ユリウスを殺した時の記憶』をフラッシュバックで思い出す。

×　×　×

聖杯戦争、第五回戦の決戦場。
赤いファイヤーウォールの向こうで、跪きながら消滅する寸前のユリウス。憎しみに満ちた顔で白野を睨むユリウスの姿。

×　×　×

シーン、現在に戻る。
ハクノ「おまえも……ゴーストなのか？」
ハクノの呟きにユリウスはぴたりと動きをとめ、その後、人が変わったようなひきつり笑いをする。
楽しくて、滑稽でたまらない、という、見ている側が不安になる爆笑。
ハクノ、呆気にとられるもチャンスとばかりにユリウスに襲いかかる↓ユリウスにあっさ

り防がれる。

ユリウス「おまえも、ゴーストだと？」

「お目出度いヤツだ。

自分がゴーストのように上等なものだと思い込んでいるのか」

CHECK▶お目出度い男だ、と言わないのは、ユリウスが見ているのは岸波（少女）だから

ユリウス「オレもおまえもゴースト以下のクズだ。

何も生み出さず、何も救わない。マスターの真似事など笑わせる」

ハクノ「なん……だと？」

ユリウス、ここでデッドフェイスに。

ハクノ「――――――（デッドフェイスを見て絶句）」

ユリウス「オレたちはとっくの昔に、生きる意味を奪われている」

ハクノの心臓をブチ抜く、ユリウスの痛恨の一撃。

ハクノ、死亡。

CHECK▶本来ならここでAパート終了のタイミングだが、今回はちょっと延ばす。

辺獄の焼却炉（内面世界）

ハクノ死亡……からの、いつもの内面世界。
第一話であった辺獄の焼却炉。
そこには佇むハクノと、白衣のトワイスがいる。
トワイスは煉獄で出会った時の、穏やかなトワイス。

CHECK▶ 辺獄にいるトワイスは賢人トワイスなので。

トワイス「おや。もう一度出会うとは。キミとは縁があるようだ。今も、昔も」
ハクノ「……昔？　昔のオレを知っているのか、アンタは」
トワイス「知っているとも。よくは知らないが、多くは知っている。
キミがゴーストではない事も。岸波白野ではないことも」

CHECK▶ よく知らない、とは白野個人とは数分しか話してないから。その代わりに多くのマスターを倒してきたので、〝多く〟知っている訳である。

ハクノ「……どういう事だ」

驚いての質問ではなく、薄々分かっていたので説明を求めるための質問。

トワイス「この一〇〇〇年でSE.RA.PHは衰退した。失われるだけの一〇〇〇年だった。
　その中で唯一、新しく加わったものが死相――デッドフェイスだ」

デッドフェイスの説明。

生きながら死に囚われたもの。

肉体のないゴーストとは違う。ゴーストは生を望んで、生を求めて彷徨うもの。

だがデッドフェイスは違う。死人として活動し、死をバラまくだけの呪い。『もう滅びたい』

『もう終わりにしたい』という、何も生み出さない悪性情報の一種だ。

トワイス「SE.RA.PHでは肉体の死と精神の死は別のものだ。
　肉体は死のうとも精神が死にきらなければ、それは呪いとして蓄積される」

「普通、人間は肉体が失われれば感情から解放されるものだ。

どれほど他人を恨もうとね。だが――」

「熾天の檻が閉ざされ、聖杯戦争が終わった時、SE.RA.PHは

電脳の地獄となった。死者たちの無念を分解する浄化装置はなくなり、

　死を放置する事になった」

映像、辺獄のさらに下、マスターたちの死が蓄積された暗黒を映す。

たえず天上からこぼれ落ち、たまっていくコールタールのような湖。

トワイス「かつての私は、人類に変革を求めた」

マスターとして聖杯戦争に参加するトワイス。何度敗北しようとリトライで、ついに熾天の檻に辿り着く。

トワイス「私の時代（二十世紀）を代償にして栄えた世紀が、
　あまりにも未成熟だったからだ。
　私は、代償に足る成長をするよう、人々に願った」

熾天の檻にて、ムーンセル中枢を見上げながら待ち続けるトワイス。

トワイス「だが、その願いは腐れ落ちた。
　私は誰に倒される事もなく生き続け、膿み続け、より明確な結論を得た」

月から地球を監視し続けるトワイス。失望の果てに表情が冷酷なものに一変する。

トワイス「できない子供にできるようになれ、と叱るのは傲慢だろう？　だから」
「もういい、と。成長する必要はない。
　人間（ワタシ）たちは、ここまでだ」

ムーンセル中枢を黒い天蓋（円形のカプセル。月の殻）で覆うトワイス。

同時に、ムーンセル中枢を目指してやってくるマスターを次から次へと殺し、辺獄に落としていた映像を差し込む。

トワイス「多くの勝者を殺してきた。善人もいれば悪人もいた。
　優勝者に相応しい英雄と言えるだろう。
　――だが誰一人、救世主とは呼べなかった」
辺獄にたまっていく死の怨念。
それはやがて渦を巻き、その中心に一つの代表を生み出した。
ぼこり、とわき上がり、天上に向けて伸びる一つの塊。
トワイス「本来ならそれだけの記録の貯蔵だが――
　SE.RA.PHの終わりを感じ取り、ただ一度の変化が起きた」
「恨みを晴らせ。熾天に座した勝者に、この憎しみを叩きつけろと」
地下の湖から辺獄にいった黒い泥は、そのまま人型になり、後者への階段を上っていく。
その姿は段々とハクノになっていく。
トワイス「自分を岸波白野の生まれ変わりだとでも希望していたのかね？」
「多くの敗者。多くの死者。蓄えられた膨大な敗戦記録」
「それらを背負い、〝誰でもない誰か〟として目覚めたもの。それがキミだ」
「キミは岸波白野ではない。その要素を持った、死の総体にすぎない。
　生者への憎しみだけで構成された、醜悪な殺人鬼だよ」
ハクノは蘇った岸波白野ですらない。敗北者たちの想念の集積体である事を突きつけられる。

自分の原動力、動機であった憎しみの正体を知り、そんな筈はない、そんな自分（もの）はいやだ、と否定するハクノ。

しかし、

トワイス「何を今さら。
　キミは始めから、殺す為だけに上を目指していたじゃないか」

言い逃れのできない事実を語られ、絶句するハクノ。

CHECK▶ これが後の「憎しみしかないものが前に進んでいいのか」という自問自答、問題提起に繋がる。

トワイス「始めから、キミに未来はない」
「キミは殺す為に上を目指し、死ぬ為に生まれた、負け犬たちの寄せ集めだ」

ハクノ、気がつくといつのまにかデッドフェイスになっている。

滑り落ちる顔（皮膚）のイメージ。ずるりと音がする。下を向くと、落ちたのは電光の仮面ではなく、仮面の下にあるべき、本当の自分の顔。

内面世界終わり。

溶鉄場内部

シーンは現実、溶鉄場の中のハクノとユリウスに戻る。
ハクノ、ユリウスに心臓を貫かれたまま。
心も体も折れたハクノだが、まだ死んでいない。
ユリウス「そうか、死人だったな。心臓を貫かれた程度では死にきれまい」
トドメはやはり頭か、とハクノの頭を鷲づかみにしようと片手を伸ばすユリウス。
そこへ駆けつけるセイバー。セイバーの呼びかけで意識を取り戻すハクノ。
ハクノ、セイバーの登場でデッドフェイスが消える。ユリウス、それを見て「むっ」と反応。

CHECK▶ セイバーの存在がハクノを死人から生者に戻している事に気づく。

ハクノ、ユリウスの胴に渾身の反撃。（正拳でも蹴りでも自由に）
攻撃を受けて吹っ飛ぶユリウス。ハクノを貫通していた腕も抜ける。
セイバー、ハクノに駆け寄る。
ハクノ、やられた胸を押さえ、瀕死の形相ながらも無事をアピール。
セイバー「奏者よ、無事か!?」

ハクノ「まだいける。あいつを殺すぞ、セイバー！」
ハクノの号令を受けてユリウスに駆け出すセイバー。

CHECK▶ここで『殺す』という言葉をはっきり口にするハクノ。『倒す』ではなく『殺す』という相手はユリウスのみ。

ユリウス、さすがにセイバーを相手にすると防戦一方。
ハクノはダメージが酷くて立っている事がやっと。
セイバー、ユリウスを圧倒しているものの、その表情は苦しげ。

CHECK▶无二打のダメージが誤魔化しきれなくなっている。

そこへ、さらに壁をぶちやぶって飛び込んでくるサーヴァント化したリンと、そのリンを弾き飛ばしてやってきたバーサーカー。
リン「ごめん、あれ無理！」
ステイナイトのアーチャー召喚時のように瓦礫に埋まり、ダウンしたまま謝るリン。
が、リンの攻撃によるものかバーサーカーの片腕は千切れる寸前。リンもやられっぱなし

という訳ではなかった。
こうして二度目の仕切り直し。
サーヴァントとマスター、セットで対峙するハクノとユリウス。
無言でにらみ合う両陣営。
マスターとしての戦い、聖杯戦争での一騎打ちを彷彿とさせる緊張感。

CHECK▶ ここで作画リソースがあるなら一ターンだけ、数秒だけの激突をいれておきたい。ネロとハクノが息を合わせて、二人で強敵と戦うシーンがこの先ないので。同時に、狂っていてもユリウスとバーサーカーはバディだよ、というシーンも見せられるので。

戦闘するにしても、しないにしても、ネロはバーサーカーの攻撃を受けていないのに吐血し、崩れ落ちる。
ハクノ「セイバー……!?」
ハクノもほぼ死に体ではあるが、倒れたセイバーを心配する。
ユリウス「……フン。むしろここまでよく持ちこたえた」
「オレのサーヴァントの宝具は初撃必殺。
戦闘開始の一手目に放つ拳は、確実に敵を抹殺する」

「そのサーヴァントは知っていた筈だ。
　その上で、マスターでもない貴様を庇った」
ハクノ、セイバーがそこまで決意して自分を庇ってくれた事に胸がつまる。
あと物理的にも胸が詰まる。ユリウスに受けた心臓へのダメージによって、ハクノも地面に膝をつく。
ユリウス「ここまでだ。酬いを受けろ」
トドメを刺そうとするユリウス。
そこへ、ハクノとユリウスを隔てるように巨大な壁が落ちてくる。
ユリウス「！」
咄嗟に後に下がるユリウス。
落ちてきたものは壁……のように見える、巨大な腕だ。
ユリウス、腕の先を見上げる。
そこにはユリウスを見下ろす、黒い巨人（サーヴァント化したラニ。逆光でシルエットしか見せない）の眼光がある。
ユリウス、バーサーカーのダメージとラニを相手にする事の不可能さ、そしてもう死人同然のハクノたちを測り、ここで撤退。

……………………………………

CHECK▶ラニのサーヴァント化のデザイン、重要。「これは強敵だ。三騎相手となると引かざるをえない」というユリウスの選択の説得力を出すために。一目見ただけで『強い』感をだすため、リンとは違うコンセプトとして巨大化させた。力（魔力出力）のラニ、技のリン（戦闘技術）、みたいな。

× × ×

残されたハクノ、助けに入ったものが何か分からないまま、倒れたセイバーへずるずると歩みよる。

ハクノ（……ごめん、セイバー。またオレが、足を引っ張った）
（セイバーは負けていない。ちゃんとしたマスターがいれば、誰にも負けない）
（ああ——でも。ちゃんとしたマスターなんて、もう、どこにもいなかった）
（オレは——）（※岸波白野の偽物だった）

そんなモノローグをしつつ、セイバーの側で息絶えるハクノ。
セイバーとハクノ、二人は互いを守ろうとするかのようによりそって倒れる。
「二人とも死んでしまった」という絵にしてカメラを引き、八話タイトルインして終了。

〈第八話／了〉

デッドフェイス

●デッドフェイス

サイバーゴーストは、生を求めて彷徨う肉体の無いもの。一方で、デッドフェイスは、生きながら死に囚われた、何も生み出さない悪性情報の一種。SE.RA.PHでは肉体の死と精神の死が別物のため、死にきらなければ精神活動も呪いとして蓄積される。織天の檻が閉ざされ、聖杯戦争が終わったことで死者の無念を分解する浄化機能が停止し、死を放置することになった。そこから生まれたものが死相――デッドフェイスである。死を迎えながら死にきれない精神情報は電光の仮面となり、死した肉体を動かし、いずれ肉体すら悪性情報に変質させ、その素顔を死の貌に塗り替えてしまう。満足な終わりを迎えた肉体すら汚染し、『動く死人』に変わってしまった時、その生命意義はすべて失われ、フロアをさまようだけの災害となる。



デミ・サーヴァント

●デミ・サーヴァント

サーヴァントの情報を自身に取り込みその能力を継承したもの。基本的には召喚し、契約したサーヴァントでしか成立しない。しかし、ど



のようなマスターであれ英霊の霊基に耐えきれず、途中で崩壊するとされる。生まれながらにそう調整された個体であれば耐えられる可能性はあるが――

ザザ鳴りの街

●ザザなりのまち

雨が降り続く街。吹き溜まった死、怨念の声がノイズとなり、そのノイズが雨音となって再生されている。このフロアをさまよう殺人鬼の怒りが投影されたもので、停滞し、崩壊した地上の風景を再現しているとも。フロアマスターは既に死亡したと判定され、



他にマスターもいなかった為、一騎打ちによる勝者輩出は行われない。そのため、ラダーは既に下りている。



第九話 招き蕩う黄金劇場

――アエストゥス・ドムス・アウレア

CHECK▶ここではハクノを通じてネロの内面を見せる。ネロの半生と、その人生の捉え方をハクノと視聴者に語り、ネロに感情移入してもらう。ネロを『愛すべき、尊敬に値する人物』と感じてもらえれば成功。

アバン／心象世界

ハクノの心象世界からスタート。
死に瀕し、心も折れている状態のハクノ。一面の暗闇をずるずると歩いている。

CHECK▶死に瀕しているから暗闇なのではなく、デフォルトで暗闇。悲しい。

ハクノ（オレは、憎しみから生まれた）
（人を呪う事が。生者を妬む事が原動力だった）

CHECK▶二話でのマスターたちへの反応など。

ハクノ（でも、都合のいい夢ぐらいは見た）

CHECK▶ セイバーの微笑み、フラッシュバック。

ハクノ（岸波白野。おそらく、セイバーの前のマスターだった人間）
（そいつの生まれ変わりじゃないか、なんて、そんな事も考えていた。
そうであってくれたらいいと）

CHECK▶ 画面、死のコールタールを映す。

ハクノ（だが現実はこうだ。オレは生者ではなく、岸波白野でもなく）
（誰でもない、ただの復讐者だった）

暗闇をずるずると歩くハクノ。
そんなハクノの頭上にうっすらと光が射す。
セイバー「……奏者。奏者よ。目を上げるがよい、奏者よ」
目覚めろ、と呼ぶ声が聞こえる。

CHECK▶ これは現実にセイバーが呼びかけている声。優しい声で。

暗闇に、今までのセイバーが告げてきた前向きな台詞が再生される。
しかしハクノ、これに反応しない。
むしろセイバーの明るい声を聞く度に苛立ちがつのる。

セイバー「そなたは、そなたにできる事を」
「それでも、諦めるのはイヤであろう？
人間は誰だって、今よりマシな自分になりたいのだ」

今までならハクノの心を癒やしていたセイバーの前向きな発言だが、今のハクノには届かない。

ハクノ（――沢山だ）
（憎しみを知らないセイバーに、そんな事を言われても）

ハクノ、自分から光が射していた場所から離れていく。
地獄にたれた蜘蛛の糸をはねのけるように。
やがて、ハクノの前には扉が現れる。

ハクノ（？）

ドアノブに手をかける。
ガチャリ、という音と共に開くドア。

中は二〇人分の椅子がある程度の、小さな試写室（劇場）だった。

ハクノ「……なんだ、これ」

映写機は回っているものの、スクリーンにはまだ何も映っていない。

席はすべて空席。

ハクノ、訝しげに試写室の中心まで移動する。

と、

少女「始まるよ。立ってないで座ったら？」

すぐ真横の席に誰か（岸波白野）が座っている。

影になって顔は見えない。

ハクノ「キミは……？」

少女「いいからいいから」

「（呟き）憎しみを知らないなんて、ふざけた事を言ってくれたわね」

白野、素っ気無いクールな素振りだが、ハクノの「ネロは憎しみを知らないから～」という発言に心底怒っている。なのでこの呟きだけ感情をこめて。

少女「アナタにはまだ足りないものがある」

「マスターとして一番大事なものを、ここで思い出しなさい」

スクリーンに映像が出る。

3、と映画が始まる前の、おなじみの数字が出る。
それを呆然と見つめるハクノ。
スクリーンの数字、カウントダウンする。
2、1、0。スタート。

スクリーン／岸波白野の記録

画面、黒一色で白野のモノローグから。
白野（このフロアで、私は今まで不確かだった死と、生と、
誰の投影でもない、自分だけの願いを手に入れた）

×　×　×

聖杯戦争、第五回戦の階層。
アリーナ（か校舎の廊下）でユリウスとアサシンに殺されかけているセイバーと白野。
セイバーは床に倒れ伏し、白野も立て膝状態でかろうじて意識をたもっている。
白野の腹部はユリウスに斬りつけられ、出血している。白野は片手でこれを押さえている。
ユリウス「路傍の石のように死ね」
「俺のサーヴァントは見ての通りのアサシンだ。

その拳を受けたものは全身の経絡を乱されて死に至る。
おまえのサーヴァントは、ここまでだ」
ユリウス、語りながら白野へと歩いてくる。
ユリウス「聖杯に至るのはレオ・ビスタリオ・ハーウェイだ。
停滞した地上を維持するという使命を持ち、
それだけの能力と経歴を培ってきた」
「おまえのような凡人が、レオに挑むなどおこがましい」
「ここは確かな志を持つ者のみが生き残る場所だ。記憶もない。願いもない。
そんなマスターが、よくもここまで勝ち残ってくれたな」

CHECK▶ 褒めているのではなくけなしている。「恥知らずめ」のニュアンス。

そう語るユリウスは、もう動けない岸波白野の首にナイフを振り落とす。
それを諦めて見上げる白野。
白野（それはまったくもっての正論で、私はイラッとする気持ちさえ持てなかった）
（でも）
セイバー「そんなマスターが、ではない！

　そんなマスターなのに、
　我が奏者はここまで勝ち上がってみせたのだと言い直すがよい！」
瀕死の筈のセイバーが立ち上がり、憤りと気迫に満ちた表情でユリウスに斬りかかる。
驚くユリウスとアサシン。画面暗転。

×　×　×

その後の保健室。
保健室のベッドに腰掛け、力無くうなだれる白野。

CHECK▶ 状況的にはユリウスの暗殺をくぐり抜けた後。

自分（白野）が過去の人間の再現データ、NPCだった事を知らされてへこんでいる。告げたのは桜とする。
それを励ます……というか悟すセイバー。
セイバー「顔を上げよ、我が奏者よ。それは気にするような事か？」
セイバーの、尊大な口調だが優しさに満ちた声。
セイバー「余を見よ。余の生きていた時代は遥か、気の遠くなるような過去の事。
　しかして、ここにいる余は何か？　余以外の何者でもない。

再現にすぎずとも、余はここにいるのだ。
うん――――なら、それでいいではないか」
セイバーの優しい笑顔。
え？　と顔をあげる白野。
セイバー「あらゆるものは記憶の積み重ねだ。
人間とて、記憶を残すために生き続ける装置のようなもの。
余――――いや、私も、そなたも、この宇宙すべての物も、いつかは消える。
それを空しいと、そなたは言うのか？」
「全ては星の歴史なのだ、奏者よ。
素晴らしいではないか。我々はみな、最後には一つに還る。
この星はあらゆる生き物を使って、一つの夢を見ているのだから」

CHECK▶ この台詞はゲーム版から。EXTRAという物語の最後の結論でもある。

白野（セイバーの言葉はいつも自信に満ちていて、誇らしげだった。
だから、私は勘違いをしてしまった）
×　×　×

その後のマイルームでの白野とセイバー。
ユリウスとの決戦の前に真名を打ち明けるセイバー。

CHECK▶ マイルームの美術はゲーム版を参照に。

机を重ね、赤い天幕をかぶせて作られた玉座でセイバーは語る。
セイバー「明日こそ彼奴らとの決戦。そなたは十分に育った。
剣として劣っているのは余の方だ」
「よって、次の戦いで宝具を開示したい。
サーヴァントとマスターは一心同体。
その証にサーヴァントは真名を開示するもの」
「それをここまで秘してきたのは、うむ——
余はそなたに、我が悪名を知られるのが恐かったのだ」

セイバー、微笑みながら語るもその顔は悲しげ。
白野（英霊になる前の彼女。セイバーの生涯は華やかで、喜びに満ちていて、
美しいものだったのだろう、なんて）

CHECK▶ この台詞は一個前の白野モノローグから引き継いだものだが、台詞として分かりづらかったらちょっと変える。

岸波白野の記録／夜明け前のローマ

シーン続き。
ユリウスとの決戦の直前、マイルームにて真名を明かすセイバー。
……そんなセイバー（ネロ）の過去語りを白野がモノローグで説明する。

×　×　×

画面、夜明け前のローマ。
ローマの遠景か、ティレニア海の望遠。寂しい夜明け前のイメージ。
白野（彼女は夜明けに生を受けた。
皇帝の嫡子としてではなく、その一族の末端として。
皇帝の座など望むべくもなく、また、望むべきでもない、
弱く、後ろ盾のない父の子供として）

×　×　×

貴族邸、寝室。アグリッピナの部屋。

白野（彼女の人生が最初に路（みち）を違えたのは、
母親の淫蕩さによってだった。彼女の母は先代皇帝と再婚し、
自らの子を皇帝とする為、あらゆる奸計を行った）

無人の部屋に、毒らしき濃色の瓶がある。

白野（その最たるものが皇帝暗殺。
四代皇帝クラウディウスは何者かの手によって倒れ、
彼女は義父からの相続として五代皇帝の座についた）

×××

ローマ市内、日中。活気のある大通り。
人影はみなシルエットに。その中を歩くネロ。
通りの喧噪は賑やかで、ネロの足取りも軽やか。楽しげなイメージで。
また、ネロの姿はこの時からすでに独創的な衣装（西洋風ドレス姿）でよい。

白野（その出自が正統なものでない反動か、彼女は身内より他人を愛した。
より正確に言えば、名高い貴人たちより、名もない市民たちを愛した）

シルエットの市民に声を掛けるネロ。

白野（彼女は皇帝即位後、すべての間接税を廃止した。
減税し、国民ひとりひとりに皇帝即位の祝い金を与えもした。

彼女が目指したものは革新だ。
腐敗した元老院属州と皇帝属州を統合し、国庫を一本化する政策をとった。
当然、元老院との対立は本格化した）
モノローグの内容とは裏腹に、ネロの様子は穏やかで美しい。
白野（母親の問題も年を増すごとに肥大化していった。
彼女の母は、娘を〝自分を皇帝の母にする〟だけの
舞台装置としてしか見ていなかった）
（一向に進まない元老院との和解。私欲で政策に口出す母親。
彼女はまず、自らのもっとも弱い部分と対決した）

×　×　×

イメージ映像。ネロが母アグリッピナを処刑するシーン。
ネロ「――この者は余に毒を盛った。
母であれ、皇帝に反する者は死罪である」
淡々と、かつ堂々と宣言するネロ。
白野（時に西暦五九年。
暴君の名が不動のものとなった瞬間だ）

×　×　×

ローマ皇帝執務室から見るローマ。咲き誇る薔薇の庭園。

白野（彼女は惜しみなく、多くの者を、多くの事柄を愛した。

　繁栄こそ人間の本質。

　生を歌い、愛を語り、命を終える。

　彼女は栄華を求めこそすれ、永遠は求めなかった）

だが、ネロの周りには誰もいない。

白野（けれど、その在り方は、人々には理解されなかった）

×　×　×

夜。火災に見舞われるローマ。ローマの大火である。

恐るべき勢いの火事だったが、これは一夜で鎮火する。

ネロ帝の行いの中でも有名な『火災への対応』。

ネロが有能な人物であった証左の一つとされる。

白野（優秀で、努力家で、気分屋で。

　きっと周りには、自由奔放な独裁者に見えたのだろう）

ローマ市内、日中、活気のある大通り。

人影はみなシルエットに。その中を歩くネロ。

だが、ネロだけ周りの人々と色が違うものになっている。

岸波白野の記録／マイルーム

カメラ、マイルームに戻る。

セイバー「うむ、そうだ。そこを、余はちと間違えてしまった」

セイバー、しんみりと、やや自虐的に語る。

「てへ」と照れている芝居をするが、芝居なのは見え見えな声のトーンで。

セイバー「この胸にともる愛は、人々のソレに比べると大らかにすぎるらしい。
　余の愛は我が儘だ。
　何もかも与える代わりに、何もかも奪わねば気が済まない。
　美しいもの。愛すべきものには全霊をもって応える。
　だが——それは、ただの炎だ。
　人々が抱く愛とは、もっと柔らかいものだった。
　余は、そこを分かっていなかった」
「……いや、気づいてはいたのだ。
　でも、どうしても理解できなかった。
　私には、彼らの言う愛が、どうしても」

岸波白野の記録／ネロのローマ自室

カメラ、ネロの生前回想に戻る。
自室でひとりきり、夜明けを見つめるネロ。
白野（やがて彼女は皇帝から国賊の身に落とされた。
ガリア地方の反乱を二度許した事が、元老院に大義名分を与えたのだ）
ネロ「ローマ皇帝とはローマ第一市民を意味する。
いかに元老院が余に罪科を問おうと、
市民たちが認めなければ余の立場は揺るがない。だが」
イメージ、ローマ大通り。
市民たちの姿はなく、ネロだけが立ち尽くしている。
ネロ「余は市民たちに尽くした。
市民たちも、余の政策を喜んでくれた。
だから――最後の最後では、市民たちが余の退位を
許しはしないと、そう考えていた」
「だが、何もなかった。
彼らからは、何もなかったのだ」

×　×　×

赤い夕日に追われるように、ローマ郊外に逃げるネロ。
供をしていた私兵たちも少しずつ減っていき、最後には一人になってしまう。
もはや退路はなく、行くべき場所もない。
ネロ、泣きながら喉元に短剣をあて、自害しようとするが何度も躊躇う。
白野（……ローマから追われ、
　荒野で命を落とす時、彼女の胸にはいくつもの憎しみがあった筈だ。
　己が落日を嘆き、
　反乱を憎み、
　そして——あれほど尽くしておきながら、
　誰一人として自分を救わなかった人々を呪って、自ら命を断った）

×　×　×

荒野の川陰に、眠るように倒れるネロ。
地平線には夕日が落ちている。
喉を裂きながらも死にきれないネロ。（この後、三日間生き延びる）

×　×　×

一度目の落陽。

日が落ちようとする頃、ネロは目を覚ます。
遠くから、自分を呼ぶ声が聞こえた気がしたからだ。
白野（それは愛した市民の声。ネロ皇帝に谘めなしと、ネロを喝采する声だ。
それにはっと目を覚ますけれど……）
（当然、幻聴にすぎない）
ネロ「うう、ぅ……」
失意のまま、子供のように涙ぐんで鼻をかむネロ。
暗転。

×××

白野（二度目の落陽。また幻聴が聞こえた。
確かめるように目を開ける彼女だが、やはり荒野には誰もいない）
ネロ「誰も……おらぬ、のか……」
死を前に、ネロの声は掠れている。
白野（泣くのをこらえながら、彼女は悔しさに唇を噛む）

×××

白野（そして、三度目の落陽。
もう彼女は目を覚まさない。そこへ……）

最後の夕暮れ。
寂しく命を落としたネロの遺体を見つけた追っ手の兵士たちが現れる。
三人の兵士たちのうち、二人はネロをこづいて去って行く。
しかし一人の兵士はネロを憐れに思い、真紅の外套をその遺体にかける。
それはただの気まぐれで、本当に自然な、
憐れなものを見て可哀想だと思う程度の行動だった。
仲間の元に戻ろうと背中を向ける兵士。
そこへ、

ネロ「――――遅かったな。だが、大儀である」

穏やかな幻聴がした。
兵士は一瞬だけ足を止めるも、風の音だろう、とネロに振り向かず去って行く。
その背中を、ネロは満足そうな笑顔で見つめ、目を閉じる。
ネロにとっては最期の最後、気まぐれであれ『人の温かみ』で終われた事が嬉しかったのだ。

白野（それが彼女の――――
ローマ帝国第五皇帝、ネロ・クラウディウスの最期。
母の愛も父の愛も知らず、人々の愛も知らず、
失意の中で人生を終えた、ある一人の、孤独な少女の生涯だった）

岸波白野の記録／マイルーム

セイバー「と、まあそういう事があったのだが！」
暗い雰囲気を一気にブッ飛ばすように明るく、満面の笑顔で切り返すセイバー。
セイバー「すべては過去の事。
つまらぬ話であったが、真名を明かすには必要な事だった故、許すが良い」
「だがこれで準備は整った。
そなたは余を知り、余の真名を覚え、余の宝具の逸話を知った」
「であれば、アサシン如き何を恐れる事があろう！
余のとっておきは凄いぞ？　そなたはまたも余に惚れ直してしまうな！」
明るくはしゃぐネロに白野は合わせられない。
まだネロの悲劇の生涯が胸に響いて、笑えない。
セイバー、そんな白野の頭をこつん、と叩く。
顔をあげる白野に、穏やかに微笑むセイバー。
セイバー「酷い顔をしおって。星の瞳が台無しだぞ？」
「余の最期はあれで良いのだ。
哀しくはあるが恨みはせぬ。

色々あったが、差し引きでは良い人生であったからな」
「不理解と裏切り。
戦いと苦悩に満ちた人生であっても、余は自らの生涯を誇りたい。
どれほど弱く、選ばれず、人々にとって無価値なものに映るものでも。
余は、余が美しいと信じたいものの為に、この命を燃やすのだ」
白野に片手を差し出すセイバー。
さあ、決戦に行こう、というジェスチャー。
白野、目には涙を浮かべてるが、もう悲しさはない。あるのはセイバーへの信頼と誓いだけ。

CHECK▶ 以下はゲーム版のこのシーンでの主人公のモノローグ

白野（もちろん。今はその強さに見惚れるばかりでも、
いつか必ず、彼女に相応しい自分になりたい。純粋にそう思った）
（……だから、ようやく見つけた。
聖杯にかけるまでもない、
もったいなくて聖杯になんてかけられない。
それは心底から生まれた、ごく平凡な――）

白野、セイバーの手を取り、立ち上がる。

試写室

カメラは試写室に戻る。
セイバーの過去を映した映像は終わっており、スクリーンには白い光だけが投影されている。
席に座っているハクノ、正体不明の感情（白野と同じ、貴いものを見た、という衝動、感動）に襲われて、スクリーンからまだ目を離せずにいる。

少女「そりゃあ、彼女は始めから前向きだったけど。
人々に見捨てられても、蔑まれても、その在り方を変えなかった」
「今もそう。本当はすごい寂しがり屋でかまってちゃんなのにね」

ハクノ「……それは、何故？」

そんな寂しがり屋なのに、なんで頑張るの？　あんなに自信満々なの？　という問いかけ。
それを凛とした視線で白野は返す。

少女「アナタが求めたからよ。あの辺獄の底で、アナタが彼女を求めたから。
アナタにとっては苦しまぎれの、
利用できるのなら何だっていい契約だっただろうけど」

「彼女にとっては何物にも代えがたい、
命を差し出してもいいぐらいの呼び声だったの」

ハクノ、『死の淵まで自分を呼ぶ声を求め、果たされなかった皇帝ネロの最期』を思い返す。

少女「アナタが目を背けてはいけないものが何か分かった？」
「自分のことなんていくらでも目を逸らしていいのよ。
そもそも自分の姿なんて自分には見えないんだから」
「アナタは、アナタを信じてくれる人を大切にしなさい。
それはいずれきっと、アナタを育てる標(しるべ)になるわ」

ハクノ、席を立ってドアに向かう。

白野は椅子から動けない。もう生きてはいないからだ。

ハクノ「そういえば、キミは――」

出口のドアノブに手をかけて、試写室を振り返るハクノ。

試写室には誰も居ない。

さっきまで少女が座っていた席のトレイには、
ジュースと焼きそばパンが置かれているだけ。ハクノ、ドアを開ける。

外から溢れる白い光に包まれて、世界は真っ白になる。↓目覚めへ。

第五階層／ラニの隠れ家

カメラは現実へ。
廃ビルの一室に作られたラニの工房。
ラニの手で治療を受けているハクノとセイバー。
二人はそれぞれ別のベッドに横たわっており、セイバーの胸（あるいは腕か）から延びたチューブがハクノの胸に繋がっている。
治療を行っているのは白衣姿のラニ。
ラニ「気がつかれましたか」
ハクノ、第二階層で死に別れた筈のラニの姿に驚く。
ラニ「遠坂リンとはレベルの違う、霊基修復のプロフェッショナルの手助けがご入り用かと思いまして」
ラニ、当惑するハクノをよそにさらさらと状況を説明する。
セイバーの霊基はすでに修復されており、その生命力を利用してハクノの体を治した事。
リンも傷を癒やし、今はユリウスたちの様子を監視しに出ているという事。それらを説明し、ラニは席を外す。
セイバーと二人きりになったハクノ。

セイバーはスリープモード。
静かに眠るセイバーの横顔を見て、ハクノは自問自答する。
今までセイバーに頼り切りだった事、
そのセイバーの内面を理解していなかった事、
自分にはもったいない英霊をパートナーにしている事、
そんな様々な後ろめたさが混濁した沈黙。

CHECK▶ 台詞にして悩む必要はなし。

そんな中、目覚めるセイバー。
セイバーは寝ぼけ眼ふうに目覚め、「うむ、おはよう奏者」とのんびり挨拶をした後、

セイバー「奏者よ、無事目覚めたのだな〜〜〜！」

とベッドから跳ね起きてハクノに抱きつく。
ハクノ、戸惑いながらもやはり嬉しいので、困り笑顔で、

ハクノ「ああ。ありがとう、セイバー」

と返す。
ハクノ、自分からセイバーを引き離し、沈黙。その顔は元気がない。

そんなハクノの心境を読み取ってなお、セイバーは胸を張って宣言する。

セイバー「この通り、余の体も回復した。
　今度こそバーサーカーめを倒してみせよう！」

元気いっぱいのセイバーに何の言葉も返せないハクノ。

セイバー「どうしたのだ？　元気がないぞ？」

ハクノ、ためらいながらもセイバーに告白する。

CHECK▶ ここでハクノがためらったのは『自分からセイバーと別れる事』がイヤだったから。しかし、セイバーに対して誠実でいたいという気持ちが、ハクノに次の返答を選ばせた。

ハクノ「……それは無理だ。
　オレはもうセイバーと一緒には戦えない。その資格がない」

ハクノ、自分の正体を告白する。

自分がマスターではない事。誰かの形を参考（モデル）にしただけの、誰でもない死人だと。

ハクノ「記憶がないのも当然だ。
　オレは記憶喪失だったんじゃなくて、個人としての過去そのものがなかった」

「……こんな自分に付き合わせてすまない。

オレはもちろん、セイバーにも、もう戦う理由は」

セイバー「ばっかもの──っ！」

セイバー、両手でハクノの両頬をぱちんと弱めに平手打ち。ネロサンドチョップ！

ハクノ「!?」

セイバー「順番を間違えるな！

そなたの戦う理由など、まだ決まっていないではないか！

「死にたくないから戦ってきた。

何も分からないから上を目指してきた。そして──」

「──そして。他の誰でもない〝誰か〟になるため、

そなたは目覚めたのではなかったか」

主人公の元になるものは無い。少なくともハクノはそう語る。

しかし元になった白野はあるのだ。ひな形として、基盤になったものは存在する。

自分をフランケンシュタイン、死のメモリーの寄せ集めと思っていた主人公にセイバーは語る。

セイバー「それでも、岸浪ハクノと名乗ったのなら、そなたは岸浪ハクノだ」

と。同じ作者、同じ素材、同じテーマで本を書いたとしても、状況が異なればみな違う内容になる。

けれどその根底にあるものは変わらない。
同じ魂を元にしたものは、どんなに違う性質になろうと同じ結論に辿り着くのだと。
すべては見え方が違うだけだ。
魂の在り方。
何を美しいと思い、何に憧れるかという、基本理念。
ハクノは元の岸波白野とは別人である。
けれど偽物ではない。まがい物でもない。同じ感情を、同じ心を持った、新しい誰かなのだと。

CHECK▶ それは転じて、ゲーム版のプレイヤーの追体験でもある。誰でもない誰か（主人公）を、プレイヤーがいつか自分の物語だと投影するように。

それを聞いてハクノは〝自分への不信〟という憑き物が落ちる。

ハクノ（何かが、剝げ落ちる音がする）
（オレの顔か。死者の顔か。無数の敗者たちの憎しみか。
いいや、憎しみも復讐も消えはしない。
オレはオレのままで、何も変わらない。それでも……）

ハクノ、自分の頬に触れているネロの手をそっと摑む。

ハクノ「字も顔も性別も違う、岸浪ハクノ」

セイバー「うむ」

ハクノ「オレは『ソレ』でいいのか」

セイバー「無論だ。そなたは初めから、何も間違えてはいない」

自分は岸浪ハクノという一人の人間であり、そう言ってくれたセイバーの信頼に応えるために熾天の檻に辿り着くと。

かつて第三階層で見た誰かの記録が思い返される。

希望を持って空にあがる。

そんな、誰かへの羨望は間違っていなかったのだ。

ハクノ「……希望を持って空にあがる」

セイバー「三層で言っていたな」

ハクノ「あそこで見たんだ。誰かのいつかの記録。

そいつは、希望を持って空にあがりたいと言っていた」

セイバー「そうか」

ハクノ「だから、オレの言葉じゃない。借り物なんだ。だけどオレも……」

俯きかけてから、視線をまっすぐネロへと向けるハクノ。

決意を込めて、

ハクノ「希望を持って空にあがりたい。

キミの認めた名前を持って、熾天の檻に辿り着く」

ハクノ(……たとえ。ソラの果てに、何が待っていても)

それが何を意味するものか薄々予感しながら、セイバーに告白するハクノ。

瞳に光が戻るハクノを見て、セイバーはうむ、と頷く。

セイバー「決意を新たにするのは余も同じだ」

「トワイスめの雪辱戦は行うにしても、それは大事の前の小事。

余は今度こそ、契約者であるハクノを守り、育て、

熾天の檻に届けるために剣を振るおう」

それを聞いてハクノ、嬉しくなって気持ちを伝える。

ハクノ「じゃあオレは何があっても、最後はセイバーの隣にいるよ」

セイバー「――――――」

ハクノの言葉に目を見張るセイバー。

それは一〇〇〇年前、岸波白野が彼女に告げた言葉だったからだ。

CHECK▶ 一瞬だけ一〇〇〇年前の第五回戦の時の、女主人公とセイバーのマイルームの映像を差し込む。

セイバー、かつての契約者である女主人公との約束を思い返し泣きそうになるのを堪え、

セイバー「うむ、それなりに期待しておこう」

と何事もなかったように流す。

×××

一方、そんな二人のやりとりをビルの外で聞いているリンとラニ。

リン「ようやくマスターとサーヴァントらしくなったかぁ。
どうなることかと思ったけど、これで一件落着ね」

ラニ「そうですね。ミス・遠坂は『彼らではユリウスには勝てない。
私たちでこっそり倒してしまおう』と言っていましたが」

リン「あくまでもしもの時は、の話でしょ。終わり良ければすべて良し、よ」

憎まれ口をたたき合う二人の表情は穏やか。口元が微笑んでさえいる。
二人はセイバーとハクノの繋がりを実感して、第五階層の突破はもう叶ったと確信し、同時にハクノたちの関係を素直に誇っている。

第五階層／ラニの隠れ家

カメラ、ハクノとセイバーのいる室内に戻る。

セイバー「しかしユリウスとバーサーカーは策もなしで倒せる相手ではない」
「ああ見えてあやつらの息は合っている。
バーサーカーの失われた理性をユリウスが補っているかたちだな」

ハクノ「なら各個撃破をするのは？
セイバーはバーサーカーを。オレは、あの男をなんとかする」

セイバー、ハクノの提案にうむ、と静かに頷く。

セイバー「本来、聖杯戦争は一騎打ちのもの。
リンとラニの助けでバーサーカーを倒しては勝者たり得ぬ」
「そなたの作戦に乗ろう。そのかわりにこちらからも提案がある」
「バーサーカー相手には余も出し惜しみはしておられぬ。
宝具を解禁するが、よいか？」

ハクノ「(宝具を？)……でも、それには」

セイバー「うむ。宝具とはその英霊のシンボル、その証明だ。
これを使うという事は、転じて、

マスターはサーヴァントの真名を知らねばならぬ」
ハクノ、もう知っているがあえて黙っている。
セイバーはわずかに息を呑んだ後、
セイバー「故に、余の真名をここで明かそう。
余の宝具はかたちある剣ではなく、余の逸話を武装にしたもの。
そして余の真名は――」
セイバー、自分の真名をハクノに明かす。

CHECK▶ ここは台詞にしない方針で。セイバーの真名はすでに視聴者も、ハクノも知っている。ネロが自分から真名を語るシーンはゲーム版だけの特別な儀式。

ハクノ、満足げにセイバーの真名を聞き届ける。
〝それでも、諦めるのはイヤであろう?
人間は誰だって、今よりマシな自分になりたいのだ〟
深層意識で聞こえたセイバーの声を思い返すハクノ。
ハクノ、真名を明かすセイバーをまっすぐに見つめて、
ハクノ（その名に万雷の喝采を。

　オレも一人の人間として、その信頼に応える時だ)
と戦いへの決意を固める。

第五階層・土砂降りの街

降りしきる土砂降りの雨の中、移動する四人。
セイバーはラニと共にバーサーカー・李書文の元へ。
ハクノはリンと共にユリウスの元へ。
ラニはセイバーと李書文の戦いに邪魔が入らないよう結界を張るバックアップとして。
リンはユリウスに気付かれる事なくハクノを送り届ける姿隠し(ステルス)の提供として。
セイバーと別れ、リンと二人でビル街を走るハクノ。
　ハクノ「……遠坂。ユリウスは、強かったのか?」
うっすらと記録から読み込み(リード)したものの、ユリウスの事を知らない(思い出せない)ハクノ、リンに問いかける。
　リン「能力値で言うなら弟のレオのが上だけど、
　　マスターを殺す、という点ならユリウスのが上だったわ。
　　レオは温室育ちっていうか、王子様だったから」

「一方、ユリウスはそんな弟を守る護衛役だったからね。
　地上でも月でも、人を殺す事が仕事だったのよ」
そうか、と頷くハクノ。
岸波白野が抱いていたユリウスへの憤り（と憐憫）をかすかに感じるも、それは自分のものではない、自分が抱いていいものではない、と切り捨てる。
リン「勝算はあるの？　ユリウスは何をやっても死なないのよ？」
ハクノ「それはそうだ。死人は殺せない」
「死人は、死体に戻すものだ」

中央広場

場面は飛び、バーサーカーと対峙するセイバーの姿。
セイバーは静かに剣を構えている。ラニは広場の外で戦いを見守っている。
セイバー「……」
李書文「――」

ビルの屋上

ユリウスが佇むビルの屋上に静かに現れるハクノ。
リンのステルスはここで切れる。
ユリウス、突然現れた（生きていた）ハクノに驚く事もなく、再び対峙する。
両者はお互い自然体で立っている。
ハクノ「……」

中央広場

セイバーVSバーサーカー。
宝具「招き蕩う黄金劇場」のお披露目なので壮麗に勝つ。
セイバー「前回は幸運に助けられたが、此度こそ、正面から貴様を打ち負かす時だ！」

CHECK▶ この前回とは八話の事ではなく、聖杯戦争五回戦のこと。

雄叫びをあげて突進するバーサーカー・李書文。

その技にかつての面影はないが、それでもセイバーを圧倒する恐るべき武術家である。
ユリウスがいない為、李書文は『无二打』は使用しない。(する、という考えが及ばない)
その代わり、バーサーカーとしての宝具『猛虎硬爬山』が開幕に炸裂する。
これを皇帝特権で模倣し、正面から頸をぶつけて何とか相殺するセイバー。
バーサーカー李書文の、荒々しいが美しい套路(とうろ)が始まる。
天地と一つになるかのような震脚。
天地を砕くかのような拳と脚。
一撃一撃が致命傷となる連撃を、セイバーは同じく拳と脚で返す。
セイバーが皇帝特権にて召し抱えたのは目の前の李書文ではない。
それはかつての魔拳士のもの。アサシン・李書文の神髄であった。

セイバー「セイ、ハッ――――!」

李書文「――――!!!!」

セイバー渾身の肘打ちがバーサーカーの胸を打ち、数メートル後退させる。
場は煮詰まり、セイバーの熱は最高潮に達した。

セイバー「魔拳士、李書文!
　かくも血に飢えた獣に落ちようと、余は貴様の万全を知るもの!」
「故に全霊をかけてこれを打倒しよう!

我が奏者の勝利と、貴様自身の名誉のために！」

李書文「[redacted]――！」

剣を天に掲げるセイバー。

宝具の始動を察知して走るバーサーカー。しかし。

セイバー「レグナム・カエロラム・エト・ジェヘナ……築かれよ我が摩天！

ここに至高の光を示せ！」

セイバーの宝具展開の方が早い。

展開される黄金劇場。すべての運気が皇帝ネロに集まる絶対皇帝圏。

セイバー、そのまま剣を炎と燃やし、突進してくるバーサーカーに斬り込む。

再び放たれるバーサーカーの宝具、『猛虎硬爬山』。

これを正面からのロサ・イクトゥスで迎撃するセイバー。

セイバー「天幕よ――」

「落ちよぉぉおおお――！」

火花を散らす鬩ぎ合いの末、セイバーの魔力出力がバーサーカーを上回り、その体を横一文字に両断する。

データ崩壊していくバーサーカー李書文。

セイバー「……奏者よ、後は任せるぞ」

セイバー、あとはハクノがユリウスを倒すだけ、身を案じながらもハクノの勝利を確信して待つ。

ハクノVSユリウス

一方ハクノとユリウス。

ユリウス「また戻ってきたな」

「貴様は何も変わらない。あの時も、あの時も、常に生き汚かった」

「何度殺しても殺しても戻ってくる。まるで、悪い夢のように」

ハクノ「そうか。でも、あいにく人違いだ」

ハクノ、ユリウスに向かって一歩踏み出す。

ユリウス「なに……？」

ハクノ「オレはおまえの知っている岸波白野じゃない。

おまえの懐郷(かいきょう)には付き合えない」

「というかさ。いつまでも恨み節はみっともないぜ」

あえてユリウスを侮辱するハクノ。

ユリウス、これに反応してハクノに襲いかかる。戦闘開始。

数回の攻防の後、ユリウスに追い詰められる、跪くハクノ。
八話の冒頭はこのシーンに。
ハクノを罰する死神のように立ちふさがるユリウス。
ひざまずき、懺悔するようにうなだれているハクノ。

ユリウス「見ろこの世界を。これがおまえの生存の末路だ」

土砂降り、薄汚れた工場地帯、無人の街の様子はそのまま現在の地上の姿でもある。

ユリウス「罪深いにも程がある。何度罰されようと飽きたらない」
「おまえに望みなどない。生まれる筈がない」
「死に絶えろ。死に戻れ。生を望むなぞおこがましい。
なぜなら――その貌が、おまえの証しだ」

うなだれるハクノ。貌は見えない。
ハクノ、土砂降りの雨に打たれながら、

ハクノ（ああ――まさしく、その通りだ）
（もとより死人。生は語れない。
それでも、もう一度目を開けたのは。
それでも、もう一度奮い立ったのは）

セイバーの顔を思い出すハクノ。

セイバーの『それでも、諦めるのはイヤであろう？　人間は誰だって、今よりマシな自分になりたいのだ』の時の顔。台詞をリフレインする必要はなし。

ハクノ「オレは先に進む。
　死んでいくのは、おまえ一人だ」

ハクノ、自分から手で顔を覆い、デッドフェイスになる。

×　×　×

ここから共に全力のデッドフェイス対決に。
互いに超人化しての激突となる。
二人の対決中、重力（足場）が変化する。
水平だった床（真っ黒い影の地面）は戦闘中に垂直になる。
垂直になった事で落下するのだが、ユリウスはおかまいなしに垂直の壁に立っている。
ハクノはよつんばいで壁にしがみつき、ズシャーと滑り落ちるもすぐにユリウスと同じように対応し、垂直の壁に立ってユリウスにむかって駆け上がり、戦闘を続行。
絵的にはテレビを縦置きした感じに。
二人の戦いは互角。
やがてさらに重力は変化し、今度は天地が逆になる。
空に向かって落下（上昇）しながら、落下状態でなおせめぎ合うハクノとユリウス。

CHECK▶ 重力の変化……上がり、落ちる、はかつてのSE.RA.PHの移動と、今のSE.RA.PHの移動の違いを示してのもの。

重力方向は元に戻り地上に向けて落下する二人。
着地の際、建物の屋根を突き破り、瓦礫の土砂の中でハクノはユリウスの胸を貫いている。
その顔はデッドフェイスでありながらも、強い意志に満ちたもの。
ユリウス、自分とハクノの違いに気づいてしまう。
いや。そもそもは先ほどの問答の時、『先に進む』と断言したハクノの姿（岸波白野の姿）を見た時に、彼の心はかつてのものに戻っていた。
故に戻ってしまった。生きる死人になる前の、ひとりきりで消えた死体に。

ユリウス「……ッ！」

血を吐くユリウスの顔からデッドフェイスが解除されていく。
ああ、と短く息を吐くユリウス。

ユリウス「死人は、何も変えられはしない。おまえも、そうだ……」

ハクノを睨むユリウス、崩壊していく。
じっとその最期を見つめるハクノ。

ユリウス「（おまえの姿は、オレの姿は）汚らしい、吐き気をもよおす憎しみだった」

ハクノ「……」

ハクノもデッドフェイス解除。

ユリウス「すぐに、おまえもオレになる」

捨て台詞を残して消えるユリウス。

無言のまま立ち尽くすハクノ。

中央広場

傷ついた体に鞭を打って広場に辿り着くハクノ。

そこにはハクノを待つセイバーの姿が。

ユリウスの最期の言葉に胸をえぐられたものの、セイバーの姿を見て穏やかさを取り戻すハクノ。

二人はリンとラニを待つが、二人はやってこない。

ネロ「リンとラニは来ぬか。旅の道連れは、どうやらここまでのようだ」

寂しげに告げるネロ。

セイバーの言葉にハクノも（寂しくはあるが）同意する。

そんな空気は感じ取っていたからだ。
二人はラダーに乗り、第五階層を後にする。

Cパート／第五階層

一方、リンとラニ。
第五階層のビルの屋上から、ラダーに向かうセイバーと白野を見届けている。
リン「私たちの役目はこれで終わり。やっとミッションを達成できたわ」
ラニ「……はい。正しいマスターを六層に到達させる。
　それが私たちの共通の目的でした。
　後は六層のマスターが彼らを歓迎するでしょう」
リン「……ええ。この世の地獄みたいなフロアだけどね」
ややや気乗りしないリン。
違和感に首をかしげるラニ。
ラニ「ミス・遠坂?」
リン「ごめん。私、もう少しアイツらに付き合うわ。
　ほら、自殺とかされたら困るでしょ?」

CHECK▶ 無論、そんな事は露とも思っていない。ラニへの方便、照れ隠しである。

ラニ「その可能性は考慮してませんでした。では、よろしくお願いします」
リン「ありがと。アナタも元気で――ううん、それはないか。
お疲れ様。一足先に休みなさい」
ラニ「はい。さようなら、ミス・遠坂」

リン、ラニを置いてラダーへ跳んでいき、ハクノたちの後にこっそり、ステルスしながらラダーの中に入る。
ラダーの扉が閉まり、ラダーは上へ上がっていく。
ラニ、それを見届けて消滅。

CHECK▶ リンがハクノたちに同行したのは、三階層からずっといた『個体』なのでハクノたちに感情移入してしまったため。

〈第九話／了〉

没案／ユリウス決着

ハクノとユリウスの決着、ハクノではなくユリウスに焦点をあてた場合はこうなる。
ハクノにとってユリウスは『岸波白野』を軸に背中合わせに存在するデッドフェイスだ。
ハクノから見て、ユリウスが過去の恩讐を繰り返す死人である事、
ユリウスにとっては誰が相手でもそれは岸波白野であり、岸波白野が相手であっても、それはもう見知らぬ誰かである、という状況に苛立ちと悼みを覚えている。
なのでユリウスと対峙した時、ハクノにはもう恐怖はなかったのだ。

ハクノ「正直、おまえの事はよく覚えていない。
でも――――（なぜか、悲しいと思うのだ）」

これはハクノの中で浮上した岸波白野の唯一の感情。
（岸波白野は最後にユリウスを友人とした。それを覚えている故の悲しみ）
戦いの末、ハクノがユリウスの胸を貫いた後。
ユリウスはようやく、ハクノをハクノとして認識する。

ハクノ「…………」

ハクノは語らない。だがその目が、ハクノのモデルになった誰かが告げている。
「最後に負けてしまってすまない。期待を裏切ってすまない。

でも、もう一度、あの頂きを目指してみせるよ』
と。
死人は殺せない。ただその恩讐を晴らす事だけだ。
最後に正気に戻ったユリウス、ハクノを見て、
ユリウス「……似ても、似つかんな」
「……そうか。そういう成り立ちか」
「難儀なことだ、岸波。オレなんぞより、よほど」
だがそれもおまえらしい、とやや困り笑いのまま崩れ去る。

〈没案ここまで〉

Characters06

キャラクター紹介



李書文

Li Shuwen

バーサーカー、李書文。本来はアサシンクラスで顕現していたサーヴァント。失った理性をユリウスが補っている。宝具は、『无二打』『猛虎硬爬山』。

『无二打』は戦闘開始時の何気ない初撃だが、この一撃には敵を内部から破壊する必殺の威力が秘められている。正体を知らない者にとってはまさに初撃必殺の宝具。

『猛虎硬爬山』は八極拳の秘門、奥義の一つ。虎が山を掻きむしるような初撃の動作がその名の由来。その一撃一撃が〝李書文という武人を出力先にした大地からのエネルギー〟である。

ユリウス・ベルキスク・ハーウェイ

Julius B Harway

聖杯戦争史上、最高のマスターと言われたレオ・ビスタリオ・ハーウェイの兄。マスターとなる前は地上で西欧財閥の私設部隊の隊長であり、自身もハーウェイの政敵を抹殺する殺し屋だった。聖杯戦争中も裏で多くのマスターを始末していた。

第五階層でセイバーと、彼女の以前のマスターに敗れたが、五階層最優のマスターとして蘇生させられるも、デッドフェイスとなり第五階層を徘徊するようになった。何度殺しても現れる「生き汚い」ものへの怒りを抱えながら。

聖杯戦争では五回戦で敗れるも、「ヤツであれば、あるいは」「ヤツになら、あるいは」と自分を乗り越えていった〝近しいもの〟に一縷の光を見たが、フロアマスターとして蘇生後、その〝近しいもの〟の結末を知り、苦しみの果てに妄執に囚われ、デッドフェイスとなった。

ユリウスには第五階層を訪れるマスターはすべて〝かつてこの階層で戦った対戦相手〟に見えていた。ただし、一〇〇〇年前の地上での因縁からか、遠坂リンだけは正しく認識できていたようだ。







岸波白野

Hakuno Kishinami

かつてのセイバー、ネロ・クラウディウスのマスター。その正体はウィザードでもなく、過去に存在した人間の再現、AIの一種——NPCだった。

岸浪ハクノと同様、聖杯戦争予選を終えても自身の過去を獲得できず、自分が誰かも分からず、聖杯にかける願いも分からないまま、それでも熾天の檻まで到達した。『最弱から始まり、やがて最強を破った』マスター。

デッドフェイス



岸波ハクノ

Hakuno Kishinami

岸波白野」ではなく彼女の要素を持った、生者への憎しみだけで構成された死の総体。多くの敗者、死者、蓄えられた膨大な敗戦記録。その記録の貯蔵が、SE.RA.PHの終わりを感じ取り、一〇〇〇年間でただ一度起きた変化。

彼が目覚めた時が辺獄――予選会場の最後の一日であり、彼が各階層で見た記憶は無数の敗者たちの記憶の断片である。一〇〇〇年間ただ一度の変化ではあったが、奇跡ではない。奇跡があったとすれば、それは彼が憎しみではなく、戦う意志を獲得したこと。窮地において生きる為に剣を手に取った事が、一〇〇〇年同じ結果をシミュレートとしていた辺獄における最大のバグであり奇跡である。

岸波ハクノは岸波白野ではない。けれどそれは偽物でも、まがい物でもなく、同じ感情、同じ心を持った、新しい『誰か』。どんなに見た目が変わろうとも、どんなに違う性質になろうとも、同じ魂を元にしたものは同じ結論に辿り着く。死にたくなく、何も分からないから上を目指してきた。

そして他の誰でもない『誰か』になるため、名前のないアナタは目覚めたのだ。

第九話 用語集

試写室
●ししゃしつ

ハクノが失意の中で辿り着いた記録。「キミは憎しみを知らない」という吐露に反応した誰かの余計なお世話。一〇〇〇年前に行われた聖杯戦争では校舎の中にあった視聴覚室であったとも。いまはやきそばパンだけが残されている。

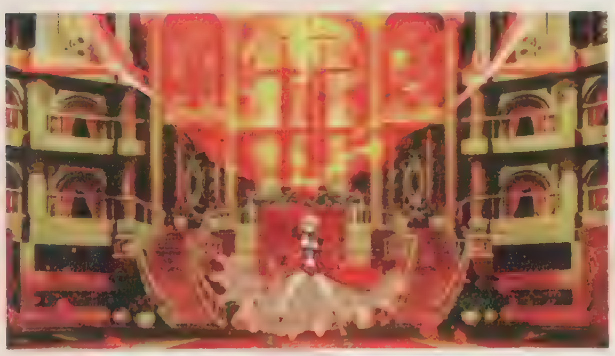
真名
●しんめい

サーヴァントの本当の名前。クラス名ではなく、英雄としての真実。これをサーヴァントから告げられ、マスターは本当の〝契約者〟となる。その告白は特別なものであり、正しい契約者のもの。

それ故、岸浪ハクノは最後まで――

招き蕩う黄金劇場
●まねきとろうおうごんげきじょう

セイバー、ネロ・クラウディウスの宝具。生前は思うままに生き、死後は『バビロンの大淫婦』と貶められた、ローマ帝国第五帝の人生・信条をカタチにした大魔術。ネロ帝が築き上げた黄金劇場を魔力で再構成し、この舞台の中でならすべての幸運・勝機が主役である彼女に傾くという決戦場。また、ネロ帝には『ローマの大火』という、ローマを襲った大火災を鎮めたエピソードもあり、そのため、炎の扱いに優れており、また炎の災厄に縁がある。





第十話　無限の――アンリミテッド・レイズ・デッド

第六階層 無限の墓

勝者は生を見失った。敗者は死を見失った。

心臓世界に鼓動は二つ。

もはや語る者のいない、「無限の――」

アバン／第六階層 現在

霧に包まれた第六階層、その中心。
リンとラニの共通のモノローグから開始する。
イメージ、他のマスターと戦い、倒し、殺すリン（ラニ）。
殺されるマスターたちは一回戦～五回戦のもの。
リン／ラニ「殺し合った。殺し合った。殺し合った」
「聖杯戦争に参加してからずっと、数え切れないぐらい、
他のマスターと殺し合った」
「それがこの戦いのルールであり、当然の事だと疑わなかった」
殺し合いのイメージ、リピート。
そのうち殺す相手がリン（ラニ）だけになっていく。
殺し合いを続けるたびに画面はどんどん曇っていく。
リン／ラニ「そうして一〇〇〇年。私たちは勝ち続けたけれど、勝者にはなれなかった」
「結局のところ。私たちはただ負けなかっただけで、
何に勝った訳でも、何を残した訳でもなかったのだ」
モノローグの締めと共に殺し合いのイメージ、終了。

CHECK▶ このリンのモノローグは作中の西暦二〇〇〇年の先進国にもあてはまる。「消費した。開拓した。発展した」「当然の事だと疑わなかった」「けど満たされた訳ではなく」「結局のところ、私たちは誰も、〝何の為に消費するのか〟というビジョンのないまま、二〇三〇年を迎えたのだ」という話。そのままトワイスの行動原理に繋がる。

× × ×

本編開始より九〇〇年ぐらい前の第六階層。
勝者不在（フロアマスター不在）のため、第六階層は曖昧な世界構造をしていた。
地面と空しかない世界。認識・在り方の曖昧さが濃霧となって世界を満たしている。
そんな世界（フロア）の中心にリンとラニがいる。
背の高い丸テーブルと椅子。（スタバにあるようなヤツ。座るとつま先が床に付かない）
二人はテーブルに向き合って座り、ごく自然に会話している。

CHECK▶ テーブルの上には第一～第五階層までのフロアデータが展開されている。これから下の層に向かおう、としているので。

あたりは濃霧ではあるが、テーブルに座る二人は爽やかな雰囲気に。イメージは昼下がりのカフェ。Ａパートでの第六階層の雰囲気とは真逆のものを。

リン「誰もいなくなっちゃったわね。
……ま、仕方ないって言えば仕方ないんだけど。
もっと早く、このカラクリに気がつけば良かった」

ラニ「過ぎた事を悔やんでも状況は変わりません。
私たちは自らの手で可能性を閉ざしてしまいましたが、
まだ希望が潰えた訳ではありません」

リン「分かってる。私とアナタではもう答えがでない。
観測者(ムーンセル)すらサジを投げてしまった。だから――」

ラニ「はい。再審は諦めて、新しい試合を始める必要があります。
その為には、どうしても――」

CHECK▶ リンとラニ以外のマスターが必要だ、と続きますが、台詞では語りません。

リン、第五階層から下の状況を語るか、テーブルに映し出されたデータを指で弾く。
リン、はあ、とため息をついて、

リン「それしかないか。じゃあしばらく休戦ね、ラニ」
ラニ「はい。『この私たち』に限って、の話ですが。
極めて実現性の低いミッションですが、お互い頑張りましょう」
穏やかに微笑むラニ。それにちょっと驚くリン。
ラニ「何か？」
リン「別に。ただ、アナタが笑ったところなんて初めて見たから。
今の、笑うところだった？」
指摘され、ラニも驚く。
ラニ「そうですね。うまく説明できませんが――そうするべきだと感じたのです」
それはリンとのおかしな友情でもあり、
これから困難な旅に向かうライバルへの餞（はなむけ）でもあったからだ。
リン、ラニのいわんとする事を汲んで、微笑む。
リン「おかしな話よね。私たち、お互いが世界で一番目障りな敵だったのに」
ラニ「だったのに、ではありません。現在進行形です」

CHECK▶ この二人が去った後もリンとラニは無限に殺し合うので。

まあね、と肩をすくめるリン。
椅子から降りてテーブルに背を向ける。

リン「行きましょう。まだ生きているマスターを見つけ出して、
この六層まで押し上げる。何を犠牲にしても、ね」

ラニ「はい。私たちが生きのびる為の、大切な生贄として」

CHECK▶ 生贄とは言っているが、意味合いは『殺される被害者』ではなく『辛い選択を背負ってもらう被害者』という意味。

ラニの不穏な言葉とともにシーン終了。ＯＰへ。

CHECK▶ このアバンで視聴者にはこのフロアが『リンとラニの話である事』『二人の今までの行動の理由』『やはりハクノを殺す為に第六階層まで導いてきた』というソースを提供し、十話全体の緊張感を提示する。

ムーンマイルラダー

第六階層に向かう途中。上昇していくラダー、ラダー内で眠るハクノ。
かつての敗北者たちの記録を通して、一〇〇〇年前の聖杯戦争での出来事を夢に見る。
聖杯戦争の舞台である校舎の屋上にいるリンとラニとハクノC（ハクノに見えるだけで、ここまで勝ち残った他のマスター）。
リンとラニがまだマスターとして『目的を持っていた』頃のエピソード。
ようは輝ける青春時代。

リン「？　どうして私が聖杯戦争に参加したかって？」
「そっか、言ってなかったわね。
私、地上では反政府側のウィザードだったの。テロリストってヤツね」
リン、画面手前、聞き手であるハクノCにやれやれ、と肩をすくめて語りかける。
ラニ「反政府……西欧財閥と敵対しているのですね、ミス・遠坂は。
では、月にはレオ・ビスタリオ・ハーウェイを追って？」
リン「ええ。西欧財閥のトップ、ハーウェイ家の次期当主。
そのレオが月に上がったってニュースを聞いたら追い掛けるしかないでしょ。
レオに聖杯を渡したらハーウェイの地上支配は盤石なものになる。

けど同時にチャンスでもあった。地上じゃガードが堅くて近寄れなかったけど、
ここなら一対一、ウィザードとしての戦いに持ち込める。
資源に関係なく、人間として純粋に強い方が勝ち残る戦いだものね」

ラニ「聖杯を手に入れる為にマスターになったのではないのですね」

ラニの答えに「まあね」と視線だけで答えるリン。

リン「私が言うのもなんだけど。未来を変えたかったのよ」

リンは語る。人類は停滞期に入り、資源は西欧財閥に管理され、二十世紀にあった『輝ける未来』を夢見るものはいなくなったと。

リン「子供たちがね、笑わないのよ。それで思ったの。
私たちが迎える一〇年後の世界は、きっと間違ってるって」
「そういう貴方たちは？」

ラニ「私は師の教えに従っただけです。
月の聖杯戦争に参加し、聖杯を手に入れよ、と」
「ただ――その過程で、師は人間を識れ、と残しました。
私はムーンセルに近しいもの。
本質的に人の心の機能を理解するコトはできませんが……」
「人として望みを探し、これを叶える。

……私には難しい事ですが、このオーダーには応えたい。
それは師が最後に抱いた、ただ一つの希望だったのですから」
今までお助けキャラだった二人の、『かつての姿』を見て彼女たちにも夢があったのだと、リンとラニのそれぞれの（感情的な）理由を知るハクノC。
今さらながらに気付く。
リン、ハクノCに穏やかな視線を向ける。
リン「それで、貴方は？　貴方の夢は、どんなものなの？」
シーン、ここで終了。

×　×　×

はた、とベッドで目を覚ますハクノ。
傍らにはセイバーの姿があり、リンとラニの姿はない。二人とは第五階層で別れているからだ。
ハクノとセイバーの会話。
黄金劇場がどういった宝具なのかをドヤ顔で説明するセイバー。
セイバー「もっと褒めよ！」
それにはいはいと誇らしげに応えながら、自分がデッドフェイスである事を受け止め、有効活用できないかと試行錯誤するハクノ。

今までの戦いを振り返って、ここぞという時で反撃できたのは『死の総体』としての経験から。これを的確に引き出せれば戦いも有利になるはず、と前向きなハクノ。だが少し焦っているようにも見える。

引き出しは山ほどあるが、同時に引き出しを開けられない、というのがハクノの長所であり短所。一つのスキルに集中すればプロフェッショナルな事はできる、という結論に。

CHECK▶ ここで治療のコードキャストも使える、というコトの提示をしておく。

ラダー～第六階層／到着

そんな話をしている中、ラダー停止。

いよいよ第六階層。扉が開き、第六階層の光景が広がる。

そこは一面の深い霧。全貌はまったく分からない。

数歩踏み出すと、地面が湖である事が分かる。不思議と沈まない。みんな大好きウユニ塩湖風。なぜって（もう思考していない）リンとラニの心象世界を設計図にしたフロアだから。地平線と空しかない寂しくも美しい世界設定。

しかし空は灰色、まわりは霧なので美しくはない。

霧の向こうに大きな崖（丘）が見える。当面の目的地(ランドマーク)はそれくらい。

セイバー「人の気配がまるでない。建物もない。廃墟の方がまだマシだ。
何もないのでは、そもそも人は生活できないのではないか！」

ハクノ「でも空にラダーは見当たらない。
ラダーが落ちていない、という事は――」

セイバー「うむ。この何もないフロアのどこかにマスターがいる、という事であろう。
しかしこれでは何も分からぬ。こういう時にリンがおれば――」

しかしリンもラニも第五階層で別れてしまった。リンがいなくなって彼女に頼り切りだった事に気付くハクノとセイバー。

CHECK▶ 実は後ろにいるけどね！

ここで尺に余裕があれば第六階層の状況から、一〇〇〇年もの間、このフロアはこのままだったのだろうか、という考察に。

ハクノ「一言で一〇〇〇年って言うけど、それは気の遠くなるような時間だ。
この六層だけじゃない。今までの階層だって」

人間の精神が一〇〇〇年もの〝ルーチン化した日常〟に耐えられるものなのか、という話

題に。
最初の一〇〇年は恐怖と不安。次の一〇〇年は安堵と法悦。そしてそこからは、ただ過ごしていくだけの倦怠と麻痺。最初の二〇〇年さえ越えれば、後は滅びるまで永遠に同じ時間を過ごせるのが人間だ、という話を。
無論、それでも生きている者には苦しみがある。第一階層のシンジ、第二階層のダン。傷を負ったまま『永遠』に滞在してしまった者は、ゆっくりと腐っていくしかない。それはこの第六階層にいるであろうマスターも同じだろう。
……みたいな会話をする。

遭遇

その時、セイバーの右側でコーン、と硬いものが硬いものにあたる。音が響くと何か落ちる音がする。

CHECK▶ これ、こっそり付いてきているリンがセイバーを助ける為に鳴らした音。助けない、と決めたクセにセイバーを助けてしまうリンであった。

セイバー「?」
振り返るセイバー。
そこへ、霧の中から赤い槍が突き出される。サーヴァント化したリン（敵）である。
咄嗟に剣で槍を弾き、ハクノの真横まで飛び退くセイバー。
ハクノ「サーヴァント!」
ハクノも身構える。
霧の中から現れたのはサーヴァント化したリン。

CHECK▶ このリンは第六階層から降りず、ずっとラニと戦っていた兵隊リンの一体。

驚きながらもリンと戦うセイバー。
実力はややセイバーが上だが、セイバーはリン相手では本気を出せない。
戦いはセイバーの防戦になり、ハクノもなぜリンがここにいるのか、なぜリンが襲ってきたのか、判断がつかず困惑する。
ハクノ（どうして遠坂がここに――!? 先回りしたのか!?）
（いや、待て。どうしてここにいるのか、なんて疑問は今さらだ。
問題はそこじゃない。問題は――）

（なぜ今になって敵対してきたかって事だ……！）

つまり第六階層の敵はリンなのか、といち早く悟るハクノ。

そんなハクノの背後に現れる巨大なシルエット。

セイバー「奏者よ、後ろだ！」

ハクノ「!?」

慌てて振り向くハクノ。背後に現れたのはサーヴァント化したラニ。

ラニ、その拳をハクノにたたき落とす。

ハクノ、咄嗟に避けてセイバーと合流。

セイバーはハクノを庇いながら、リンとラニと対峙する。

セイバー「二対一――事情は分からぬが、状況は明白だ。

あやつらは余と奏者を本気で殺そうとしている！」

どうする、というところで、おもむろにラニがリンを摑み、握り潰す。

仲間割れか!?　と驚くハクノたち。

ラニは残骸になったリンを投げ捨て、ハクノたちに一歩踏み出し――瞬間、霧の中から現れた複数のリンたちの攻撃を受け、息絶える。

複数のリンたちは目を光らせ、無表情にハクノたちに振り返る。明らかに殺される雰囲気。

セイバー「リン……！　これはどういう――」

ハクノ「セイバー、考えるのは後だ！」
ハクノ、セイバーの手を握って逃げ出す。
これを追い掛けるリンたちだが、現れたラニ二体目に阻まれ、リンとラニはまたも同士討ちを始める。

撤退～全容へ

襲い掛かってくるリンたち、立ちふさがる巨大ラニの漫然とした攻撃をすり抜けながら、息も絶え絶えで丘を登るハクノとセイバー。
ハクノはコードキャストで身体強化している。
丘を登り切ると、ようやく霧が少し晴れる。
丘と思われたのはクレーター状の盆地（東京一区画ぐらい？）で、盆地の中央には墓場が見える。
そして、墓場のまわりにあるもの——というか、今まであったものがはっきりと視認できる。
湖のような地面の下に沈んでいるものは無限とも言えるリンとラニの残骸。
この世界の地面はすべて、二人の残骸でできているのだと。

第六階層・丘の上

呆然と第六階層の惨状を見渡すセイバー。
ハクノの驚きはセイバーより深く、呆然というより戦慄。
ハクノは死の総体である為、この惨状を見て、リンとラニがどんな一〇〇〇年を過ごし、そして、どんな状態なのか予感してしまっている。
二人を追い掛けるように霧の向こうからリンとラニ（汎用タイプ）がやってくるのが分かる。
二人、盆地の斜面をすべりながらクレーター内へ逃げる。
逃げた先にもリンたちは居るため、二人の攻勢を躱しながらハクノとセイバーはとにかく走る。

セイバー「ああもう！　分からぬ事だらけの旅だったが、今回はお手上げだ！
　今まででいちばん訳が分からぬ！」

ハクノ「気持ちは分かる！　だから、なんでこんな事になったのか、考えたい！」

かんしゃくを起こすセイバー。

混乱しながらも冷静なハクノ。

CHECK▶ 完全に混乱していた場合『なんでこんな事になっているのかを考えたい』となるが、漠然と予感しているので『なんでこんな事になってしまったんだ』とリンたちの悲劇を踏まえた上での台詞になっている。

セイバー「う、うむ！　その通りだ、成長したな奏者よ！」

ハクノとセイバー、逃げのアクションをしながら考察。

ハクノ（リンとラニ、二人はもとマスターだ）
（おそらく六回戦まで勝ち上がっただろう。
どちらかがこのフロアのマスターである事は確実だ）

それは消去法的に分かる。しかし、

ハクノ（それがなぜこんなに沢山いるのか）
（そもそもなぜ、今まで自分たちに手を貸していたのか）

といった疑問が浮き彫りになる。

疑問を提示し、整理していくのはセイバー。セイバーが整理していく度にハクノの面持ちは深刻に、そして悲愴になっていく。

第六階層・巨大ラニの死体の下

なんとかリン&ラニの目から逃れ、物陰に潜み、体を休めるハクノとセイバー。
ハクノは完全に息が上がっており、セイバーも度重なる奇襲を防ぐ事で疲労している。(ハクノほどではないが息が上がっている)
疑問は解けないが、クレーターの上から見た時、中心部分のドームの周りにはリンたちの残骸はなかった。

ハクノ「理由は分からないけど、
あの遠坂とラニは中心部分には近づけないんじゃないか?」
セイバー「余にもそう見えたが……もしそうでなかった場合、逆に逃げ場がない。
なにしろ敵は、あの底意地の悪いリンだ。
罠という可能性の方が高いのではないか?」
ハクノ「む」
セイバーの指摘につい同意するハクノ。

CHECK▶ 一方、姿を隠しているリンは「ないわよ! 今回はハクノ君の直感が正しいわよ!」と拗ねている。

セイバー「……ともあれ、リンとラニ、どちらかがフロアマスターなのは確かなのだ。
あのリンたちが偽物だとしたら、どこかに本物がいる筈。
それを探さなくては」
ハクノ「……いや。たぶん二人は、みんな同じだと思う」
「偽物とかじゃなくて等価値なんだ。
単に『戦う事』に機能を振っているだけで、オレたちの知っている二人と
変わらない。襲いかかってくる二人も、埋め尽くされた残骸の二人も、
みんな同じなんだ」
セイバー「あの山のようにいるリン、そのすべてが本物と言いたいのだな。
……つまり？」
ハクノ「ああ。はじめから遠坂は量産型遠坂だったんじゃないないだろうか。
あるいはプラナリアみたいに分裂」
リン「んな訳ないでしょう、バカにしてるのアンタ!?」
ステルス状態だったリン、たまらずハクノの頭を殴る。
セイバー、ハクノ、びっくり。
リン「あ」
しまった、と顔を逸らし、ステルス状態に戻ろうとするリン。

セイバー「逃がすか！　諦めよ！」
リンに抱きついて捕まえるセイバー。
リン、観念して座り込む。
リン「……まったく。はいはい、私の負け私の負け。
観念して捕虜になるから、離してくれない？」
リン、セイバーを引きはがし、地面に座り込む。
言うまでもなくこのリンは第五階層までハクノたちに付き添ってきた個体。他の兵士タイプとは違う。
リン、自分たちが第六階層のフロアマスターである事、
自分とラニはハクノとセイバーを殺そうとしている事、
そしてドームまで逃げれば安全である事を語る。
リン「悪いけど、それ以外の質問には答えない。そのかわり嘘も言わない」
「私とラニにとって、ハクノ君は抹殺対象よ。
でも同時に、アナタたち二人がドームに辿り着く事が私たちのゴールでもある」
セイバー「ゴール？　ドームに入れば奏者は安全なのに、か？」
リン「ええ。どっちでも結果は同じだから。
アナタたちが第六階層に到達した時点で私たちの勝利条件はクリアされた。

「ハクノ君が生きるか死ぬかは正直どっちでもいい」

ハクノ「……本当に？」

事情を推理し、真相に気付いているハクノはリンの嘘に気付いている。
リンは事実を語っているが、その気持ちは隠しているのだ。

CHECK▶ リンとしてはここでハクノを殺せばラニではなく自分が勝者になるので、この後の『生殺与奪をハクノに委ねる』ギャンブルがなくなる。なのにリンはその優位性を語らず『どっちも同じこと』と嘘をついている。

リン「本当よ。だから連れて行ってあげる。
あのドームに入ればやるべき事は一つしかなくなるから」

リン、他人事のようにあっさり語る。

第六階層・中心ドーム前

リンの手引きでラニたちに見つからず、ドーム周辺まで辿り着くハクノ。
ドームは東京ドームよりやや小さい、ぐらいの大きさ。

入り口にあたるドア（大きなものではなく、研究施設に入るためのようなドア。セキュリティロックがかけられている）。
しかしドーム前にはサーヴァント化したラニが待ち受けている。
ラニと対峙するハクノ、セイバー、リン。

ラニ「なぜ彼らを助けるのです」
「今になってロジックエラーですか」

リン「違うわよ。アンタに勝たせたくないから助けたの。
まわりにいるのが私たちだったら、そっちに向けて尻を蹴飛ばしていたわ」

ラニを言葉で牽制しつつ、ドーム内に逃げ込むタイミングを計るリンたち。
ドームの扉のセキュリティカードはリンが持っている。ラニを数秒だけ食い止めれば扉は開き、中に入れる……という状況だが、

ラニ「……いいでしょう。先に進みなさい」
「どのようなカタチにせよ、選択をさせる事にかわりはないようですから」

ラニ、ハクノに向けていた矛の切っ先を外す。
三人、ラニの足下を抜けてドーム入り口へ。
その背中をこれまで通り、淡々と見送るラニ。だがその瞳はかすかな哀しみと、申し訳なさが隠れている。

ドーム内・ロビー

リンと共にドーム内に入るハクノとセイバー。
そして、奥に向かう前にリンから一騎打ちの申し出がある。
リン「この先に、上にあがる為の答えがある。でもその前に――」
「ここで私と戦いなさい。マスターとしてアナタに戦いを挑むわ」
これまでの一〇〇〇年と、聖杯戦争に挑むまでの一六年の自分へのけじめとして戦いを挑んでくるリン。
セイバーとサーヴァント化したリンの一騎打ち。
戦闘はそれこそ一分以内で終わるものに。
互いに無言で間合いの調整↓
必殺の気合いで踏み込むリン、槍の猛攻を裁き、反撃するセイバー↓
リン、セイバーのとどめの剣戟をギリギリで躱し、勝機とばかりにとっておきのゲイ・ボルク（四連。穂先が四つに分裂して相手を四方から穿つ）を放つ↓
しかしセイバー、ドレスを翻し、体をねじりながら、イバラの中をくぐるように四連ゲイ・ボルクを躱し、リンを斬り伏せる。
といった感じのもので決着。

戦闘中はいっさい台詞なしで。
敗れたリンだが即座に消滅はしない。(もう消滅一歩手前だが)
入り口広場で横たわり、ハクノたちに先を促す。
リン「お願い。私で……ううん、私たちで最後にして」
「正直ね。もう痛くて、苦しくて、泣き出す寸前だったの、私たち」
て へ、照れ隠しのような笑顔でハクノにそう告げて、リン消滅。

ドーム内・通路

無人のドーム通路を行くハクノとセイバー。
冷たく、簡素ではあるが、どことなくアクアリウムのような雰囲気。リンとの別れを経て、沈鬱な空気のハクノとセイバー。
二人が歩いていると、通路の壁にモニター(ホログラフィ)が浮かび、リンとラニのナビゲートが開始される。
ラニ「第六層の中心、心臓部分へようこそ、名も知らぬマスター。
名前すらお呼びできない歓迎ですが、どうかご了承のほどを」
映像と音声はリンとラニが、『いずれ来るかもしれないマスター』に向けて制作したもの

だった。
廊下を進みながら、この第六階層で何があったのかを伝えるリンとラニ（の映像）。
×××
もともと第六階層は彼女たちが同時に勝ち上がり、戦った階層だった。
問題はこの戦いの勝敗があやふやだった事だ。
リンもラニも、ムーンセルですら、二人の実力が伯仲すぎて『どちらが勝ったのか』を判別できなかった。
結果、勝者であり敗者である彼女たちは六回戦から抜け出る事……死んで消える事も、勝者として第七階層に上がる事もなく、曖昧な状態で決戦場にて『戦闘後の仮死状態』のまま保護された。
その後、トワイスによるSE.RA.PH占拠が起こり、聖杯戦争は停止。
ムーンセルからのリソース供給を制限された第六階層は残された機能をフル動員しフロアの維持にあたったが、その時、『保護されていたマスター二人』を優秀な魔術回路を持つユニットとして誤認し、第六階層の中心部分の補助装置として組み込んでしまった。
生体ユニットとして蘇生した二人は『第六階層そのもの』になりつつ、マスターとしての行動を再開した。
即ち、対戦相手であるラニ（リン）を倒し、第七階層に上がる、という最初の目的だ。

二人の本体は夢を見るカタチで自分の分身（アバター）を作成し、ラニ（リン）と戦いを再開した。
殺し、殺される関係である。
タイプは違えど、互いに優れた魔術師である二人の生存競争、性能競争は凄まじいものだった。
二人は聖杯戦争で失ったサーヴァントのデータを自身に組み込み、疑似サーヴァントとして戦うようになった。
絶え間ない自己研磨。絶え間ない最適化。
一度の戦いが一分で終わる事もあれば、一年も続く事があった。
二人が生み出す分身（アバター）は数を増やしていき、戦いは並列化し、第六階層のいたるところで大小のリン、ラニによる戦いが行われた。
その様は正しく『戦争』と呼べるものだっただろう。
しかし何度相手を殺しても、何度相手に殺されても勝者としてカウントされる事はない。
自由になる事もできず、死ぬ事もできない。
そうして一〇〇〇年ほど経過した時、二人は「ラニ（リン）」を倒しても倒されても、それはもう『結果のでなかった事』なのでカウントされないのだ、と結論する。
リンたちが解放されるにはもう一人、まだ『勝者として残っているマスター』が必要だったのだ。

しかし第六階層にはもうマスターはいない。
一〇〇年ほど前だったらまだ数名はいたかもしれないが、彼らはこの一〇〇年のうちに第七階層を目指す事を諦め、下の階層に逃げ出してしまったのだ。
大元のリンとラニはもはや生きる屍。
生体ユニットとして第六階層を運営し、自分の分身を造り、疑似サーヴァントとして使役し、殺し合っている。
大元の体の魂は仮死状態なので、『意識があって本物と言える』のはサーヴァント化している分身たちだ。
システム化したかつて自分だったものにサーヴァントとして永遠に戦わされ続けるリンとラニ。まさに無限の残骸。
だが、この無限の殺し合いもどちらかの本体を殺せば終わる。
リンとラニがハクノたちを第六階層まで導いた理由はそこにあった。

×××

通路を進む中、ホログラフイたちのメッセージは続く。

リン「残された私たちは、無限とも言える殺し合いの果てに考えました」
「下の階層にかつての自分と同じアバターを送り込み、まだ聖杯戦争を――
戦う事を、上に上がる事を諦めていないマスターを探し出し、ここまで導こう

しかし第六階層にはもうマスターはいない。
一〇〇年ほど前だったらまだ数名はいたかもしれないが、彼らはこの一〇〇年のうちに第七階層を目指す事を諦め、下の階層に逃げ出してしまったのだ。
大元のリンとラニはもはや生きる屍。
生体ユニットとして第六階層を運営し、自分の分身を造り、疑似サーヴァントとして使役し、殺し合っている。
大元の体の魂は仮死状態なので、『意識があって本物と言える』のはサーヴァント化している分身たちだ。
システム化したかつて自分だったものにサーヴァントとして永遠に戦わされ続けるリンとラニ。まさに無限の残骸。
だが、この無限の殺し合いもどちらかの本体を殺せば終わる。
リンとラニがハクノたちを第六階層まで導いた理由はそこにあった。

×××

通路を進む中、ホログラフィたちのメッセージは続く。

リン「残された私たちは、無限とも言える殺し合いの果てに考えました」
「下の階層にかつての自分と同じアバターを送り込み、まだ聖杯戦争を――
戦う事を、上に上がる事を諦めていないマスターを探し出し、ここまで導こう

と」

ラニ「アナタが私たちのどちらかに倒されれば、
アナタを倒した方は〝勝者〟としてこの六層から解放されるでしょう」

リン「アナタが私たちのどちらかを倒せば、アナタに殺された側は〝敗者〟として
この六層から解放されるでしょう」

リン／ラニ「どちらでも私たちには同じ事です。
勝手な言い分だと承知していますが、どうかお礼を言わせてください。
ありがとう、名も知らぬアナタ。
アナタがこの六層に到達した時点で、私たちの目的は果たされたのです」

二人の目的と真相を知り、憤りと悲しみに襲われるハクノ。
夢で垣間見た、一〇〇〇年前のふたり――
希望に満ちていた頃のリンとラニの笑顔が脳裏によぎる。
その結果がこんな場所で、誰にも知られないまま、残骸で世界を埋めるほどの殺し合いを
続けてきたのか、と。

心臓世界アストライア

通路は終わり、中心部——第六階層中枢・心臓世界アストライアに辿り着く。
そこにはリンとラニの大元（オリジナル）の肉体が眠っている。
茨のように密集したコード類が小高い丘になり、
それぞれ棺のように彼女たちの周囲を覆っている。

CHECK▶ 眠れる森の美女（原題：茨姫）のオマージュ。

二人の映像は語る。
リン／ラニ「お願い。アナタの手で、勝者を選んで」
ハクノの手でどちらかの本体を殺してほしい、と語るリン&ラニ。
そうすれば残ったものが勝者となり生き残れる。
ハクノ「……殺せって言うんだな、どちらかを」
第一階層からここまで、二人はそのために——自分たちを殺すためにハクノを導いてきたのか、と理解するハクノ。
その表情には苦悩と怒りが滲んでいる。リンたちに裏切られた・利用されたとはまったく

思っていない。ただこの結末、この事実を受け入れたくないだけだ。
歯を食いしばって二人の棺を見つめるハクノ。
セイバーも気をもんでいるが、じっとハクノを見守る。
ハクノ、一〇〇〇年前の二人の姿と、現在の今も殺し合う二人の姿を思い返す。
希望に満ちていた二人と、絶望に陥ってからも諦めなかった二人。
自分可愛さだけなら、二人は永遠にここに残っていただろう。
それでも彼女たちは行動を起こした。
無為には生きない、という、人間として当然の事。
誰に言われるまでもなく、間違っている〝全て〟を正す為に。

ハクノ「――――」

その決意を今さらながら理解し、奥歯をかみしめるハクノ。
やらなければならない。選ばなければならない。
二人の一〇〇〇年に敬意を表するのなら、ハクノは選ばなければならない。
上に上がるために、そして、リンとラニの聖杯戦争を終わらせるために。
カメラ、暗転。

解放～目覚め

シーン再開。リン視点。

カメラ、棺で眠っていたオリジナルのリンの横顔から。

リン「ん……（ブレス芝居）」

静かに瞳をあけるリン（大元）。

リン、静かに体を起こし、自分の手を動かして生きている事を確認し、周囲を見渡す。

CHECK▶ オリジナルはそれぞれの分身からの情報のフィードバックを受けていたので、目が覚めた瞬間、これまでのハクノとの出来事を『自分の経験』として受け入れている。

茨の丘の下にはハクノが跪いている。

ラニの棺には光は射していない。ただ空洞のような闇が埋まっている。

リン、それで状況を察した。

ハクノはリンを助けるため、ラニを殺したのだと。

リン、ハクノの元まで歩いていく。

ようやく自由になったリンと、静かに涙を流して悲しみに耐えるハクノ。

リン「あなたに責任はないわ。これは私とラニ、二人で選んだ事なんだから。
アナタには酷い役回りを押しつけちゃったけど――」
ハクノ「……それは違う。オレは、ラニを助けられなかった」
リン「？」
ハクノ「……彼女の方は、体の損傷が激しかった。オレは、君しか助けられなかった」
ハクノはどちらかを殺す事でどちらかを生かしたのではない。

×××

ここでシーン、数分戻る。
ハクノはリンの傷を修復した後、すぐさまラニの治療に走ったのだ。
第六階層と同化しているケーブルを解き、治療術式に移る。
しかしラニの心臓にあたる部分（霊基核）はアトラス院の至宝、オシリスの涙と言われる光子収束体で、その構造はムーンセルと同ランクのものだった。
疑似霊子より上のランクのものをハクノは治せない。
死の総体、敗北者たちの中に、これを修復できる技術を持つ者はいない。
ラニを修復できるものはムーンセルだけ――つまり、ラニは勝者にならなければ助けられない命だったのだ。
必死にラニの心臓を修復しようとするも、ラニの体は末端から消えていく。第六階層から

分離した事で、本来の『死亡状態』に戻りつつある。
ハクノは自分の選択の間違いを呪いながら、ラニの修復に全霊を傾ける。
ラニ、目を覚まし、そんなハクノに微笑みかける。
ラニ「どうか悲しまないで。アナタの選択は間違いではありません。
　——いえ。
　他人を消す事だけを考えていた私たちより、遥かに正しい選択です」
そっとハクノの頬に手に触れて、治療行為を止めるラニ。（泣いているハクノをあやすように）
ハクノ、涙をこらえているため、ラニに言葉を返せない。
ラニ「……でも、良かった。一つ、残念な事があったのです。
　第二階層で見送りは済ませていましたが……
　お別れの言葉を、伝えていませんでした」
「さようなら、輝ける星。
アナタのこれまでの戦いと、これからの戦いに幸運を」
「私たちは、人間は、これでいいのです」
「これは、たったひとりの生者を、送り出すためのお話でした」

CHECK▼最後の台詞はハクノにかけたものだが、最終話において、ハクノにとっては違う意味を持つようになる。

ラニ、完全に消滅。
光るデータの粒子だけが僅かに残る。

×　×　×

シーン戻る。
事の顛末に気づき、愕然とするリン。
ハクノはラニを殺したのではなく、死体同然だったリンを蘇生させた。
同じようにラニを救おうとしたが、それは不可能だった。
殺して解決するのではなく、生かす事で解決しようとした。
結果は同じだが、その方法は真逆の発想だったのだ、と。

リン（私がアナタを殺す。ラニがアナタを殺す。
あるいは、アナタが私たちのどちらかを殺す――なんでもいい。
結果はどうせ同じになる。
私たちのどちらかは、それでこの六層から解放される）
（……でも、違った。結果は同じでも、その先の在り方が違った。

（私たちは生き残る道を選んだ。でもアナタは、生き続ける事を望んだのね）

リン、心臓世界に差し込む天からの光を見上げながら、ハクノの行動に感謝する。

自分の命を助けてもらった事ではない。

その選択ができる人間がまだいたこと。

そんな人間が、自分等を看取ってくれた事に感謝したのだ。

とはいえ、ここで涙を流すほどリンは自分に甘くはない。

毅然とした表情で、『これからの自分が採るべき道』を決意するのだった。

CHECK▶ リンが涙ぐむのはここではなく最終話のみ。

Cパート

第六階層、ドーム前。既にラダーが降りている。

ラダーの扉のすぐ近くには、先ほどのサーヴァント型ラニのものだろう残骸。

セイバー「オリジナルを失って自壊したのだな」

寂しい表情のセイバー。目を細めるハクノ。

ハクノとセイバー、ラニを弔う。

CHECK▶この戦いの結果、ハクノの考えは完全に前向きになる。セイバーの助けやマスターたちとの戦いを経て、たとえゴールについたら死ぬとしても『始めるために』『生きるために』ゴールを目指すんだ、と言えるようになる。

セイバー、そんなハクノを見て誇らしげに微笑む。

CHECK▶ラニの最後の言葉をリフレインし、その通りだ、と頷くセイバー。

少し離れた場所に、リンが佇んでいる。

リン「(呟く)お墓まで作ってくれちゃって」

リンの視線の先には、墓標。

リン「(呟く)ここまでされちゃあ……」

セイバー「リンよ! 我らは上へあがるが、貴様はどうするのだ」

セイバー、ラダーの扉から声を掛けてくる。

リン「……ラニ。アナタの為に、生きている私は私にできる事をするわ」

リン、セイバーの隣にいるハクノを見る。

ハクノは空を見上げている。

リン「彼の残りの戦いをサポートする。最後までね。それが、私の――」

墓標へ顔を寄せて、『私のこれからの役目』と声には出さず唇を動かすリン。

そして、ラダーへと歩いていく――

〈第十話／了〉

Characters07

キャラクター紹介



遠坂リン

Rin Tohsaka

一〇〇〇年前。地上ではテロリスト——反政府側のウィザードとして活動していた。彼女が月の聖杯戦争に参加した理由、それは西欧財閥のトップ、レオナルド・ビスタリオ・ハーウェイを追い、西欧財閥に管理され停滞期に入った『未来』を変えるため。

遠坂リンとラニ＝Ⅷは、同時に勝ち上がり、戦い合った。しかしその勝敗はムーンセルにも判定することができなかった。いずれかが死ぬことも勝ち上がることもなく、仮死状態で保護された時点で聖杯戦争が停止。二人はフロアを維持するための補助装置として組み込みまれた。

二人は微睡みの中で自己を再定義し、階層そのものであると同時にマスターであるとして、各々のアバターを戦わせた。しかし、既に引き分けの判定が出ている以上、その闘争に意味は



ない。生体ユニットと化した二人には、永遠無限に殺し合い、永遠無限に残骸を増やし続ける選択肢しか残されていなかった。

しかし、自己改造と自己強化も際だった変化を見せなくなった五〇〇年前。彼女たちは、ひとつの共通の目的を掲げて休戦協定を結んだ。ミッションはただ一つ。第一階層から第五階層までに分身を派遣し、まだ生きているマスターを見つけ出し、彼女たちの本体が待つ第六階層まで押し上げる、というものだ。

リンは第五階層、第三階層、第一階層の担当。（協力関係にあるといってもラニとはライバルなので、第二階層、第四階層ではステルス機能で姿を眩ませていた。第六階層でもステルスで身を隠していたが、ハクノの心ない言葉によってつい姿を現してしまい、捕縛された）

彼女たちが望んだものは明確な「結末」だった。あまりにも歪な、ただ死なないだけの「無限の生」から解放される為の。



ラニ＝Ⅷ

Rani Ⅷ

現代にまで魔術を伝えていたアトラス院の最後の魔術師。人間の手で作られた人造生命、ホムンクルスである。電脳魔術師（ウィザード）として最高スペックを与えられ、魔術師としてのスペックだけならレオナルド・ビスタリオ・ハーウェイを上回る。一〇〇〇年前、「月の聖杯を得よ」「人間を識れ」という、師の教えによって聖杯戦争へと参加した。

『月の聖杯が手に入らないものであれば破壊せよ』という隠された使命を持ち、その為に彼女の心臓部分は極めて高密度の霊子集合体で出来ている。これはムーンセルの技術体系とは異なるアトラス院の最奥であり、暴走させればSE.RA.PHを破壊し、熾天の檻で使用すればムーンセル自体にも多大なダメージを与える。

ハクノがリンの心臓の治療はできて



もラニの心臓の治療ができなかったのはこのため。あまりにも複雑な構造であった為、治療はできず、ただ死にいくラニを看取るしかなかった。

分身の担当地区は第五階層、第四階層、第三階層。リンと違い義理人情のパラメーターを優先しない（感じてはいるが第一としない）為、第四階層、第五階層ではハクノたちに付いていく事はなく、ミッションは次の分身（じぶん）に託していた。

「けれど、アトラス院の使命とアナタの使命は別のものです。可能であるなら人としての望みを探し、これを叶えなさい。それがアナタを残して先に消える、母としての望みです」。寿命により死に瀕したラニの師はそうも残した。

運命を変える星。あるいは、運命を乗り越える星。彼女は最期に、その行く末を眩しそうに見届けた。

無限の――

●むげんの――

無限の残骸。実力伯仲だった二名のマスターの戦いの末路。勝者を輩出する事なく、敗者を決定する事なく、ただ、戦いに敗れたそれぞれの遺体が積み重なる無人の第六階層。



一〇〇〇年前の聖杯戦争で遠坂リンとラニ＝Ⅷはこのフロアで対決したが、その結果は完全なる引き分けだった。互いにサーヴァントを失い、互いに致命傷を与えた両名は、『勝者でもなく敗者でもない者』としてカウントされてしまった。その後、トワイス・ピースマンの手で聖杯戦争が停止し、ムーンセルは第六階層でもっとも優れたマスターであるリンとラニをフロアマスターとして選んだ。死の直前にある両者はフロアの核として採用され、第六階層は彼女たちの世界に再構成された。

リンとラニが自分たちの状態（フロア化している事）を把握するまで数十年のラグがあり、その間、第六階層にいた数少ないマスターたちは第七階層に向かったか、下層に避難した。

死の直前でフロアと同化したリンとラニの本体（オリジナル）の意識は、いまだ『聖杯戦争』のただ中にある。彼女たちは霧のかかった意識のまま、本能に従い、代理となる分身（アバター）を作成。勝敗を明らかにする為、戦闘を再開したのだが、何年、何十年、何百年と戦いを繰り返しても、彼女たちが勝者としてフロアから解

放される時は来なかった。

五〇〇年の殺し合いが続き、彼女たちもようやく状況を諦めた。自分たちではもう判定は覆らない。リン（ラニ）を殺したところでラニ（リン）が勝者になる事はない。彼女たちが『勝者』か『敗者』になる方法はただ一つ。第六階層まであがってきたマスターと戦い、これを倒して勝者としてカウントされるか、倒されて敗者としてカウントされるかだけである。

分身
●アバター

リンとラニの今の姿。数百年にも及ぶ、自己改造と自己強化のなれの果て。フロアとなった彼女たちは生体工場となり、ライバルであるリン（ラニ）を上回るため自身の電脳体を改良し続け、その果てに自らをサーヴァント化した。

すでにサーヴァントを失っていた彼女たちは、かつて契約していた英霊の要素を自身の電脳体に植え付け、融合させている。その有様は成長というより、工場で出荷される兵器のようなもの。自己改造は本体（オリジナル）そのものから始まり、彼女たちは生きたまま違うものに組み替えられる痛みと恐怖を幾度となく繰り返し、今の最適解の電脳体に落ち着いた。長いトライアルの末、リンはスキルに特化したサーヴァントスタイルを選び、ラニはパワーに特化したサーヴァントスタイルを選んだようだ。



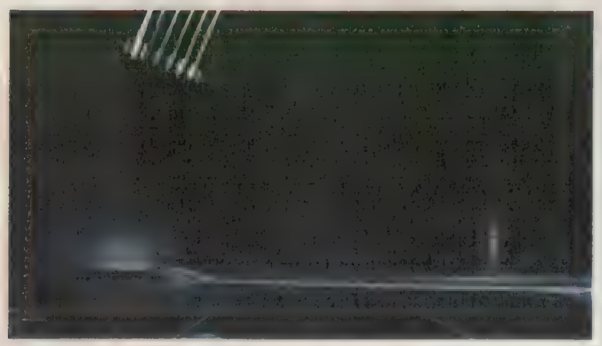
各階層でハクノとセイバーに協力していたのは、第六階層から下層に向けて派遣されたこの分身である。SE.RA.PHは一方通行の為、第一

階層にひとりずつ分身を派遣していた。その目的は言うまでもなく、『新しいマスター』を第六階層にまで到達させる為だった。

心臓世界アストライア

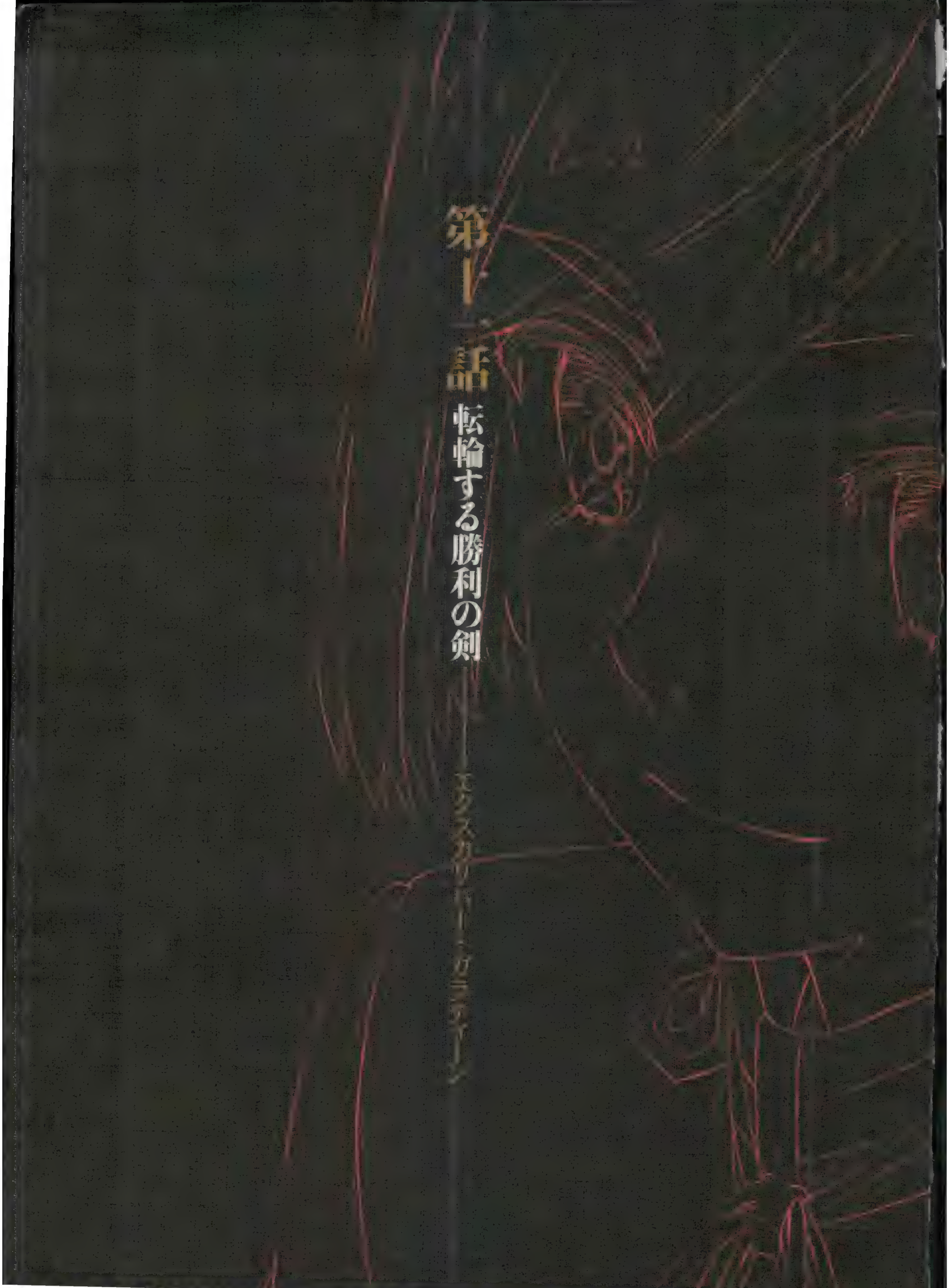
●しんぞうせかいアストライア

　第六階層の中心にあるドーム。リンとラニの本体が安置されており、分身たちはこのドーム



に入る事を本能的に恐れている。いかに代理といえ、分身（借り物）が本物に近づき、これを直視しようとした時、自己矛盾により砕け散る可能性があった為だ。また、分身たちでは本体に干渉する事はできないため、自殺する事も叶わなかった。

　フロアの心臓部分であり、この天秤の上からどちらかが欠けた時、第六階層は崩壊する。分身たちは消滅の際、蓄積した情報・記憶を本体に送り届ける。分身たちの行いはすべて、眠り続ける本体にフィードバックされる構造になっている。



第十二話 転輪する勝利の剣

――エクスカリバー・ガラティーン

第七階層 太陽の頂

王は完成し眠りについた。

騎士は錆びながら目覚めを待った。

七天の終わりに夜は明ける。いざ、「太陽の頂」へ。

アバン／ムーンマイルラダー

第七階層に向かって上昇するラダー内部。
ハクノとセイバーの最後のイチャイチャ。今までのシーンと同じ、意味は無いが温かなトーク。
……から、リンによる第七階層の説明が入る。

CHECK▶ リンはこれから自分も戦えるように自分の体（電脳体）を調整中。自分を改造しつつのトークなので、ハクノ&セイバーが同じテーブルにいるとしたら、リンは離れたテーブルにひとりでいる。

リン「暢気なものね。もうじき最後の階層、
聖杯戦争のフィナーレと言われた第七階層だっていうのに」
セイバー「怯えるよりは良いであろう。そういうリンは用心しているようだが？」
リン「まあね。私も直接見てはいないけど、上の事はそれなりに調べていたから」
リン、第七階層の情報を語る。
リン「一二八人のマスターたちの中で、最強の二人だけが辿り着ける場所。
……当然、そこのフロアマスターは文字通り、
〝聖杯戦争の歴史の中で最強の〟マスターと言えるでしょう」

ハクノ、なんとなくフロアマスターは第六階層で終わりだと思っていたので意外に思いつつ、リンに問いかける。

ハクノ「第七階層のフロアマスターはどんなヤツなんだ？
その、遠坂たちより強い？」

リン「……まあね。正直、私にもラニにも勝ち目はなかったと思う。
スペックも経験も文句なしに上。誰もがアイツの前では戦う前に負けていた」
「本当ならムーンセル中枢に至って、トワイスをさえ倒して、
あっさり世界を救っていたかもしれないマスター――――」

リンの言い回しでハクノ、それが誰か察しがつく。
ハッとするハクノの後ろに（じっとリンを見つめる）岸波白野の姿があってもいい。

リン「レオ・ビスタリオ・ハーウェイ。
私の標的であり、なぜか岸波白野に勝利を譲った、
地上の救世主になる筈だった少年よ」

岸波白野の記憶、回想

一〇〇〇年前の聖杯戦争・第七回戦の回想。

決戦場でレオと対峙する白野。
ここでレオと白野の戦い、救世主と凡人の対比を見せる。
聖杯で地上を救うというレオのスタンスと、
目的のない白野との比較。
どちらが勝ち残るに相応しいのか？　当然、レオである。
レオの行いはすべて正しく、白野の行いは利己主義と断じられるモノだった。
その上で白野はレオを倒し、上に進む。

CHECK▶ここでの描写はとにかくレオとガウェインは圧倒的で、白野は最後の一太刀以外は何一つ敵わなかった、というものに。

CHECK▶可能であればこの後、岸波白野の最期としてトワイス戦まで回想したい。（第一話アバンの戦い）

熾天の檻に辿り着いた白野を迎えるトワイス。
トワイスは「人類に戦争を与えるために地上に干渉してきたけど誰も思想の後継者がこないからもういい、諦めた」、「これからSE.RA.PHを停止させ、地上人類を終わらせる」と語る。

トワイスのサーヴァントの宝具、天輪聖王もここでハッキリと見せる。
トワイスに敗れる白野。SE.RA.PHが崩壊する瞬間。
白野の、勝ち残るべきは自分ではなかった、という悔恨。

ムーンマイルラダー

回想終わり、ラダー内に。
リンの台詞から、『白野とレオ』の戦いの断片をフラッシュバックしたハクノ。
ハクノ「……」
頭痛に顔をしかめるハクノと、それを見てリン、
リン「覚えているの？　レオの事」
ハクノ「……いや。それより、勝ちを譲ったっていうのは？」
リン「データだけ見るとそうとしか思えないのよ。そのあたりどうなのセイバー？」
リンの追及。セイバーは目を閉じて、ふるふると首を振る。
〝真相は自分には分からない〟というジェスチャー。
セイバー「勝利を譲られた訳ではない。
余とマスターは実力でレオとそのサーヴァントに打ち勝った。

だが、しかし――――」

「決戦の日になって、あやつの王聖は陰っていた。

あの絶対の王者が有り得ない隙を見せたのは、それが原因だろう」

重苦しいセイバーの返答。

セイバー自身、レオ&ガウェインとの戦いは得心がいかないものだった。

勝利したのは事実だが、それは自分たちが勝ったのではなく、敵が自分から足を踏み外したようなものだからだ。

ハクノ「でもセイバーはレオたちに勝った。

それならレオはもう死んでいるんじゃないのか」

リン「……分からない。六層から調べたかぎり、

七層にはマスターの反応が一つだけ残っていた。IDはレオのものよ。

セイバー。貴女と貴女のマスターは、レオたちにトドメは刺したの？」

セイバー「――――いや。あやつは自ら敗北を宣言し、

ムーンセルに灼かれる道を選んだ。余とマスターが見たものは」

映像。ファイヤーウォールの向こうで白野とセイバーを見送るレオ。

セイバー「攻性防壁に灼かれる、あの従者の姿だけだ」

リン「消滅する所は確認していない……か」

「果たして生きているのか、死んでいるのか。
私のように生き延びたのか、死人として残っているのか。
どっちにしろ、簡単には行かなさそうね」

ここでラダーの上昇、ストップする。
ガコン、という震動と共に扉がアンロックからオープン表示に切り替わる。
音を立てて開いていくラダーの壁。
差し込む強烈な（黄昏の）光。光に目を細め、開けるハクノたち。
一行の目の前には雄大な景色の山々、第七階層・『太陽の頂』が広がっていた。

第七階層・スタート地点

第七階層、黄金の海に囲まれた、大小の剣の山が乱立した世界。
雲海の上に、いくつもの山の頂（いただき）が見えている。
ひときわ高い山の頂に神殿跡があり、そこが第七階層のゴール、決戦場となる。
チャクラ・ヴァルティンの全容もここではっきりと視認できる。
ラダーが到着したのは標高二〇〇〇メートルほどの山の頂上。
野原っぽくなっていて、ここから更に高い標高の山々へと道が延びている。（道は吊り橋か、

単なる崖道でもよし）
雲海に見える山々の中心には一際高い山があり、その頂点に太陽がさしかかっている。
第七階層は永遠の黄昏なので太陽は山の頂から動かない。

×××

目の前に広がる風景に息を呑むハクノ。
ついに来たな、と静かに闘志を燃やすセイバー。
リンも柄にもなく少し感動してから、「いやいや、何してんだ私」と首を振って気合いを入れ直す。まだ少しだけ頼りないハクノとセイバーをフォローする、という使命感からくるものだ。

リン「感慨に耽っている余裕はないわよ。
ここは前人未踏、一〇〇〇年の間誰も届かなかった頂点なんだから」

CHECK▶ SE.RA.PH崩壊から前人未踏、という意味。まあ、第六階層にあがってきた数少ない挑戦者たちはリンとラニの怪獣大決戦を見て「こらアカン」と撤退したので、責任の一端はリンたちにもあるけどね！

リン、自らを鼓舞するように一歩踏み出す。

ハクノもそれに続くが、ふとポケットに違和感を覚える。が、違和感がなんなのか分からずスルー。

CHECK▶ ハクノのポケットに入っているナーサリー・ライムの青い栞、ぼんやりと輝く。

×　×　×

ラダーが出たところは山の頂の野原ではあるが、ガーデンにもなっている。
第七階層の景色に圧倒されていたハクノだが、ふと視線を落として周囲を見ると、そこには人影が一つ。
ローブ、フードを被った人物が、鳥たちに囲まれながら庭園の花々に水をやっている。
ガウェインである。

CHECK▶ 隠者のようなみすぼらしさ。あれから一〇〇〇年経っているので。デザインとして可能であれば『片腕は義手』『片足も不自由』がよい。この段階でもう戦えないように見せる。

CHECK▶ また、このガーデンの奥にはレオの墓がある。自ら棺に入ったレオの言葉に従ってガウェインが作ったものだが、ガウェインはレオの眠りは仮初めのものと分かって（信じて）いるので墓は手

入れされておらず、苔むしている。

ハクノたちに向き直り、穏やかに呟くガウェイン。

ガウェイン「おや。閉じた筈の扉が開くとは。
　しかも今日という、SE.RA.PHが終わる最後の日に」

敵！　と身構えるハクノたちだが、ガウェインは両手を広げてハクノたちを迎え入れる。

ガウェイン、内面では『最後によくぞ間に合ってくれた。これでレオの行いにも意義ができる』という喜びと感謝でいっぱいだが、隠している。

ガウェイン「ようこそ、最初にして最後の挑戦者。貴方がたの到来を歓迎しましょう」

穏やかなガウェインの言葉に警戒を解くハクノとリン。

姿こそくたびれているが、その清廉潔白とした振る舞いは少しも損なわれていない。

一方、セイバーはガウェインと聞いて目を見張り、二人を庇うように前に出る。

セイバー「油断するな、二人とも！」
　「あまりの変わりように目を疑ったが、余が貴様を見間違う筈がない！」
　「そうであろう、太陽の騎士！
　レオナルド・ビスタリオ・ハーウェイの従者（サーヴァント）、白銀のセイバーよ！」

セイバーの言葉に驚くハクノとリン。

ガウェイン、目を閉じてセイバーの言葉を受け止め、
ガウェイン「……そうでしたか。貴方でしたか、薔薇の皇帝。
　懲りずにもう一度、この頂にやってきたとは」
ガウェイン、静かにローブの胸元を開く。
そこには抉られたような剣の傷跡が。
かつてネロ（セイバー）によって付けられた致命傷である。
ガウェイン「ご覧の通り、私は単身では戦えぬ体。
　そのように警戒する必要はありません」
「彼女の言う通り、私はセイバーのサーヴァント。
真名をガウェインと申します。
ですが、理由もなく剣を振るう気概も、理由も、今は失って久しい」
「どうでしょう、食事でも。
　とはいえ、あまり贅沢はなものはないのですが」
ニコリと微笑み、アフターヌーンティーの準備をしようとするガウェイン。
リン「結構よ」
断ろうとするリンだが、
セイバー「うむ、受けよう！　歓迎、大義である！」

ずいっと前に出て応じてしまうセイバー。せっかくの食事だしね。

ガウェインとの茶会

決戦の場だというのにアフターヌーンティーに付き合うハクノたち。

ガウェイン「下の様子はどうでしたか？
　ここからでは分からないので、教えていただければ幸いです」

ハクノ、第六階層までの状況を語る。

ガウェイン、なるほど、と何事もなかったように受け入れる。

ガウェイン「この頂きから見えるものは地上の様子だけでした。
　地上の文明は衰退し、新しいフロンティアになる筈だった
SE.RA.PHの新世界も、停滞の末消え去った」
「人類はここまでのようですね。
かつてそうであった者として、悲しい事です」

リン「他人事のように言うのね。貴方も人類に愛想をつかしたクチ？」

ガウェイン「いいえ。それは決して。
　ですが私はサーヴァント、死人と変わりのない存在です。

　私は王の剣にすぎません。
　今を変えられる者は、今を生きている者だけです」
そんなガウェインの穏やかさに敵か味方かを計りかねているハクノ。
ハクノ、こっそりセイバーにガウェインの逸話を聞く。
ここで英雄ガウェインの逸話を解説。アーサー王の騎士であり、感情を御し得なかった事で王を死地に向かわせてしまった後悔の騎士と。
無論、本人が目の前にいるので内緒話もない。
ガウェインはその逸話を聞いて、「感情に縛られる事なく、今度こそ王たる者の剣である事を誓ったのです」とハクノに語る。

ハクノ「王の為に尽くす、か……騎士道ってヤツは、オレには分からない」
「でも一つだけ聞きたい。一〇〇〇年近くもここにいて辛くなかったのか？
　疲れなかったのか？　アンタはなんていうか、ずっと」
ここに一人でいたのではないか、とガウェインの雰囲気から察するハクノ。
ガウェイン、ハクノの気遣いに微笑みで返答。

ガウェイン「剣に疲れはありませんよ、マスター・ハクノ。
　ただ、少しずつ錆びるのみです」
錆びるのみ、という言葉に自分と近いものを感じるハクノ。

CHECK▶ この台詞はガウェインのちょっとした嘘。第十三話で回収されます。

リン、これ以上ガウェインと話すのは良くない、と判断。ハクノがガウェインに情を抱いてしまいかねないので。

リン「身の上話はそれだけ？　じゃあ本題に入りましょう」
「貴方のマスターはどこ？　私たち、上に行きたいんだけど」
ガウェイン、やや残念そうに嘆息し、ティーの準備を止める。
ガウェイン「我が王でしたら、あちらに」
ガウェイン、山の頂に手を向ける。
ガウェイン「いささか性急ですが、敗北を望むのなら案内しましょう。
あの頂きがこの階層の決闘場――
熾天の檻に繋がる、唯一のラダーですから」

第七階層・山道

ガウェインの案内で山道を行くハクノたち。

リン「対戦相手のサーヴァントに案内されるなんてね。
ガウェイン卿。そもそも貴方のマスターは」
ガウェイン「生きているのか、ですか？
無論、ご存命です。攻性防壁に灼き消される直前、
レオはトワイス・ピースマンの手によって一命を取り留めました」
ハクノ「！」
トワイスの名に過剰反応するハクノ。
ガウェイン「以後、我が王はトワイス・ピースマンの思想に賛同し、
この階層の守護者となった。
名実共に、生き残った人類の敵になった、という事です」
「とはいえ、それも数年の間だけ。
数名の志のない挑戦者たちを排除した後、自ら眠りにつきました。
この一〇〇〇年、マスターとして戦った事は一度もありません」

CHECK▶ SE.RA.PH崩壊後、レオが下したマスターは『第七階層に残っていた他の聖杯戦争会場のマスター』と『第六階層から上がって数名の挑戦者』。

リン「そう。ずいぶんと余裕なのね。今なら三対一だけど」

ガウェイン「信頼しているだけですよ。上を目指すマスターであれば、
　決闘場以外での戦いは無意味だと知っている。
　マスターのいない私を倒しても熾天の檻は貴方がたを迎え入れません」

リンの挑発に笑顔で返すガウェイン。

ガウェイン「ですので、戦うのはまだ早い。もうしばらくの辛抱を、レディ」

レディ扱いされ、むっ、と押し黙るリン。

山道を登っていくとチャクラ・ヴァルティンの姿も近づいてくる。

頭上にひろがるチャクラ・ヴァルティンの威容。

チャクラ・ヴァルティンの動きは今までより速くなっている。

ヴァルティンの回転を時計の針に例えると、今までは数時間に一度、秒針が一回進んでいた、今は一分に一回、秒針が進んでいる感じ。

今までは一日観測してかろうじて計れた僅かな進みが、今は目に見えて早くなっている。

リン「時間、あんまりないのかもね」

気を引き締め直したリンの台詞だが、実際は楽観そのもの。残された時間は半日もないのだから。

そのあたりを分かっていながらガウェインは指摘せず、山道を登っていく。

×　×　×

剣の山の細い峠道を登っていく三人。

いよいよ頂上が見えてきたところで、ハクノはガウェインに話しかける。

ハクノ「レオはあの頂にいるのか？」

ガウェイン「無論。肉体は傷つき、王聖は灰になったとしても。

あの方は、自らの責務を地に落とす方ではありません」

そう断言するガウェインの表情はやや苦しげ。

CHECK▶ 半ば死に体となっても〝王としての最後の責務を果たす〟レオの在り方を尊敬しつつ、その苦しみから解放されるべきだと案じているので。

ガウェイン「とはいえ、挑戦者がいないのでは王の意向を示す機会もない。

この九〇〇〇年はただ静寂だけがあった。第六階層の影響ですね」

リン「…………」

むっと顔をしかめるリン。第六階層がああなっていたので挑戦者があがってこなかった、という嫌味だからだ。

ここからはさらに険しい傾斜を登るというところでセイバーが一行を止める。

セイバー「すまぬ。寄り道をさせてほしい」
神妙なセイバーの発言に頷くハクノ。断らないリンとガウェイン。
セイバーは頂への道を通り過ぎ、やや道を下っていく。
しばらく歩いて行くと、岩肌を巨大なスコップでくり抜いたような窪みがある。
そこは岸波白野が消滅した場所。（第一話アバン参照）
亡骸は当然ない。
が、セイバーも、ハクノもここがどんな場所なのか分かっている。
セイバー、途中で摘んでいた花を供える。
セイバー「戻ってきたぞ。長く、一人にして済まなかった」
優しく微笑みながら呟くセイバー。
リンもそれでここがどんな場所なのか察する。

弔い

岸波白野の最期の地点。
しばし黙禱してから、ハクノは質問する。
岸波白野はどんなマスターだったのか、と。

リン「岸波白野はレオを破ってムーンセル中枢に辿り着いた最後のマスター」
「でも——」
セイバー「聖杯を手に入れる事はできなかった。
熾天の檻にはあの男が待ち構えていたからだ」
リン「……そうみたいね。聖杯戦争は何度も行われてきた。
優勝者は何人もいた筈よ。
なのに聖杯を手に入れて、地上に戻れたマスターは一人もいなかった」
「トワイス・ピースマンが優勝者を排除して、
聖杯を独り占めしていたからね」

CHECK▶ リンはトワイスに会っていないので状況証拠で話しています。

ハクノ、トワイスの名前を聞いて憎しみに襲われ、目を細めるもぐっと我慢。
リン「ただ——もし。もしもよ」
「もしレオ・ビスタリオ・ハーウェイが七回戦を勝ち上がっていれば、
SE.RA.PH はこんな事にはならなかった」
「データが語っているわ。レオならトワイスに負けなかった。

偶然性に依った岸波白野ではなく、万能の天才であったレオが
勝ち残っていればSE.RA.PHは崩壊せず、地上も滅亡しなかったたって」
ハクノ「……岸波白野がレオに勝った事が、すべての間違い……」
深刻に呟くハクノ。
それを見てあわてるリン。
リン「ちょっと。事実を述べただけで、アナタを責めた訳じゃないわよ!?」
「岸波さんだろうとレオだろうと、結果は変わらなかった。
もしレオが上がっていれば、それはそれで地上はおしまいだったしね。
あの選民思想の権化がムーンセルを手に入れたら、
地上の文明は五〇〇年ぐらいで終了していたわよ」
セイバー「であろうな。レオめの主張は〝穏やかな現状維持〟だった。
だがそれは無理なのだ。人間は消費しなければ前に進めぬ生き物。
現状維持とは即ち、種としての退行を意味する」
リン「そうね。どんな偉大な王様でも、制度でも、
現状維持では衰退するだけだと人類史は証明している」
「だからレオでもトワイスでもダメなのよ。
停滞したまま五〇〇年で静かに眠るか、

争いにあけくれたまま一〇〇〇年しぶとく生き延びて絶滅するか。
どっちにしろ人類終了は避けられなかった」
「分かる？　結果は同じだったの。
トワイスは人類に過去の清算を求めた。
レオは現在に留まる道を選択した。
二人とも人類の未来を信用しきれなかったのよ。そんなヤツらに
ムーンセルを使わせたら、そりゃあムーンセルだって狂い出すわ」

リンの言葉に違和感を覚えるハクノ。

ハクノ「ムーンセルは狂っているのか？」

リン「ええ。トワイスの思想に偏っている。正常の観測状態じゃない。
地上ばかりじゃなく、この月でさえ死を容認しはじめているんだもの」
「ムーンセルには新しい〝指針〟が必要なのよ。
天才の発想でも、救世主の理念でも未来はないと判明してしまった。
だからあの二人とは違う未来を見ようとする、平凡な誰かのね」

ハクノ「じゃあ、ムーンセルさえ正常に戻れば地上に未来はある？」

リン「やり直しはできないけど、仕切り直しは可能でしょうね」
このままだと滅びるのは確定だが、今ならまだ何かを残せるかもしれない。

トワイスの影響で、ムーンセルはここ一〇〇〇年の人類史を『自滅する為のもの』と解釈している。
なので、そうなるための未来しか観測していないし、解決する未来（プラン）を提示する事もない。

リン「けど、今からでも『この一〇〇〇年』は持ち直すためのプランだった、と
　ムーンセルに再定義させれば話は違う」

CHECK▶ ここの説明でエクステラで使っていた『編纂事象と剪定事象』の未来分岐図をだしてもいい。
ラストアンコールは編纂事象の端っこで、このままいくと主流である幹部分から外れて枝（剪定部分）に入ってしまうぞ、という説明。この『一〇〇〇年間の見直しと再定義』の話をガウェインも混ぜてやるとよい。ガウェインはレオのサーヴァントだが、同時に『正しい判断力を持つ騎士』として印象づける。

ハクノ「――――そうか。
　聖杯がまだ機能しているのなら、願いは考えるまでもないんだ」

この一〇〇〇年間の見直し、あるいは再定義を。
かすかな希望に興奮するハクノ。

CHECK▶ ここでリンに「遠坂はどうしたいんだ?」と未来の話をふるハクノ。もう地上に肉体はない。SE.RA.PHで生きていく。→SE.RA.PHが新世界になれば?

ハクノ、ここで長らく引っ張ってきた苦悩に決着をつける。

ハクノ「ここまでずっと悩んできた。オレは何の為に戦うのか」

死の総体として、敗者たちに背負わされた大きな使命。

トワイスを殺して世界を呪え、という怨念。

岸浪ハクノとして目覚めた小さな願い。生きたい、希望を持っていたい、という生命の基本原理。

そのどちらを取るのが正しいのか悩んできたが、ようやく、それが一つになる時が来たと。

ハクノ「ムーンセルを元に戻す。そうすれば、オレも――」

やっと胸を張れる人間になれる、と顔を上げるハクノ。

しかしリンは険しい顔。

ムーンセルを正常化するという事は不正データの抹消、デッドフェイスの消去となる事を知っているからだ。地上に未来ができるとしても、ハクノはおそらく〝その後〟に存在できない。

ここでチャクラ・ヴァルティンから鐘の音が鳴り響く。

離れた場所で待機していたガウェイン、ハクノたちに語りかける。
ガウェイン「申し訳ありませんが、時間です。レオとの戦いを望むのならお急ぎを」
瞼を閉じて告げるガウェイン。
ガウェイン「もう一度あの鐘が鳴った時が、このSE.RA.PHの――終わりの時です」
一瞬遅れて、ガウェインの言葉に目を見張る三人。
〝なにそれ、どういう事!?〟といった緊張感のままシーン切り替え。

第七階層・太陽の頂

ハクノたち、山頂に到着。
山頂は戦闘ステージになるので古代神殿跡のようなものを想定。定番イメージだが円形の広場＋石造りの床。
広場の奥には高さ二メートルほどの棺が直立している。棺の中心には聖剣(ガラティーン)が突き刺さっている。（棺の蓋を封印している）
広場の中頃には淡い光のヴェールのようなものがある。棺に近づくものを焼く防壁(ファイヤウォール)である。
ハクノ（あれは……棺……？）
（それにあの防壁は、確か――）

過去の聖杯戦争のフラッシュバック。決戦に敗れたマスターたちを焼き殺した防壁と同じものだと察するハクノ。

ガウェイン「あれは決戦場の防壁。触れる事はなりません」

「ハクノ。私からの案内はここまでです。ですので、私からも礼の言葉を」

「ここまで来た貴方の戦いに敬意を。

どうか、王の善き対戦者にならん事を」

ガウェイン、棺まで歩いていく。

当然、防壁の中に踏み入っていく事になるが防壁はガウェインを焼かない。ガウェイン、棺の前に到達し、棺に突き刺さった剣を抜く。

ガウェイン「王よ、最後の目覚めです」

ガウェイン、聖剣を手にしたまま棺の横に控え、跪く。

棺を閉じていたボルト（上下四隅にある）がひとりでに回転し、抜ける。ガバッと棺が開き、中で眠っていた人影が現れる。

青年にまで成長しているレオである。

レオの眼には明確な意思と理性があり、棺から一歩踏み出して直立する姿には衰えも、弱々しいものもない。長い眠りから目覚めたばかりとは思えない堂々とした姿。

CHECK▶ ハクノ、少年から青年に成長しているレオの姿に驚くものの、台詞にしてまでは驚かない。

レオ「これはまた、予想外の組み合わせですね」
「それに、かつての地上で僕らハーウェイの敵であったもの、遠坂リン」
「かつて僕とガウェインを倒したサーヴァント」
「そして――――」
「死の総体。地の底から這い上がってきた誰でもない誰か」
「ですが、不思議です。どこかに見覚えがある。
本来なら尋ねるほどの事ではありませんが、貴方の名前は？」

レオ、ハクノを格下と見るような扱い。
実際、レオにとってデッドフェイスの名前など聞くに値しないが、それでも引っかかるものがあったので。
ハクノ、レオの態度に反感は覚えず、いつでも戦えるように身構えて返答する。

ハクノ「岸浪ハクノ。セイバー、ネロ・クラウディウスのマスターだ」
レオ「――――」

レオ、わずかに驚いた後、不快げに眉を曇らせる。

レオ「その名前を、僕の前で名乗る意味が分かっていますか？」

ハクノ「――」

ハクノ、レオを見据えたまま返答せず。

CHECK▶ この理由は十三話で明かされます。

ハクノ「……そっちこそ。本当に、あのレオなのか」

「レオ・ビスタリオ・ハーウェイは、

救世主として月にやってきたマスターだ」

「そのおまえがトワイスに従ったのか。SE.RA.PHの廃棄に賛同したと？」

ガウェイン「はい。人間は、これ以上生存しても有益ではないと受け入れました」

ハクノ「！」

レオ「そう言う貴方は？　人類に存続の価値があるとお思いですか？」

ハクノ「……（正直な話、）分からない。オレは自分の事だけで精一杯だった」

「そもそも人間の価値なんてオレに分かる筈がない」

なぜなら、ハクノには〝人間として幸福だった体験〟がないからだ。

ただトワイスへの憎しみ、SE.RA.PHへの憤り、死にたくないという執念だけで昇ってきた。

『人類の存続』なんて、一度も原動力にはなりえなかった。

ハクノ「でも今は目的がある」
「ムーンセルを元に戻す。そうすれば、オレも――――」
やっと胸を張れる人間になれる、と強い視線をレオに向けるハクノ。

CHECK▶ 先ほどのシーン、台詞とほぼ同じものだが、より分かりやすくなるように。

ハクノ『使命に目覚めて戦うヒーロー』のような格好よさを見せる。
しかしそれを冷めた目で見下すレオ。
レオ「それは不可能な話です。アナタは前提を一つも間違えている」
一歩前に出るレオ。
セイバー「聞かせるがよい、王の骸よ」
セイバー、ハクノの隣から、レオに応えるように一歩前にでる。
レオ「彼はトワイス・ピースマンを殺し、
ムーンセルを正常に戻す、と言いましたね」
「それは難しい」
「一つは物理的な話です。彼ではトワイス・ピースマンには及ばない。
死人では、あの妄念は晴らせない」

「もう一つは精神的な問題です。
ムーンセルを正常に戻す事は、彼にはできない」
「なぜなら、それは自己の消滅を意味します。
ムーンセルを正常に戻した時、不正データはすべて消去される。
つまり―――アナタもこの一〇〇〇年と共に消えるのです、岸浪ハクノ」

ハクノ、愕然。
リンは分かっていたので苦々しげに唇を噛む。

レオ「ですがフォーマット処理を待つまでもありません。
貴方はここで、僕の手で処理されるのですから」
「ガウェイン」

レオ、革手袋を締め直しながら、淡々と告げる。

ガウェイン「御意」

片足の傷などないように、スッと静かに、しかし勇ましく立ち上がるガウェイン。

レオ「抵抗の準備を（※ハクノに向けての発言）。
貴方に、マスターの戦いというものを教授してあげましょう」

レオの言葉と共にレオから全方位に炎が放たれる。
ハクノの間にあった防壁は炎となって燃え尽き、ガウェインのローブも燃え上がる。

ローブが燃え尽きた後、ガウェインの姿は傷ついてはいるものの、聖杯戦争時の堂々としたものに変わる。
レオVSハクノ、セイバーVSガウェイン、開始。

頂上決戦

レオVSハクノ、セイバーVSガウェイン。
レオとガウェインの力は圧倒的。
ガウェインの通常攻撃（ただの剣の一振り）は他サーヴァントの宝具に匹敵している。
ガウェインの攻撃を剣で受け止めるセイバーだが、そのつど、セイバーの背後にエクスカリバー（小）なみの衝撃が走り、地形を切断していくほど。
誰がどう見ても『格が違う』と分かる出力（パワー）の差。当然、セイバーもわずか数回の剣戟で追い詰められる。
加えて、レオも積極的に戦闘に参加してくる。
片手を空中に向け、ハクノ&セイバーに向けて払う↓その動きに連動して、周囲に浮いていた山（！）が隕石のようにセイバーを襲う。
このレオの地形操作攻撃を、デッドフェイスの力（攻撃コードキャストのダウンロード）

でなんとか破壊してやり過ごすハクノ。
そういった戦力差以外にもレオ組とハクノ組には差がある。
レオの一挙一足とガウェインの動きは連動・同調している。まさに一体。
ガウェインが凄まじい一撃を振るう時、レオの片腕もまた魔力の回転で光っている。
ハクノはデッドフェイス化して、セイバーは全力でガウェインと斬り合うも相手にならない。
戦いの渦中、追い詰められたハクノはレオに問う。

ハクノ「オレを恨んでいるのか？」
「岸波白野が、おまえに勝たなければ」

レオ、一瞬きょとんとした顔のあと、

レオ「話になりません」

最高の笑顔で返す。

CHECK▶ 目を閉じてのニッコリ笑顔。だが、レオにとってこれは最大の敵意。ハクノの見当違いの発言に怒り心頭している。

レオ、空中に大きく跳躍し、浮遊する。

CHECK▶ 浮遊というより大気中の霊子を足場にして立っている。第十三話からはこれが基本になる。

位置関係的には上空六〇メートルぐらいにレオ。
その下、上空五〇メートルぐらいにガウェイン。
　レオ「ガラティーン、最大出力！　セイバーを焼き尽くせ」
ガウェイン「御意。王命のもと、地上一切を焼き払いましょう」
上空で聖剣を構えるガウェイン。
　セイバー「宝具開帳か……！」
剣を杖のようにして、なんとか膝立ちになって起き上がるセイバー。
ガウェイン「この剣は太陽の映し身。
　　もう一振りの星の聖剣——エクスカリバー・ガラティーン！」
真名解放と共に、決闘場にいるハクノに向けて光の奔流が放たれる。
ガラティーンにしては珍しい、『突き』の攻撃。軌跡は剣というより槍に近い。
　セイバー「させぬ！」
ハクノの前に駆けつけ、迫るガラティーンの光の斬撃を剣で受け止めるセイバー。
直撃は防ぐものの、ガラティーンの一撃は決闘場を足場ごと両断する。
ハクノに向けて一直線に放たれた『光の槍』は、かつてセイバーを最下層までたたき落と

した『天輪聖王の槍』と同ランク。
崩れていく決闘場。
リン「ハクノ君！　セイバー！」
決闘場から退避しつつ叫ぶリン。
光の奔流に呑み込まれるセイバーとハクノ。
セイバー「奏者……！」
流星のように落下していく二人。

×　×　×

レオは上空から見下ろしながら、
レオ「未熟です。戦うに値しない。最下層からやり直してください」
そう言って、懐から出した懐中時計を開いて時刻を見る。
レオ「……失敬。やり直す時間はありませんね」
目を細めながら、懐中時計を閉じるレオ。
レオ「天輪聖王の到達まで、数時間もない」
絶体絶命で次回。

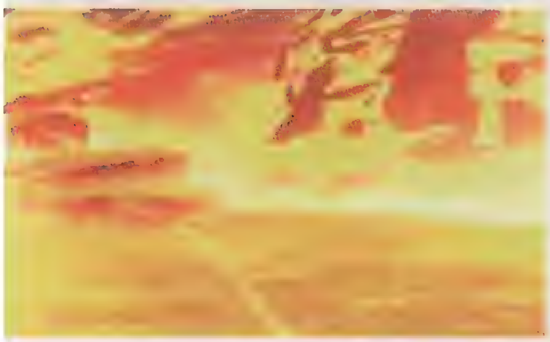
〈第十一話／了〉

第十一話 用語集

太陽の頂
●たいようのいただき

黄金の海に囲まれた、大小の剣の山が乱立した世界。雲海の上に、いくつもの山の頂が見えている。事実上、聖杯戦争における決戦の場。ここではムーンマイル・ラダーは降りてこない。もう『上がる階層』はないからだ。

ひときわ高い山の頂に神殿跡があり、そこがマスター同士の決戦場となっていた。この決戦場で勝利したマスターは、自動的にムーンセル中枢のある『熾天の檻』に招かれる。『熾天の檻』から落とされた岸波白野の最期の土地。



転輪する勝利の剣
●エクスカリバー・ガラティーン

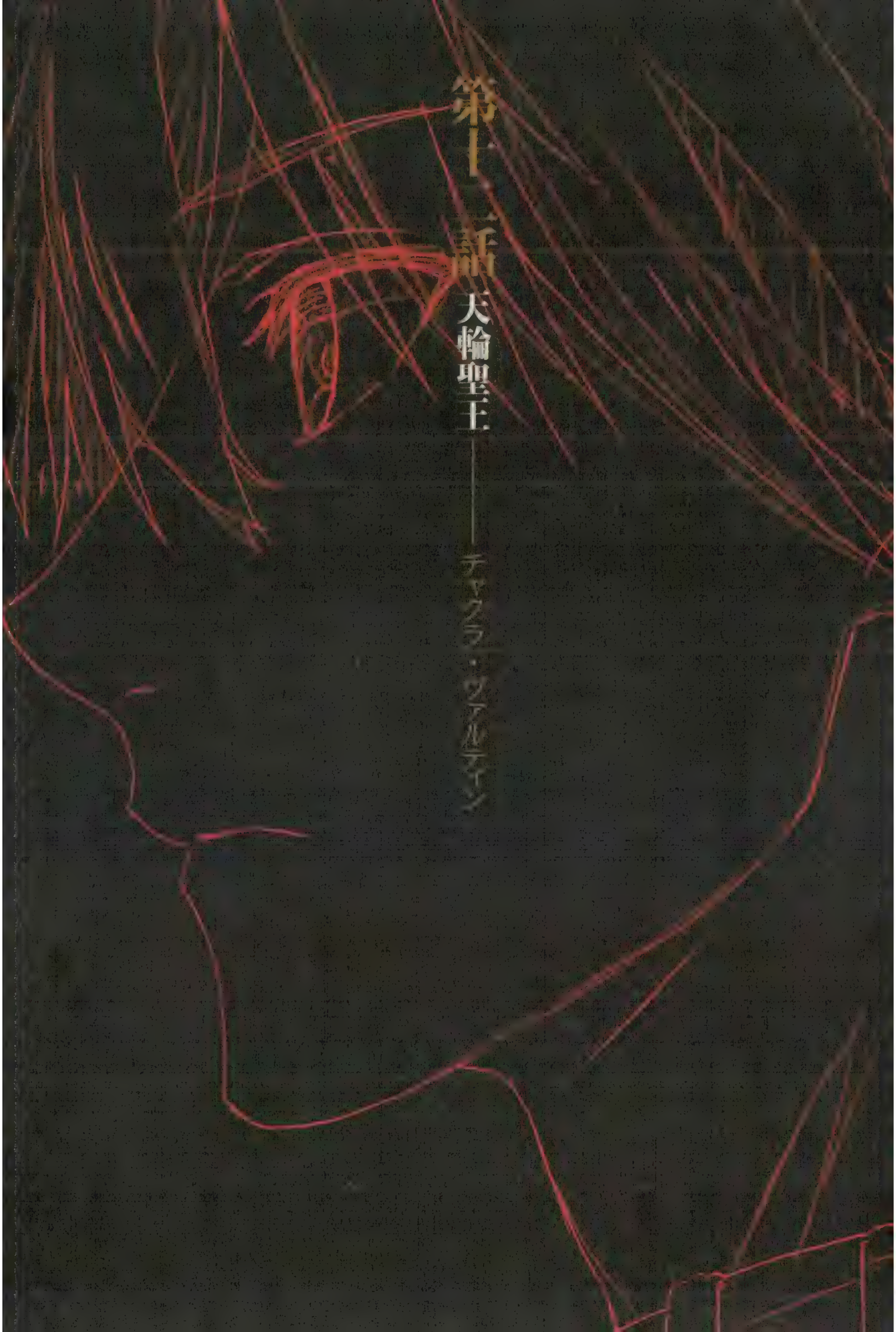
白銀のセイバー、ガウェインの宝具。聖剣エクスカリバーの姉妹剣。その柄に人工太陽を宿す炎の聖剣。純粋な破壊力であれば聖杯戦争の中でもトップランクの宝具。レオの膨大な魔力供給と強化術式により、その威力は更に向上する。真名開放による一撃はセイヴァーの『天輪聖王、七つの武具』と拮抗、これを上回る。

岸浪ハクノとセイバーを第七階層から辺獄まで貫き落としたのがその証左。

攻性防壁
●ファイヤーウォール

月の聖杯戦争で敗れたマスターが灼かれる防壁。マスターの命を奪うのは敵マスターではなく、不要になった敗者を処理するSE.RA.PHの、ひいてはムーンセルの敷いたルールそのものである。

第十二話 天輪聖王——チャクラ・ヴァルティン



アバン／レオの回想

レオの回想からスタート。
『なぜ一〇〇〇年前の七回戦で白野に勝利を譲ったのか？』の真相。
聖杯戦争七回戦（ゲーム版の第七階層アリーナ）にて、岸波白野との決戦前にトワイスと遭遇するレオ。
決戦を前にしても平静なレオの前に現れるトワイス。
警戒し、排除しようとするガウェインを片手で制し、レオはトワイスと会話する。
　レオ「熾天の檻からの客人です。それに、無関係という訳でもない」
トワイス「自己紹介は不要のようだ」
レオとトワイスの視線が交差する。
トワイス「事実上、地球を支配する西欧財閥の現当主。
　作られた人工の王。キミに、いくつか質問があってね」
　レオ「質問？　ここではなく、地上の出来事について、ですか？」
トワイス「そうだ。一九七〇年の出来事。決定的な資源枯渇、人類衰退の始まり。
　世界から、生命が生きていくための力は奪われた。
　これに関するキミの所感が聞きたい」

レオ「地球と人類の終わり――と、言わせたいのでしょうが、いいえ。
僕が終わらせない」
レオ、トワイスを見据えて、
レオ「聖杯を得て、事態を打開する」
トワイス、静かに頷く。
トワイス「月の聖杯……ムーンセルは、確かに人類にとって万能の願望器だ」
「ムーンセルは完璧なナビゲーターだ。
持ち主が望んだ未来へのルートを必ず見つけ出す。だが――」
「それにも限度がある。失った分を上回る利益を得る事はできても、
失ったもの自体は取り戻せない」
レオ「マイナスをプラスで補填するだけで、マイナスそのものを解決できない。
つまり――前提は覆らない」

CHECK▶ この『前提』とは、一九七〇年に起きた『マナ消失』の事。エクステラで語られる話。クォンタム・タイムロックがかかってしまっている『EXTRA世界の地球はもう終わっているよ』という前提のこと。

トワイス「そうだ。君は分かっている筈だ、レオ・ビスタリオ・ハーウェイ」
「この惑星は、その魂とも言える核を傷つけられている。
他の誰でもない、君たちの手によって」

CHECK▶ その名は[redacted]。EX世界の人類史を停滞させた元凶。

レオ「その結果が資源の枯渇……人類の衰退となった。
この惑星汚染を解決する手段はないと言うのですか？」
トワイス「いや。そんなものは解決するまでもない。
資源の枯渇など表層だけの話だ。地球汚染など笑わせる」
「単に、人間が住めなくなるだけの話だ。
地球にとっては皮一枚傷ついた程度だよ」
地球の資源を補填したところで地上の衰退は解決できない。
問題は、人類そのものが行き詰まっている、という点だ。
トワイス「その打破として、私は全人類に等しい戦いを求めた」
「君はその逆だ。戦いを廃し、思考停止による楽園維持を目指している」
「君であれば計画そのものは上手くいくだろう。だが――」

「完璧な船を作ったところで乗員の意識は変えられない。
理想の道を示したところで、自ら足を踏み外すのが人間だ」
「そう。君の計画が破綻していた事で人類が滅びるのは、まだいい」
「けれど。完璧な計画が用意された上でなお人々が変わらなかった時、
君は誰に、どのような罪責を求めるのだろうね」
レオ、その問題には気がついていたので苦い顔をする。
理想の王がいたところで人類に未来があるとは限らない。
人間そのものの性質は変わらない。
レオの方針は人間の愚かさを抱えたまま、少しでも長く管理しようというものだ。
トワイス「それがハーウェイの呪いだ。
ハーウェイから生まれた王は人間を管理するだけの王だ。
救う事も、共に生きる事もできない」
「私は、間違っていた」
「人類の変革など夢物語だった」
「レオナルド。それを君が証明した。
君は私が知るかぎり最高の指導者だ。
人類を導く為、人工的に作られた最高精度の王だ」

「その君をもってすら人類を救う事はできない。
その王をもってすら人類を諦めざるをえない。
その事実が、私を真に敗北させた」
レオ、苦々しい表情で止める。
トワイス、レオの前から去ろうとする。
レオ「待ってください。なぜ僕が諦めたと?」
トワイス「問うまでもない事だ。君は、人類の未来を信じていない」
「人々が望み、最大の資金を投入して作り上げられた
王の選んだ選択が〝管理〟だったんだ。
――その時点で、人類は終わっていたのさ」
トワイス、立ち去る。
残されたレオ、愕然。
ガウェイン「卑劣な謀です。貴方の真実を語るものではありません。
レオ、どうか惑わされる事のないように」
ガウェインのフォローに、微笑みで返すレオ。
しかしこの時点でレオの心には亀裂が入っている。生まれてからずっと心の底で眠ってい
た〝自分の欠点〟を自覚させられたからだ。

CHECK▶ これが原因で岸波白野との戦いにおいて、最後の最後、互いにトドメを刺す瞬間で『自分が勝ったところでトワイスと同じ結末だ。であれば、自分が先に進む意味は――』と迷いが生じ、岸波の逆転を許してしまった。

×××

回想がおわり、現在の第七階層、山頂のレオ。
最下層まで落ちたハクノたちから視線を外し、空に君臨するチャクラ・ヴァルティンを見上げる。

レオ「……僕の王聖はとうに砕けている。彼女（岸波）に負けた時ではなく、トワイス・ピースマンに出会い、彼の考えに賛同してしまった時点で」

そして今のレオの考えはあの時に垣間見た未来と同じもの。

レオ「未来を見るなどと、どの口で」
「人類はここで終わります。断末魔を長引かせる事に、僕は意義を見いだせない」

アバン終了。

第七階層～最下層（辺獄）

辺獄までの落下。
最下層まで落下するハクノとセイバー。
セイバーはガウェインのガラティーンを剣で受け止めた事で意識を失っている。
ハクノ、気絶したセイバーを抱き留めながら落下。
持てる力を総動員して自分たちに防御障壁を張り、辺獄に墜落する。

CHECK▶ デッドフェイスの知識を総動員しての衝撃防御なのでハクノの顔はデッドフェイスになるべきだが、デッドフェイス化はノイズ程度のものに。ここは『憎しみ』ではなく『生存とセイバーのため』に全霊を傾けているのでデッドフェイスにならない。この話の最後にデッドフェイスから脱却する伏線として。

辺獄の薔薇園

ハクノ、セイバーを抱きかかえたままなんとか最下層に落下したものの、ダメージで身動きが取れない。

一面の暗闇。
だが、そこにぽう、と青い光がともる。ナーサリー・ライムの空色の栞だ。
栞はハクノのポケットに入っており、ハクノ、ポケットから栞を握って顔の前に持ってくる。

CHECK▶ ここで暗闇にいるのがハクノと、ハクノに抱きかかえられているセイバーだと分かる。

ハクノは仰向けに倒れ、セイバーを抱き留めたまま、栞ごしに空を見上げる。
ハクノの目には蒼穹と、その空を囲んで迫りつつあるチャクラ・ヴァルティンが映っている。

CHECK▶ 実際、辺獄は光が差していない地下なので青い空もヴァルティンも見えない。これは今、落下の衝撃で朦朧としているハクノ視点だから。

蒼穹に走る飛行雲。
第一話の冒頭、青い空と飛行機雲と同じものを。これはゲーム版の冒頭、人工衛星を例にした『誰もが永遠を誤認した』シーンと同じ光景。
ハクノ（こんな空を、いつか見た気がする）
ハクノ、レオに敗れた事、レオとの実力差の前に屈辱を通り越して平静（フラット）になっている。

ハクノ「……過ぎた願い、だったのかな」
ぽつりと呟くハクノ。
セイバー「ん……」
ハクノの呟きがきっかけで目を覚ますセイバー。
セイバー「っ、無事か奏者よ！
　任せよ、さすがに無理っぽいが余が何とかしてみせ――――！」
ハクノの上でガバッと体を起こすセイバー。
しかし自分がハクノの上にいる事、ここが辺獄である事、自分を庇ってくれたのはハクノである事を瞬時に理解する。
セイバー「――――うむ。騒がせてすまなかったな、奏者よ」
「礼を言う。余を守ってくれたのだな」
柔らかく微笑むセイバーに、
ハクノ「無我夢中でだけどね」
同じく微笑みで返すハクノ。
セイバーとの会話でハクノの意識も明確になり、先ほどまでの幻視は消える。辺獄は浅い暗闇に包まれている。
セイバー「それで、どうするのだ？」

ハクノ「どうって？」

セイバー「残された時間は少ない上に、ここは最下層。もうどうあっても熾天の檻には
辿り着けない」
「加えて、レオとガウェインは我らより格上だ。
何一つとして我らが勝るところはなかった」

つまり何をしても意味はない、ここで眠ってもいいのだぞ、という暗示。
セイバーにその気はないが、先を示すだけの元気もない。
度を超えた『もう何をしても駄目』な状況は、セイバーからですら熱意を奪っている。
それはハクノも同じだが、決して諦めた訳ではない。

ハクノ「とりあえず、先に進もう」

セイバー「先？　先とはどこだ？」

ハクノ「ほら、あそこ。光が射している。あそこに行けば空が見える筈だ」

ハクノ、遠くに見える一条の光を射す。

CHECK▶ そこは第一話でセイバーと契約した、剣が刺さっていた場所。まだ遠くて見えない。

セイバー、うむ、と満足げに頷いて、光の射している場所を目指す。

辺獄を歩く

ハクノの持つ青い光だけが頼りの暗闇。
はぐれないように手を繋いで歩くハクノとセイバー。
セイバー「て、手を放すでないぞ。はぐれてしまいそうだ！」
ハクノ「確かに。セイバーはそそっかしいからなあ」
セイバーのオーバーアクションに、つい楽しくて苦笑してしまうハクノ。
第三階層ではセイバーの手を自分から握り返せなかったハクノだが、今はしっかりと握り返している。
辺獄を行く中、ハクノとセイバーはこれまでの戦いを振り返る。

CHECK▶セイバーとの最後の二人きりの会話。なんでもない休日の、なんでもないピクニックのような雰囲気で。ハクノが絶望していないのは『不思議と終わる気はしない』から。この気持ちを台詞にしてもよい。

セイバーと話しながらハクノは回想する。

自分がここで目覚めてから、様々な出会い、戦い、別れ、結末があった。
そのどれもが人知れず終わったものであり、
敗れたものが立ち上がろうとして果たせなかったものであり、
自分たちしか知り得なかった事だった。
けれど今はそれが無意味なものとは思えない。
状況は絶望的で、自分の未来も希望がない状態でも、『これまで』の事を思い返すとつい微笑んでしまう。

ハクノ（どれほど辛く、悲しい事があっても、それは充実した時間だった。
それを『惜しい』と思うぐらいには、自分は成長できたのだ）

しんみりと『これまでの時間』を噛みしめるハクノ。

ハクノ（なら、まだ諦める訳にはいかない――）

といった心の動き。
ハクノの心情に応えるように栞が輝く。
ハクノ、ここで栞の存在に気がつき、ナーサリー・ライムが遺したものがなんであるか、ようやく理解する。

ハクノ（そうか。彼女が残したもの。
彼女に、オレに似た誰かが残したものが何だったのか、今さら気付いた）

希望だ。

辺獄を歩く～リンからの通信

と、そんないい雰囲気の中、通信ウインドウが開く。
リンからの通信である。

リン「生きてる!?　こっちは生きてる！　今にも死にそうだけど！」

忘れていたがリンは第七階層に残っており、現在、レオに襲われて必死に逃げているところだという。
とにかく騒がしい通信。爆発音と崖の崩れる音、たまにリンからレオへの反撃としてビーム。
リン、状況を説明。
上空のチャクラ・ヴァルティンの回転が速まり、SE.RA.PHは末端から切り崩されだした。
ガウェインの言う通り、SE.RA.PH終了はもう目前。この一日が終わる前に熾天の檻に辿り着かないとSE.RA.PHはその規格（うつわ）ごとパージされる、と。

ハクノ「大丈夫なのか、遠坂!?」

リン「ワケないでしょー！　正直、私ひとりじゃどうしようもないわ！
でも肝心のあなたは最下層に落とされて、レオは一向に手を休めないし！

絶望的すぎてちょっと笑っちゃうわね！」
「でも諦められないじゃない!?
うつむいて死ぬために、ここまで来たワケじゃないんだし！」
リンの強さに元気をもらうハクノ。
リンのこの生命力、前向きな強さこそ生者の力であり、先に進む者の資格だと再認識する。
ハクノ「遠坂。こんな時に、こんな事を尋ねるのも何だけど」
戦闘時には相応しくない、ごく普通の口調で問いかけるハクノ。
リン「あのね、こっちは鉄火場なんだって分かってる!?
まあ聞いてあげるけど！　で、なによ」
ハクノ「人間は、目的がないと生きていけないのかな。
遠坂みたいに、やる事がはっきりしているほどしぶといものなのか」
リン「何気に失礼ねアンタ」
リン、いつもの憮然とした顔をしてから、自信満々の笑みで、
リン「でも違うわ、ハクノ君。やる事があるから死ねない、ではなく
「やれる事を見つけたくて、人間は生き続けるのではないかしら」
こんな時でも不敵に断言するリンに、ハクノもつられて口元をほころばせる。
ハクノ「ありがとう。それと、すまない！

かならず戻るからなんとか逃げ切ってくれ！」
リン「手段はあるの!?　方法は!?」
ハクノ「ないけど何とかする！　負けるな、遠坂！」
リン、なによそれー！　と呆れながらも、そういう事なら頑張る、そっちも何とかしなさい、と連絡終わり。
セイバー、ハクノが戦いを再認識した事を読み取り、静かに覚悟を決める。
セイバー「リンをひとりにはしておけぬな」
「さあ、あと少しだ奏者よ。もうじき、摩天の下に辿り着こう」

辺獄の薔薇園・黄金劇場跡

ハクノとセイバー、光が射していた場所に辿り着く。
そこは第一話でハクノがセイバーの剣を抜いた場所。
ここからのみ、四角く切り取られた空が見える。
ハクノ、契約の場所から空を見上げる。
軋みをあげるSE.RA.PHと、黄昏に染まった空が見える。
ハクノ、栞を握りしめて呼吸を整える。

セイバー「そうか。その光はナーサリー・ライムの」
ハクノ「やり直しの宝具。
その欠片だから、それこそ『元の場所』にしか戻れないだろうけど」

CHECK▶『元の場所』の定義は栞が輝きだした第七階層スタート地点か、敗北する前の地点、とする。
どちらにせよここでは説明はしない。

セイバー「戻る手段はあったワケだな。しかしレオは強敵だ。
多少の準備をして戻りたいところだが、時間がない」
やや強がりを言うセイバーと、そうだね、と同意するハクノ。
セイバー「だがよいのか？　そなたはムーンセルを正常に戻すと言った。
それは正しい事ではあるが……そなたは消えるのだぞ？」
ハクノ「ああ。でも、やってみなくちゃ分からない」

CHECK▶ここのハクノの「やってみなくちゃ分からない」は消えないかもしれない、という意味ではない。
「その時を迎えた時、自分の気持ちが喜ばしいものなのか悲しい事なのか、まだ分からない筈だ」という意味。

ハクノ「それよりセイバー。『やり直し』をしたところで戦力差は変わらない。
　呆は一度使えば燃え尽きる。それでも、その」
もう一度、自分と戦ってくれるだろうか、と不安を口にするハクノ。
しかしセイバーはそれを否定する。
セイバー「いや。もうそなたは劣ってはいない。今や最強のマスターだ」
セイバーの信頼は嬉しいが、ハクノには迷いがある。
デッドフェイスである自分の不純さだ。
〝果たして、負の感情で他人を殺すものに正当性はあるのだろうか？〟というもの。
その疑問をセイバーはこう説く。
セイバー「憎しみで戦うのはだめだ。だが、怒りで戦うのはよい」
ハクノ「どうして？」
セイバー「怒りは相手の行いに対して向けられるもの。
　だが憎しみは相手そのものに向けられるものだ。
　それはそなたには相応しくない。だいいち美しくないしな」
「負の感情しかないというのであれば、怒りだけを原動力にするがよい。
　人を憎まず、かといって悪行を赦さず。そなたは生命を絶つのではなく、

その怨念を断つものとして生を受けたのだ」

あらゆる人間を「それも良し」と一目置くセイバーらしい言葉。

ハクノはこの言葉で救われる。自分は怒りの化身だが、その在り方にも救いはあるのだと。

ハクノ、以前セイバーに言われた言葉を思い返す。

セイバー「暗闇から体を起こし、生きる事に目覚めた時。

　魂が岸浪ハクノと名乗ったのなら、そなたは間違いなく、

　他の誰でもない、岸浪ハクノという命なのだ」

かつてセイバーはこう言った。

ハクノ（……そうだ。いつだってオレ以上に、

　セイバーはオレを信頼し、誇ってくれていた）

第五階層の暗闇であったセイバーの言葉を思い返す。

セイバー「それでも、諦めるのはイヤであろう？

　人間は誰だって、今よりマシな自分になりたいのだ」

ハクノ（その言葉が今でも、不確かなオレのカタチを作っている）

改めてセイバーを見つめるハクノ。

セイバーはまっすぐにハクノを見返してくる。

ハクノ（失いたくない。この笑顔を、温かさを失いたくない）

（でも一番失いたくないものはセイバーの信頼と、これまで得てきたものだ）

ハクノ「行こう、セイバー。まだオレは行くべき場所に辿り着いてもいない」

セイバー「うむ、その通りだ。まずはこれまで通り、邪魔者を打ち倒さねばな！」

ハクノ、栞を握った手を前に差し出し、セイバー、その手を握る。

手を重ねる二人。満ち足りた微笑みのまま、栞から青い光があふれだし、辺獄から二人の姿が消える。

CHECK▶ ここの流れ、絵的に地味だったら辺獄も崩れ始めていて、辺獄が崩壊する寸前で栞ワープをする、というのもアリ。

× × ×

その後。演出的に蛇足だとは思うが、戦いに向かうハクノを見送る「辺獄のトワイス」を出したい。

第一話では『辺獄から逃げ出した』ハクノだったが、

第十二話では『辺獄から旅立った』ハクノになる。

その変革を見届ける（かつて人類に希望を見いだそうとしていた頃の）トワイス。

トワイス「かつて私は、最弱のものが最強に至る過程に期待し、過ちを犯した」

「命の本質は戦いではなく生存にある事を忘れたのだ」
「だが無から生まれた君は、いま有限のものとなった」
「――その道行きに光あれ。キミはついに、己の命を獲得した」
そんな独白をして辺獄のトワイスも消滅（というか昇天）し、SE.RA.PHに作られた辺獄は消滅する。

太陽の頂

リンを追い詰めたレオの前に、再び現れるハクノとセイバー。
ハクノたちに驚くレオとリン。
リンは「ホントに戻ってきた！　やるじゃん！」という喜び。
レオは「また現れたのか」という驚きではなく、「勝てないのになぜ挑むのか？」という驚き。

レオ「力の差は理解できている筈ですが――」
「明確な死が欲しいというのなら、そのように済ませましょう」
レオ、リンからハクノたちに向き直る。
その表情はわずかに苛立っている。レオ、今まで以上にガウェインに魔力を送る。余剰で

あり、余分な力みだ。

ガウェイン「レオ。わずかに乱れがあるようですが？」

レオ「――構わずに、ガウェイン。

実力差も分からずに戦いを挑む愚かさが、癇に障っただけです」

レオが怒りを露わにする、という時点で異常な事だが、ガウェインはあえて黙る。

半分断ち斬られた山頂でもう一度対峙するハクノ&セイバー、レオ&ガウェイン。

セイバー、ガウェインに飛び出す直前、ハクノに囁く。

セイバー「余ははじめから全力で戦い、聖剣を封じる。

わずかでも力が弱まれば、ガウェインめは宝具を展開するだろう」

「ただ一度でよい。

そなたの力で、余にガウェイン卿を上回る機を与えてくれ」

セイバー、ガウェインを破る秘策がある事を提示する。

ハクノ、頷いてデッドフェイス化。セイバーに送る魔力を最大にする。

セイバー、ハクノのブーストを受けてガウェインと正面から打ち合う。

CHECK▶ ここからセイバーとガウェインの打ち合いが数分続き、その背後でそれぞれのサーヴァントを支援するマスター、ハクノとレオの会話劇（会話戦）となる。映像コストは計り知れないが、

各所でセイバーとガウェインの殺陣を見せつつ、ハクノ、レオのモノローグの所はキャラクターの表情のアップ等で作画リソースを軽減したい。

正面からガウェインと打ち合うセイバー。
ガウェインのデタラメな火力は変わらず。それを受け止めるセイバーは前と違い、一歩も引かない。
ガウェイン、セイバーの力強さにわずかに表情をほころばせる。

CHECK▶ 強敵と対峙する喜びと、レオの敵として相応しいものが来てくれた、という喜び。

一方、レオは内心で驚いている。

レオ（彼とセイバーの同調が上がっている……？
先ほどとは別人のようだ。この僅かな間に、いったい何が――）

レオ、ハクノを見る。
ハクノの顔はデッドフェイス化している。あきらかに限界を超えた魔力放出でセイバーをサポートしている。
どう見てもあと数分しか持たない強がり。

レオ「ですが、それでも足らない。限界は分かっている。
死の総体である君には、新しいものがない」
「残念です。どれほど膨大な魔力を持とうと、君の力の源泉は敗者の記録だ。
その敗者の中には、ただの一人も、レオ・ビスタリオ・ハーウェイを
越える者はいなかったのだから」

太陽の頂・神殿の柱

一方、リンはそんな両者の戦いをギリギリの安全圏で見守っている。
レオに受けた傷を治療しつつ、ハクノに加勢するべきかどうか迷っている。
リン「レオのガウェインと互角——デッドフェイスの力を総動員しているのね」
「……でも、あれじゃハクノ君の体が持たない。拮抗できるのはあと数分。
なら、今のうちに私がレオを——
でもそれだと私がレオを倒した事になっちゃうかもしれない」
「対戦者同士が戦って、勝利して、はじめてラダーは動く。
私が横やりをいれたらそれこそまずい——？」
「でもジリ貧なのは目に見えているし——！

　ああもう、どうすればいいのよ！」
とテンパるリンだが、ハクノの様子を見て目が点になる。
リン「え……？」

CHECK▶ リンの目には一瞬、ハクノのデッドフェイスがなくなったように見えたのだが、ここでは証さない。

リン「どういう事――そんな事って、あるの……？」

聖杯戦争・オーラス

カメラはレオとの決戦中のハクノに向けられる。
セイバーに魔力を送るハクノ。
デッドフェイスのオーバーフローはもう目前。
度を超えた魔力放出と提供で視界が光に包まれつつあり、全身はとっくに激痛に包まれている。

CHECK▶ わかりやすく吐血してもよい。

だが、それらの苦痛を押さえつけて、ハクノはセイバーの一挙一動に集中している。
セイバーが踏み込むのなら、自分も同じように踏み込み、その動きに同調して魔力を送る。
セイバーが剣を振り上げる、振り下ろすのなら、自分はその剣になったかのようにブーストする。
セイバーのあらゆる動きに集中し、これを増幅させる。
セイバーの剣を振るう腕の熱さが、ハクノの腕の熱さになる。
互いに違う命である事を感じながら、同じ命として相乗させていく。
ハクノ（――――っ）
ハクノ、知らず口元がつり上がっている。
痛みによるものではない。
喜びだ。ハクノ、ついにマスターとしての完成。
はじめて楽しい、と感じている。充実している。生きている。

×　×　×

セイバーとガウェインの殺陣。
いよいよセイバーが追い込まれるが、セイバーの表情は輝きと自信を増すばかり。
とても追い込まれているような顔ではなく、攻めきれないガウェインに若干の焦りが見ら

れるようになる。
セイバーとガウェイン、いったん離れ、互いのマスターの前で構えたまま対峙する。

× × ×

対峙する二人のマスター。
次の打ち合いに入る前の、わずかな小康状態。
レオ、苛立ちをはっきりと顔に出す。
限界を迎えながらも力を緩めないハクノにレオは問いかける。

レオ「まだ戦うのですか」
「貴方には動機がない。人類を救う理由がない。
だって、死の総体である貴方には、人間としての体験がない！」
「ただ憎しみだけで、勝者への不満だけで這い上がってきたものが、
ムーンセルに何を願うというのです！」

ハクノ、朦朧とした意識でレオの追及を受け止める。

ハクノ「言っただろう。ムーンセルを元に戻す。
見たいものを、見れるようにするんだ」

レオ「ありえない。それは貴方の消滅に繋がる事だ。
死を望むのならここまで抵抗する理由がない。おとなしく倒されればいい」

ハクノ「……そりゃあそうだ。死ぬ為に、ソラに昇るようなもんだもんな」
独り言のように返すハクノ。しかしその声に自重の翳りも、迷いも見られない。
セイバー「行けるか、奏者よ?」
セイバー、ガウェインを見据えたまま背後のハクノに語りかける。
ハクノ「もちろん。あいつらを倒すぞ、セイバー」
セイバー、真剣な面持ちで頷き、ガウェインにダッシュ。
ガウェインもこれに応えてダッシュ、両者はまたも打ち合いに。

×　×　×

再びカメラはハクノ視点に。
セイバーとガウェインの打ち合いの中、ハクノはレオからの追及を反芻する。
ハクノ(死を望んでいる、か。確かに、死んで楽になりたかった時もあったっけ)
ムーンセルを正常化するという事は、違法データである自分の消滅を意味する。
ハクノが獲得した〝人としての願い〟は自死に他ならない。
ハクノ(でも、後ろ向きじゃない。この願いがオレの死そのものだとしても。
終わりに向かう理由は、死にたいからじゃないんだ)
ハクノの口元には、笑みが浮かぶ。

×　×　×

——第八話の回想。

セイバー「無理に、大きな事をせずともよい」
「そなたはそなたのできる事を」
「余は余のできる事を」
「それは、この世界で、各々にしかできぬ事なのだ」

×××

あの時の、優しく微笑むセイバーの姿を思い返してハクノは寂しく微笑む。
——なんて誇らしい、自分にはもったいない導き手。

ハクノ「オレには大きな事はできない。小さな事しかできない。
ただ一歩前に踏み出す事に全霊を傾ける。——それでいいんだ」

悲鳴をあげる神経。
秒単位で燃えていく魔術回路。
目に火花が散るような苦痛。
その上で、

ハクノ(ああ、それにしても——)
(生きるのは、とても楽しい)

ハクノはセイバーと同調し、マスターとして戦う。聖杯戦争は楽しい。生きる事は楽しい。

希望を抱く事が人生の歓びだという、純粋な感想。
ハクノが生者になるための最後の成長。

×××

セイバーとガウェイン。
セイバーにみなぎる力がガウェインを、レオを圧倒しはじめる。
押され出すガウェイン。何事か、と目を見張るレオ。

×××

ハクノ視点。
レオは言った。ハクノには〝人間としての〟動機がない、と。
まさにその通りだ。
ハクノには初めから、人類を救う理由も、地上を憂う理由もなかった。
なにしろ、

ハクノ（オレには無かった。人間としての生活が。
　人間として、人間をよいものと感じる経緯が存在しなかった）
突然発生した復讐者であるハクノには〝日々はよいもの〟という経験がない。
ハクノ（オレには美しい記憶がない。
　幸福な記憶がない。人間を良しとする記憶がない）

（それでも――）

CHECK▶ 実はこのあたりのパーソナリティはレオも同じ。なのでレオは岸波白野、およびハクノに興味があった。レオは個人を愛せなかった。同じように〝人間の営み〟を知らないハクノが、個人を愛せるのかと。

ハクノ「そうしたいと、オレは思った」

小さいが確かな返答。

レオ「いま、何と？」

ハクノ「そうだ。動機なんて初めからないし、今も持てない」

「オレは死者の代表だ。過去の亡霊だ。

怨念に、怒りに、責務に突き動かされてここまで来た」

「オレが熾天の檻を目指す理由は、トワイス・ピースマンの過ちを……

ヤツと同じ過去の人間として、過ちを正すため、だった」

「そうしなければと。そうでなければいけないと、ずっと怯えていた」

レオ「道理です。その理由なら納得がいく。貴方はシステムとして目覚めた。

加害者に罰を与える為だけに起動したデッドフェイスで」

ハクノ「でも、生きている。生きるのはとても楽しい」

レオ「――――」

レオ、有り得ないもの、だが刮目するに値するものを見たように目を見開かせる。

ハクノ「……そうしなければ、じゃない。過去の清算なんて知らない。
ただ今のオレが、そうしたいんだ」

ハクノ（敗れ去ったものたちの総意として、ではなく。
トワイスと同じ過去に生きた人間として、でもなく）

ハクノ「生きる為に、死に向かう。
聖杯戦争を勝ち上がったひとりの人間として、オレは戦う」

ハクノ（自分は人間として生きたと誇る為に。
終わりが見えていても、最期まで、生きる為に足掻くのだ）

もうハクノに迷いはない。

レオはそこに、一つの人間の完成形を確かに見た。

ハクノ「ムーンセルを正常に戻して、オレは世界を拓く」

レオ「……何のために？」

そんなのは決まっている。

ハクノ「たったひとりの生者を、未来に送り出すために」

CHECK▶ 実はリンの事である。

×××

カメラ、レオ視点に。
満身創痍、だが自信に満ちたハクノの結論に怒りを露わにする。
レオ「聞いたような口を――――!」
レオ、ガウェインに魔力を送る。
力でハクノを黙らせる、というオーバーアクション。
セイバー「来るぞ、マスター!」
セイバーの声に応えて、ハクノ、全魔力をセイバーに送る。
デッドフェイスがうずき、片手で顔を押さえるハクノ。
最後の打ち合い、勝負の明暗をわける数秒が始まる。
ブーストされて踏み込んでくるガウェイン。
これを迎え撃つセイバー。
その刹那を見据えながら、
ハクノ(世界を救う為に全霊を傾けたレオ。

自分を求める為に全てを使った岸波白野。
白野／ハクノは醜悪か？　醜悪だ。
救世主であった男や、理想の王であった男には及びもしない。
それでも――）

ハクノ「生きたいという願いだけは、他の誰にも負けてはいない――！」

その開眼とともにハクノのデッドフェイスがずるりと落ちる。

CHECK▶ デッドフェイスが剝がれ落ちるのと同時に、顔を押さえていた片手を放す。

以前、心象世界の中で剝がれ落ちたのはハクノの素顔だった。
だが現実(いま)は違う。
死相は剝がれ、ハクノは聖杯戦争のマスターとなった。

CHECK▶ 以後、ハクノのデッドフェイス化はない。

レオ、その素顔に見入る。
セイバー、正面からガウェインを打ち負かす。

打ち込まれ、数歩後じさるガウェイン。

セイバー「奏者よ！」

レオ「ガウェイン！」

共に勝負所と察し、互いのパートナーに声をかける。
セイバー、ガウェイン、共に宝具を展開する。
しかし（ガウェインを後退させていた分だけ）セイバーの方が早い。
展開される黄金劇場。遅れてガウェインのガラティーンが光の剣（刀身が長い）となり、黄金劇場をスパッと真ん中から両断する。

ガウェイン「未熟！　貴方の宝具など百も承知です！
　黄金劇場なぞ、開始前に砕けばいい！」

セイバー「であろうな！　だがこの先の展開を卿は知るまい！」

黄金劇場、自ら燃え上がる。
劇場は炎に包まれ、その炎の熱がすべてセイバーの剣に集束される。
赤い高熱の光剣となったセイバーの剣。
ガウェイン、急ぎ聖剣を構え直すが間に合わない。

セイバー「我が劇場の最期を看取るがよい！
　天幕は二度と上らずとも、この瞬きは奏者の為に……！」

受けよ、星馳せる終幕の薔薇（ファクス・カエレスティス）！」

CHECK▶ もう私の劇場はなくなってしまうけれど、最期の輝き、最後の華はただひとり、奏者のために、
というニュアンスで。

セイバーの炎の剣とガラティーンの光がぶつかり合う。
火力であればガラティーンは劣っていないが、この一瞬、この刹那だけはわずかにセイバーの炎が聖剣を上回った。
一瞬の激突の結果、ガラティーンはその刀身を中心で灼き切られ、ガウェイン、敗北する。
その炎とハクノの姿を見てレオは自分の敗北を受け入れ、理解する。
燃え尽きる炎を遠く見つめながら、レオは呟く。

レオ「……生きる事が願い、とは、また」
「確かにそれは、ボクからは失われた、当然の理由でした」

自分がまだ残っていた意味。自分は確かに敗れたものだが、それでもやる事が残っている事を。
最後のマスターたちの戦いは終わった。
『聖杯戦争』はこの時代で、その役目を終えたのだ。

太陽の頂・決着後

神殿跡。
聖剣は折れたもののガウェインはまだ存命。レオも健在。
……なのだが、レオは無言でハクノたちに背を向け、自分が眠っていた棺に近づく。
レオ、棺に手を入れ何らかの操作。
すると、決着を告げる鐘が鳴り響く。
やや呆気にとられるハクノとセイバー。
ハクノ「なんのつもりだ?」
レオ「見ての通り、貴方たちの勝利を告げる鐘ですが。
それとも、敗者から勝者への称賛でもほしいのですか?
わりと厚顔なんですね」
ニコッと天使のように笑うレオ。ちょっと人が悪い。
ハクノたちの質問意図を分かった上で見当違いの皮肉を返している。
リン「厚顔はそっちよ、この御曹司――――!」
リンもやってきてレオに文句を言う。

リン「宝具の打ち合いで負けたなら倒れなさいよね!?
なに堂々と、
まだ全然余力はありますが、まあ、負けた事にしてあげましょう。
みたいな態度をとってるのよ――!」
ぷりぷりと怒るリン。
セイバーもまったく同意見である。
ハクノは逆に『どちらかが死ななくても戦いは終わった』事に驚き、また嬉しい。
そんなハクノの視線に気付き、レオは微笑む。
レオ「ええ。本来、聖杯戦争とはそういうものです。
どちらかが敗北を認めれば、その時点で戦いは終わります。
敗者が消滅するのは戦いによってではありません。
戦いの後にある裁定で消滅するのです」
「ですが――」
レオの言葉を遮るように、山頂そのものがリフトアップしていく。
ラダーは落ちてこない。
レオ「ムーンセルによる裁定も今はない。勝者は速やかに次のステージに送られます」
「立ち上がり、状態を整えてください。時間がないのでしょう?」

「あれがムーンセル中枢、熾天の檻。事象選択樹と呼ばれる観測機」
「そして――――貴方が敵として捉える、最後の男が待つ場所です」
太陽の頂であった神殿の台地が浮上していき、熾天の檻に到着する。
明らかになる現在の『熾天の檻』の状況。
空中にあいたブルーホールと、黒い球体《ドーム》に包まれたムーンセル中枢。
その下（空中浮遊）に佇む、ムーンセル中枢を見上げる男。
白衣の男、トワイス。
やってきたハクノたちに振り向くトワイス。
その顔は以前のハクノ同様、完全にデッドフェイス化していた。
回り続けるチャクラ・ヴァルティンを見せて、次回への引きとする。

〈第十二話／了〉

Characters08

キャラクター紹介





レオナルド・ビスタリオ・ハーウェイ

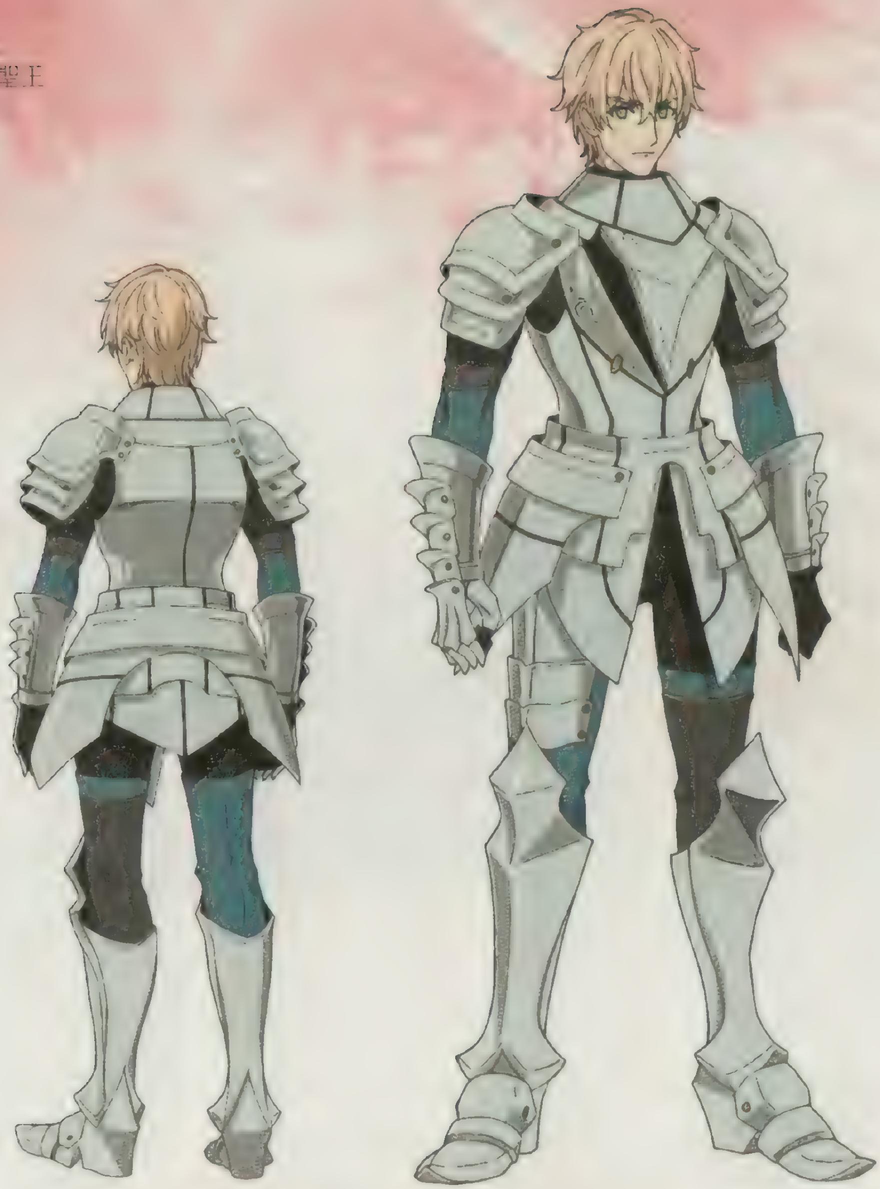
Leonardo B Harway

聖

聖杯戦争に参加した全てのマスターの中で最強と言われる、世界を支配するハーウェイの次期当主。地上の救世主、世界を治める者としてデザインされた理想の王、その器。ユリウスと同じく誕生時から多くの魔術器官を移植され、膨大な知識を継承した欧州文化圏の指導者。

一〇〇〇年前、岸波白野に対して敗北を宣言し、自ら攻性防壁に灼かれる道を選んだが、トワイス・ピースマンによって一命をとりとめた。以降はトワイスの思想を非とする前提を失い、人類の未来を諦め、第七階層の守護者となったが、第七階層に到達した幾人かのマスターを退け、自ら眠りについていた。

岸浪ハクノが上がってきた事で最後の目覚めの時を迎える。燃え尽きた王聖の灰に、わずかな火を残したまま。



ガウェイン

Gawain

白 銀のセイバー、ガウェイン。ガウェイン卿はアーサー王伝説に登場する、円卓の騎士のひとり。相対する対戦者にも敬意を払う騎士。王に仕えている。自身の感情と思考を切り離して王に仕えている。宝具は、対軍宝具の『転輪する勝利の剣（エクスカリバー・ガラティーン）』。柄に疑似太陽を封じ込めた、もう一振りの星の聖剣。太陽が昇っている間は絶対的な力を誇るが、その力はすでに失われている。

レオが九〇〇年の眠りに就く間、第七階層の管理・手入れを続けていた。彼の王が『正しい王』である以上、必ずや王に届く好敵手が現れると確信して。ネロ・クラウディウスに受けた傷により単身では戦えない、と本人は語るが、単騎でも充分に岸浪ハクノとセイバーを圧倒する力を維持している。

第十二話 用語集

辺獄の底
●へんごくのそこ

予選会場のあった階層。第一話において予選会場は消去され、今は何も無い空間が残るのみ。セイバーが眠っていた辺獄の薔薇園のみがかろうじて残されている。暗い闇の中、切り取られた空を目指してふたりは歩く。

そびえる天を睨む。
喝采は失われ、
繁栄は虚偽に落ち、
多くの願いは砕け散った。
それでも――その辺獄に、光は射した。



オーバーカウント一九九九
●オーバーカウント一九九九

トワイスが語った謎の言葉。決定的な資源枯渇、人類の衰退の始まりの時期。その原因は不明とされる。人類では食いつぶせない筈の地球の資源は枯渇し、世界から生命が生きていく為の力は失われた。地球はその魂とも言える核を傷つけられた、と彼は語るが……。



ガウェインの傷跡
●ガウェインのきずあと

一〇〇〇年前の聖杯戦争、第七回戦で受けた傷。ガウェインの胸を抉り、霊核を破損させている。レオとの対決時、千載一遇の好機に全て



をこめて放たれた、岸波白野とそのセイバーの生命の証。本来、倒せる筈のない相手。絶対の敗北の運命を覆した一撃を前に、レオは自らの敗北を受け入れた。「――貴女に、この先の未来は無いとしても」、「貴女という生命の意義は、その一撃で完成した」。それは転じて、理想の王として作られながらその理想そのものに疑問を抱いた、最後のレオの完成でもあった。

栞

●しおり

ありすとナーサリー・ライムが遺したもの。劣化しているものの『永久機関・少女帝国』を発動させる。栞は一度きりで散ってしまうものであり、その使用と共に、ナーサリー・ライムもその長かった物語を終え、穏やかに本を閉じた。




第十二話
喝采の薔薇

熾天の檻

覚者は去り、聖者は燃え、天輪は軋み続ける。

「熾天の檻」は死相たちの柩のように。

——だが。もし君が、今は生者であるのなら。

アバン

最上層『熾天の檻』／ムーンセル中枢前。
ハクノたちがやってくる数分前の状況。
地上一〇〇メートル位置に留まり、ムーンセル中枢を見上げる、デッドフェイス状態のトワイス。
　トワイス「――――」
第七階層で起きているレオとハクノの戦いを感知し、瞑想から目を覚ましはじめる。
そのおり、過去のトワイスの記憶がリフレインする。

アバン／一〇〇〇年前・トワイスの記憶

　トワイス（忘れないでほしい。私は、地獄から生まれた）

CHECK▶ 以後、このシーンでの過去トワイスはトワイスとする。

炎上する南ベトナムの集落。
断続的なM16の銃声と、複数の悲鳴。

ナパーム弾を次々と投下する『死の鳥』こと爆撃機B52のシルエット。
燃え上がる森と集落を見つめる、三〜四歳の幼い孤児（幼いトワイス）の瞳。
トワイス（戦火、戦争）
憎悪に燃える瞳。歯噛み。
トワイス（幼い私にとって、ソレは現実のすべてだった。
　憎みながらも肯定するしかない残酷な光景。
　無慈悲な世界。人類史が生み出す、歪みの地獄）

×　×　×

一九九九年、都内の焼け跡（原作参照）。八〇〇〇人規模の大惨事。
倒れ伏した犠牲者たちを見つめる、自分も負傷し倒れた状態のトワイス。
戦争への憎悪に揺れるその瞳。
トワイス（それほど長くはない人生だった。
　成長した私は科学者となり、人を救う為の発明を成す傍らで、
　戦地での医療にも従事したが……）
数メートル先で倒れた子供（三〜四歳）へ震えながら伸ばされる、トワイスの手。
トワイス（一九九九年極東。バイオテロに遭遇し――為す術もなく）
倒れていた子供、弱々しく咳をして、血を吐きながらも立ち上がる。

トワイス（……ああ）（※静かに、穏やかに）

死にかけながら、何かを悟った表情を浮かべるトワイス。

地獄の中で立ち上がる命の強靱さを自分は求めていたのだ、という悟り。

暗転。

トワイス（死んだ）

×　×　×

――ポコリ、と泡のイメージ。

トワイス（そして）

月のSE.RA.PH。海中の第七階層。

海の泡の中で、徐々にデータ構成されていく白衣のトワイス。

トワイス（死亡した彼の、私の――トワイス・H・ピースマンのデータを再現した電脳体が、NPCとしてSE.RA.PHに配置された）

データが完成し、瞼を開くトワイス。

トワイス（人間として生きた私とは違う、しかし確かに私である者）

虚空からデータ構成された眼鏡を装着。

指で、眼鏡を押し上げる。

トワイス（そう。言わば、サーヴァントのようなものか）

×××

月の聖杯戦争アリーナ。

トワイス（私はイレギュラー中のイレギュラーだった。
　トワイスの記憶をすべて有し、自我さえ獲得した特殊なＮＰＣ）

月のアリーナに立つトワイス。

トワイス（あまつさえ、マスターとして月の聖杯戦争に組み込まれもした）

手を掲げて令呪を見る。

背後には玉藻の前のシルエットがある。

トワイス（私は――）

×××

真っ赤に染まった月の聖杯戦争アリーナ。

トワイスの前には、数多のマスターたちの死体がいっぱい。

トワイス（何百という試行錯誤（リトライ）の末、そこに辿り着いてしまった）

振り返るトワイス。上空には『熾天の檻』の姿。

トワイス（熾天の檻。七天の聖杯（セブンスヘブン・アートグラフ）を安置する、七つのソラの頂へ）

トワイス、『熾天の檻』へと歩き始める。

トワイス（すべては自我という奇蹟を与えられて再誕した、

　その責務——タスクを果たす為に）
歩くトワイス。
トワイス（聖杯をこの手に。地獄で生まれ落ちた男が心より願った夢を、今こそ）
　×　×　×
ゲーム版最終ステージ、ムーンセル中枢前。中枢前に佇むトワイス。
トワイス（だが）
ヴーン、とムーンセル中枢の発光音。
トワイスは手を伸ばしかける。だが、その手が途中で止まる。
トワイス（聖杯を、私は得られない。ＮＰＣには最終的なアクセス権限がない。
　ムーンセル中枢へ立ち入ることは、できない）
画面暗転。
トワイス（故に、私は待った。……私の思想を体現する後継者を）

アバン／一〇〇〇年前・ゲーム版最終ステージ

トワイス過去回想・岸波白野との対峙。
ザッ、と記録映像開始のイメージ。

広大な空間。乱立する石柱の山の上に立つトワイス。

トワイス「この未来は間違っている——誰かが、やり直さなくてはいけない」

トワイスの視線の先に、真剣な面持ちの岸波白野とネロの姿。

トワイス「人類史は歪んでいる。未熟な時代の後、来たるべき成熟期——

黄金期は遂に来なかった。

消費と繁栄のバランスは崩れ、停滞し、腐乱した」

「人類は、我々は停滞という悪性を切り離せないまま、

腐り果てて、遂に精神の枯渇を迎えるに至った」

「世界は袋小路に入っている」

白野「……」

トワイス「この未来はとっくにデッドエンドを迎えている。

人類は結果を出さず、見苦しくも半ばで終わる」

ネロ「——」

キッとトワイスを睨んでいるネロ。

トワイス「誰も、未来を望んでいない、興味がないのだろう。

前に進む事より立ち止まった方が遥かに楽なのだと」

「だいたい人間はもう充分に幸福だ。

　これ以上の進歩なんて、それこそ不要なものだろう。
　……人々の意識はそう語る」
息を吐いて、首を横に振るトワイス。
トワイス「いいや、それでは意味がない。
　ただ幸福でありたいと願うのなら、動物のままでいれば良かった」
トワイスの背後（上空）で、ヴーンと僅かな音を立てるムーンセル中枢。
トワイス「だが幸福以上のものを求めて、君たちは、我々は、多くの血を流してきた」
　ネロ「……」
心当たりのあるネロ、眉根を寄せる。
トワイス「……私は、その弱さに憤怒する。
　なぜ人々はそこまで強くありながら、かくも弱いのか」
「この結末は、はたして二〇〇〇年の価値があるのか？」
「争いを忘れた人間は消え去るのみ。
　生存競争こそが生命の根底。真の意味で生き残る手段である」
右手を高々と掲げるトワイス。
トワイス「――そう。争いこそが、進化の道だ」
「殺せ、拓(ひろ)がれ、奪え、栄えろ。

この星を枯らすのなら、この星を置いて宙に至れ」
「それが人間の、最低限の責任だ」
掌を開いて岸波白野へと伸ばすトワイス。
トワイス「そして、君こそがその結晶」
白野「…………」
佇む岸波白野の姿。
トワイス「その成長を見ろ。戦いが君を育て上げた。苦境がその血肉を鋼に変えた。
一流のマスターたちをも凌駕させた。
なのに——その尊さを知る君が、この闘争を否定するのか？」
一瞬の静寂。
白野「……この時代に」
白野はトワイスから視線を逸らさず、
白野「何の価値も見いだせなくても。この未来がすべて他人事にすぎなくても。
たとえ、私たちの夢見た先が、愚かしい行き止まりでも」
一旦、瞼を閉じて——
瞼を開けて、悲しげな瞳を向ける。
白野「ここに生きる人たちの人生を、否定する事はできない」

トワイス「この未来を認めるのか、君は」

白野「いいえ、認める事はできない。——けれど、憎む事も、またできない」

わずかに視線を下げてから、再びトワイスを見据える岸波白野。

白野「結末を選ぶのは、その時代に生きる人々の責任だ。

トワイス・H・ピースマン。貴方が守るべき時代は、とうの昔に過ぎ去った」

トワイス「——————」

トワイス、戦闘開始を告げるように片手を上げる——

ザッ、と記録映像停止のイメージ。

アバン／最上層『熾天の檻』・ムーンセル中枢前

カメラ、現在に戻る。

最上層。デッドフェイス状態のトワイス、ムーンセル中枢を見上げている。

トワイス「九〇〇〇年ぶりの不備とはね。

——欠けた夢を、見たようだ」

先ほど、一瞬だけリピートした過去の記録に対して感情なく呟くトワイス。

アナウンス「事象選択樹　剪定機構——チャクラ・ヴァルティン、

伐採準備が整いました。すべての並行世界運営停止、
すべての可能性断絶開始まで　あと一二〇〇秒」
ムーンセルからのアナウンスが響く。
そこに——
トワイスの背後、熾天の檻の地上部分に新しいフロアがリフトアップしてくる。
第七階層から上がってきたハクノ一行である。
それに振り向く事なく、ムーンセル中枢を見上げ続けるトワイス。
トワイス「おかしな事は続くものだ。有り得ない光景を、私は見ている」
「もっとも——これといって意味のない、不要極まる来客だが」
デッドフェイス・トワイスの横顔。

最上層『熾天の檻』・地上

第十二話の続きから。
上がってきたハクノ&セイバー&リン、レオ。
緊張した面持ちの三人だが、上空に浮かぶトワイスは反応しない。
リン「あれが……トワイス・ピースマン？　ひとりだけ？　サーヴァントは？」

セイバー「気配はない、が——」

ハクノ「……ッ」

トワイスに確固たる衝動（怒り）を覚え、決意をこめて胸を押さえるハクノ。

レオは泰然と、上空のトワイスとムーンセル中枢を見上げている。

トワイスの背中、かすかに動く。

顔半分だけを後ろ（ハクノたちのいる地上）に向けるトワイス。その横顔は完全にデッドフェイス化している。

三人「!!」

レオ「(冷静)」

トワイス「………」

トワイス、ハクノ一行を見たものの、関心ないとばかりに顔を中枢に戻す。

——直後。キラキラ、と一瞬だけ小ヴァルティィンの輪に光がともる。

セイバー「来るぞ、離れよ!」

リン／ハクノ「!」

ハクノとセイバーは右、リンは左に飛ぶ。

入れ替わるように上空から小ヴァルティィンの光弾が着弾。

ここから、終わりのない小ヴァルティィンからの光弾掃射が始まる。

ハクノとセイバー、リンはそれぞれ別方向に移動し、ヴァルティンの掃射から逃げている。
レオは微動だにせず佇んでいる。ヴァルティンもレオは狙わない。トワイスにとってレオはまだ味方判定であり、レオもトワイスと敵対していないからだ。

CHECK▶ ヴァルティンの掃射はまだまばら。本気で狙っていない。ただの自動防衛。ヴァルティンの砲門は輪の内側にびっしりと作られているが、ここではまだ一部がランダムに開いてビームを撃っているだけ。ロックオンもしていない。

ひとり涼しげに佇むレオにリンが文句を言う。

リン「なに余裕かましてんのよ!?」

レオ「僕は中立ですので。どうぞご健闘を」

笑顔で手を振るレオ。

セイバー「レオめ、他人事か！　ええい、敵か味方かハッキリしろというのだ！」

×　×　×

砲撃を避けながら、遮蔽となる神殿跡Aへ滑り込むハクノ&セイバー。
そこには、先に隠れていたリンがいる。

リン「話し合う気は微塵もないって訳ね！」

セイバー「それならそれで良い！　むしろ手間が省けた！」
セイバー、ハクノへ目を向けて、
セイバー「マスター、準備はよいか！」
ハクノ、トワイスがデッドフェイスである事に驚いているが、それを飲み込んでセイバーにうなずきを返す。
ハクノ「勿論」
「オレも、メチャクチャ怒っている」
セイバーとリン、ハクノの返答に頷き返して、同時に遮蔽から飛び出す。
二手に分かれて集中砲火を二つに分断する作戦。

×　×　×

リン「借りるわよ……！」
リン、走りながらサーヴァント化。
サーヴァント・ラニの片腕をガトリング砲にしたものを持ち出し、トワイスを掃射。
リン「届け――――！」
凄まじい強度のガンド砲連射。
ガンド砲、小ヴァルティンの砲撃に削られながらもトワイス本体へ届きかける。
だが、無数の小ヴァルティン砲台に全弾撃ち落とされ、あと一歩で届かない――

というところでリン、ガトリング砲そのものをミサイルに変えてトワイスへ発射。

リン「JACKPOT（ジャックポット）！」

ミサイル、トワイスの直前まで迫り——

からくも小ヴァルティンに迎撃され、爆発。

セイバー「もらった！」

爆発の隙をついたセイバー、大きく空中を回り込んでトワイスに接近。

小ヴァルティンの自動防衛砲撃を受けながらもトワイスに肉薄し、剣を一閃。

セイバー「ふッ！」

胴体から真っ二つにされるトワイス。

しかし、トワイスの電脳体は水面に映った像のように揺らぎ、元に戻る。

セイバー「!?」

セイバー（手応えはあったぞ……！）

空中でわずかに戸惑うセイバー。

そこに、チャクラ・ヴァルティン（大）からの光槍の狙撃。

セイバー「！」

セイバー、隕鉄剣で防ぐも勢いを殺し切れず、光槍を受け止めたまま吹き飛ぶ。

最上層の地上に叩きつけられる直前、

ハクノ「セイバー！」

神殿跡Ａの物陰から姿を出したハクノによるコードキャスト援護。
コードキャスト光弾が複数、ハクノの眼前に展開した電子的魔法陣から射出。
光槍は横から光弾群に破壊され、セイバー、体勢を立て直して神殿跡に着地。

セイバー「見事だマスター！　もはや愛だな！」

ハクノ、セイバーの喜びように、照れくさいが勿論、と無言で頷いて返事をする。
と——
ふっと小ヴァルティンからの砲撃が止み、トワイスがゆっくりと振り向く。

トワイス「………………」

セイバーとリンを流し見て、レオに一瞬目を細め、最後にハクノを見定める。

トワイス「……なるほど。君が、地の底から這い上がってきた死の総体か」

体ごと向き直るトワイス。

トワイス「素晴らしい健闘だ。
　辺獄から最上層まで、僅かに残ったマスターとサーヴァントの残骸を
　砕きながら、よくぞ此処まで。もっとも、それも——」

トワイス・デッドフェイスの目が輝く

トワイス「意味の無い戦いだったが」

緊張感のある一瞬の間。

セイバー「余は大いに不満だ。
　　リベンジに来たというのに、肝心の相手がいないとはな」

トワイスのサーヴァント、セイヴァーがいない事を指摘するセイバー。

トワイス「覚者は既に去った。もうこの宙域では再現されない」

ソラの大ヴァルティンを示すトワイス。

トワイス「宝具、大輪聖王――チャクラ・ヴァルティンのみを残して」

ゴウン、と回転する大ヴァルティン。

トワイス「彼の去った此処で、私は、私自身の思想を断念するに至った。
　　岸波白野さえ私の後継者ではなかった。ならば」

ムーンセル中枢、輝く太陽。

トワイス「私だったものは消去される事を覚悟した上でムーンセル中枢へと至り、
　　SE.RA.PHを閉ざす事を選択した。
　　人類に残された、この最後の新天地を」

セイバー、その言い回しに訝しむ表情になる。

セイバー「私だったもの……？　消去だと？」

リン「トワイスはデータエラーの一種。

ムーンセル中枢にアクセスしようものなら自動的に消去される。

……そうか。SE.RA.PHの運営に手を出し、聖杯戦争を廃止した時に、

トワイスはムーンセル中枢に触れていたのね……」

そして死んだ。

かつて幾人の檻で多くの聖杯戦争の勝者を倒してきた〝戦いの王〟は、これまでのマスターたち同様、もう失われていたのだ。

CHECK▶ トワイスが自発的に『人類の悪』にまわったのか、その真実は最後まで語られない。ムーンセル中枢にアクセスしたトワイスが死を覚悟で何を望んだのかは語らない。ただ、その結果としてSE.RA.PHの運営は縮小し、ムーンセルは緩慢な死のルートを観測し始めた。

ハクノ「じゃあ、いまあそこにいるアイツは誰なんだ」

ハクノ、トワイスを見上げて睨む。

トワイス「私はトワイス・ピースマンを名乗った電脳体の残骸。

此処に焼き付いたデッドフェイス――――君の、同類だよ」

ハクノ「同類……」

頷くトワイス。

トワイス「意味のない戦い、とはそういう事だ」
「ともに死から生まれ、死を望むもの。
君の怒りは君自身に向けられたもの、私と戦う必要はない」
ハクノ「…………」
トワイス・デッドフェイス、目を細める。
トワイス「自分の正体に納得がいったのなら眠るがいい。
もとより憎しみだけで登ってきたもの、
憎む相手がいなければ存在する意味はない」

CHECK▶ ここで「同じデッドフェイスだからおまえを取り込めるぞ」といった台詞を言わせておくとラストの演出が分かりやすくなるのですが、言わなくても伝わるのならスルー。会話のテンポが悪い。

セイバーとリン、ハクノを見る。
ハクノは堂々と、トワイスの視線を受け止めて返答する。
ハクノ「憎しみだけじゃない」
「オレの目的は、おまえの先にあるものだ。

生者として、ムーンセルに……勝ち上がったマスターとして中枢に辿り着く」
トワイス「……何の為に？」
ハクノ「新しいものを見るためにだ。
おまえみたいな、死ぬために死ぬようなヤツと一緒にするな」
トワイス「――――つまり君は」
ハクノ「ムーンセルを正常に戻す。おまえの話には何一つ興味がない」
トワイス「地上を救うと？　死から生まれたものが？」
トワイス「だが、とっくに手遅れだ。地上に人類の生活圏は存在しない」
馬鹿らしいと嗤うトワイス。それはかつてのトワイス本人の思い上がりと同じだからだ。
トワイスが手を上げる。
映像ウィンドウが一帯に広がる。
廃墟と化した都市、汚染された黒い海、灰色に澱んだ空――
リン「あれが……今の、地上の、光景……？」
息を呑むリン。険しい表情のセイバー。
トワイス「そうだ。キミが生きていた一〇〇〇年前とは違う。
あらゆる文明が滅び去った、人類の終焉だ」
「人類は資源枯渇などでは滅びない。

この惑星の資源は人類などに食いつぶせるものではない」
「だからこそ人類はいつまでも残り続け、無様を晒した。
——天災がなければ臨終すらできない知性体。その幕を私が引いた」
「私がこの座についてから、じき一〇〇〇年。
たったそれだけの時間で、
一万七千年近く続いたヒトの歴史は終わったんだよ」
淡々と語るトワイス。
震える体を抱きしめながら、ショックに耐えるリン。
ハクノも同じようにショックだが、ふん、とトワイスを小馬鹿にした笑いをうかべて言い返す。

ハクノ「なんだそりゃ。みっともないぜ救世主」
トワイス「……なに？」
ハクノ「逆だろ。一〇〇〇年かけても滅ぼせなかった、に言い直せ」
トワイス「……！」
ハクノ「住む場所がなくなっただけで、人間はまだ生きている。
だからおまえはSE.RA.PHを壊すんだろ。
生き残った人々が、いつかここに辿り着く事を知っているから」

トワイス「――――――」

目を細めるトワイス・デッドフェイス。

そこに、セイバーが一歩前に出る。

セイバー「トワイス・ピースマン。賢者の残骸よ」

静かに、だが強くトワイスに語りかけるセイバー。

セイバー「人類が憎いのか？　貴様の思う理想に届かなかった人類が」

トワイス「まさか。どうでもいいものを憎む事はできない」

「単に消えて欲しいだけだ」

トワイスが手を再び上げると、映像ウィンドウがすべて閉じて消える。

トワイス「成果を出せないのなら消えるべきだ。

マイナスで終わったのなら、せめてゼロに戻そうと考えただけだよ。

かつて地上で生きた、ひとりの人間として」

セイバー「はっ！」

セイバーは笑い飛ばして、

セイバー「諦めた賢人ほど傍迷惑なものはないな！」

トワイスへ真剣な視線を叩き付ける。

セイバー「ゼロをもって和とするなぞ、生命原理への冒瀆だ。

　貴様は今、あらゆる生命より劣っていると馬脚を現したのだ！」
堂々としたセイバーの論破。
しかしトワイスは動じる事なく、冷淡に返す。
トワイス「そうだとも。
　人間はあらゆる生命に劣るものだと、ここまで語ってきたつもりだがね」
再び手を上げるトワイス。
瞬間、小ヴァルティンの全砲門が開く。
ハクノ、セイバー、リンを正確にロックオン。
トワイス「――――」
トワイスが手を下ろすと――
小ヴァルティンから、レーザーが雨のように降りそそぐ。
セイバー「奏者！」
咄嗟にハクノを庇うセイバー。
だが、この攻撃は防ぎようがない――
というところで、ハクノたちの頭上すべてを覆う広大、かつ強固な防御障壁が展開する。
レオによるコードキャストである。
トワイス「！」

トワイスの視線の先にはレオの姿。

レオ「お礼は結構です。皆さん、お早く！」

レオの障壁は熾天の檻すべてを覆っている。レーザーは防がれているが、それも紙が焼けるように虫食いになっていく。

咄嗟に、近場の建物（神殿跡Ｂ）の中へ移動するハクノたち。

最上層『熾天の檻』・神殿跡Ｂの陰

ズウン、ズウン、とレーザー射撃を受けて断続的に揺れる神殿跡Ｂ。

ハクノ、神殿跡Ｂのひさしの陰に隠れながら電子的デコイを展開。

コードキャストで作られた偽ハクノたち神殿跡Ｂからバッと飛び出て、散り散りに逃げていく。（囮である）

レオ「おや。気の利いた事を」

ハクノ「ただの現状維持だけど」

レオ「いいえ。いい判断です」

レオ、瓦礫に腰掛けて、信頼できる戦友を見るように微笑む。

ハクノ、ちょっと嬉しい。

ズウン、と神殿跡B全体が揺れる。
揺れと揺れの間隔は当初より長い。
セイバー「一撃ごとに最上層が揺れるようだ」
リン「デコイと障壁で分散してはいるけど、ここにも撃ち込まれてるわ。
崩れるのも時間の問題ね」
セイバー「いかにして、あのチャクラ・ヴァルティンを止め……」
リン「そして、いかにして、ムーンセル中枢へ入り込むか。ね」
セイバー「ヴァルティンを直接破壊するのは難しかろうな。あの巨体だ」
ズウン。揺れる天井。
むっとして天井を睨むセイバー。
リン「定石で言えば、宝具を所有するサーヴァントを倒せば消えるコトが多いわ。
この場合、サーヴァントはもういないから――」
セイバー「トワイス本人を倒すしか手はないな」
ハクノ、首を横に振る。
ハクノ「トワイスは倒せない。死者だからだ。あの妄念は永遠に晴れないだろう」
セイバー「……」
ハクノ「でも、手段はある」

リン「それは？」

ハクノ「いちいち相手にする必要はないさ。
　ムーンセルを正常化すれば、デッドフェイスは消えるんだろ？」

ハクノの言葉にハッとして頷くリン。

リン「……勝利条件はトワイスの撃破じゃなくて、
　聖杯戦争のマスターが中枢に辿り着くコト、か」

レオ「合理的ですね。ですが、貴方はそれでいいのですか？」

ハクノ「────確かに、メチャクチャ怒っているけど」
「オレには、アイツに言いたい事なんて何もない」

ハクノ（死の総体としての怒りと、岸浪ハクノとしての思いは、もう別のものだ）

静かな横顔のハクノ。

リン「……」

リン、苦虫を噛みつぶした顔。ハクノの提案に納得がいかないが反論しないように努力している。「その方法だとアンタも死ぬじゃん！」と怒りたい。

ズウン。揺れる天井。小さな破片が落ちる。

レオ「反論、異論を挟む時間はありませんね。では中枢に入る手段を考えましょう」

リン、掌の上に最上層の疑似モデルを構築。

リン「問題はチャクラ・ヴァルティンの砲火と、ムーンセル中枢を覆う黒いドーム」
人型のコマが構築されて、中枢へ接近。
疑似小ヴァルティンの砲火を受けて消滅。
リン「中枢に向かうものは集中砲火によって消滅は必至。切り抜けたとしても……」
人型コマ、疑似中枢へ迫るが、疑似ドームに阻まれて周囲をウロウロ。
リン「あの黒いドームが邪魔ね」
レオ「ひとつ助言を。あのドームはチャクラ・ヴァルティンによって作られたモノ」
疑似小ヴァルティンを、コードキャストによる小さな光弾で弾くレオ。
レオ「ヴァルティンの小輪を止める事ができれば、一時的に停止する筈です」
疑似ドームが解除され、人型コマは無事に疑似中枢に到達。
浮かび上がる『MISSION COMPLETE』の文字。
リン「でも、どうやって?」
レオ「ここにある我々の全ての力で。先陣は僕が切ります」
セイバー「貴様が?」
レオ「トワイス・ピースマンを消去する事はできませんが、
一時的に無力化する程度であれば必ず。
ついでに、チャクラ・ヴァルティンも、止められるのなら止めてみましょう」

涼やかに言ってみせるレオ。
ハクノ、セイバー、リン、呆気にとられる。
リン「あっさり言ってくれるわね？　中立じゃなかったの、アンタ？」
レオ「ははは。過去に拘るのはやめた方がいいですよ、ミス・遠坂。
僕らはいま、SE.RA.PHに残された最後の三人なんですから」
ハクノ「……アンタが手を貸してくれるのは心強い。けど、どうして」
レオは視線をハクノを向けて、
レオ「その前に、僕からも一つだけ質問を。ずっと考えていたのですが」
ハクノ「？」
レオ「第七階層での事です。貴方はなぜ、あの時僕に名乗ったのです。
岸波さんの名前を聞けば、
僕が大人げなく機嫌を損ねると分かっていたでしょう？」
ハクノ、わずかに返答を戸惑った後、意を決して気持ちを口にする。
ハクノ「名乗るべきだと思ったんだ。
あそこでアンタと戦った岸波白野と、なにより岸波白野に道を譲った、
馬鹿みたいに強かったマスターの為に」
レオ「――――それなら、よかった」

レオ、穏やかな微笑みを浮かべてから、スッと立ち上がる。

レオ「随分と昔の話です」

ハクノたちから離れ、神殿の外に歩き出すレオ。

レオ「救世主に自分の限界を突きつけられ、

もう人類は終わらせるべきだと自分も思ってしまった。

その時にレオナルド・ビスタリオ・ハーウェイは死んだのです」

レオの表情は見えない。

レオ「砕けた王聖。灰になった王聖。火種はもう残ってはいない。

それでも——」

横顔を見せるレオ。

その口元には微笑みがある。

レオ「それでも、顔を上げる事はできるんですよ。

自らが再起する事は叶わなくとも、希望を送り出す事ぐらいはね」

一〇〇〇年前にあった軽やかさを口元に浮かべて、戦場に戻る少年王。

最上層『熾天の檻』・地上

最後に残っていたと思しいハクノのデコイがレーザーの直撃を受けて消滅。
いかにもデコイですよ、とデータの残骸になって消えていく。
そこに神殿跡Bからレオが姿を見せる。
トワイス、レオを見下ろして――

トワイス「君が熾天の檻に上がって来る事はないと思っていた。
その上、私の方針に異を唱えるとは、想定外だった」
レオ「ええ」
トワイス「なぜ今になって？　君は私と同じ賢人の筈なのに」
レオ「貴方と同じですよ、トワイス・ピースマン。
ただし、かつての貴方と。これはボク一人では成し得ない事ですから」
「理解者、協力者。あるいは後継者を待っていた、と？」
「そう。貴方とボクの最大の違いはそこですね。
貴方は最後まで理解者を、賛同者を得られなかった」
「ですがボクは違う。最後の最後で、共に戦うに足る人物に出会えました」
トワイス「――――そうか。つまり、君は」

レオ「ええ。あの時行うべきだった王としての裁決を、ここで果たします」

小ヴァルティンの一斉掃射、ストップ。

レオをロックオンして集中砲火（第二段階攻撃）準備。キン、と魔力が高まっていく。

レオ「……」

レオの令呪と右腕が魔力の光を発する。

全身の魔力回路が励起するイメージ。

同時に、レオの体が崩れ出す。

レオも元より死人。棺から出た時からこうなる事は目に見えていた。

トワイスが助けたのは『ファイヤーウォールで灼かれる』事だけ。レオ本人の致命傷……

白野に受けた傷は治りようがなかったのだ。

それを承知でレオは全身の魔術回路を稼働させる。

レオ「――ガウェイン」

短いが確かな呼びかけ。

レオの背後に今まで霊体化していたガウェインが出現する。

ガウェイン「従者ガウェイン、ここに」

レオ「もう一度だけ付き合ってください。疲れているでしょうが、最後の力をボクに」

ガウェインは嬉しげに微笑む。

ガウェイン「いいえ、剣は疲れません。
　剣は主の命の下、崩れ落ちる一瞬まで輝くもの」

CHECK▶ 第十二話の『剣は疲れない』の本当の回答。

ガウェインの言葉に最後の力をもらうレオ。
ヴァルティンの集中砲火、レオに向けて放たれる。
レオ、これを睨み、先ほどの超強力防御障壁を一瞬で展開。
同時に、ガウェインに全魔力を流し込む。
聖剣を下段に構えるガウェイン。
折れた刀身から光が伸び、補強する。
二人の呼吸、霊基、すべてが完全に一致する。
　レオ「ふぅぅぅ――――」
レオの最後のコマンドがサーヴァントに託される。
胸の致命傷が燃え上がるように全身に広がっていく。
それに応え、騎士は聖剣を抜刀する。
ガウェイン「この剣は太陽の映し身、地に残された最後の光。

たとえ刀身が折れようと、主の意思に応えるもの」
レオ「邪悪を払うは星の聖剣――」
ガウェイン「転輪する勝利の剣(エクスカリバー・ガラティーン)――!」
聖剣攻撃、小ヴァルティンの砲火と拮抗。
ビーム同士の衝突。
二つは拮抗するかに見えるが、ガウェインとレオの力が勝る。
ガラティーンの光は宙に浮かんでいるトワイスを焼き尽くし、そのまま長大な光刃として振るわれ、小ヴァルティンを薙ぎ払う。
小ヴァルティンの装甲が灼かれ、中身が露出する――
ガウェイン「…………!」
声にはできなかったガウェインの別れの言葉。
ガウェイン、ガラティーンのバックファイアで燃え尽きる。
レオ(ありがとう、ガウェイン)
直後、小ヴァルティンの健在な砲門からの光線がレオを直撃。
レオ「ボクたちの戦いは、ここまででしたね」
最後に、満足げな微笑みを残し、炎の中で燃え尽きるレオ。

最上層『熾天の檻』・小ヴァルティン

小ヴァルティンは大きな損傷を受け、傷口から黒煙を上げているが健在。
回転スピードも変わらず、断続的な斉射攻撃が続いている。
ムーンセル中枢を覆うドームも健在。
ガラティーンによって完全に焼き払われたものの、トワイスは徐々に再現されていく。文字通り、死人は殺せない。

最上層『熾天の檻』・神殿跡Bの陰

リン「なんて威力……！」

驚愕するリン。
リンの手の上の小ヴァルティン疑似モデルが、現実とそっくり同じように損傷中。

リン「でも、あれだけの一撃を受けてもなお健在なんて――」

セイバー「……見事な王聖の輝きであった。今こそ好機とみたぞ、奏者」

セイバー、ハクノを見つめる。
一瞬の間。

ズウンズウン。天井が揺れて、軋む。

セイバー「余に令呪を。聖剣が付けたヴァルティンの傷を利用して、

二秒、なんとしてもあの輪を止めてみせよう」

ハクノ「令呪――」

セイバー「その隙に、そなたはムーンセル中枢へ」

リン「二秒か。特攻に近い作戦だけど……残る火力を注ぎ込むのは、そうね。

今しかないわ」

ハクノ「…………」

ハクノ、逡巡。

セイバーの視線を受け止めきれずに目を逸らし掛けるが――セイバー、一歩二歩ハクノへ接近。

令呪のある手をぎゅっと握り、

セイバー「……本音を言うとな。一秒でも長くこうしていたい。

離ればなれで戦うのはイヤだ。不安でたまらぬ」

セイバー、寂しく目を細めて、

セイバー「だが、余はそなたのサーヴァント。

マスターを勝利させる為なら、あらゆる恐怖を乗り越えるのだ」

えっへん、と強がりを言うセイバー。

ハクノ「……ああ。知ってる、ずっと見てきたから」

ハクノ、セイバーの手を握り返す。

ハクノ「最後の令呪だ」

その手の令呪が光を放つ。

ハクノ「――セイバー、キミにすべて託す」

セイバー「うむ、確かに任されたぞ」

コツン、とハクノと額を合わせて、

セイバー「では、互いに行くとしよう！　そなたは先に中枢で待っているがよい！」

大きく頷くハクノ。

その背後で寂しそうな顔のリン。

セイバー「奏者の援護は頼むぞ、リン！」

隕鉄剣を実体化させながら、神殿跡Bからバッと飛び出るセイバー。

セイバー「最後の王は矜持を示した。

ならば次は、最高の皇帝――余の見せ場である！」

最上層『熾天の檻』・小ヴァルティン

トワイス再生中——

トワイス「ふむ」

もう頭部までデッドフェイスごと再生している状態だが、上半身の左側が途中。

×××

セイバー、一直線に飛翔。

令呪ブーストでハイパーモード、超高速跳躍による飛翔だが、無数に撃ち込まれる砲撃の幾つかはセイバーを傷付ける。

セイバー、構わずに猛スピードで飛翔を続け、小ヴァルティンの内側まで一気に到達。

回転する輪の傷口（ガラティーンによって破壊された外部装甲）に剣を突き立て、剣で回転を食い止めるようとするが……。

セイバー「止まれ……！」

そこに、砲撃が次々と降り注ぐ。

セイバー「むううううッ——！」

セイバー、渾身の魔力放出で巨大構造体である小ヴァルティンの回転と拮抗。

七キロメートルの小ヴァルティンVS一五〇センチのセイバー。人間ひとりでタンカーを

食い止めるようなものだが、セイバーは決して怯まない。
ボッ、と炎がセイバーの体にともる。
魔力放出の余波で自身を燃やしながら、砲撃に撃たれ続けながら、なんとか輪を止めようとするセイバー。
わずかに、輪のスピードが落ちる。
回転が緩まると、砲撃の数も減るが——
セイバー「くぅ、う……！　これは、さすがに——」
歯を食いしばるセイバー。
あまりの痛みと辛さで泣きそうになるのを懸命に堪える。
その時——
セイバーの目に、地上からムーンセル中枢へと飛翔していく流星が見える。
流星は小ヴァルティンからの砲撃を避けながら、再生中のトワイスを躱し、一条の光となって中枢へと飛び込んでいく。
セイバー（奏者か！）
だが、まだドームは健在だ——
セイバー「こうしてはおられぬな……！」
セイバー、最後の力で全身を燃やしながら小ヴァルティンの回転力と拮抗。

ゴウン、と軋むヴァルティン。
いよいよ止まるか、というところで――

×××

再生を終えたトワイス、小ヴァルティン（に張り付いているセイバー）へ視線を向ける。
トワイス「天輪聖王を止めるだと？」
トワイス「身の程を知れ、頭の沸いた暴食と暴君風情が――――！」
小ヴァルティンの数多の砲門がセイバーの背中に照準を合わせる。
集中砲火開始。

×××

セイバー「……!!」
集中砲火を無防備な背中に浴びるセイバー。
致命傷にも等しい一撃だが、目を瞑らずに耐えきる。
セイバー「……なんの……これしき……。どうという事はない！」
「余が見たものは星の誕生。
己がないと嘆いたひな鳥が、誰よりも高く羽ばたいた流星の軌跡である！」
集中砲火は続く。
爆風で服が裂け、髪が乱れる。

それでもセイバーは揺るがずに剣を小ヴァルティンに突き立てたまま、いっそう強く、全身を燃え上がらせる。

セイバー「いずれ虚空に消えるとしても、流るる星は永久（とわ）の標（しるべ）に！
　この身が辺獄に落ちようと、天を見るたび我が瞳は輝こう！」

CHECK▶ セイバーの決め台詞。ハクノに対する感謝と尊敬、そして誇り。流星のように一瞬で消え去るとしても、その軌跡は私の胸に残り続けるだろう、というニュアンスで。「自分はこのあと辺獄に落ちて永遠に地上にはあがれないが、空を見上げるたび、かつて一度だけ見た軌跡を思い返し、そのたびに瞳を歓びの涙で濡らすだろう」という万感の気持ちをこめたもの。

大きく軋むヴァルティン。
セイバー、それこそ燃えさかる流星のようになって、渾身の気合いと共に剣を振り抜く。

セイバー「余の名はネロ！　ネロ・クラウディウス！
　この月において、最後まで戦い続けた勇者の、
　愛すべきサーヴァントである……ッ！」

CHECK▶ 愛すべき、を自分で堂々と言いきれるのが皇帝ネロ。

おおおお、といった渾身の気合いをこめた叫び。
セイバーの剣はエクスカリバー級の光の剣（炎なので高熱の熱線だが）となり、ヴァルティンを停止させ、そして――

×××

ガゴゥン――と巨大な動作停止音。
ギ、ギ、ギと軋みながら完全に停止する小ヴァルティン。
セイバー、突き立てた隕鉄剣に寄り掛かるようにして、ホッと息を吐く。

セイバー「余はやったぞ、奏者よ……」

ぽつり、と顎から落ちる汗。
その体は希薄になり、もう体を保てずにいる。

セイバー「ここは当然褒めたたえる場面だが……今回ばかりは、仕方がないと――」

ハクノ「さすがセイバー。暴君の名は伊達じゃないな」

セイバー「なんとぉ!?」

セイバーが振り返ると、そこにはハクノの姿が。
壊れかけた防御障壁が、セイバーとハクノの頭上に展開していた事が分かる。

CHECK▼ ハクノ、実はトワイスの罵倒からの砲火を、すべてセイバーの後ろで防いでいた。

セイバー「！」
セイバーは驚き、喜び——それから疑問と怒りの表情になって、
セイバー「な、なななななぜこちらに来た!?
ムーンセル中枢はどうなって」
ハクノ「遠坂に行ってもらった。中に入るのは、マスターなら誰でもいいんだ」
セイバー「それは、そうだが————」
ぽかんと放心するネロ。

最上層『熾天の檻』・中枢近く

中枢めがけて飛ぶ流星——
砲撃を受けながらも勢いを緩めない。
それは、サーヴァント化して飛翔していくリンである。
リン「そんなんで止まるもんですか！」
「こんな大きな借り、勝ち残る以外、返せないものね……！」

×××

回想。時間は数分前に戻る。
セイバーが出て行った直後の神殿跡B。
ハクノ「遠坂は気付いていない素振りだけど」
ハクノ「いま、月の聖杯戦争の唯一の勝者は遠坂だ」
リン、目をまん丸にして「え?」と驚く。
リン「なに言ってるのよ、勝ち残ってきたのはアナタで」
ハクノ「……いや。オレは違うよ。聖杯戦争には参加していない。
　オレの戦いは、かつてそうあったものとは、別のものだった」
少しだけ寂しそうに語るハクノ。所詮、自分のすべては偽物だった、と受け入れている。
それを悲しく思うリン。
リン「でも、それがなに?　いいじゃない、偽物とか本物とか、そんな話は」
ハクノ「そうじゃなくて。遠坂にだけ聖杯を手に入れる資格がある。
　だから中枢には、遠坂が先に向かってほしい」
リン、ハクノの言葉を聞いてから一瞬だけ思考停止し、
リン「はあ!?　そんな大事な役目を私なんかに任せていいの!?」
ハクノは静かに頷く。

リン「ちょ、ムリムリ、いまさら無理だってば！
　私はただの負け犬で、アンタを利用してきた悪魔で、
　トワイスとどっこいの非人間で、
　ここまで来られただけでも何かの間違いっていうか」
そんな大事な役目を私なんかに任せていいのか、と戸惑うリン。
自分を過小評価しているリン。視聴者もそうだろう。
けれどハクノ、静かに首を横に振る。
ハクノ「それは違う」
　「二〇〇〇年間、自分を正すために、間違いを無くすために戦ってきた。
　その戦いは、オレなんかよりずっと貴(とうと)いものだった」
リン「……！」
ハクノ「だからキミに行ってほしい。本当の聖杯戦争の、正統な勝者として」
真摯なハクノの言葉。
そこにはかつて聖杯戦争に参加し、敗れていったマスターたちを尊重する気持ちも含まれている。
リン、涙ぐみそうになるも踏みとどまり、なんとか笑顔を作ってハクノの作戦に同意する。
リン「アンタ、天然のたらしね！」

そんな、けなし文句とも感謝ともとれる、親愛の言葉を返して。

×××

回想終わり、カメラは現在に。
流星となって、黒いドームが消去されたムーンセル中枢へ飛んでいくリン。

リン「でも、そうよね」
「私たちはこの為に戦った。
ユリウスも、レオもラニも——みんな、この為に戦ったんだから！」

リン、目尻に涙をうかべながら、しかし誇らしげな顔でソラを駆ける。

最上層『熾天の檻』・ヴァルティン前

シーン戻って、白煙をあげる小ヴァルティンの前のセイバーとハクノ。
見つめ合うふたり。

ハクノ「それに、約束しただろ。ひとりにしないって」
セイバー「！」

セイバー、胸を突かれて絶句。
じわりと瞳に涙を浮かべる。

ハクノの姿に、在りし日の岸波白野の姿が重なって見える。
――一〇〇〇年前の聖杯戦争。
岸波白野に真名を告げた後の会話を、セイバーは回想する。

× × ×

ネロ「それが余の真名だ。よく覚えていてほしい」
白野、うん、と静かに頷く。
白野「もう一つ。ネロが聖杯にかける願いを教えて」
ネロ「うむ。余は別に聖杯なぞどうでもよい。生前、たいていの事は叶えたしな！
奇蹟にたよるほど大それた望みは、もうないのだ」
「ただ……そうだな。本当に、ささいな望みなのだが。
余が死ぬ時に、ひとりなのは辛い。余の最期には、誰かに側にいてほしい」
さみしげな、偲ぶような独白。
皇帝ネロの最期は誰にも看取られる事のない孤独な自決だったからだ。
それを聞いて慈愛に満ちた目で微笑む白野。
白野「じゃあ約束。ひとりにしないよ、セイバー」
微笑む白野の口元。
白野「最期には誰かに側にいてほしい。

それがアナタの願いなら、わたしは絶対、アナタのもとに帰るから」

CHECK▶岸波白野はその願いを叶えると約束し、セイバーと共に七回戦を勝ちあがるものの、最後にトワイスによって消滅した。

×××

セイバーが瞬くと、白野の幻は消えている。
ハクノは穏やかに微笑んでいる。
セイバー「…………そうか」
万感の思いを込めて、満足げに微笑むセイバー。
そのドレスは裾から粒子になって崩れだしている。
セイバーももう消滅寸前なのだ。
とはいえこれで事は成った。後はリンが中枢でムーンセルを正常化すれば——
というところで、中枢に再びドームが形成されてしまう。
ムーンセルは正常化されず、ヴァルティン（大）の動きも止まらない。
あの黒い球体がリンのコマンドを弾いているのだ。つまり壊さないと！
燃え散ってバラの花びらを散らしていくセイバー、ソラを見上げる。

ふぅと息を吐いて、
セイバー「すまぬが、もう一仕事だ奏者よ」
「そなたのサーヴァントに、そなたが最高のマスターである事を示すがよい」
セイバー、ハクノに隕鉄剣を差し出す。
その手も燃えてうっすら消えかけている。
セイバー「余の戦いは終わった。唯一の願いも叶えられた」
「後は任せた、そなたの剣とならん事を！」
セイバー、泣くのを堪えながらの満面のドヤ顔。
頷き、剣を受け取るハクノ。
ハクノ「…………行ってくる」
セイバー「うむ！」
笑顔で見送るセイバー。
剣を手にして、走って行くハクノ。
セイバー「――――」
トワイスのいる方へ走っていくハクノの背中に、涙の笑顔を向けるセイバー。

最上層『熾天の檻』／デッドフェイス

ハクノ、小ヴァルティンの端からジャンプ。
セイバーの剣を手に、ムーンセル中枢――月の中央へに向かって飛ぶハクノ。
目指すは重力が逆転する重力変動点。
しかしその直前にはデッドフェイス、トワイスが立ちはだかっている。

CHECK▶ 小ヴァルティンの損傷の影響を受けたその肉体は半透明。消えかかっている。

トワイス「愚かな。ここまでの偉業を見せておきながら、最後に過ちを犯したな」
「予想外の結果になったが、ここまでだよ。
人類の為と言いながら、自らの生存を、欲望を殺せなかったキミの負けだ」

ハクノ「――――」

ハクノ、まっすぐに中枢を見据えたままスピードを緩めない。
飛んでくるハクノに、その手をミサイルのように伸ばすトワイス。

トワイス「我々は同じデッドフェイス。その体は私を受け入れる骨格となる。
その無傷の筐体、私が引き継ごう」

伸びてきたトワイスの手が、ハクノの頭を摑む。
しかし、摑めない。
トワイス「!?」

CHECK▶ とはいえ、するりとトワイスの手が透過したところは黒く変色してしまう。摑めないだけで肉体はデッドフェイス……『死』の状態に戻される。

ハクノ、顔の半分はダメージを受けるものの、意に介さず上っていく。
トワイス「(バカな)なぜ干渉できない!?」
次々と牙のような腕を生やし、ハクノに繰り出すトワイス。
ハクノの体のあちこちを貫いていくトワイスの手。しかしハクノは止まらない。痛みに唇を嚙みしめるだけで、苦痛の声もあげない。
いよいよハクノ、トワイスと接触する。
その、互いの体が融け合っている瞬間、ハクノ、一度もトワイスに視線を向けずに通過していく。
トワイス、ハクノとすれ違った時に、ハクノの心が『生きている』ものである事を知り、驚愕に包まれる。

これまでの戦い。
第七階層で得た結論。
電光の仮面は既になく、辺獄から上がってきた〝何者か〟はとっくに死者ではない事を理解しようとしなかったデッドフェイス。
トワイス「馬鹿な――そんな、事が」
ハクノ、トワイスを完全に振り切り、重力変動点を抜け、いよいよムーンセル中枢へ落下していく。
トワイス「――私が見えていない――憎んでもいない――」
「敵ですら、ないと――」
トワイス、屈辱の怒りで震えながら、落ちていくハクノに振り向き、その体から幾つもの牙（伸びるぞ）をハクノへ放つ。
トワイス「我らは同じ死から生まれたもの。
人間の愛憎。感情の淀み。人類が持つ悪として発生したもの」
「それが――
何の怒りも疑いもなく、生を讃えるなど、できるはずが――！」
ない、と声にならない否定の叫びをあげて遠ざかっていくハクノに無数の腕を放つトワイス。ハクノの背中をドスドスと音をたてて貫くも、やはり干渉できないトワイスの腕。

トワイスの領域から完全に離脱していったハクノ。
ハクノは一度もトワイスに意識を向けず、純粋に生（死）に向けて駆けていった。
ひとりしょんぼりと虚空に取り残されるトワイス。
トワイス「死者に……生者は……」
トワイス、ハクノに取り残されるカタチでカメラからアウトする。
トワイス「摑めない……か……」

瞬き～月の記憶

トワイスを通過し、ブルーホールの重力圏を抜け、ムーンセル中枢に落ちるハクノ。
これまでさんざん『昇る』ベクトルだったが、最後は『落ちる』ベクトルに。
この落下の時、ハクノは今までの出来事を思い返す。
今まで経験してきた全て。短いが自分の人生だったものを、掛け替えのないものとして噛みしめる。
希望を目指す落下。この回想がハクノにとって最後の報酬であり花道なので、映像は悲壮なものでも音楽は華々しくあってほしい。
ハクノ（ムーンセル、中枢）

風圧に目を細めるハクノの視界に、今までの旅の記憶がフラッシュバックする。

ハクノ（オレの旅の——終わり——）

×××

最下層。学園の教室。ニヤリと笑うシンジと、穏やかなアマリ。

×××

第一階層。虚飾の都市。酒場で不敵に微笑むドレイクの姿。

×××

第一階層決戦場。戦闘開始直前の、ドレイク&シンジ。

×××

第二階層。森の中に佇むロビン。

×××第二階層。夜、灯りのともった多くの墓を背にして佇んでいるラニ。

×××

第三階層。草原に立つ、ありすの背中。

×××

第五階層。雨の中、鋭い視線を叩き付けてくるデッドフェイス・ユリウス。

その背後で、影のように立つ李書文。

第六階層。中枢にて、棺の中から微笑みかけてくるラニの最期。

×××

第七階層。本来はありえない、ガウェインの庭園で共にお茶を愉しむレオ。

×××

過ぎ去っていく記録。
もう掘り起こされる事のない戦い。
SE.RA.PHの終わりを前にして、岸浪ハクノは実感する。
これは数ある聖杯戦争の一つではなく。
何百年も時が経って、その行為がもう過去の遺物（もの）として仕舞われる時の話。
聖杯戦争の終わりの物語だったのだと。
落下継続中。
急激な風圧の中で、落ちていくハクノ。

ハクノ（まったく。もっとうまくできただろうに。失敗と後悔だらけだ）
（でも、目を覚まして良かった）
（アンタたちに知り合えて良かった）
（俺には、もったいない人生だった）

瞼を閉じるハクノ。

×　×　×

――イメージ。

ハクノ（ああ――最後に）

満面の、ネロの笑顔。

ハクノ「欠けた夢を、見たようだ」

×　×　×

――シーン戻って、落下中。

閉じていた瞼を開くハクノ。

黒いドームは目前に迫っている。

隕鉄剣を構えて、落下エネルギーをそのままぶつけるハクノ。

ドームの表面に、トン、と剣が刺さる。

一瞬遅れてひび割れて、砕け散るドーム。

破片がゆっくりと舞い散る中で、同じようにゆっくりと、ムーンセル中枢に降り立つハクノの姿で――

最上層『熾天の檻』・ムーンセル中枢

ムーンセル中枢に入ると、そこは外見の四角形からは想像できない広いドームになっている。中心には四角形の『ムーンセルのコア』があり、これに触れると意識が拡大してムーンセル内部に引き込まれる。

CHECK▶ムーンセル内部は光でできた演算機械なので、ここでようやく、既存の「サイバースペース」のようなものになるのが望ましい。駆け巡る光のニューロン。ムーンセル中枢を人間の脳に模したものにするなら、中心にあるのは太陽の如き脳である。

そんなムーンセル中枢空間で、リンが先に待っていた。
というかリンは傷ついたままでこっちも今にも死にそう。

CHECK▶ここ、ハクノもトワイスの腕の干渉で全身がほぼ黒い（死に戻りつつある）ので、疲労具合はハクノの方が上か。

リン、死にかけの雰囲気。

ハクノ「ムーンセルを使わなかったのか!?」

リン「使ったわよ」

ふん、と拗ねるリン。

リン「アンタが来るまで待ってなさい、って」

ハクノ、そうか、と納得し、最初で最後のコマンドを打ち込むため、ムーンセルにアクセスしようとする。

リン「情緒ないのね。少しは躊躇いなさいよ」

ハクノ「時間がないからな。――――ありがとう、遠坂。最後まで気を遣ってくれて」

「でも、その優しさは分かりづらい。

もうちょっと素直になってほしい。友人として忠告だ」

リン、そうね、とやれやれ同意。

リン「ムーンセルの正常化はシステム更新みたいなものよ。

貴方個人の願いにはカウントされないと思う」

ハクノ「ん……」

リン「望めば叶うわ。コマンドも要らない。

中枢に触れて、思考のひとつでも送り込むだけでいい。

すべてとは言わないけれど、結構なことができるはず」

リン、静かな表情。

リン「貴方は、何を望むの？」

ハクノ「…………」

ハクノ、ちょっと黙る。

第十二話のセイバーとの会話が聞こえる。

×　×　×

セイバー「そなたは、消えるのだぞ」

ハクノ「やってみなくちゃ分からない」

×　×　×

ハクノ、頷く。

ハクノ（そうだ。消えるかどうかの話じゃなくて、

その時、自分が何を思うのかは、やってみるまで分からなかった）

その表情は穏やか。

ハクノ「やり直しはできない」

リン「ええ」

ハクノ「だからせめて、新しい世界を」

リン「――――」

リン、驚いた表情。

ハクノ「託される人たちには、本当にしんどい話だろうけど」

リン、無言で苦笑い。

ハクノ、中枢の太陽に手を伸ばす。

ハクノ（ムーンセルが正常化されれば、オレは消える。
　違法なデータとして最小単位まで分解され、自我も何もかも消え去る）

太陽の光がハクノの手を灼き始める。

ハクノ（あるいは、別の何者かとして目を覚ますのかもしれない。
　あの日、青い空を見上げていた時のように）

ハクノの横顔が電子的損傷をしてぶれる。

ハクノ（この記憶……記録も、築き上げた関係も、失って）

一瞬の間。それから、ハッとするハクノ。

ハクノ「（呟き）――なんだ。その程度なら、なんとでもなるぞ」

口元に浮かぶ笑み。

一度だけリンへ振り返ったハクノ、希望に満ちた笑顔を浮かべて――

ハクノ「だって、一度来た道だ」

中枢へ向き直り、まっすぐに手を伸ばす。

ホワイトアウト。

最上層『熾天の檻』・全体

シーン切り替わり、熾天の檻。
チャクラ・ヴァルティンの大輪が崩壊しはじめる。
それを見届けているセイバー。そのドレスはチリチリと燃え散っている。
セイバー「かくして閉幕。これ以上はない、輝かしいアンコールであった」
「月はあるべき姿を取り戻し、SE.RA.PHは新しい世界を拓くだろう。
ひとりの人間が示した、誰も知る事のない決意によって」
「だが！　物語は悲劇では終わらぬ。
デウス・エクス・マキナなどこの月にはいくらでもいるからな！」
「世界が続くかぎり人類の旅は終わらない。
死からこぼれ落ちながら最期まで生を信じ、
生に焦がれながら、終わりを拒む事はしなかった者よ」
「その在り方が余には悲しく、また誇らしい。
見事だ、我が奏者、我がマスター。

岸浪ハクノ――そなたの戦いに、万雷の喝采を！」
セイバー、誇らしげに、凛々しくハクノに告げて消滅。
霊基を構成していた疑似霊子が咲き誇る薔薇のように散っていく。
そして、SE.RA.PHに鐘が鳴り響く。

第一階層～第七階層

水没した第一階層、データ崩壊しながら消滅していく。

×××

第二階層の森、データ崩壊、消滅していく。尖塔も崩壊。

×××

第三階層の洋館、崩壊していく。
ありすの残骸、きらきらと煌めいて、消滅。

×××

第五階層、雨があがっている。青空の下で工場群がデータ崩壊して消滅していく。

×××

第六階層、クレーターもドームも、データ崩壊して消滅していく。

×××

第七階層、山全体がデータ崩壊して消滅していく。
花畑、棺、きらきらと煌めいて消滅。

×××

SE.RA.PH全七階層の全体像――
それが、きらきらと煌めきながら、データ崩壊していく。
暗転。

×××

黒画面。
――ポコリ、と泡のイメージ

旅路 SE.RA.PH（新）

最後のお話。
新しく構成された青いSE.RA.PH。
これまでのような縦構造の有限のものではなく、地球を模した新天地（エクステラ）となっている。
とはいえ、まだ整理はされていない。廃墟やら森やら砂漠やらが節操なく結合した風景。

×××

その中でよっこらしょ、と荷物(リュック)を背負って、人影がやってくる。
人影はよく見知った顔だが、髪の色が金色に変わっている。
それは新しい在り方を受け止め、かつてあった本当の姿（月に来る前のオリジナル）を取り戻したようにも見える。
人影は丘の上から、これから向かう、彼方まで広がった新天地を見下ろして、

少女「さて――――いっちょ行きますか！」

自分を鼓舞する独白と共に、力強く丘の斜面を走り始めた。
行き先は何一つ決まってはいないが、残され、託された以上は、行けるところまで行ってやろうと笑うように。

〈フェイト・エクストラ・ラストアンコール／了〉

13.喝采の薔薇

Characters10

キャラクター紹介







岸波ハクノ

Hakuno Kishinami

第七階層までの戦いを経て、死人の仮面は剥がれ落ちた。死者は生者となり、叶えるべき目的は逆転した。反面、デッドフェイスとしての不死性は失われ、戦力は大きく低下した。生きている以上、胸を貫かれれば死ぬのだから。だが——

死者に生者を止める事はできず。潔く逝くものの影を、死者が掴む事はない。



ネロ・クラウディウス

Nero Claudius

薔薇の皇帝。真紅のセイバー、ネロ・クラウディウス。自由奔放な独裁者——暴君として名を知られた、ローマ帝国第五皇帝。父母の愛も知らず、人々の愛も知らず、失意の中で人生を終えた、孤独な少女。宝具は、

『招き蕩う黄金劇場(アエストゥス・ドムス・アウレア)』。かたちある剣ではなく、逸話を武装としたもの。「皇帝特権」を存分に発揮できる、黄金劇場を作り上げ戦場とする。さらに燃え盛り崩壊する黄金劇場を利用し、攻撃をおこなう『星馳せる終幕の薔薇(ファクス・カエレスティス)』。

一〇〇〇年前、岸波白野と共に戦い熾天の檻へと辿り着いたが、セイヴァーに敗れた。だが、辺獄の底での岸浪ハクノの『最後まで戦う』という声に応じ、再び聖杯戦争に参戦することになる。セイバーは美しいと信じたいものの為に、命を燃やす。

第五階層では真名をハクノに告げ、真にマスターとサーヴァントとしての絆を結ぶ。そして再び熾天の檻に辿り着き、聖杯戦争に関わったすべてのサーヴァントたちの代行者として、最後のマスターをムーンセルの中枢へと送り届けた。

彼女が聖杯にかけた些細な願い——『最期には誰かに側にいてほしい』。生前では決して叶わなかったその願いが、彼女に与えられた唯一にして最大の報酬である。

トワイス・H・ピースマン

Twice H Pieceman

戦いを憎み、推奨する救世主の欠片。一九七〇年、少年時代にトワイスは戦争・戦火――人類史の歪みの地獄を経験した。成長し科学者となった彼は戦地での医療に従事していたが、一九九九年、バイオテロに遭遇し、為す術なく死亡した。のちに、彼を再現したNPCがSE.RA.PHに配置される。だが、彼はイレギュラーのNPCだった。トワイスとしての記憶を有し、自我さえ獲得し、何百という試行錯誤（リトライ）の末に七天の聖杯を安置する熾天の檻へと至った。

だが、NPCである彼にはムーンセル中枢へ至る為のアクセス権限が無かった。聖杯を得ることは出来ない彼は、自らの思想を体現する後継者を待ち、トワイスは全人類に等しい戦いを求めた。人類の文明が袋小路に至ったとき、レオという最高精度の王をもってすら人類を救うことができないという事実を静かに認め、そして、最後の希望だった〝戦いの思想の体現者〟である岸波白野と決裂した時、人類の変革は夢物語と悟った。

岸波白野とセイバーを消去した後、トワイス本人は自身が焼かれる事を承知でムーンセル中枢にアクセスし、SE.RA.PHの在り方、そしてムーンセルの運営方針を変化させた。〝人類の死を認めよ。この文明の終わりを看取れ〟と。そして熾天の檻にはトワイスを名乗った電脳体の残骸――意識が焼き切れた後、なお人類の在り方に固執し続けた、生きる死者だけが残された。



第一三話 用語集

熾天の檻

●アンジェリカ・ケージ

事象選択樹アンジェリカ・ケージ。並行世界の運営まで観測・予測するムーンセルの心臓部。並行世界りの在り方は巨大な樹を思わせる構造であり、ある救世者が悟りを開いたのも菩提樹の木の下だったという。空中に浮かぶ立方体こそがムーンセル中枢であり、聖杯と呼ばれるもの。本来なら聖杯戦争に勝利したマスターは無条件で中枢に誘導されるが、トワイス・ピースマンによって中枢は閉ざされている。



天輪聖王

●チャクラ・ヴァルティン

チャクラ・ヴァルティン。トワイスのサーヴァント、セイヴァーの宝具。セイヴァーは既にこの宇宙から立ち去ったが、その宝具は今もトワイスの指示通りに活動している。大輪と小輪とに分かれており、大輪はSE.RA.PHを囲み、破壊しようとしている直径七〇キロメートルのリング。小輪は熾天の檻だけを囲む直径七キロメートルのリング。小輪はトワイスとムーンセル中枢への到達を阻む迎撃宝具であり、武の王・転輪聖王が持つとされる七つの具足を模したバンカーバスターを有する。

ムーンセル中枢

●ムーンセルちゅうすう

天輪聖王・小輪によって封印されたムーンセ

ル中枢。黒いドームは物理的にムーンセル中枢を封鎖し、アクセス権限を持つ者であろうと来訪者を拒んでいる。SE.RA.PHが『惑星』であるのなら、ムーンセルは『宇宙』と言える。そのムーンセルの基本運営方針を決定する心臓部にして頭脳。ムーンセル中枢に近づく（トワイスより上に移動する）と重力が正常に戻り、月の中心に向かって落下するようになる。ムーンセル中枢は空に穿たれた大渦、ブルーホールであり、大気に漂う疑似霊子や光子の流れが孔に向けて落ちている。

マスター

●マスター

聖杯戦争のマスター。サーヴァントと運命共同体であり、彼らの力をもってその願いを叶えんとするもの。生存競争は醜く、残酷で、憎しみを生み続ける。その中でまだ前に進むものたちだけが勝ち残り、己の責任を全うしようとあがき続けた。その輝きは一〇〇〇年前に失われ、また、この一〇〇〇年で完全に消え去った。もう聖杯戦争が行われる事はなく、それらはすべて過去の遺物である。



……だから、それは最後の残響。聖杯戦争に贈られる名も無い喝采。辺獄から第七階層までの戦いの末、〝誰でもない誰か〟として誕生した命はひとりの人間（マスター）として、己が願いを獲得した。

約束

●やくそく

一〇〇〇年前、岸波白野とネロ・クラウディウスが交わした、なんでもない約束。

SPECIAL THANKS

桜井光
ワダアルコ

Last Encore Your Score

2018年8月10日 初版発行

著者 ―――― 奈須きのこ
発行者 ―――― 竹内友崇
発行所 ―――― TYPE-MOON
http://www.typemoon.com/
FAX：03-3865-6166 MAIL：info@typemoon.com

表紙イラスト ―――― ワダアルコ
協力 ―――― 株式会社アニプレックス／株式会社シャフト
文章校正 ―――― 鴎来堂
装丁 ―――― WINFANWORKS
印刷 ―――― 新星社西川印刷株式会社

©TYPE-MOON/Marvelous,Aniplex,Notes,SHAFT
落丁、乱丁本の交換については、FAXまたはE-mailで受け付けております。
上記FAX番号、またはE-mailアドレスまでお問い合わせください。

無断転載、複製を禁ず
Printed in Japan.

この作品はフィクションであり、実際の人物・国家・団体とは一切関係ありません